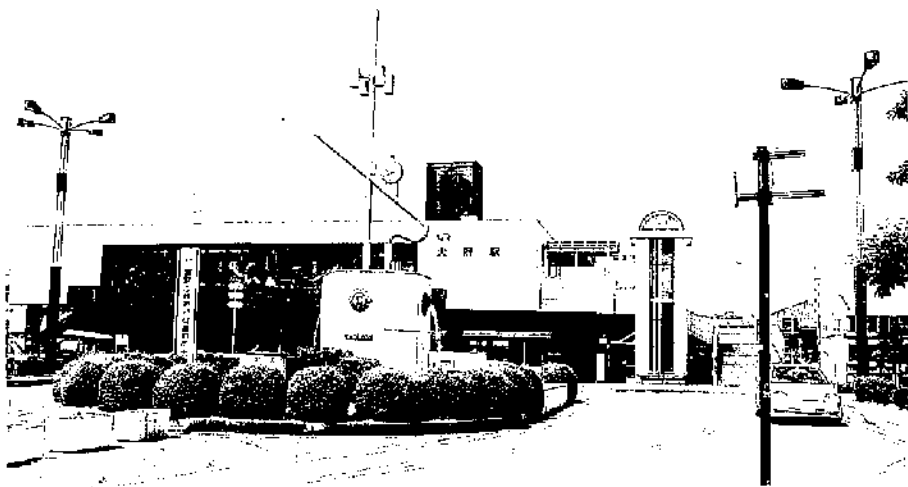
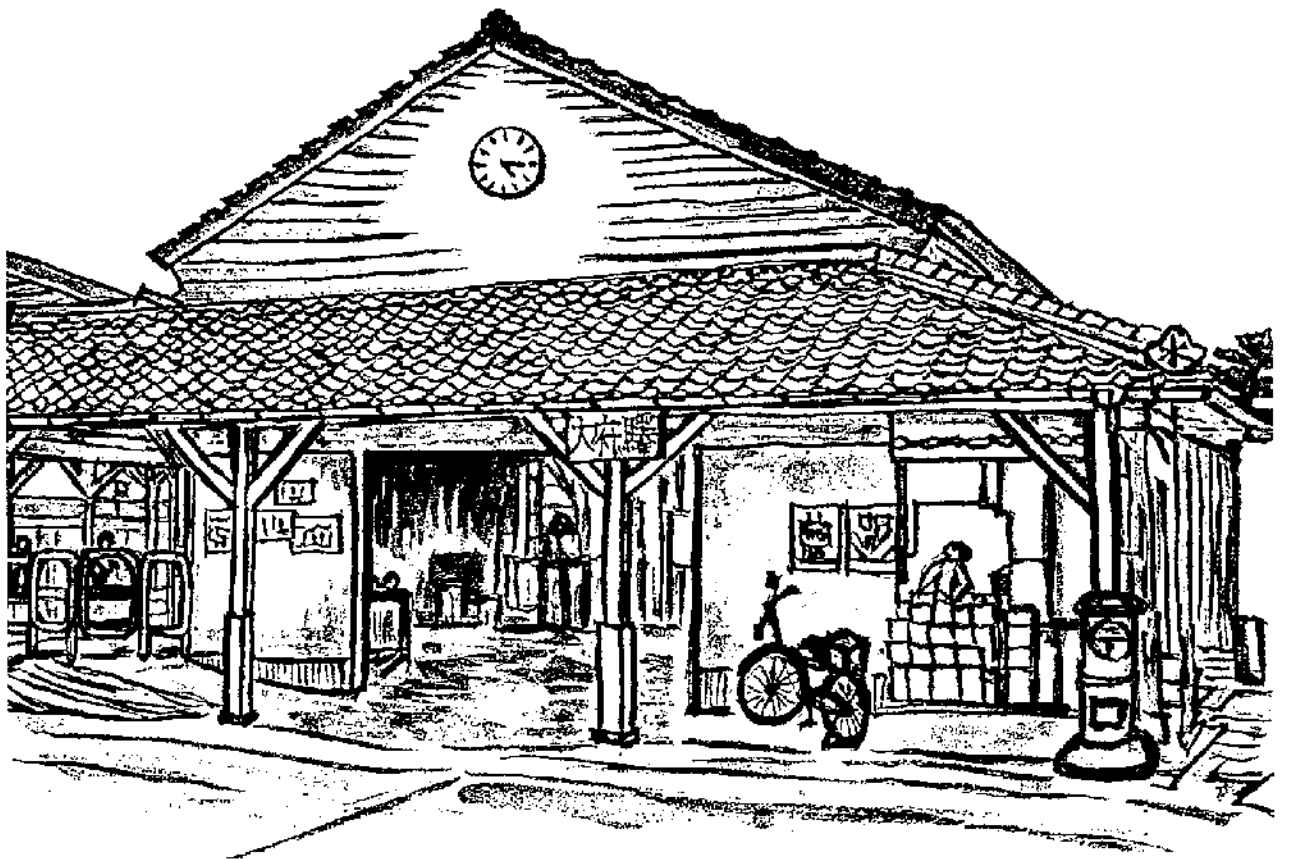


# 語り継ぐ 戦争体験



大府の戦争記録

表紙カット

戦時中の大府駅

あなたが征った大府駅  
声なく帰った大府駅  
多数の英霊安かれ  
故郷を思う遺志継いで  
戦なき世を築きます  
永久の平和を誓います

表紙題字 鷹羽 操 氏  
カット 早川清夫 氏

# 語り継ぐ 戦争体験

大府の戦争記録

戦争体験を語り継ぐ有志の会

## 発刊にあたって

…後世に伝えたい戦争並びに終戦当時の記録…



戦争体験を語り継ぐ有志の会  
代表

渡辺房枝

21世紀を迎えた平成の今日、はや戦後58年を迎えます。戦争を知っている人々の記憶が残っている間に、大府の戦争記録をまとめたいと思い、今は、故人となられました北崎町の浜島明房先生のご指導をいただきながら、平成11年より資料の提供を呼びかけてまいりました。また、各地区で、ご賛同をいただいた発起人の方々を中心に、座談会も開催してまいりました。お陰<sup>かげ</sup>を持ちまして、100名を超える多数の皆様方より、貴重な体験記・写真・新聞・書籍などの資料の提供をいただきました。本当に有難うございました。

私は、大府で生まれ、大府で育ちましたが、昭和19年、旧満州国の撫順<sup>ぶじゆん</sup>に10か月ほどの海外経験を致しました。その後、日本に帰って、終戦当時は、高齢男子と婦女子のみで守っていた、大府町役場に奉職していました。銃後からではありますが、戦争の悲惨さ・大変さを味わっていました。そして、私自身も、当時の体験・思いを何とか後世に伝えたいと思っていました。戦争を知らない若い世代の人々が、戦争の事実を知るだけでなく、これからの未来を考える縁としていただけたらと思うからです。

この冊子の編集にあたりましては、諸先輩をはじめ市行政当局のご理解とご協力をいただきました。特に生涯学習課・情報課・歴史民俗資料館には、お世話になりました。深く深く感謝申し上げます。

また、往時<sup>しの</sup>を偲び、この戦禍により犠牲<sup>めいぶく</sup>となられた多くの皆様に深く感謝し、ご冥福をお祈りいたします。

## 発刊によせて



大府市長

福島 勢

20世紀は、戦争の世紀と呼ばれ、戦火の中で、多くの尊い命が失われました。21世紀になり、世界の平和が続くことを期待していましたが、新たな戦火が勃発<sup>ぼっぱつ</sup>してしまい心は曇ります。さらに、次なる争い<sup>いさか</sup>が起きないことを心より願っています。

私は、大戦末期、北京<sup>ペキン</sup>に住んでおり、激しい戦火の経験がありません。生命の危機を感じたという記憶も残っていません。多くの方々が、肉親を亡くされとか、食糧の調達などにご苦労されたことを考えると、恵まれた環境にあったと感じています。

戦争や紛争は、なぜ起きてしまうのでしょうか。貧富の差、教育の有無、国籍、民族、宗教、イデオロギーの違いなどがあるからでしょうか。きっと、このような差が、様々な問題を引き起こしているのだと思います。私たちは、好んでこの差を放置して、争いの中で、かけがえのない命を軽んずる行為を繰り返してはならないと思います。お互いが、幸福を望み苦しみを厭<sup>いと</sup>うなら、武器を捨て、自らの主張ばかりをするのではなく、相手を受け入れる、寛容さと賢さを身につけるべきではないでしょうか。

私は、凄惨<sup>せいさん</sup>な戦争を二度と望みません。私たち一人ひとりとこの地球が、健康であるように、そして、幸福を感じられる明るい未来が、全ての人に訪れるよう祈念いたします。ここに掲載<sup>けいさい</sup>された、多くの方々の辛い体験や悲痛な叫び声を風化させず、私たちも、平和のために、出来る限りの努力をしなければならぬと、心に誓うものです。

## 発刊によせて

戦後58年が過ぎ、今日日本は世界の先進国、経済大国として飛躍的に発展を遂げました。

第2次世界大戦の終戦を境として、日本国民は、<sup>こんとん</sup>混沌とする世情の中を黙々と働き、今日の日本を築きあげてまいりました。

しかし、ここに至るまでには、戦争という悲惨な状況の中で数多くの尊い犠牲があり、その犠牲のもとに、平和と繁栄の日本社会が成りたっているという事実を決して忘れてはなりません。

このたび発刊される「語り継ぐ戦争体験…大府の戦争記録」は、私たちに、戦争の悲惨さと必死で生き抜く人々の姿をあらためて思い起こさせてくれるものです。貴重な体験記録として、後世に末長く残していくことが大切であると思います。

私は戦後生まれの人間として、戦争体験を知らないまま育ってまいりました。この記録は、その私たちにとって、わが町の貴重な歴史の事実として語り継がれ、二度と戦争を引き起こしてはならないと、深く心に刻み込むものであります。

この戦争体験記録を発刊するにあたり、遠くになった記憶の糸をたぐり、寄稿された多くの方々と、その編集に熱心にご尽力<sup>じんりょく</sup>いただいた関係各位に深く感謝するところであります。

わがまち大府を始めとして、日本の国、そして、世界の国々が、しっかりと手を取り合い未来永劫<sup>えいごう</sup>に平和で繁栄し続けることを祈念して、発刊のご挨拶といたします。



愛知県議会議員

深谷勝彦

# 『語り継ぐ戦争体験…大府の戦争記録』 目次

◎発刊にあたって	戦争体験を語り継ぐ有志の会代表	渡辺房枝
◎発刊によせて	大府市長	福島 彦
	愛知県議会議員	深谷勝彦

ページ

1. 写真で見る時代の移り変わり (風車モニュメントの写真)			1
◎グラビア			2
◎大東亜戦争…大東亜共栄圏			12
2. 満州事変から太平洋戦争へ			
1. 戦場 (忠魂碑の写真)			13
二つの戦争	共和町	小倉重男	14
奮戦の砲台員の末路	横根町	藤田店代志	16
玉砕予定部隊	安城市	橘 欽一	20
思い出の津村別院	桃山町	大嶋 つちお	22
地獄絵巻	横根町	山本 幸一	24
軍旗奉焼	横根町	山本 慶司	26
おとうとよ	森岡町	千賀 やえ	28
8月15日の回想	中央町	水野 清次郎	30
墓参の場は追憶の場	北崎町	鈴 置 清	34
戦いすんで —上海捕虜収容所から大府駅まで—	宮内町	浅田 孝 敬	36
満州放浪体験記	大府町	加藤 敏 男	38
シベリヤ抑留の思い出	横根町	山口 三喜夫	42
私の避難記	共和町	小倉 あやよ	44
私の戦争体験記 —良かったこと2件—	中央町	鈴木 ツ ヤ	46
渡満と帰国	長草町	荒川 清	48
大東亜戦争の回想録	追分町	鈴木 久 弑	50
戦後50年を顧みて	月見町	新田 武 治	54
私と終戦 —その頃—	吉川町	浅田 善 策	56
大東亜戦争の開戦 —日本の少年飛行兵—	北崎町	浜 島 五 郎	58
昭和20年上半期の思い出	若草町	斉藤 正 幸	60
あの時・この時 —思い出の断片—	北山町	鈴 置 正 農	64
◎宣撫工作…栗田機関			66
◎敗戦の日本を救った人			68
2. 空襲 (爆撃機B29の写真)			69
わが家が燃えてしまった	朝日町	井 村 正 則	70
戦争が残してくれた心の温もり	朝日町	深 谷 泰 造	72
焼夷弾で亡くなった妹の死を思う	長根町	斉藤 久 男	74
大府空襲と半田空襲の回想記	共和町	早 川 達 郎	76
爆弾の投下された場所	共和町	鈴木 克 昭	78
東海道本線空襲 —昭和20年8月14日—	刈谷市	稲 垣 信 夫	80

命を救ったシッカロールの缶	横根町	大島康民	82
長い悪夢の一日から	朝日町	深谷俊二	84
亡き弟への追想	中央町	永田雄一郎	86
太平洋戦争末期の出来事	桃山町	小塚義松	88
戦時中の消防活動の思い出	若草町	榊原昭治	90
日本空爆の時代	米田町	竹内富久	92
防衛隊での思い出	半月町	深谷薫	94
第2次世界大戦の回顧	横根町	安藤みね	96
◎空襲による大府の街の被害			98

### 3. 戦中戦後の生活

#### 1. 銃後のささえ（報国農場の写真） 99

あの辛く悲しい思い出	桃山町	村田静枝	100
節目を大切に	吉田町	伴米子	102
おみやげ	吉田町	伴久代	105
戦争の悲惨さ	桃山町	鈴木久子	106
50年の歩み	朝日町	渡辺志げる	108
すぎ来し人生	共栄町	中嶋たき	110
大東亜戦争銃後の体験記	中央町	伴ちよ子	112
私の脳裏に残る昭和17年に別れた父	北崎町	浜島房子	114
戦中・戦後の厳しい生活	中央町	村瀬富美代	116
今も鮮明に残る私の戦争体験記	北崎町	酒井秀雄	118
戦時体験回想記	森岡町	久野與吉	120
戦争と大府の発展	中央町	渡辺房枝	122

#### ◎戦争と流行歌 126

#### 2. 総動員体制（梶田町六丁目付近の写真） 127

今は幻 - 三菱「名航大府」 -	中央町	広瀬治雄	128
三菱の飛行機製作所の場所	東新町	中井鉄次郎	132
軍需工場になった愛知トマト	朝日町	鷹羽治幸	134
終山の特殊地下壕	大府町	久野栄一	136
勤労働員の思い出	長草町	深谷哲	138
特殊潜航艇の製作	桃山町	加藤金松	140
傷痍軍人愛知療養所にまつわる思い出	半月町	伴武量	142
戦争体験 思い出	中央町	木村一子	144
勤労働員に明け暮れた学生生活	追分町	鈴木大昭	146
売れたリュックサック	月見町	加古豊蔵	148
戦時・戦後の農業の誇り	北崎町	浜島久雄	150
戦中・戦後の農家のくらし	長草町	加古新吉	152
慰問文の取り持った縁	共栄町	富田八千代	154

### 4. 戦中・戦後の子どもたち

#### 1. 子どもたちの生活（二宮金次郎の写真） 157

戦中戦後をふりかえって	長草町	加古和美	158
戦時中の頃	北崎町	浜島平和	162

あの頃は	長草町	加古悟朗	164
戦中・戦後の子どもの遊び	長草町	山口勝久	166
私の体験をひもとして	北崎町	久野源之	168
終戦の頃の思い出	森岡町	千賀重安	170
第2次世界大戦の思い出	吉川町	藤戸衛	172
四国での戦争体験	吉田町	三好誠雄	174
三弘法参り	桃山町	青山郁博	176
少年野球チームの復活	東浦町	小田正年	178
私の戦争の記録	横根町	伊藤一雄	180
踏みにじられた人間性	桃山町	小川雅康	182
生きること	米田町	田邊泰	184
赤い防空頭巾	神田町	長坂幸子	186
2. 学校での生活（1年B組の写真）			189
大府第一国民学校では	若草町	祖父江茂子	190
国民学校の終えん	阿久比町	新美英子	192
雨兼池の思い出	桃山町	安藤剛	194
奉安殿と子ども銀行の思い出	中央町	伴茂	196
大府第三国民学校戦中戦後の移り変わり	共和町	深谷よし子	198
戦時中の学校	桃山町	加藤鶴子	200
私の戦争中の生活	北崎町	相木久代	202
小学校に入ったが	北崎町	神谷孝明	204
私の少国民時代	吉田町	佐藤英夫	208
大府中学校分教場にて	長草町	築波宗二	212
◎新美南吉と戦争			214
5. 語り継ぎたい思い（南中での語る会の写真）			215
次世代に伝えるリレーランナーの一人として	吉田町	下村博	216
特攻隊員の死に報いるには	桜木町	蟹江博	218
私の生涯に深い感謝・感激・感動の思い	朝日町	鷹羽操	220
続、時は流れて	北崎町	森下太三次	222
飛行機墜落事故追想	北崎町	久野正巳	224
戦争はこんなにも惨い	大東町	野田光輝	226
次世代に伝えよう戦争記録	宮内町	高橋憲一	228
◎軍旗奉焼			231
6. 年表			232
7. 用語解説			236
8. 執筆者の連絡先			240
◎編集後記			243

## 1. 写真で見る時代の移り変わり



大府のランドマーク「風車モニュメント」



昭和初期の揚水用風車

こども 桃山公園の風車モニュメントだね！

わたし 平成3年の市制20周年記念事業によって建設されたんだ。

こども どうして風車を作ったの？

わたし 大正から昭和にかけて、桃山には高さ約10mの風車があり、桃などの果樹畑に水を汲み上げるのに利用していたんだ。しかし、鉄の供出のため戦争中に取り壊されたんだ。

こども 桜ではなく桃があったの？

わたし 今は桜しかないけれど、昔は桃山公園から大府中学校の辺りは、桃畑が広がり、花の咲く時期には、花見の客でにぎわったそうさ。地名も、以前はガンジ山だったが、桃山になったんだ。写真で、昔と比べて今がどんなに変わったか、見てみよう。

# (1) 空から見た地域

## 大府地区



昭和 2 3 年

国土地理院空中写真を使用



平成 1 1 年

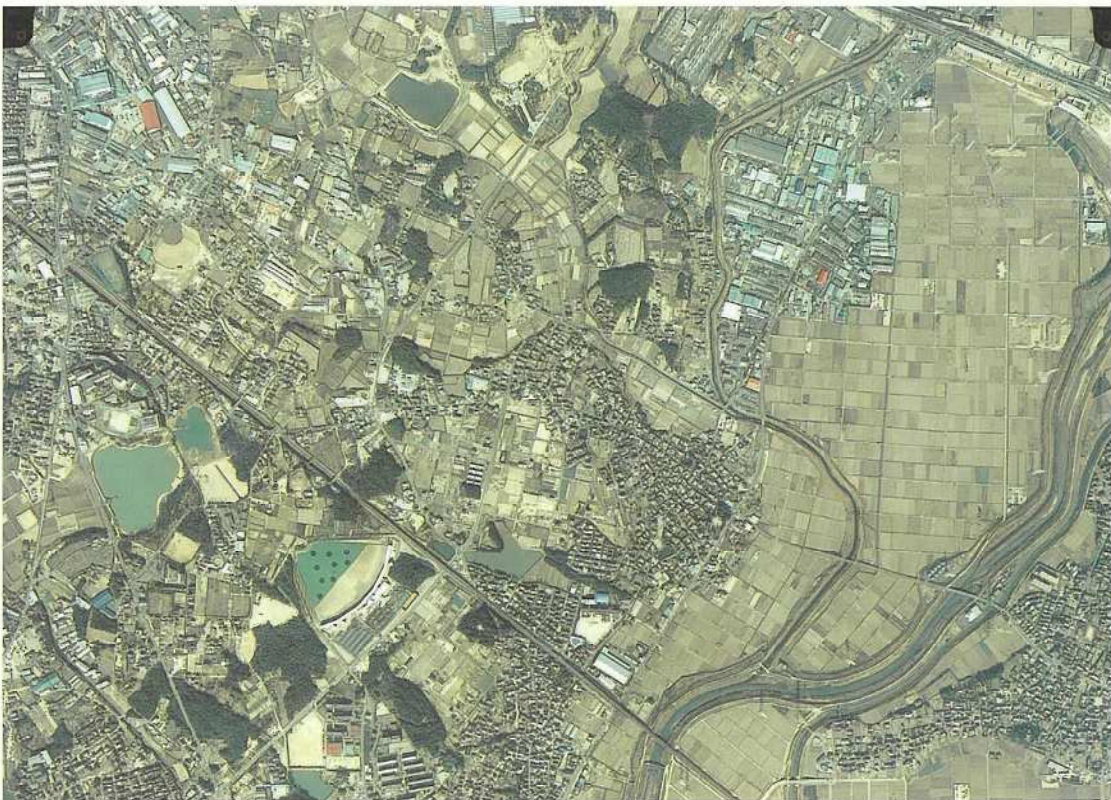
大府市都市計画課の資料

## 神田地区



昭和 2 3 年

国土地理院空中写真を使用



平成 1 2 年

大府市都市計画課の資料

## 共長地区



昭和 23 年

国土地理院空中写真を使用



平成 11 年

大府市都市計画課の資料

## 吉田地区



昭和 2 3 年

国土地理院空中写真を使用



平成 1 2 年

大府市都市計画課の資料

## (2) 主な建物の移り変わり

### 大府駅



昭和30年ごろの駅舎



平成15年

### 共和駅



昭和27年当時の駅舎



平成15年

## 大府町役場



昭和32年までの  
役場庁舎  
(中央町四丁目)

昭和33年～平成12年の市役所庁舎  
(中央町五丁目)

## 市役所



平成13年に完成した市役所新庁舎（平成15年撮影）

## 大府第一国民学校（大府小学校）

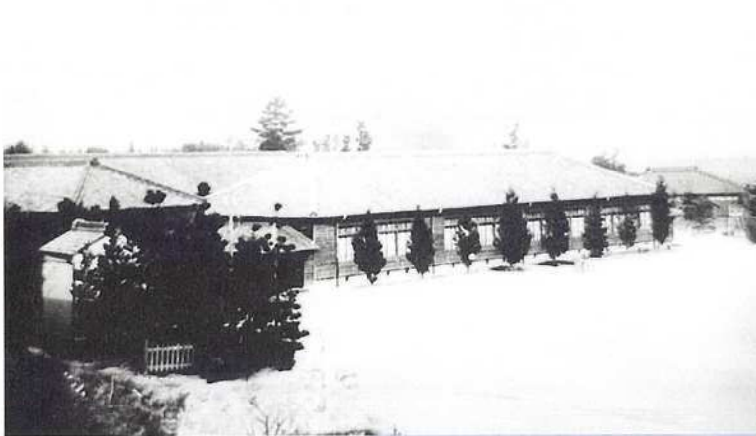


終戦前の校舎



平成 15 年（桃山町五丁目）

## 大府第二国民学校（神田小学校）



昭和初期の校舎



平成 15 年

神田小学校（神田町三丁目）

## 大府第三国民学校（共長小学校）

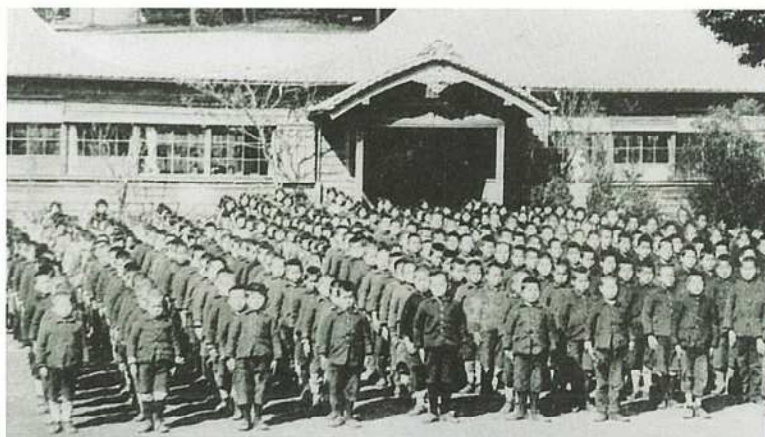


昭和14年ころの校舎



平成15年（共和町六丁目）

## 大府第四国民学校（吉田小学校）



昭和14年ころ



平成15年（吉田町四丁目）

## 大府中学校



昭和24年ころ



平成15年（桃山町三丁目）

## 大府派出所



昭和27年ころ  
（中央町四丁目）



大府交番（平成15年）  
（月見町六丁目）

## 大府郵便局



昭和10年～40年  
(中央町四丁目)

昭和41年～59年(中央町二丁目)



昭和60年からの局舎  
(中央町六丁目)  
平成15年撮影

## 大府農業協同組合



昭和30年ころの  
大府農協

あいち知多農協  
大府支店  
中央町七丁目  
(平成15年撮影)



だいとう あ きょうえいけん  
**大東亜戦争・大東亜共栄圏**

昭和6年9月18日、南満州鉄道の路線を爆破し、これを中国側のしわざだとして勃発した満州事変。昭和12年7月7日、北京郊外の盧溝橋で日本軍と中国軍の衝突からはじまった支那事変（現在では日中戦争という）。昭和16年12月8日、日本軍の真珠湾攻撃によりはじまった太平洋戦争。このように戦争を拡大してきた日本は、中国や東南アジアに対する侵略政策を合理化するため、大東亜共栄圏の建設を唱えた。（東亜＝東アジア）

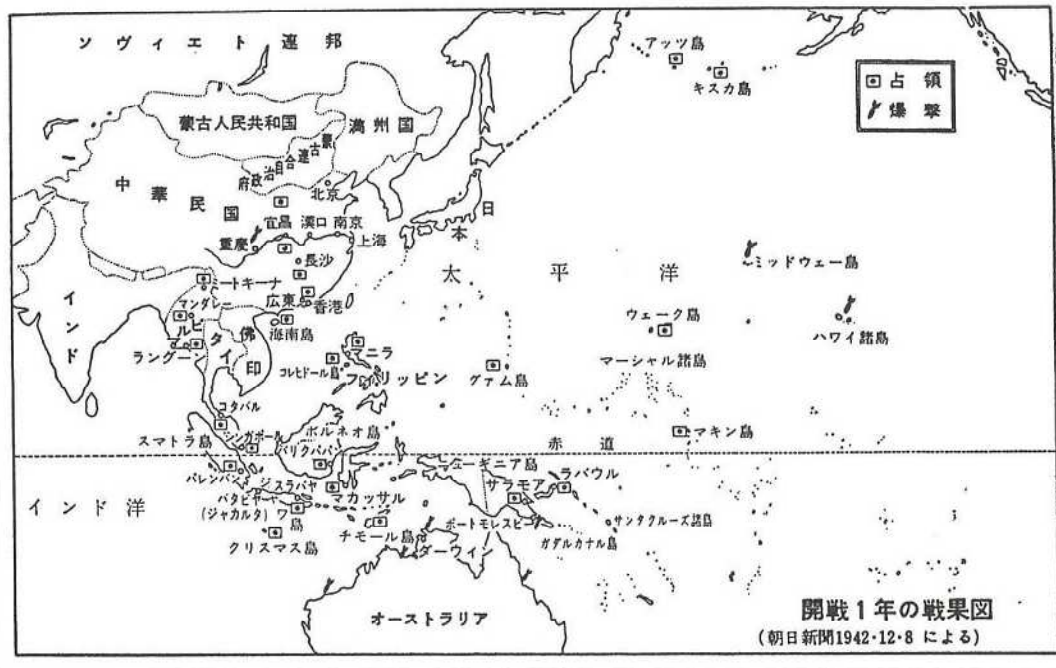
『大東亜戦争』という呼び名は、開戦の翌々日の12月10日に決められた。この決定には、次のようないきさつがあったと言われる。「12月10日、開戦後初の連絡会議を開いた。この会議で、今次戦争は、支那事変を含め大東亜戦争と呼称することに定められた。席上、海軍側から太平洋戦争・対米英戦争の名称案がでたが、これらの名称は、支那事変を含めると適当でないし、また、好むと好まざるとにかかわらず、いつ対ソ戦に発展するかわからないから、大東亜の新秩序を建設するという政治的意味をも加えて、大東亜戦争とすることに決定したものである。」（種村佐孝『大本営機密日誌』）

従って、太平洋戦争のことを戦前は大東亜戦争と言っていた。また、太平洋戦争はヨーロッパでの戦争とあわせ第2次世界大戦にふくまれる。

1943年（昭和18年）11月5～6日帝国議事堂で「大東亜会議」が開催された。日本から東条首相、中国は汪精衛国民政府行政院長、タイはワンワイタヤコン首相代理、満州は張景恵國務總理、フィリピンはラウレル大統領、ビルマはバー・モウ首相が出席し、「自由インド仮政府」からはチャンドラボースがオブザーバーとして出席した。この会議では、「共存共栄」「独立親和」「文化昂揚」「経済繁栄」「世界進運貢献」の大東亜五原則が満場一致で採択された。

この会議は、日本が敗退への大きな曲がり角に来ていた年、多かれ少なかれ傀儡性のつよい政権代表者を集めて、「大東亜共栄圏」の具体化を誇示して敗色を隠そうとしたものであった。しかし、戦争遂行と占領地経営を目指す日本と、民族の独立を求める他の国との間には、大きなギャップがあった。

『日本の百年』筑摩書房より抜粋



## 2. <sup>まんしゅう</sup>満州事変から太平洋戦争へ

### 1. 戦場



〈忠魂碑〉  
(大府市役所隣接地)

こども これは何なの？ 何と書いてあるの？

わたし <sup>ちゅうこんひ</sup>忠魂碑というんだ。忠魂というのは、<sup>ちゅうぎ</sup>忠義をつくして死んだ人の<sup>たましい</sup>魂ということだ。

こども どうして死んだの？ だれが死んだの？

わたし 戦争で死んだんだ。昭和33年に完成したこの忠魂碑の<sup>いしとびら</sup>石扉の中には、大府市の<sup>せんぼつしゃ</sup>戦没者498柱の氏名が収められている。

こども どうして戦争をしたの？ どこで戦争をしたの？

わたし どうしてだったのか…。これから、いろいろな人の、その頃の体験談を読んでほしい。そして、戦争のない平和な世界にするには、どうしたらいいのか、皆にも真剣に考えてもらいたいんだ。

## 二つの戦争

小倉重男

中国の北部は、冬になると一面の黄土の砂漠となる。昨夜の戦闘で一つの部落を焼いた。双方とも、相当な戦死者を出し、私たちの体は疲れ、心は重かった。『何故こんな戦争を！』という思いが、兵士たちの胸を横切る。

北京<sup>ペキン</sup>の西南方、雄県<sup>ゆうけん</sup>地区に共産軍が集結の報を受けて討伐に向かった。夕闇のころ、月の光は物凄く、周囲は凄涼<sup>せいりょう</sup>の気に満ちている。当時（昭和14年）の中国の原野は、灯火一つない原始の世界である。たった一つのかすかな灯火が前方にゆらめいている。近づくと、大きなカトリック教の教会である。中国服を着た老齡のフランス人神父だった。この人によると、「自分たちは、全部で8人いたが、戦乱に巻き込まれ、ある者は死に、ある者は行方不明となり、現在は自分一人である。」という。同神父は、青年時代に来中し、在住50余年、本国との文通もなく、孤独の伝導生活を送っていた。私は軍の学校で習った拙<sup>つたな</sup>い中国語で話し合ったが、詳しいことを聞くのに不自由なので、招集されるまで勉強していた英語に切りかえると、この神父は流暢<sup>りゅうちょう</sup>な英語で種々詳しく語った。私は、当時の欧州での大戦のこと…フランスの敗戦、パリ開城、ドゴール將軍失脚、ペタン内閣のこと…など語った。彼の頬<sup>ほ</sup>に滂沱<sup>ぼうだ</sup>として涙が流れた。それは祖国の運命への悲しみもあったが、それ以上に、50年目にはじめて聞くヨーロッパ語（私の英語）への郷愁の涙であった。

思えば数か月前のこと、私は戦友の加藤君（当時、<sup>すぎやま</sup>椴山女学校の英語の教師）とともに、<sup>しょうとく</sup>彰徳の一英国人経営の海国病院に入院患者を見舞った。当時はまだ大戦前で、英国は治外法権を持っていたので、入院の患者は、ほとんど中国国民党および共産党の戦傷病者であった。私たちは一介の兵士であったので、こういう所へ近づくことは厳禁されていたが、日本軍警備の手薄なことや、我々は当時英国人を尊敬していたので、<sup>こ</sup>彼等の博愛の事業にどうしても触れて見たかった。呉



（戦友とともに、右端が私。昭和14年中国にて）

<sup>えつどうしゅう</sup>越同舟のベッドに、敵味方の軍人たち（国民党と共産党は闘っていた）を見舞い語り合ったが、誰も戦争など好んでいない。誰も彼も隣人であり友人である

ことをこの時強く知った。院長の勧めで飲んだ一杯のコーヒーの味を忘れられない。戦争は誰も望んでいない。皆を不幸にする。

私の従軍生活は8年にわたる。支那事変とともに従軍、第2次世界大戦の終りまで参戦。最後はシンガポールで英軍の捕虜となり、のち、語学連絡士官として、戦後1年をシンガポールで英国上陸軍最高司令部との連絡をした。

あれは、コヒマ・インパール作戦の敗戦直前、前線の日本軍は、連合軍の圧倒的優勢な空軍に叩かれ、そのうえ、雨季の到来。後方との兵站・食糧補給を断たれ、僅々、3か月の間に7万の将兵が戦死。戦場も道路も死屍累々。死臭紛々たる有様。前線の無線機は全部破壊され、前線の戦況は全く分からない。私は、この時、南方総軍本部通信隊の一下士官であった。命令を受けて、サイゴン（今のベトナムのホーチミン市）からビルマ・インド国境の戦場まで大型無線機の輸送をした。通信隊司令部のあるサイゴンで、大型無線機を受領。プノンペン（カンボジア）、マンダレー（ミャンマー）、インパール（インド）への道は遠く険しく、全道程は苦難の連続であった。瀕死の重傷者を見ても助ける術もなく、飢えを訴える兵に与える食糧もなく、全く無謀な作戦であった。幸いに任務を達成したが、帰途は累々たる死屍を踏んで帰る有様。私も飢餓寸前であった。この任務が終わって間もなく、終戦の8月15日がやって来た。

戦いが終わると、日本軍人の残虐行為が問題となった。私たちは、首実験のため一列に並ばされ、現地の中国人・インド人・マラヤ人たちの目に晒された。多くの同僚たちがBC級戦犯として捕えられ、簡単な裁判のうえ絞首刑になった。多くは無実であり、私の親友も処刑され悔し涙をのんだ。

日本軍の残虐行為は誇大されてはいないか。私が中国・ビルマに駐留中、現地の人達、特に子どもや女性たちとともに乏しい食糧を分け合ったのは幾度か。国境を越えた友情に手を握り合ったことも幾度か。今なお、日本人を敬愛し、親しみを持つ現地の人達の数が多い。私の前に来た一中国人の女性、温（ウン）さんは、すぐに「この人は悪い人ではない。日本人の中にも良い人は幾らでもいる。」と英軍に向かって証言。私は直ちに釈放され、語学力を買われ終戦連絡士官となり、戦後1年、現地に留まり、マウントバッテン将軍（英女王の夫の父）の司令部との交渉に当たった。連絡部に同時収容された人達の中には、板垣・土居原・綾部・志村などの将軍があり、毎日この人達と接し、悲運の将軍たちの心境にふれることを得た。

もし平和に寄与できねば、何を言うのも無駄である。

ふんせん ほうだいいん まつろ  
奮戦の砲台員の末路

藤田 店代志

昭和19年8月、当時の南洋群島パラオ島に、艦が撃沈されて2か月ぶりに帰って来た。海軍では、艦船が撃沈されて生き残った者達を“ドカチン組”という。この者達は、便船があり次第、所轄の海兵団に帰ることになっている。聞くとところによると、昨日までいた連合艦隊がいなくなり、古賀大將は戦死したとか。帰る便船は、もう来ないとかの話であった。

空襲警報が鳴り、爆音と爆弾の破裂する音が防空壕に響きわたる。これに反応している高角砲と機銃の銃声がある。空襲警報が解除となったので、武徳殿に引き揚げる。もうこのパラオにも、敵が押し寄せて来るのは、時間の問題であるといわれていた。

翌日、陸戦隊の編成があり、私は赤尾隊第一小隊第一分隊長となり、服と雑

囊を配布された。その日の夕方「玄関で藤田兵曹を呼んでいます。」という。「藤田です。」

「警備隊司令の命令である。コロール砲台砲台下士官を命ずる。ただちに赴任せよ。」とのことである。艦の戦友との別れの挨拶もそこそこに、一人で南洋神社に通じる道を行き、山に登った。「分隊士は何処にいるか。」と尋ねると、待機所へ案内してくれた。長谷分隊士に初めて会う。「おう藤田君よく来てくれた。明日から

3・4番砲を見  
てくれ頼むわ。」  
と言われた。

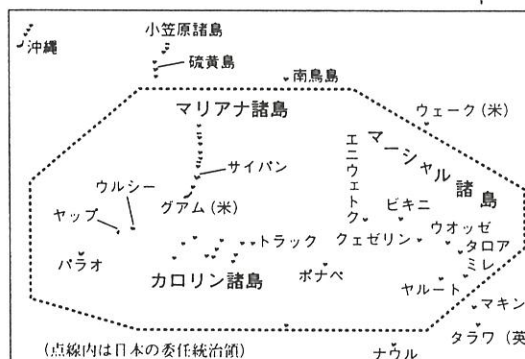
昭和19年9  
月8日早朝、私  
は砲台の3・4  
番砲の中間地点

南洋群島 大正三年（一九一四年）の第一次世界大戦勃発で日本はドイツに宣戦布告、日本は艦隊を派遣してドイツ領南洋群島の諸島を占領して軍政を敷いた。戦後の大正九年（一九二〇年）、大小千四百余の島々が国際連盟の決定で正式に日本の委任統治領となった。日本は大正十二年四月から南洋庁を置いてこれを統治した。

委任統治領の中でグアムだけは米領（米西戦争の結果、フィリピンとともに獲得）で、

これは開戦後すぐに領外のすぐ東にあるウェイクとともに占領した。またマーシャル諸島に続く英領ギルバート諸島のマキン、タラワも占領した。

マーシャル諸島のクエゼリン、ヤルト、タロア、ウオツゼ、ルオットなどには早くから海軍陸戦隊や航空隊が進出し太平洋東方の最前線になり、トラックとパラオは戦争中を通じて連合艦隊の前進基地になった。



『あの戦争』産経新聞社編より

に立っていた。昨日、1番砲員は全員が戦死していた。「南洋神社上空に敵戦闘機。」との見張りの声に上空を見上げると、敵の戦闘機グラマンが40数機の編隊でやって来る。1番機が機銃を乱射しながら突っ込んで来る。一斉に砲



〈コロール砲台連装25mm機銃〉  
今もコンチネンタルホテルの裏庭に残っている

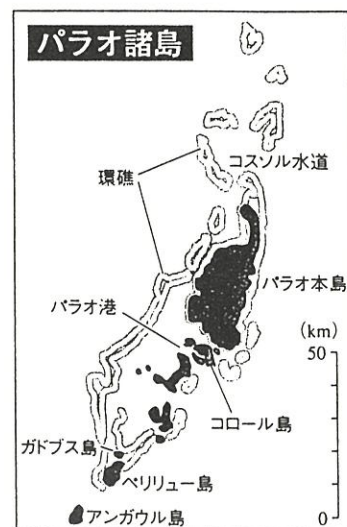
撃開始である。4機編隊の1番機が急降下して突っ込んで来ていたが、方向転換しながら爆弾を投下して去って行く。2番・3番機と急降下して来るのがよくわかる。爆弾が炸裂する。撃破されてパラシュートで落下していく米兵もいる。数十分の戦いであったが、私には何時間もの戦いのように思われた。わが部隊は見事に戦った。しかし、戦いが終わってみると、3・4番砲員に負傷者がおり、機銃員、弾薬運搬員が戦死している。無残に変わり果てた姿となっている。負傷者を病院に移送する。そうして、夕方に戦死者を集めて埋葬し、新しい墓標を建て、花を供え、総員集合し、長谷分隊士（僧侶）の読経で戦死者の冥福を祈る。昨日の10名に続き、今日も8名が戦死した。

私は、軍隊生活7年余になるが、このような激烈な実戦は初めてである。恐ろしくも怖くもなかった。どうせ今日は人の身、明日は我が身と思っていた。続いて9日も敵機の来襲である。

この砲台は、海軍45警備隊笠井隊で、4月に呉で隊員100名で編成された。12cm高角砲4門、25mm連装机銃2門、13mm機銃7挺であった。8日の爆撃で兵舎が倒壊したので、私は4番砲の待機所で寝起きすることにした。戦死・負傷者がでると、兵員を補充しなければならない。敵機の来襲のない日は、操法の訓練である。私が指揮して実施する。

コロール島の南西25kmにペリリュウ島があり、飛行場がある。9月15日に米軍機動部隊が来襲し、11月24日まで激戦が続き、全員玉砕した。

20年3月4日の早朝、敵の戦闘機1機が超低空で飛来して来た。当直砲が一発撃った時には、すでに砲台上空に達していた。私が駆け上がった時に、金属製の物体がフワッと4番砲の上に落ちた。掩体の中は火の海である。総員配置に付いたところをやられた。火勢が強くて近寄れない。投下されたのは油脂爆弾であ



ったために全員が火傷で、倒れている者、呻いている者、付着した油脂を取り除こうとしたために皮膚がただれて、全員が苦痛に泣き叫んでいる。トラックで全員を病院へ移送し、交代の看護人を手配した。医薬品は無く、医師も手の施しようがなかった。全員昇天してしまった。

8月15日終戦。部隊はパラオ本島に移転しなければならない。本島に移転した日に、私はアメーバー赤痢に罹り、即日海軍病院に入院した。10日間の入院で全治し、清水村の農耕作業隊第3小隊長として、部下40名を指揮監督せねばならない。ところが、食料が逼迫して毎食小粒の乾麵包が10粒と芋の入った塩汁である。食料自給のために、芋とタピオカをつくらなければならない。ポーキサイトの土地である。なかなか育たない。

朝「小隊長、誰々が起きません。」という。行ってみると、昨日身辺整理をしていたというが冷たく死んでいる。赤痢の流行と栄養失調で、次々と死亡者が出る。元気で奮戦していた部下が次々と亡くなって行く。

『12月に内地引き揚げ』やっと夢が実現となった。米軍LST輸送艦に乗船して7日間の航海の途中で、1名が故国を目の前に死亡する。20年12月26日、日本の浦賀に入港した。復員したのは72名であったが、帰国しなかった102名の戦友がいた。

昭和50年7月、一通の封書が配達された。内容には、8月23日、第1回コロール砲台戦友会開催、場所は京都サンフラワーホテルと記されており、出席欠席の返信ハガキが同封されていた。戦後30年、それにしても、よく現住所を調べたものだと感心した。こうして、20才の若者が50才の初老となつての再会であった。

昭和56年1月21日、「コロール砲台慰霊団」一行18名がパラオ空港に降り立ちました。戦後36年、再びパラオの地を踏みしめるなどと、夢にも思わなかったことが、実現したのであります。私にとっては、懐かしのパラオ、苦難のパラオ、そして、悲しい思



〈パラオ海軍墓地での慰霊祭〉

い出のパラオであり、万感胸に迫るものがありました。空港出口には、女酋長をはじめ、多数の島民が出迎えてくれ、レイを首に掛けてくれました。戦争中はアイライ飛行場として戦闘機が飛び交い、敵機の爆撃にあいましたが、今はベラウ国としての独立記念日に備えて、日本の技術者なども来て、空港整備の

最中でありました。集会所で昼食歓迎会が催され、珍しい果物や御馳走をいただきました。

コロールに通じる道路をバスで行きました。身を乗り出すようにして、周囲の景色を眺めていました。墓地公園に着き、祭壇の準備が終わりました。私は、今は亡き戦友たちに対して、弔辞を読み始めましたが、万感胸に迫り、声にならず、ただ涙するのみでありました。参列の戦友たちも、同じ思いであったことであらう。

## サイパン玉砕

マリアナ諸島における戦闘で、日本軍は、昭和19年7月7日のサイパンに続いて、テニアン（8月2日）、グアム（8月11日）と玉砕を重ねる。「南洋群島」のサイパン、テニアン両島では、女性や子供を含め、多くの日本住民が地上戦に巻き込まれ、悲惨な最期をとげた。当時、看護婦としてサイパンにあり、自決をはかったが、米軍に救われて助かった一日本人女性の手記は、次のように語っている。

「『あなたはケガしているのだから、動いてはいけない。』と、日本語でいった。私は、アメリカ人に日本語をいわれたので、またびっくりしてしまった。そういわれても、私は自分がケガをしていることも知らなかった。…私は捕虜になったのだ…という自覚はすぐにきたけれども、なぜケガをしているのかは分からなかった。じっと考えていると、だんだん記憶がよみがえってきた。そうだ、手榴弾で…。

ノドがカラカラに渴いている。私は水が欲しいといった。『あなたはケガをしているのですから、水を飲んではいけません。』若い将校がまた日本語でいった。私は、それでも水をくれといった。するとなにか罐を持ってきて、穴をあけて、その汁を私の口に入れてくれた。私は一口のむと、ペッと吐き出してしまった。それは私の大きらいなトマトジュースであった。しかし、アメリカの将校は、どうしても飲めという。私は怖かったので、少し飲んだ。私は死ぬのは怖くなかったけれども、アメリカ人が怖かった。

私は、一生懸命、記憶の糸をたどってみた。あの谷間の最後の光景が、しだいにハッキリと目に浮かんできた。野戦病院はどうなったのだろうか？ 私は、そのことを聞いてみた。『みんな死にました。生きたのはあなた一人だけです。』アメリカの将校は答えた。(略)

まもなくトラックがきた。私はベッドのままかつぎ出された。トラックは、山を下って、やがて大きな道路に出た。空も月で明るい。私はトラックの上に仰向けに寝たまま、月を眺めていた。『たくさん死んでいますねエ…お父さんもお母さんも、おじいさんも、おばあさんも、こどもも…』トラックから外を見て、将校がいつている。『あなた、見ますか？』こんどは、私の顔を見ていう。『日本人がたくさん死んでいます。』『見せてください。』私は大きい声でいった。将校は、背中の毛布を高くして、見えるようにしてくれた。…(略)』

菅野静子『サイパンの最期』より

サイパン島は、西太平洋の中心にあたっているので、この地域の制海・制空権におよぼす影響は、極めて大きかった。実際、アメリカは、これ以後、サイパン・テニアン島を基地に、日本本土へのB29による爆撃を始めることになった。

# 玉碎予定部隊

橋 欽 一

悲惨な傷跡を残した戦争が終わって50余年、今更ながら年月の流れを感じる今日この頃である。

盡（尽）忠報国（忠義を尽くして、国の恩にむくいる）言葉を信じて戦地に赴き、筆舌に尽し難い辛酸を味わった。一兵士として戦争に参加して凄惨な戦闘を体験した。この体験は生涯忘れられない。戦争は、敵・味方の別なく悲惨で過酷なもの、二度と繰り返してはならない。それには、私たち体験者が戦争の実態を後世に語り継ぎ、不戦の誓いとしたい。私は、呉鎮守府第六特別陸戦隊「呉六特」の一員として、ソロモン群島ニュージョージア島ムンダへ進出した。

昭和18年6月30日朝、雨の中炸裂する砲弾の音で夢破られた。敵の艦砲射撃である。夜が明け離れると共に、レントバ島とムンダの間の海上は、駆逐艦に護られた輸送船7隻、そして数十隻の上陸用舟艇で埋め尽くされた。上空は常時乱舞する多数の敵機によって手も足も出ない。対岸のレントバ島は既に敵の手に墜ち、砲兵陣地を構築。ムンダへの砲撃を開始した。私たちは一日千秋の思いで友軍機の来援を待った。だが友軍機の来援は散発的。待ちに待っていた一式陸攻機が飛来。陸攻隊は魚雷攻撃の態勢をとりながら猛烈な対空砲火の中、敵輸送船に突っ込んでいく。目的を果たさず魚雷を抱いたまま海面に落ちていく陸攻の姿を目の前に見るのは、やりきれない思いだ。

空爆、艦砲射撃の援護のもと上陸してくる敵軍、ジャングルを完全に平地化する砲爆撃にさらされながら、日本軍は夜襲・切り込みを繰り返すうち次第に消耗していった。連日の白兵戦（相手にせまってする戦い）で米軍は完全に戦意を失い、一旦は水際まで後退したが、新たに2個師団を投じて反撃。2か月に渡る死闘が続いた。負傷者は膿と血と泥にまみれ、異様な臭気を放ち、蠅が産みつけた卵からかえった蛆に苦しめられた。蛆は髪の中に、鼻の中に、耳の穴にまで入り込み、成長して傷口に取りつき、1mm位の蛆が3日もたたないうちに5mmから1cm位に育ち、やがて銀蠅と赤蟻にびっしりたかられる死体の情景を作り出した。蛆に片目をそっくり食べられた重傷者もいた。

7月末、連合艦隊指令部は、セ号作戦を指令。中部ソロモン戦線からの撤退

である。負け戦さの撤退は、一斉にとはいかない。しかも撤退する兵士達は、ジャングルの中で底なし沼の様なぬかるみに足を突っ込んでぬけなくなり、戦友の力を借りて足をぬくといった状態。無論、飢えや病魔で体力をすりへらした多くの兵士達が無念の思いを残して、その泥地獄の中で息絶えていった。

各方面から呉六特本部のエノガイに集結。大型機動艇「大発」でコロンバンガラ島アイヨル入江への輸送である。暗夜ひそかに港を出た「大発」は、クラ湾に出没する敵魚雷艇の目をかすめての輸送だが、十中八九交戦は免れない。わずか6ノットの「大発」は、時速40ノットの敵魚雷艇群の絶好の獲物である。この輸送作戦で多数の死傷者を出した。海戦は悲惨である。海上戦闘は、陸上と違い艇内では味方の被害のみが見える。敵艦の動向がさっぱりわからないといった状態。

次は、北方50カイリのチョイセル島である。第一次9月29日、第二次10月2日に渡り、「大発」による海上大輸送作戦だ。残余の部隊は、駆逐艦での輸送である。この作戦は、佐六特・横七特・陸軍船舶工兵隊の協同作戦だ。特に苦労したのは、第二次10月2日の輸送中のことである。降りしきるスコールの中、突然海上に砲声が轟き、閃光弾が飛び交い始めた。「大発」は、彼我（敵・味方）艦隊の海戦海域に突っ込んでいた。見つければひとたまりもない。そんな中「大発」は揚陸地点に向けて必死の努力をしていた。幸いにしで発見されることもなく、夜明け前スンビ岬にたどり着いた。

今までは海上での逃避行だったが、これからはチョイセル島縦断の行軍である。十日分の食料を支給され、ジャングルのけもの道を踏み分け、急勾配の山道を越えると、スコールで増水した河、濁流が行く手を阻む。浮舟で河を渡ると三抱えもある倒木が行く手をさえぎる。かすかな生を求めて鬼気迫る姿でひたすら歩き続けた。この世のものとは思えない光景だ。行軍の途中力尽きて死んでいった戦友の手指を切断し、遺品として薬きょうに入れ、三角布に包み、首から吊している兵を見た。100kmにおよぶ難行軍の末、北端の邑ホセに到着。ブーゲンビル島ブインを経てラバウルに帰った。

休む間もなく、私は、83警備隊へ転勤を命じられた。呉六特は、その後、昭和19年2月米軍が上陸、激戦の末、玉砕した。ガ島撤退後、中部ソロモン戦に布陣した部隊は、いずれも玉砕を予定されていた部隊であった。戦い止んで50年、いまだ戦争の重荷を背負って生きている人に思いをはせて、歴史の証人としての語り部になりたい。

# 思い出の津村別院

大 嶋 つちお

ガダルカナル島にて、昭和17年12月17日、夫の戦死。原隊からの公報を受け取ったのは、昭和18年7月18日でした。

思わず抱き寄せたわが子（5歳）の顔にも涙の玉が光って見えました。じっと目を瞑れば、在りし日の面影がわが心であり、「後を頼む、子どもをしっかり育ててくれ。」といった言葉が耳元に聞こえるようで、自分は今、大変なことになったのだ。母の私は、強く生きなければならぬのだ。子どもと共に頑張ろうと誓いました。

昭和18年12月17日午後、役場からの電話で遺骨が帰る報せを受ける。全身の血が一度に止まったような感じがした。毎日、今日か明日かと待っていたのに、いざこの日が決まれば、こんなに驚いている自分が不思議にさえ思えました。あれこれと落ち着かず、いよいよ明朝出発と決まれば、もう眠くはありません。子どもも元気な父でも迎えるつもりでいるのでしょ、ただ喜んで走り回るばかりです。その姿を見るにつけ、可愛そうな子よ、父亡き後は、丈夫で大きく育ててほしいものだと祈りました。明けて19日、午前3時に起き支度して、親類の御厚情に感謝して家を出ました。

うす明るくなった大府駅に、5柱の遺族が町長さんのお世話になって汽車に乗りました。12時大阪着、駅で憲兵の案内で地下鉄津村別院前で下車し受け付け、宿に案内されました。

午後6時半からの前夜祭の儀式、厳粛な気持ちで寺院内に入り、全遺族が列々と連なりました。御前の扉が静かに開いて御仏様の前に「ああ悲し」幾百の御霊が真白な箱の上に一つ一つ並んだ位牌の姿、気高く尊い英霊よ安らかなれ、遠い南の島で亡くなった勇士の面々、身が引き締まり震える思いで、手を合わせて拝みました。思い出すまいと努めるのですが、あの部隊で最後の別れになった面会の場面が頭に浮かび、あんなに元気だったのに二度とあの姿が見られないのだと思うと、涙が次々と流れて、遺骨安置所がボーッ



↑南御堂の北約500mに建つ  
☎06-6261-6796 中央区本町4-1-3  
●地下鉄御堂筋線・本町駅から徒歩1分

北の御堂さんと呼ばれる浄土真宗の寺。准上人が、慶長2年（1597）に建立。第二次世界大戦で焼失し、現在の建物は鉄筋コンクリート。

にしほんかんじもらへつじんたまどろ  
西本願寺津村別院北御堂

と霞んで見え、胸が苦しくなりました。

やがて読経が始められて、部隊の各代表、全遺族の拝礼・焼香と続き、<sup>おごそ</sup>厳かに式が終わりました。当年26歳の自分は、この津村別院で同席した数多い同年代の戦死者の遺族に会い「ああこんなにも仲間がいたのだ『同病相憐』<sup>どうびょうあいあわれむ</sup>悲しみは、自分だけではないのだ」と自然に素直になり、あきらめる気持ちを持つことができました。忘れられない過去の思い出の一コマです。

終戦50年は、長かったとも短かったとも感じ、生かされている今の幸せを感謝します。

## ガダルカナル<sup>てんしん</sup>転進

昭和17年12月31日、大本營の御前会議はガダルカナル島作戦の停止と<sup>てしゅう</sup>撤収を決した。ガダルカナル島地上戦での人員損害は陸軍1万3千人、海軍3千8百人といわれ、撤収人員は陸軍9千8百人、海軍8百30人であった。昭和18年2月9日、大本營は、ガダルカナル島に作戦中の部隊は、その目的を達成せるにより他に転進せしめられたと発表した。「<sup>たいさく</sup>退却」のかわりに「転進」ということで、敗戦の事実から国民の目をそらそうとしたのである。



### ガダルカナル島

現在「ソロモン諸島」として独立しているが、日本軍進出当時は英領。東西百三十き。ほぼ四国の三分二で、四国の四つの出っ張りを取ったような地形。中央には二四四〇<sup>尺</sup>の高山がある。全島ほとんど未開の密林で、わずかに北岸の平野部に広大なヤシ畑があり原住民の村落があった。対岸のツラギは天然の良港で、船舶の泊地として早くから開けていた。

日米の決戦場になったのは島の北西部で、ほぼ愛媛県に相当する地域。

『あの戦争』産経新聞社編より



「ガダルカナル転進」を報じる昭和18年2月10日付東京朝日新聞朝刊

# 地獄絵巻

山本幸一

地震・雷・火事・親父おやじと昔こわから怖いものの代名詞に使われていますが、それ以上ひさんに悲惨なことを吾々の人生に味あわせてくれたのは、何ととっても二度と出会いたくない戦争の体験ではないでしょうか。

軍艦ぐんかんマーチの音楽と共に大本営だいほんえい発表。日本軍はアメリカ合衆国と交戦状態に突入し、真珠湾戦果しんじゅわんせんかの発表に酔よいしれたものでした。

その後、弟も応召おうしょうされ軍艦大和ぐんかんやまとに乗り込み、沖繩洋上おきなわで戦死し、50有余年の年月を経ました。若い人にはもう出会うことのないよう、苦い体験を聞いていただきたいと存じます。

今では生き残っている人もだんだん少なくなっています。過去の恐ろしかったことの一部ですが、振り返り申し述べたいと思います。

昭和19年9月、戦争の末期に第二回の応召を広島で混成師団こんせいしだんの一員として受け、大体南方へ行くらしいと想像しておりました。兵舎でいろいろと雑誌を読んだりしながら待機していました。数日後に船団の人となりました。一帖じょうの畳たたみの広さに十数人が閉じこめられて、20日近くも出帆しゅつぽんもせず、どうなることかと心配していました。身体かゆが痒くなり、みんなが騒ぎだしたのは、シラミが発生したためでした。みんながシラミ退治に追われているうちに船は門司を出ました。2～3時間したら船酔ふなよいする人も大分多くなりました。

「あっ、敵の潜水艦が我が船団に現われた。退船準備」

船酔いしている人も大周章おおあわてで飛び出す始末でした。船団は15隻に護衛艦4隻でした。一体何処を航海しているのかさっぱり分かりません。敵艦はいなくなりましたが、今度は艦内に伝染病患者が出て大牟田港おおむたに立ち寄った。患者かんじゃを陸軍病院きょこくちゅうぐんに護送する任を受けて、病院から帰ってきたら船団はいない。拳国忠君愛国の信念を植えつけられた私たちも、内心うれやれ嬉しやと思っても言葉には出せません。

「佐世保軍港させほぐんこうに來い。」

との指示があつて、がっかりして船団の人となりました。そして急に行路の変更さいしゅうがあり、行く予定の沖繩が空襲で、やむを得ず朝鮮の済州島さいしゅうへ引き返し、数時間の休憩くうばくの後に出帆した。2～3時間後に「今、済州島は空爆を受けた。」



# ぐん き ほう しょう 軍 旗 奉 焼

山 本 慶 司

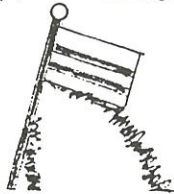
昭和18年ごろは、アッツ島の玉砕、ガダルカナル、ミッドウェイ海戦等南方各地での敗戦は重なっても、日本は不滅だ！「神風」は吹く！と真の報道は伝わらず、国内は勝利を信じ、勇躍、壮途に赴く若人の数は増すばかり。

その頃、私は出征した。歓呼の声に、区長さんの激励のことばに、見送りの人達に、征って来ます！と藤井神社を後にして、博多港から、荒れ狂う玄界灘を渡って釜山へ。異国情緒ただよう、民家から「哀号」という泣声が聞えて来た。一路朝鮮半島を北上して（長春）へ、遺書、爪、毛髪の一部を送って…。

翌朝、熱河省喀喇沁中旗という所へ貨物列車で行き、寒風すさぶ、枯れた大平原を行軍し続け、病友の背嚢を背に重ね、両肩に銃を、歩きまた歩く。駐屯地につく、低い土造の家屋、ランプ、銃架、古いテーブル、暖炉はない、オンドルといって、土の溝、（煙りっぽく）アンペラを敷き、毛布にくるまって眠る。草原の中で全く林も森もなく、村落も遠い。馬が走り、車が通れば、砂埃が立上る。夜、歩哨に立てば、狼が遠吠し、月は上弦に輝き、星は軍営に満つ。演習に出れば延々と続く羊の大群を連れた牧童に合う。幽玄の世界をみた。

2月13日、中防作令甲13号という命令で、長春に

歩兵二十五連隊旗

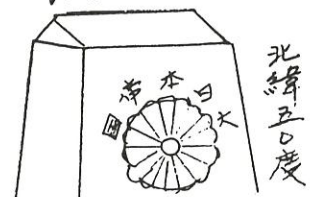


帰ることとなる。本来なら4年兵は満期除隊のところ、不運にも召集の形で、編成され、北千島最北端の島へ移駐となる。行軍、また行軍、貨物列車、軍用列車、連絡船、内地を縦断して青森港棧橋待合室へ、異様な光景をみた。船員に尋ねてみると、ガダルカナルで玉砕した北

海道生れの英霊の白い木箱のピラミッドであった。国のため散華された先輩英霊をムザムザ、敵の魚雷で沈ませてはならないと答が返る。英霊より一足先に津軽海峡を渡り、白一色の引込線、運河の小樽港に着く、下車をするや否や荷卸しが始まり、軍装を解いたのは市内のお寺で、艱難、

辛苦、忍耐が続き初年兵には酷しい。受難の三週間が待っていた。使役また使役、整理整頓、点呼、訓示が終ると、初年兵は呼び出されて打擲の制裁が続き、私などはメガネは飛散し、つるは折れ、奥歯は欠け、鼻血、耳の

日露国境境界標





下のあざを受け、その様子は能や歌舞伎の立ち廻りのように、他の初年兵は明晩は我身だと真剣にみて同情、心配していた。

数日後、私は「転属」の命令が出て、小樽を出航して、海から利尻、礼文の島を眺めて、大泊から、黒い樹海、カラムツ、トドマツの茂る間を縫うようにして上敷香で赴任、この歩兵25連隊（要2221部隊）の所属となった。それから、毎日、訓練、演習、冬季はスキー訓練、ツンドラがとけてまた凍り、歩兵の各種兵技任務につき、瞬く間に1年が過ぎ、白皚の中を札幌へ教育に出た。

8月6日国境古屯からソ連軍が進入して、敵は陸、空から侵攻して、南下を続け、上敷香も焼かれ、15日の終戦の詔勅は戦の最中

であった。17日応戦中に「軍旗を奉焼せよ」の命令が下り、18日豊原、真岡の中間の逢坂部落の神社境内で、歩兵25連隊長は所属部隊を集めて、将兵の見守る中、軍旗を奉焼した。日露戦争以来、数々の武勲を秘めた由緒ある軍旗は灰塵に帰した。居並ぶ将兵の顔は涙、涙であった。何んとも申し訳けない感激の一場面であった。硝煙と弾雨によって、どの連隊も同じく、文字通り真中がなく、周りの房だけの軍旗は厳然として心のよりどころであった。部隊の象徴であった。20日ソ連軍は真岡に上陸し、空と陸と艦砲射撃の他に車輛、火砲、自動車の陸揚げをし、橋頭堡を逐次拡大し、敵はすこぶる残虐にして、住民を惨殺し、自動小銃や機関銃で猛射し、中隊長は形見に分けてもらった軍旗の房を中隊全員に見せて最後の決意を示し、兵隊の士気の揚る中に、夜襲戦を計画し、熊笹峠で戦勢を整え、宝台～真岡と戦は続き、22日には「矛を収めよ」「俘虜となるも停戦せよ」との命令が下りた。建軍以来、私たちの頭の中は「恥を知る者は強し、常に郷党家門の面目を思い、愈々奮励してその期待にこたえること、生きて捕虜の辱しめを受けず、死して罪禍の汚名を残すこと勿れ！」ということを信じたのに、戦いは大詔が下ってから13日後まで続いて終わった。戦死された方、負傷された方、武装解除の後、シベリアへ連れられていった方、本当に、本当にご苦労さんでした。

# おとうとよ

千賀やえ

弟<sup>たけひこ</sup>計彦は、4人の女の子が続いた後、大正4年、父深谷雄太郎、母れいの長男として生まれた。そのころは、長男が生まれると、跡取り<sup>あとと</sup>ができた<sup>あんど</sup>と祝ったものである。4人もの女の子の次に男の子が生まれたのだから、母も安堵<sup>あんど</sup>したことだろう。先祖<sup>せんぞ</sup>の太左衛門の太の字をとって、太計彦と名付けたのである。一族<sup>しゆくふく</sup>の祝福と期待と愛情に包まれて、すくすくと成長した。祖母は、親戚<sup>しんせき</sup>へ事ある毎<sup>ごと</sup>に弟を連れて行き、「これが家の跡取り<sup>あとと</sup>です」と紹介<sup>しょうかい</sup>した。

長じて、甲種合格<sup>こうしゅごうかく</sup>し、第三師団野砲第三連隊<sup>だいしだんやほうれんたいしよぞく</sup>に所属。中国各地を転戦した。武漢<sup>ぶかん</sup>で航空隊に転じ熊谷航空学校<sup>くまがやこうくうがっこう</sup>を卒業。続いて陸軍航空士官学校<sup>しかん</sup>卒業。浜松航空隊より、パレンバン落下傘部隊<sup>そうじゅうし</sup>の操縦士<sup>かつやく</sup>として活躍した。その後、パキスタン西インパール作戦<sup>こんきよち</sup>を有利にするため、根拠地<sup>こんきよち</sup>パキスタンのチッタゴン港<sup>ぼく</sup>爆撃<sup>ぼく</sup>の命<sup>めい</sup>を受け、重爆撃機<sup>じゅうぼくげきき</sup>の機長<sup>とうじょういん</sup>として搭乗員<sup>とうじょういん</sup>20余名とともに出撃した。「高射砲<sup>こうしゃほうだん</sup>弾<sup>めい</sup>が命中<sup>めいちゆう</sup>し、僚機<sup>りょうき</sup>に翼<sup>つばさ</sup>を振り、別れの挨拶<sup>あいさつ</sup>をして、埠頭<sup>ふとう</sup>施設<sup>しせつ</sup>に突っ込んで壮烈<sup>そうれつ</sup>な戦死<sup>せんじ</sup>。」との通知<sup>つひ</sup>があり弟は遂<sup>かえ</sup>に還<sup>かえ</sup>らなかった。昭和18年12月26日のことだった。

父、雄太郎<sup>ちようか</sup>の弔歌

防人<sup>さきもり</sup>の 務<sup>つと</sup>めはげめと 訓<sup>さと</sup>ししも  
散<sup>ち</sup>るを急<sup>いそ</sup>げと 望<sup>のぞ</sup>まざりしに

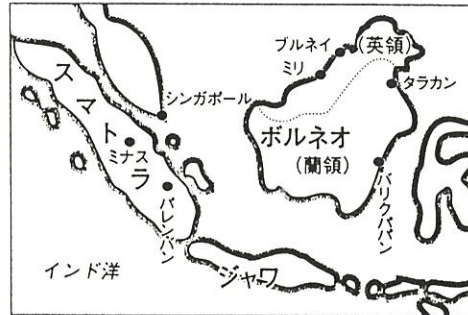
昔<sup>かたぎ</sup>氣質<sup>かたぎ</sup>の父<sup>ちち</sup>だから女々<sup>めめ</sup>しい態度<sup>たいど</sup>は見<sup>み</sup>せなかつたが、期<sup>き</sup>待<sup>たい</sup>していた弟<sup>あに</sup>の戦死<sup>せんじ</sup>から立<sup>た</sup>ち直<sup>ち</sup>れずに、「平和<sup>へい</sup>になつたら、チッタゴンへ行<sup>い</sup>つてみ<sup>み</sup>たい。」と言<sup>い</sup>いつつ亡<sup>な</sup>くなつた。弟<sup>あに</sup>、28歳<sup>さい</sup>で、温<sup>ぬ</sup>かい家庭<sup>かてい</sup>を築<sup>き</sup>くゆとりもな<sup>な</sup>い人生<sup>じんせい</sup>だつた。

彼<sup>ひ</sup>我<sup>が</sup>ともに、春秋<sup>しゆんじゆう</sup>に富<sup>と</sup>む尊<sup>とうと</sup>い人間<sup>にんげん</sup>の命<sup>いのち</sup>を奪<sup>うば</sup>い合<sup>あ</sup>う戦争<sup>せんそう</sup>は絶<sup>ぜつ</sup>対<sup>たい</sup>にしな<sup>な</sup>い。このこと<sup>こと</sup>が全<sup>ぜん</sup>人類<sup>にんるい</sup>の共<sup>きゆう</sup>通<sup>つう</sup>の願<sup>ねが</sup>いとし<sup>し</sup>て守<sup>まも</sup>られ、平和<sup>へい</sup>な社会<sup>しやかい</sup>が来<sup>き</sup>ることを切<sup>き</sup>に願<sup>ねが</sup>う。故<sup>こ</sup>国<sup>こく</sup>の平和<sup>へい</sup>と繁<sup>い</sup>栄<sup>さか</sup>を一<sup>いち</sup>途<sup>ず</sup>に願<sup>ねが</sup>って逝<sup>い</sup>つた弟<sup>あに</sup>や、この戦争<sup>せんそう</sup>で散<sup>ち</sup>つた多<sup>おほ</sup>くの方<sup>かた</sup>々の死<sup>し</sup>を無<sup>む</sup>駄<sup>だ</sup>にし<sup>し</sup>てはな<sup>な</sup>らな<sup>な</sup>い。弟<sup>あに</sup>よ、魂<sup>たましい</sup>安<sup>やす</sup>かれと祈<sup>いのち</sup>る。

## パレンバン降下作戦

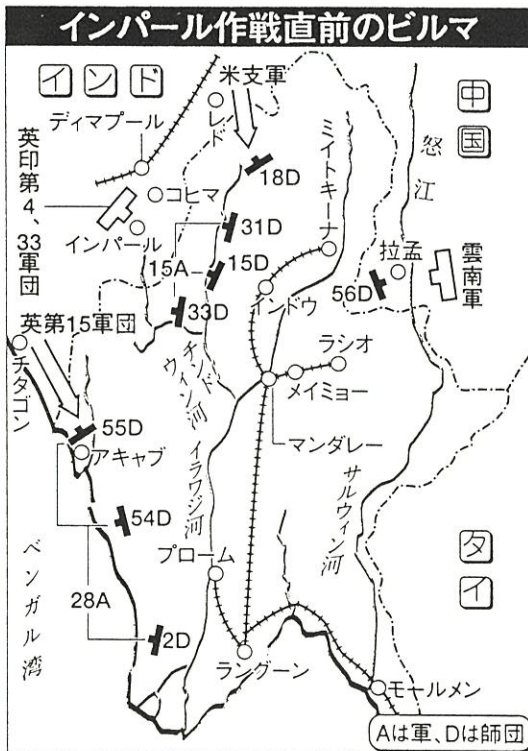
「石油の一滴は血の一滴」といわれた。対日石油輸出規制で、昭和16年5月ごろから最大の供給国だった米国からの石油輸入はストップした。日本の南方進出のもっとも大きな目的は、石油資源の獲得にあった。

昭和17年2月14日、占領したマレー半島南部の基地を出撃した陸軍の落下傘部隊339人が、オランダ領スマトラのパレンバンに降下した。陸軍初の空挺作戦だった。パレンバンには、当時、世界最大級の製油基地があり、年間産油量は約470万kl。当時の日本の国内消費量よりも多かった。落下傘部隊は、製油所の占領に成功。翌日には、製油所・油田の復旧にあたる日本石油の技術者らの石油部隊が上陸した。



『あの戦争』産経新聞社編より

## インパール作戦



トラック、そしてマリアナ諸島に米軍機動部隊が来襲し、大本营は足元に火がついているというのに、はるか西のビルマ（現ミャンマー）戦線では、昭和19年3月8日、インド領へ進入するインパール作戦が、開始された。当初から、国境地帯の険しい地形から見て、実行困難といわれたが、実際「補給を無視した無謀な作戦」となった。

7月2日、インパール作戦の中止命令が出されたが、雨季は最盛期に入り、食糧の尽きた中での、悲惨な退却行が始まった。栄養失調に加えて、マラリアと赤痢の蔓延で戦病死者が続出した。兵たちは、退却する道を「白骨街道」と呼ぶようになった。戦後著わされ、映画にもなった竹山道雄の『ビルマの豎琴』は、僧となって、「白骨街道」に放置された戦友の遺骨収集に余生をささげる決意をした、水島上等兵の話である。

『あの戦争』産経新聞社編より

## 8月15日の回想

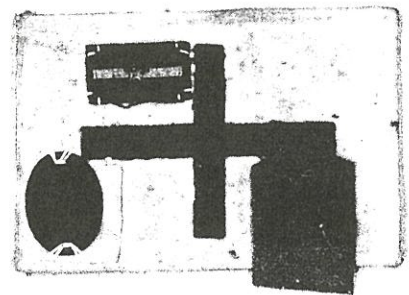
水野清次郎

長沙<sup>ちょうさ</sup>の平常の朝は静かであった。不寝番<sup>ほしやう</sup>や歩哨に立った時など、崩れかかった土塀<sup>どべい</sup>の中から外を見ると、早起きの良民<sup>りやんみん</sup>が野菜や果物を天秤棒<sup>てんびんぼう</sup>で担ったり、一輪車に商売物を積んで、売り場へ急ぐ者が2・3人歩いている位である。平素は静かな<sup>こ</sup>此の街も、その日は朝早くから爆竹が鳴らされた。たて続けに鳴り出したその音に、私たちは深い眠りから呼び覚まされ<sup>たた</sup>叩き起こされたようで、暫くの間、頭の中がはっきりしなかった程である。ところが、その<sup>さん</sup>劈ざめく様なけたたましい音は、衰えるどころか、時が過ぎるに従って大きく広がっていた。爆竹のその音は四方八方に広がり、私たちの宿舎を取り巻いて、意地悪くも、これでもか！これでもか！というふうに、少しも休まず鳴り続いた。時には、耳を覆<sup>おお</sup>う様な馬鹿でかい音も混じって驚かされたのである。

その前日に、明日正午に、重大発表があるから正装にて庭前に整列、という隊長殿からのお達しが出されていた。重大発表とは何であろう。第一正装といっても、ついこの間の<sup>しこう</sup>沚江作戦では、随分<sup>た</sup>叩かれ散々な目に遭<sup>あ</sup>って、小さな部隊でも何名かの戦死者・負傷者を出し、やっとここまで逃げ延びて来たばかりではないか。食うことが精一杯で、交換する衣服の配給どころではない。こんな状態の今、何を着るんだ。とそんな声もあったのである。

その15日の朝である。まだ暗い夜明け前から、バシ、バシッ、バーンと爆竹が鳴りだし、その音は時間の経過とともに益々大きくなり、その合間には「ウワー」とか「オー」とか、怒鳴るような喚声<sup>わんせい</sup>が聞こえて来る。しばらくして、「外に出るな！」という外出禁止令が出されて、事の成り行きが想像された。しかし、だれ一人、日本は負けたんだと言う者はいなかった。

その日も、また朝から暑かった。朝食を終える頃から気温はぐんぐん上昇して、じっとしていてもジリジリと汗がしみ出る程であった。外へ出る



〈呂六一三六 中六ノ九四〇の私の認識票〉



〈虎は千里往って千里帰ると言う。この虎の絵は私を守り通し私と共に無事家に帰った。〉

ことも出来ず、室内に閉じこもっている私たちの耳に間断なく響いて来る爆竹の音は、もう、鬱陶<sup>うつとう</sup>しさを乗り越えて、その休みなき執拗<sup>しつよう</sup>さには腹が立った。時々湧き上がる喚声<sup>わんせい</sup>と、それに呼応するかのよう<sup>かね</sup>に鐘や太鼓<sup>たいこ</sup>を打ち鳴らして氣勢を上げる。それはあたかも、私たちに挑戦しているかのようであった。その狂気乱舞は、何時果てるかも解らず、重大発表があると知らされていた正午頃が最大最高であった。

無条件降伏<sup>こうふく</sup>！ ポツダム宣言受諾<sup>じゅたたく</sup>は、私たち日本軍人よりも支那民衆の方が、はるかに早くから知っていたのである。壁外の大喚声を聞き腹を立て、悔しさの持って行き場のない憤り<sup>いきどお</sup>をどうすることも出来ず、じっと我慢<sup>がまん</sup>するより他に仕方がなかった。この荒れ狂っている大喚声に立ち向かって行ったら、たちどころに、一瞬のうちに打ち倒されてしまうであろう。怒りと虚ろ、そんな矛盾した気持ちで私たちは重大発表の正午を待った。

入隊以来2年経っていたが、部隊ではまだ初年兵であったから、何時も時間に追われて暇のない私たちであったが、この時ばかりは手持ち無沙汰<sup>ぶさた</sup>で、昼までの時間を持て余した。正午に近い真昼の太陽は頭の真上にあり、目まいする程の暑さであったが、壁外の騒ぎだけはそのとどまる所を知らず、興奮<sup>こうふん</sup>は興奮を更に増すようで、その様子は壁の中にも良く伝わってきた。しかし、さすがに彼等も我々の中へは入って来る様子はなく、日本軍の強さ、恐ろしさは良く知っていたのであろう。

正午少し前、私たちは庭前に並んだ。隊長殿の挨拶<sup>あいさつ</sup>があつて、台の上にポツンと置かれたラジオのスイッチが入れられたが、「ザーザー・ガーガー」という雑音ばかりが大きくて、大切なお声は、残念ながら十分良くは聞き取れなかった。けれど、その聞き取りにくいお言葉の中から、我々大日本帝国は負けたんだということをはっきりと知った。重大発表の儀式はわずかな時間で終わった。涙は不思議にも出なかったが、腹の中はいっぺんに空になったようでがっくりと力がなかった。

日本は負けたんだ。神州不滅、万世一系、そんな言葉が頭の中を駆け巡<sup>かめく</sup>った。虚ろな気持ちで見上げた空は、あくまでも青く、晴れ上がっている。その下の方に、真夏の白い雲が厚めに重なりゆっくりと流れて行った。ちょうどその時、その白雲を追うように飛行機がただ一機<sup>ゆうぜん</sup>だけ悠然と飛んで行った。私の目には、それは全く高々度で機影は小さかった。昨日まで恐怖の思いで聞いた爆音も、今は地上の大喚声にさえぎられ、聞こえては来なかったが、その機影

から二つ・三つと黒い塊かたまりが落とされた。その塊は、初めは小さく、落ちる速度も速かったが、下に落ちて行くにしたがって、それが次第に大きく広がって、速度もゆっくりとなり、ヒラヒラと舞い下りて行くようであった。それは、ばらまかれたビラだったのである。敵さん発行の宣伝ビラで、日本降伏を自国民に知らせると同時に、中国軍また民衆との激突を起こさぬようにという警戒やら注意の宣伝文だったのである。無益ないさかいを起こさぬようにとの配慮とも思われる。

大陸では最後となった沅江作戦では、我に利あらずして敗退したが、全土に於いての大勢としては、まだ、かなりの余力を残していたように思う。その日本軍を刺激しげきして、トラブルを起こしては、双方ともに得策ではない。そんな風にも思えたのである。

蒋介石さんの「徳を以って報いよ！」という言葉が、改めて思い出されるのである…。

それから昭和21年7月5日、上海港出航まで1年にも近い、永い永い私たちの行事が始まるのである。行く先々で、負けたことがいかに哀れであることか、悔しさ・悲しさを十二分にも十三分にも味わされた行事が始まったのである。私たちは、中支最後の引揚船高砂丸たかさごまるに、やっと間に合ったのであった。

あれから半世紀、50年になる。私たち兵舎の真前まんまえのファンズで、靴の修理をやっていた、元日本陸軍兵士、第一次長沙ちょうさ作戦で日本軍に見捨てられ、重傷の身で捕虜となり、永久に故国日本から忘れ去られた人、あの人はどうしているのだろうか？

語りたことは多い。毎年のことだが、8月15日が来ると、長沙のあの暑い日、青い空、白い雲、宣伝文を撒まいて行った、ただ一機だけの飛行機！そしてあの元日本兵！を思い出すのである。



〈中国最大の湖、洞庭湖どうていこ〉

夏期増水すると、長さ120km、幅96kmにもなるが、冬は水位が低下する。

私たちの中国での3年間は、洞庭湖を中心に、上り下りをしたようなものであった。揚子江ようすくわうの長さ、大きさ、洞庭湖の広さは、忘れ得ぬ大陸の風景である。

### 奉天のホテルで熱いコーヒー



奉天神社での記念写真。  
前列左端が水野さん、後  
列左から井上、田中、井  
上末子、西山の皆さん  
昭和19年春撮影

ようやく奉天にたどり着いた水野さんたちが、決まって訪れたのが「大和ホテル」の喫茶室。熱い一杯のコーヒーは最大の憩いだった。代金を

所属の水野さんらは、傷病兵を内地に送還するため南京―奉天間の病院列車で輸送任務に就いていた。五、六日かけての輸送は便衣隊(ゲリラ)、正規軍の襲撃、地雷敷設などで不安と緊張の連続だった。  
「あの方たちにお目にかかることができたら、来年四月の戦友会(九班会)にぜひお招きしたい」

↑  
残念ながらこの女性たちとの再会はできなかった。



↑ ナンキン 南京第一陸軍病院にて三笠宮殿下(真ん中の方)。私たちも正装して警戒に当たった。



↑ シャンハイ 上海競馬場は広大な野原であった。完全装備の行軍で偉かった。私も↓この中のどこかにいる。

# ウエートレスと憩いの時

## 女性の探索

平成たずね人

「過酷な任務の中で、奉天でのひとときは実に楽しいも 央町六ノ一五七、水野清次郎

さん(せむ)は、昭和十九年春、満州・奉天(現・遼寧省瀋陽)で知り合ったウエートレスの女性たちとの再会を望んでいる。  
中国大陸での戦況が悪化する中、北支・中支派遣員六一三六部隊患者輸送部第九班に

所属の水野さんらは、傷病兵を内地に送還するため南京―奉天間の病院列車で輸送任務に就いていた。五、六日かけての輸送は便衣隊(ゲリラ)、正規軍の襲撃、地雷敷設などで不安と緊張の連続だった。

時に記念撮影した。その後、アメリカから空輸された新装備の中国軍に對した「正江(しこう)作戦」にも参加した水野さんにとっては、奉天でのひとときは今もってほのぼのとした思い出として心に残る。「あの方たちにお目にかかることができたら、来年四月の戦友会(九班会)にぜひお招きしたい」



↑ ヘーギン 北京紫禁城が後方はるかに見える。

# 墓参の場は追憶の場

鈴 置 清

夕暮れせまる寺の境内<sup>けいだい</sup>である。観音堂<sup>こうしんどう</sup>、庚申堂へのお参りが日課になって久しい。

懐中<sup>かいちゆう</sup>に五円玉、手にろうそく、線香<sup>とうみょう</sup>。灯明の中に青い香煙が立ち昇る。静かに心経<sup>しんぎょう</sup>を唱える。太陽は沈んで間もなくであたりはまだ明るく、茜色<sup>あかねいろ</sup>の空に鳥が一・二羽。庚申堂の石垣に体をあずけて手を合わせる。静寂<sup>せいじやく</sup>に包まれる一刻。ふと目を上げた視野の中に黒く石碑<sup>せきひ</sup>が建つ。逆光を背にして影絵のように。碑の肌は緑か、はっきり見えない色<sup>おお</sup>で覆われている。50年の風雪の跡。

碑は、高さ3メートル、幅1.5メートルくらいか。碑も台座も自然石で碑面上部<sup>じんちゆうほうこく</sup>に盡忠報国と読める。中央いっぱい大きな文字「故陸軍伍長<sup>こりくぐんごちょう</sup>」その下は樹の葉に隠れて見えない。この碑が建ったのは戦争中で、それ以後の世相の移り変わりを見下ろしている。碑の裏に略歴が彫ってある。私は今回改めてその文字をたどる。

「油山警備<sup>たい</sup>二對スル弾薬補給ノ命ニヨリ前進途次敵ト交戦大隊本部二報告連絡ノ途中遂ニ戦死功ニヨリ伍長ニ任ゼラレ勲 等 級ヲ賜フ 享年26歳 昭和18年10月」

顕彰<sup>けんしょう</sup>の等級がはいっていないのが空しい。故国の敗戦がここにもあった。

この一画に建つ碑の中には中支あり、南支あり、実に多方面の戦線に兵士が散らばっていたのである。そして戦死。この碑の文面をみてあの玉音放送の「終戦の詔書」が心によみがえる。

## 詔 書

曩ニ米英二國ニ宣戦セル所以モ亦實ニ帝国ノ自存ト東亜ノ安定トヲ庶幾スルニ出テ他國ノ主權ヲ排シ領土を侵スカ如キハ固ヨリ朕立志ニアラス然ルニ交戦己ニ四歳ヲ閲シ朕力陸海將兵ノ勇戦・・・最善ヲ盡セルニ拘ラズ戦局必ズシモ好轉セズ・・・

碑の一基は私の従弟<sup>いとこ</sup>で幼い頃遊んだ間柄です。4歳下で、昭和20年12月13日中支博文書院に於いて戦死<sup>ほへい</sup>。歩兵上等兵でした。歩兵であったからこそあの広い中支の戦野で奇跡的に彼との出会いがあったのでした。

私たちの部隊は夕食をすませて夜行軍です。敵が近いので煙草<sup>たばこ</sup>の火にも気を使っての肅々<sup>しゆくしゆく</sup>の行軍でした。渡河点<sup>と かにん</sup>に近づくとつれ、他の部隊もここに集まる

ので隊列は錯綜<sup>さくそう</sup>してくる。呼びかける声。小隊中隊の人員掌握<sup>しょうあく</sup>の声。おし殺したような声があちらこちらから聞える。軍馬のいななき。極力行動を秘匿<sup>ひとく</sup>しての隠密<sup>おんみつ</sup>行動を心掛け、戒め合っている。だがこの暗夜である。人数を確かめる声もつい大きくなる。

その時である。「すずおき」と呼ぶ声が耳に届いた。一瞬、自分が呼ばれたかと思った。が、その声はかなり焦<sup>あせ</sup>っている。私は近くの者に、

「むこうの隊に知り合いがいるかもしれぬ。行ってみる。出発になりそうになったら知らせてくれ」

心せくまま、それだけで言ってたずねてまわった。

「おい、鈴置はどこだ。俺<sup>おれ</sup>は鈴置だ」と呼びながら急いで探し歩いた。と返事があった。

「元気か、野戦はいつ来たか」

あわただしい面会だった。時間がない、肩をたたいて、「体に気をつけよ」くらいしか言えない。またどこかで会えるかもしれない。と心を残しつつ自分の隊の方へ走った。慌<sup>あわ</sup>ただしい面会だった。束の間の別れとなった。

間もなく渡河開始。18年5月の頃です。対岸で赤吊星が揚がる。船着場とて急造<sup>きつせい</sup>のもの。細い板が吃水の浅い舟に渡してある。川面が低いので板は傾斜している。

「一人ずつ渡れ。慌<sup>あわ</sup>てて河に落ちたら助からんぞ。」

前の者が渡るのを見守る。板がしなっている。私は元来こういうところを渡るのは不得手なので無我夢中で船に転がりこむ。

作戦開始時で袋には携帯食糧までぎっしり入って重い。どうやら渡河は無事にすむ。この辺は、沼沢地<sup>しょうたくち</sup>で到る所に沼あり、クリークありで、そうした地形と特殊な保壘<sup>ほうるい</sup>に前進<sup>はば</sup>を阻まれる。大きなのは300人位で守っているという。所々に銃眼がかすかに見える。なかなか下にとりつけない。やっとりついても上がれぬ。長いハシゴをかけ、頂上の穴から手榴弾<sup>しゅりゅうだん</sup>を投げこむ。

6月下旬、江南作戦終了。その後も移動ばかりで、いとこの消息もわからぬまま復員して戦死を知りました。

ここに並ぶいくつかの碑の英霊には、戦後もない。

# 戦いすんで

—上海捕虜収容所から大府駅まで—

浅田 孝 敬

夏の暑い日に、解りにくい玉音放送を聞いて戦争は終わった。20歳の私には、戦争がなにであったのか、終戦とはどんなことなのか全く解らなかった。

お前等は、2銭のハガキで集められた兵隊だ。上官の命令はどんなことがあっても聞かねばならない。それが終わったのだ。8月15日、暑い日だった。朝からやっていた零戦の整備はまだ終わっていないが、もうしなくても良いのか。大切な戦闘機だったはずなのに、もう無用になったのだ。この日、午前中までは忙しかったのに、今は命令もなければ、号令を掛ける人もいない。飛行機も出撃しない、空襲もない、誰も口をきかない、拍子抜けがして考える気力もない、昼寝でもするか。

ここは中支（中国）上海市外の日本海軍航空隊滑走路脇にある電灯もない番兵舎の中だ。夜が来た。灯火管制で隊の内外は灯りすらない。昼間のことは本当なのか。自分たちはこれからどうなるのだろうか。敗けたと言うことはどうなるのか解らない。そんな一日が過ぎて行く。翌朝いつものように目覚める。作業着を着て寝台から出る。号令も整列も何の指示も今朝はない。作業はないのかなあ。今までこんなことあったことがない。戦いすんで日が暮れて、遊んで食べて二週間目、ようやく我々日本海軍航空隊在中華軍の処置が中国側から知らされた。「航空隊を明け渡して上海陸戦隊兵舎へ移れ」と言われた。武装解除が行われ、兵器類の没収が終ると捕虜収容所の生活が始まった。作業への狩り出しがあり毎日が忙しくなった。自動小銃を肩にしたMPの見張りに追い立てられる。手袋もない手に血がにじむ毎日だ。敗残兵のつらいことよ。作業は主に日本軍が造った物の取り壊しや、入港する米艦船の荷物の上げ降ろし、降ろした荷物を岸壁から倉庫まで担ぐなどの作業であったが、驚いたことに輸送艦には女の兵隊がいて着岸・停泊などの指揮を取っていた。また、これらの荷物が食料品の時は、MPが我々の目の前で箱をばらして分けてくれた。上官の指示もないのに勝手に開けてくれたのには、いささか驚くと同時に、日本軍とはまったく違うのだ。

我々日本兵には、内地の事情は全く知らされなかったが、そのうち中国人や日僑の人々から、広島、長崎の原爆の話、空襲のことや愛知の地震もひどく

て、「帰っても住む家もないぞ」と聞かされた。そんな収容所での生活も慣れるとけっこう楽しいものになった。

そして、とうとう帰れる日が来た。大勢の引き上げ者組に入れられ、部隊編制があり隊を揃えて収容所を出発した。ときに昭和21年3月15日のこと、終戦から7か月目のことだった。14km歩いて上海新政府の税関検査場へ。ここで仮眠をとり、翌朝広場で荷物点検、港の乗船場は大勢が乗り込むために夕方になる。機雷があり、夜の航行は危ないので今夜はここで停泊。この引き上げ船の部屋が大変で、貨物船なので甲板に大きなハッチが開いている。中二階があり狭いはしごで船底へ。ここが我々の居場所と決まった。「蝕雷でもすれば、いちころで東支那海の藻屑だなあ」と誰かが言った。船底で大きなシャフトのカバーにもたれてエンジンの音を聞きながら4日間の船旅だ。揚子江を出て4日目、九州が見えた時はうれしかった。午後博多へ入港、検疫で頭からDDT粉剤をかけられ、復員列車の到着を待つ。ここで九州の人たちとの別れだ。

私たちは九州佐世保鎮守府所轄の本隊だったので、ほとんどの同僚と別れた。夜半いよいよ列車が入り、グループごとに乗り込み東京行き復員列車が走り出した。小倉、下関と停車し小郡まで来たら夜が明けた。のろのろと列車は進み広島駅へすべり込んだ。これが原爆の街か。上海の日本字新聞には五十年は草は生えず、人も住めないと書かれていたが、ここから見ると焼け焦げた大木から芽が出ているではないか。駅周辺には焼けたトタン屋根の家で暮す人がいて、野には少しだが緑がある。麦でも播いてあるのだろう。岡山で四国へ帰る者が別れ、大阪へ着いたのが夜だった。大阪で下車、全員に新円の切り替えの話があり、持って来たお金は全部没収された。証紙を貼った新円札を数拾円渡されたが、故郷に親がいて後継ぎの者は皆の倍の新円札が渡された。ここで簡単な入国手続きを終えて再び列車に乗り込む。各駅停車だから停車のたびに人が降りて行き、名古屋につくころには空が白んで来た。大府駅では、私一人だけの下車だった。東へ帰る皆が窓から手を振り「元気でやれよ」と、声をかけてくれた。「さようなら。元気だったらまたどこかで会おうな」と友に一声。大府駅は出征の時と変っていない。俺はとうとう故郷に帰って来たぞ、早朝の駅前で思わずバンザイとさげんだ。

# 満州放浪体験記

加藤 敏 男

私が徴兵検査で甲種合格となり、東満州の林口の山砲独立守備隊に現地入隊を命ぜられ、名古屋の野砲八連隊に仮入隊したのは、昭和19年3月10日のことであった。入隊して20日後の深夜、突然たたき起こされ、任地に赴くこととなった。懐かしい故郷を離れて約1週間、船酔いに苦しみ、貨車に揺られての辛い旅路の後、4月7日の夕暮れに、ようやく原隊所在地に到着した。

私の入隊した部隊は、泣く子も黙ると言われる関東軍の精鋭部隊で、そこで初年兵として激しい訓練を受けることとなった。そして、その年の年末に転属命令を受け、南満州の鞍山に赴くことになった。鞍山には大きな製鉄所があり、その技術兵として満州第515部隊に所属した。

鞍山に転属して、気温・兵舎など環境が著しく変わった。兵舎は、平屋建ての長屋式民家の壁をぶち抜いた畳み敷きで、わが家に帰ったような感じである。厳しい訓練もなく、古年兵の世話も、馬の手入れもない。民間人になったような感覚に陥って行くのを戒めるのに必死であった。

明けて昭和20年8月、突如として、ソ連軍の参戦が告げられた。内地では、広島・長崎に原子爆弾が投下され、一億玉砕と言われる中、8月15日を迎えた。営庭に整列して、終戦の詔勅を一瞬耳を疑いながら、涙して聞いた。鞍山の地は、一日にして敵地と化した。ソ連軍の命で武装解除、軍としての機能を失った、私を含めて部隊全員の運命は？ 在満邦人の運命は？ そして、祖国日本の運命は？ 不安ばかりがつのり、焦燥の色濃く、互いに、些細なことにもわめき散らす喧騒の日々が続いた。鞍山の治安もすこぶる悪くなった。

武装解除された我々は、ソ連軍の監視のもと、兵舎内で不安と焦燥の一週間で過ごした。どうやら部隊はこのまま存続し、ソ連軍の指揮下で使役に従事させられることになった。作業内容は、我々が勝利のために日夜増産に励んだ、製鉄所の解体作業であった。その作業が終わると、内地へ送還されるという約束を取り付けているとのことであった。それから、1か月余の日夜兼行の作業が始まった。

作業が終わりに近く、いよいよ祖国に帰れるかと、希望に胸を膨らませていた矢先、全員シベリア抑留の情報が伝わって来た。もうこれ以上、我慢できな

い。シベリアまで連れて行かれ。ソ連軍の奴隷として、シベリアで犬死に野垂死にするのは嫌だ。ここで、意を決した者同志で脱走を決意したのである。

街の治安は、ある程度維持されているとはいえ、軍人の夜間外出には、監視の目が厳しかった。我々の兵舎の回りには、有刺鉄線が張り巡らされ、ソ連軍の歩哨が絶えず監視していた。兵舎と道一つ隔てて製鉄所社員の社宅が並んでいた。兵舎から脱走しても、軍服では直ぐに目に留まるので、何とか民間人に成り済まさなければならない。そこで、監視の間隔を利用して、有刺鉄線を潜り抜け、知り合いの日本人の社宅の戸を叩いた。しかし、すでに日本軍人を匿うと処罰するとの布告が出されていたので、戸を開けても、身の危険を感じて体裁良く断られてしまった。

徹夜作業をしていた頃、「鞍山の南西に位置する千山には、兵器弾薬を持った完全な日本軍部隊が健在で、共産八路軍に対しゲリラ活動をしている。そして、蒋介石の国民党に通じている。」と話を聞いたことがあった。2～3名の小単位で、夜陰に乗り見知らぬ千山を目指した。飲まず食わずの逃避の末、2日目の朝、千山らしき山の麓に辿り着いた。樹木の間から「誰か？」と紛れもない日本語。着剣した日本兵の頼もしい歩哨の声であった。姿勢を正し、その旨を伝えると、山の中腹にある小屋に案内された。「よく着いた。よく頑張った。」と励まされ、熱い味噌汁と温かい飯の歓待を受けた。2日ぶりに何の危険も不安もない安住の地で、涙をポロポロ流しながら満腹感に浸ることができた。

翌朝、快い眠りから醒め、朝食をいただき、周囲を見回して驚いた。噂どおりである。将校はむろん、一兵卒に至るまで、れっきとした軍隊が現存し、将校は馬上で抜刀し、戦闘訓練を指揮していた。目を疑いたくなるが、一瞬まだ戦争は終わってないのかと、錯覚に陥る。ここに長く居たらどうなるだろうか？先々のことを考えずにはおられなくなった。いつかは、夜襲の一員として駆り出されることは必定である。万一、共産軍の銃弾にでも当たったら、犬死になってしまう。ここも決して安住の地ではない。食い逃げは気が引けるが、命あってのものと、せっかく辿り着いた千山を見捨て、次の安住の地を求めることにした。

夜陰に乗じて千山を脱出し、七嶺子の部落を目指して歩を進めた。七嶺子は鞍山の西方にあって、治安も良く、日本人も多く住んでいた。鉄鉱石の採石場があり、邦人は衣類等の売り買いをしながら、何とか生活を営んでいる様子であった。この部落についても、一面識もない人ばかりであったが、窮地に追い

込まれた邦人同志、お互い助け合って内地へ帰るまで頑張りましょうと、理解して下さる方があって、長野県出身の方の家にお世話になることになった。軍服では目立つからと、作業服を提供していただいた。お陰で身も心もすっかり民間人になりすますことができた。

一週間も経った頃、「鞍山の街も落ち着きを取り戻し、邦人も満人から小麦粉などを買い求め、饅頭まんじゅうなど作り街頭で売り、日銭を稼かせぎ内地へ帰還する日を夢見ている。」という話を耳にした。大の男が、何もしないで、人の世話になっては申し訳ないと考え、再び鞍山の知人を尋ねて、何とか自活の道を開こうと思い立ち、お世話になった謝辞を述べ、別れを惜しんで鞍山へと歩を進めた。

共に脱走した戦友とも別れ別れになり、たった1枚の作業服だけの着たきり雀、一人身の気楽さ、放浪の身の一匹狼である。距離にしてどのくらいか分からないが、朝出発してその日の昼過ぎ3時頃、鞍山に着くことができた。街の十字路には、共産軍の兵士が立っていた。民間人に成り済ませてはいても、やはりドキッとす。素知らぬ顔で警備兵の横を通り過ぎようとしたとき「ニンデ、ナーベンチーラマ？（おまえ、どこに行くのか？）」と問われ、ハッとす。片言交じりの中国語と手真似てまねで「友達の家へ行く。」と答えると、どうやら通じたのか「シン、シン。（わかった。）」と言って通してくれた。

鞍山入りはどうやら成功したが、さっそく今晚の寝ぐらを探さなければならぬ。当たって砕けろと、作業隊当時、一緒に職場で働いていた弘前市出身ひろさきの青木さんを訪ねた。軍服を脱いだ自分に一瞬げんそうであったが、でも良く覚えていてくれて「おお加藤さん、よくまあご無事で！」と快く家に入れてくれた。その時の感激は、地獄に仏であった。激しかった脱走の日々を振り返ると、ホッとするとともに、何だか自分の家に帰ったような錯覚さっかくを覚えた。

ソ連軍のシベリア送還から逃れるため脱走した艱難辛苦かんなんしんくをお話ししながら、夕飯ちそうをご馳走になった。家族の人達が涙を流して聞いてくれ、無事を喜んでくれた。このことは終生忘れることができない。その一家も決して裕福ゆうふくではなく、15才の息子と小学2年生の娘と親子4人の家族構成で、何枚かあった着物もほとんど売り尽くし、若干の着替えと寝具を残す程度であった。満人の店で材料を求め、大福やおはぎなどを作って売り、タバコも売り歩いていた。どうやら、生活の糧を求めその日暮らしの生活であった。私には嫌な顔もせず、親切に甘えさせてくれた。しかし、生活の実態を見て、私も何とかお手伝いしな

ければと、慣れぬ手付きで、出来るだけ愛敬<sup>あいきょう</sup>を振り撒<sup>ま</sup>いて、満人や邦人相手に1円でも多くの売り上げをと頑張った。その他、共産軍から時々、道路の補修や駅の荷役作業などがあり、それに参加すると賃金はくれないが、食事は腹いっぱい食わせてくれた。

そんな明け暮れが続くうちに、昭和21年の新春を迎えた。その日暮らしにとっては、盆も正月もないが、満人街では景気良く爆竹<sup>ぼくちく</sup>を鳴らし、ドラや太鼓<sup>たいこ</sup>で大騒ぎであった。年が明けて間もなく、鞍山の東の方で、夜のしじまを破る砲声が起こった。音が段々近くなり、ガラス戸がビリビリと音をたてた。何の情報もないので、不安な長い一夜を過ごした。夜明けとともに、砲声はいよいよ至近距離<sup>しきん</sup>に迫り、小銃や軽機関銃の音まで聞こえるようになり、身の危険を感じた。これは、蒋介石<sup>しょうがいせき</sup>の軍隊と共産軍の戦闘であった。約1時間続いた戦闘がやんで、恐る恐る社宅の4階の窓から覗くと、旧日本軍の三八式歩兵銃を手にした共産軍が、右往左往逃げ惑う姿が散見され、街路樹や民家を盾<sup>たて</sup>に銃撃する蒋介石軍の姿がちらほらと見えた。蒋介石軍は、服装も装備も全てアメリカナイズされていた。旧支那軍とは雲泥<sup>うんでい</sup>の差であった。中国の内戦は続き、私たちも、破壊された鉄橋の修理や、負傷兵の運搬などの使役に駆り出された。

終戦2年後の8月初旬と記憶するが、蒋介石総統の「戦争は終わった。同じ肌色で共通の文化を持つ日本人は、皆我々の友達である。世界平和のために相携えて行こう。」こんな意味の布告が出された。そして、「日本人は全部帰国させてくれる。生命財産は保証してくれる。」旨<sup>むね</sup>の声明が出た。これで生きて祖国に帰れる希望が出来た。敗戦後の2年間は、余りにも長く厳しい月日の連続であった。いろいろな人と出会い、それらの人との共同生活も不思議な運命であった。そこには恥も外聞もない。ただ身体の続く限り、半ば本能的に生きることのみを考えた。

昭和22年8月、満州製鉄株式会社社員として帰国手続きを済ませ、鞍山駅に集結<sup>むがいしゃ</sup>、無蓋車でコロ島に向かう。帰国の条件は、現金一人千円まで、荷物は2個までと制限された。コロ島からアメリカ軍のリバーティ船<sup>はかた</sup>で博多港に無事到着。上陸後、復員手続きをし、旧海軍の白の作業服と若干の日用品、それに現金200円と名古屋までの国鉄乗車券の交付を受け、列車の人となった。満州で幾多の苦難と試練に打ち勝ち、生き抜いて来たこの体験が、耐えるということの大切さ、命と平和の尊さが、戦争と敗戦の悲劇が、後世の皆さんに、少しでもご理解いただければ幸いである。

# シベリア<sup>よくりゅう</sup>抑留の思い出

山口 三喜夫

人類が互いに憎<sup>にく</sup>しみ殺し合うのが戦争です。平和の時代が続く日本で、戦争を知らない若い世代に、あの悲惨<sup>ひさん</sup>な実状や体験を語り継ぐことは歴史的にも必要であり、また、大切なことだと思います。五十有余年前のあの大战では、日本人すべてが戦争の苦難と悲惨な体験をしており、語り継ぐことばは限りないと思いますが、それぞれの立場での体験や感想を語るのもまた必要かと思えます。

私は、昭和19年4月<sup>げんえきへい</sup>現役兵として入隊、10日後には<sup>まんしゅう</sup>満州（現中国）の東満地区の国境警備につき、連日乗馬の猛訓練にあけておりました。しかし、戦況の悪化で国境線を大きく後退して、ソ連軍の侵攻に備えての<sup>じんちこうちく</sup>陣地構築にあけてくれるようになりました。南方戦線での、次々と<sup>ぎよくさい</sup>玉砕する話や内地での米軍機による空襲で、多くの被害や多くの犠牲の出ていることも聴かされておりました。しかし、遠く離れた満州の地では、当時はまだまだ<sup>へいおん</sup>平穏な日々を送っており、米軍機など一度も見たこともありませんでした。しかし、20年8月9日、日ソ<sup>ふかしん</sup>不可侵条約を一方的に<sup>はき</sup>破棄したソ連軍（現ロシア）が<sup>どとう</sup>怒涛の如く進攻して来ました。不意をつかれて日本軍は、戦闘準備のいとまもなく、<sup>もうぎゅう</sup>猛牛の如きソ連軍戦車の猛攻の前に、第一線が次々と突破されてしまいました。当時、満州には<sup>まんもうかいたくだん</sup>満蒙開拓団として日本政府の国策に協力すべく、東北や北海道等<sup>へきち</sup>僻地の多くの農民が満州の原野に骨を埋める覚悟で移住しておりました。日本は、南方で戦争をしているのだとの考えがあり、心の準備もできておりません。突然のソ連軍の侵攻に男手を軍隊に<sup>ちようしゅう</sup>徴集された開拓団の人々は、女手一つで、老人や子どもを家財道具の<sup>すきま</sup>隙間に乗せた牛車の手綱をとって、後方へ後方へと逃れて行きました。戦闘準備に忙しい我々兵士に対し、しっかり戦ってくださいとことばはなくても、期待をかけたまなざしが今も忘れることができませぬ。それを追うが如くソ連軍の重戦車がごうごうと地響きをたてて進攻してきました。トタン張りのような日本の戦車が立ち向かえるはずがありません。昭和14年、国境紛争で日ソ両軍が死闘を繰り返したノモンハン事件では、日本軍の当時泣く子もだまるといわれた関東軍の精鋭一個師団1万5千名が、ソ連軍機械化部隊の前に全滅のうきめにあっているのです。その実状を日本軍上

層部はひたかくしに隠していたのです。その強力なソ連軍の侵攻の前に力の差は大きく、徐々に後退させられた日本軍は、組織的な戦闘も不可能になって、小人数での山中への<sup>とうひこう</sup>逃避行がはじまりました。大木の下で歩行する力をなくした兵士が、うつろな目で歩き去る我々を眺めていても、それを手助けする余力もありませんでした。山中を歩き続けた約1か月、1台の無線機で日本の降伏を知りました。各地で<sup>ぶそうかいじょ</sup>武装解除をうけた日本軍は、シベリア鉄道で、ソ連領の各地へ移送されたのです。着いたところは、シベリア中部のコムソモリスクでした。牛舎を改造した収容所には、四方に<sup>かんしとう</sup>監視塔が立っており、その時はじめて日本内地への送還などありえないと覚悟を決めました。20才前後の食べ盛りの若者が<sup>かんづめ</sup>缶詰の空き缶にわずかの<sup>かゆ</sup>粥のような食事です。空腹のため夜も眠れぬ日々が続きました。体力の衰えに厳しい寒さで、隣に寝ていた友が朝には死んでおり、冷蔵庫のような小屋に置いて、10名程になると馬車に積んで山の方へ運搬して行くのです。しかし、終戦の混乱期も過ぎ、3か月もたったころからはパンも支給され、体力も徐々に回復して労働作業にも出るようになりました。ただ一つの救いは食糧倉庫への作業でした。カチカチに凍った<sup>ばれいしょ</sup>馬鈴薯などを、ソ連人の目をかすめて持ち帰ったり、時には穀物にもありつけました。想像を絶する厳寒の冬を三度過ごして、私は幸いにも無事祖国へ帰ることができました。モイ（帰る）の挨拶を交わし、コムソモリスクを後にしました。青春時代の<sup>よくりゅう</sup>抑留生活は、人生の中での試練でもあり二度とない思い出と経験だったとしみじみ思うこの頃です。

【参考】海外からの引揚者数 6, 388, 665名（旧厚生省援護局統計）  
昭和36.12.31現在

中国	2, 905, 844	本土隣海	131, 805
ソ連（現ロシア）	766, 496	太平洋諸島	130, 967
現韓国	596, 454	ベトナム	32, 303
現台湾	9, 544	香港	19, 347
現北朝鮮	322, 585	インドネシア	15, 593
オーストラリア	138, 843	ハワイ（合衆国）	3, 659
フィリピン	133, 122	ニュージーランド	789

# 私の避難記

小倉 あやよ

戦後50年、幸せに暮らしている現在、あの終戦後の<sup>みじ</sup>惨めさが、幻のように私の頭の中に浮かんで来ます。今、思い出してみると、昨日のように思われますが、50年の歳月が流れているかと思うと感慨無量<sup>かんがいむりょう</sup>でございます。昭和20年8月11日、北満<sup>まんしゅう</sup>（北部満州）に暮らしていた私たち軍隊の家族・開拓団の家族の運命が、一変してしまいました。11日の早朝、午前3時頃、部隊よりの伝令で、ソ連と交戦状態に入ったので、ただちに武装して部隊に出頭せよとの知らせがありました。主人も予期せぬこととて<sup>きつきょう</sup>吃驚しました。

北満の軍隊には、それだけ情報が遅れていたのです。部隊に出頭した主人は、1時間くらいたって再び官舎に帰って来ました。とうとうソ連と戦争が始まったから、家族はすぐ避難する準備をして、部隊からのトラックを待つようにとのことでした。それから戦争に入ったのだから、女・子どもも、どの様な運命になるか判らないから、万一の時は青酸カリを飲んで死ぬようにと、私に青酸カリを渡して帰って行きました。これが主人との満州での最後の別れとなってしまうました。平和なこの時代には、自分の妻に青酸カリを渡すなんて、全く信じられないことです。それから、私たちの運命は、地獄のどん底に落とされてしまいました。

<sup>ぼたんこう</sup>牡丹江の駅から、午前8時頃、避難列車に乗り込みました。全く動く様子もなく、夕方まで列車の中に閉じ込められたままでした。その間、ソ連機の<sup>しゅうげき</sup>襲撃を受けて、生きた心地ではありませんでした。ようやく夕方出発した列車は、<sup>こうが</sup>蛟河という町に着き、そこの学校に収容されました。そこで、8月15日の終戦<sup>しょうしよ</sup>の詔書を聞きました。張りつめていた心も、急にがっくり、涙は止めどなく<sup>ほほ</sup>頬を流れました。その瞬間に敗戦国民となった私たちは、すべてソ連の命令のまま行動することになりました。飛行機の格納庫に移動させられ、一週間監禁状態でした。だんだん犠牲者も出て来て、死んで行く人、<sup>うな</sup>唸っている病人、生まれる子ども、人生の縮図そのままです。夜が来るとソ連兵が、女を連れに来るのです。毎晩、恐怖の連続でした。身を守るために、女たちは頭を丸坊主にして必死に逃げ回りました。

ある朝、突然の命令で、出発ということになり、何百人かの行列が始まりま

した。満州の道は赤土色で、行けども行けども果てしない道でした。みんな顔は無表情、暑さと汗にまみれ真黒。夜は野宿で、雨に降られ、濡れたままで毛布一枚で夜を明かしました。魂の抜殻が歩いているだけです。背中で赤ちゃんが死んでいたり、暑さと疲れで倒れる人。敗戦の惨めさは、日々に現れてきました。倒れた人を救うことも出来ず、そのまま置いて行く始末です。満州の気候は、日中は暑くても、朝夕はめっきり寒くなって来ます。悲惨さは、日に日に増して来ました。これは、私の体験したほんの序の口の出来事です。

戦争って本当に恐ろしいものです。こんなことは、二度とあってはならないことです。1年間苦勞の連続で、やっと日本の土を踏んだのは、21年の10月でした。主人もソ連の捕虜となり、3年間つとめて、無事帰国することが出来ました。

戦後の日本は、食料も物資も乏しく、みんな苦勞しました。何とか切り抜けて、今は幸福な現在です。戦後50年と一口に申しますが、並々ならぬ努力の賜物と思います。日本の現在あるのも、あの純粋な気持ちで、日本国家の事を信じて亡くなった、大勢の犠牲者のお陰であることを決して忘れてはならないと思います。戦争がいかに悲惨なものであるか、若い世代に伝えて、世界中が幸福であることを祈ります。

### 満州国

日清戦争（1894～1895）、日露戦争（1904～1905）に勝った日本は、朝鮮・中国への進出を強めて行きました。日露戦争後、日本は朝鮮に（韓国…朝鮮国は1897年国号を韓国と改めた）韓国統監府をおいて支配し、やがて、1910年には、韓国併合をして領土に加えました。そして、第一次世界大戦（1914～1919）後の不景気を乗り切るため中国への進出を強め、満州（中国東北部）を完全に支配しようとした。

1931（昭和6）年、満州にいた日本軍の一部は、南満州鉄道の線路を爆破し、これを中国側の仕業だとして、中国軍を攻撃し、満州を占領しました（満州事変）。そして、翌年、満州国をつくりあげて、その実権をにぎりました。

国際連盟は中国の訴えにより調査を行い、この戦争は日本の侵略行為であって、満州国の成立を認めませんでした。日本政府はこれに反発し、1933年国際連盟を脱退しました。そして、満州各地には、開拓のために沢山の日本人が移民するようになりました。



開拓民分布図

「日本の百年」筑摩書房より抜粋

# 戦争体験記

—良かったこと2件—

鈴木ツヤ

あの苦しかった戦争の頃<sup>ころ</sup>を思いだし、今でも、本当に良かったと思っていることが2件あります。

私たちは、満州義勇隊<sup>まんしゅう</sup>開拓団として、北部満州の齊々哈爾<sup>チチハル</sup>の北にある嫩江<sup>のんこう</sup>という所にいました。主人は、その団長として任務していました。ところが、昭和20年5月の末頃に、召集令状の赤紙が来ました。100人以上いた団員のところにも、数十人は召集令状が来ました。それから2か月半経った頃の8月20日に、私たちは、日本の敗戦を初めて知ったのです。満人の暴動が始まり、私たちは避難する形となりました。

十数人残っていた団員に助けられ、とりあえず、嫩江にある兵舎に落ち着きました。1か月ほど過ぎた頃、今度は満州拓殖公社の社宅に移されました。その数約500人、一部屋に7～8人でした。それからが大変でした。援助してくれる国も人もありません。みんな命からがら、とっさの出来事で逃げたので、着のみ着のままです。もう北満は、夜になると零度くらいになっていました。兵士・義勇隊員は全部シベリアに連行され、男の人といえば老人の3～4人のみでした。兵士の残していった上着・ズボンなど、何でもいいから身にまといました。それから、色々のことがありました。

毎日が事件の連続でした。そのうち、とうとう伝染病が出てきました。10月頃から、幼児が、カゼやハシカで次々と死んで行きました。私も、2才2か月の女の子が一人いましたが、11月1日に死亡しました。拾い集めた板で、何とか箱を作っていただき、広い野原の一角に埋めました。そして、零下20度を越す冬を北満で過ごしました。本当に色々なことがありすぎて、とても書き切れません。

越冬して3月ともなれば、南下の話が持ち上がりました。少しでも日本に近づきたい。私も南下する人の名簿に載せてもらいました。しかし、子どもをこの地に残して行かねばなりません。何とかして一緒に帰りたい。それとも、私がこの地に残るか、どちらかです。どうしても日本には帰りたい。考えた末、子どもを掘り出して骨にし、抱いて日本に帰ろうと決心しました。

私は子どもの死後、頼まれて宿舎の一角にある事務所にはいました。ロシアの

兵士も毎日のように来ていました。言葉は通じなくとも、手まね足まねで、親しく挨拶するようになっていました。そのロシアの兵士に、日本に帰るのに、子どもの骨を持って帰りたいからと、手まねと片言の言葉で薪を頼みました。そのことが通じたのか、翌日、薪を持って来てくれました。

とにかく、半年近くも地中に埋めてあった子を掘り出しました。「1人焼くのも、5人焼くのも一緒だよ。その代わり何が起こるか分からないよ。」と声をかけました。団長さんのご指導で、たたみ3枚と薪で焼いてくださいました。火葬したのは、小児のみ6名でした。もっと大勢の希望者がありました。埋めてから一度でも雨が降ったら、もう氷づめになってしまい、掘り出すことは出来ません。一度も雨に遭わなかった墓は、ジャリを掘り出すようで、思ったより簡単に掘り出せました。私は中身は見ませんでした。見た人は、「ろう人形のような顔をして、綺麗だったよ。」と言っていました。とにかく、色々なことに会いましたが、子どもの骨は、無事に持ち帰ることができました。今も、鈴木家の墓の中に眠っています。この様なことが出来たのは、何万人に一人だったと思います。

今も、大勢の人に助けられ、あの時があったと、感謝の気持ちで一杯です。あのロシアの兵士も、知らぬ振りをしてくれたのだと思います。

それから、わが子は亡くしましたが、母を亡くした、全く知らない、3才の隣の子を日本に連れて帰りました。その子は、今でも北海道で元気に暮らしています。「僕が孤児にならずに済んだのは、おばさんのお陰だよ。」と、会うたびに言います。時々、私の家にも来ます。その子とは、親子以上の付き合いをしています。連れて来て本当に良かったと、今も思い続けています。

### 満蒙開拓団の悲劇

ソ連の参戦で、楽土満州は一転して地獄になった。推定160万人の居留民が、無秩序の中を彷徨っていた。厳冬を乗り越えず、病気や栄養失調で亡くなった人は、推定17万人。今もなお、戦争の深い傷跡を見せる中国残留孤児の問題も残っている。

#### 開拓団の悲劇

東安駅爆発事件 八月十日朝、旧東安省東安(密山)の駅ホームに野積みされていた大量の弾薬に撤退前の軍が火を放ったため大爆発を起し、無蓋貨車にすし詰めで避難待ちの居留民数百人が死亡。石川、富山、福井県出身者などが中心の黒組子開拓団員だけでも死者行方不明の半数が死亡。

の来民開拓団が暴徒化した現地民や匪賊に包囲され団員二百七十六人が一人生き残っただけで全滅。  
 在源郷開拓団事件 興安近くに入植していた東京・武蔵小山商店街の転居業者たちの開拓団八百七十人の逃避行を現地民や匪賊が襲い、八月二十日ごろまでにその半数が死亡。  
 佐渡開拓団跡事件 旧東安省宝清周辺に点在していた主に長野県出身者の七つの開拓団が勃利へ向けの逃避行で、佐渡開拓団跡でソ連軍戦車に包囲され戦死となり、死者は、大半が集団自決した高村開拓団(長野県下高井郡出身者)が四百二十、清和開拓団(新潟県



出身者)三百七十一、更級郷開拓団(長野県出身者)二百九十四、埴科郷開拓団(同)二百二十一、南信濃郷開拓団(同)百、阿智郷開拓団(同)二十四、笠間郷開拓団(茨城県出身者)四十三(いずれも推定、計千四百六十四に達する。

## 渡満（中国東北地方へ行くこと）と帰国

荒川 清

昭和19年の秋、私は軍の管轄下にある航空工業会に勤め、全国各地にある航空機製造工場への資材の割り振り、分配の仕事をしていました。その事務所のあった東京新宿の伊勢丹（デパート）の屋上より、品川沖にB29が撃墜される情景を見ました。

昭和20年3月10日の東京大空襲の時には、上野の鶯谷にいましたが、友人の寺が危ないと聞き、浅草に駆けつけました。寺から貴重な仏像や寺宝等を防空壕に運び、覆いをし土を被せ焼失を防ぎました。また、家財の一部をリヤカーで運び出しました。寺は全焼してしまいましたが、二人はやっとの思いで逃げのびることが出来ました。しばらくすると、B29が真っ赤に燃える夜空を低空で飛行し、戦果を偵察するのを見て情けなくて堪りませんでした。

東京での食糧不足を補うため、月に一度程、母、兄が仮住まいしている大府長草の西忍場を訪ねていました。丁度その時、名古屋の大空襲があり、西忍場の高台から燃え上がる名古屋が見え、夜空からは北風に乗って人々の大きな悲鳴が聞こえて来ました。また、5月には、大曾根の三菱重工を爆撃するB29の大編隊を目撃しました。

20年6月に、軍からの依頼で満州に行くことになりました。東京のアパートから布団や荷物を背負い、夜中に大府駅に着きました。そこから母、兄のいる長草西忍場に徒歩で向かいました。向江を過ぎたあたりの橋の欄干で、休息をとりました。その夜は蛍が何百匹も群れをなして飛び交い、道が明るく見えました。その頃は環境汚染も少なく河川もきれいで、今では想像できないその情景を、時々思い出して懐かしんでいます。

大府から東京に戻り、6月末に陸軍燃料廠を出て、品川より東海道線、山陽線を経て博多に到着しました。そこで2000噸程の貨物船に乗り、アメリカ軍の潜水艦や飛行機の襲撃を避けるため、唐津、対馬にそれぞれ2、3日避難してからウルサンに上陸しました。そこから釜山まで列車で行き、特急アジア号に乗り換え奉天に向かいました。京城、平城を経て鴨緑江を夜中に通過し、翌日昼頃奉天に到着、乗り換えに2時間程待ち、また列車に乗りやっと撫順に着きました。軍需省よりの派遣でしたが、満鉄撫順炭鉱の社員としての特別扱

いを受け、石炭液化の仕事を担当しました。住まいの設備も良く、半月ほど平穩な恵まれた生活をしました。

8月15日、天皇の玉音放送を聞き、敗戦を知り大きなショックを受けました。それまで民間に潜伏していた八路軍が軍服に着替え、統治と治安維持に当たりました。その後、ソ連軍が来て、目ぼしい機械や設備など、全てを取り払い持ち去ってしまいました。日本の軍隊は、八路軍により武装解除され奉天に連れていかれ、ソ連軍によりシベリアに抑留されたようでした。

9月には、北から開拓民の人たちが大勢避難してきましたが、女性や子どもたちばかりで、極度の食糧不足や恐怖、疲労が重なり多くの方が悲惨な死を迎えられました。

私は満鉄を辞して、知人の世話になり、在留邦人の住む部落に移りました。地下から凍って地下から溶けると言われる厳寒の地で、一冬過ごすことになりました。春三月、気温が上り雪が少しずつ溶け始めた頃、八路軍と国府軍との間で戦の始まる気配がありましたが、大事に至らず、八路軍とソ連軍は撤退し、国府軍とアメリカ軍が撫順を支配するようになりました。

21年7月、国府軍やアメリカ軍の配慮により、一般邦人から帰国出来るようになり、奉天、コロトウを経て、博多に向かいました。無蓋車の移動で途中の食べ物が悪かったためか、発疹チブスに罹り、博多の旧陸軍病院で1か月入院治療の後、復員することになりました。8月下旬、病院列車で夜中に名古屋に着き旧陸軍病院に宿泊しました。翌朝、電話連絡ができた母と姉が迎えに来てくれました。その時の母の喜んだ姿を今も決して忘れることは出来ません。

その頃、日本では紙幣は新円に切り替えられており、博多からの復員の時、新円で500円当時の政府より支給されました。

23年に、地元長草の女性と結婚し、東忍場に家を建てて、以来57年間住み着きました。

大府長草に住み始めた当時は、北斗七星は夏と冬の夜空に銀河と共に輝き、川や田んぼ、野山には、ドジョウ、メダカ、タニシ、鰻、蛙、蛇、イナゴ、野ウサギ、鴨の群れなども見られた。

戦後40年にして、日本は経済大国になりましたが、自然環境の悪化など失われた物も多くあります。今、また経済危機の兆しがありますが、敗戦前後の苦しい生活から立ち上がった、あの根性で、再び安定した地域社会の健全な発展を期待しています。

# 大東亜戦争の回想録

鈴木久 式

私は、昭和12年1月10日、広島県呉海兵団に海軍看護兵として入団。以来、8年9か月、艦船勤務や陸上勤務をしながら、日中戦争・太平洋戦争に参加。紀伊半島長島町で終戦を迎えました。その間の特筆すべき思い出を以下に記します。



## ◎第二鮮友丸乗船と江口丸沈没

昭和18年11月、第32掃海隊付きを命じられ、病院船朝日丸の薬局室長より転勤。紀伊由良港に本部宿舎があり、串本港に停泊中の第二鮮友丸に乗船しました。司令、海軍大佐以下に5艇あり、各艇、海軍大尉以下60人位の乗員でした。主な任務は、大阪湾から御用船団が南方に向かう護衛のため、船団の両側に配備され、敵潜水艦を発見し攻撃するということでした。敵潜水艦を発見すると、爆雷投下の連続でした。

〈軍艦千代田陸戦隊医務科  
海軍二等看護兵当時〉

昭和13年10月15日  
南支那海洞山島で

やがて、本部は和歌山県串本港陸岸に移動しました。司令海軍大佐・機関長職特務大尉・主計特務大尉・軍医長医大尉・前任衛生兵曹（看護科より衛生科に変わる）・前任機関兵曹・前任主計科兵曹のほか、下士官1名と従兵3名が本部付きで、各艇に衛生下士官1名が乗員の衛生管理のために勤務していた。私は、毎月、各艇の乗組員の健康検査のために、軍医長と2人で巡回定期診察をしたものです。

昭和19年6月、熊野灘周参見沖にて、配下の江口丸がアメリカ潜水艦の魚雷攻撃を受け沈没。乗組員は、船外に投げ飛ばされた主計兵1名が助かったのみで、他の59人は戦死でした。近くで操業していた漁船に救助され、周参見町の民家に収容せりの電報で、軍医長と私は、救急医療具を持って収容先に飛んで行った。そこでは、地元の国防婦人会員の温かい看護を受けていた。全身火傷のため、火傷処置と強心剤注射等応急処置をし、近くの紀伊防備隊医務科に転送した。配下の船が洋上を搜索したが、他の乗組員は浮いて来なかった。軍医長2人配下の船で、周辺海上をくまなく捜せど、ブイや木片くらいしか発見できなかった。

今思えば、アメリカの潜水艦は、昭和18年当時から、大阪湾から南太平洋に出撃する陸軍船団を迎撃するため、日本近海まで進出していました。ここに、江口丸の乗組員の皆様のご冥福<sup>めいふく</sup>をお祈りいたします。なお、江口丸に同郷の鈴木弘三さんが、応召後乗り組んでおられたが、運よく沈没1か月前に転勤され、



〈海軍三等看護兵曹当時、  
正装で〉  
昭和17年5月1日  
呉海軍病院で

当時として安堵<sup>あんど</sup>したものです。私も、何時戦死するも覚悟はしておりました。

潮岬沖で、ドイツ商船が機雷に触れ、真夜中に乗組員を第二鮮友丸に收容したことがありました。30人ほどであったと思うが、カルテ（患者日誌）の氏名・生年月日記入欄に、ドイツ人からの聞き取りで、ローマ字で記入するのに大変苦勞した経験があります。対潜掃討中であつたので、軍医長とともに第二鮮友丸に便乗中の出来事でした。

### ◎津波と地震・1屯爆弾の被害

昭和19年12月7日午後1時30分頃、東南海地震に遭遇。異常な大音響とともに身体が突き上げられた。当時、串本港陸岸に本部設置、医務科は民家を借りて病室・診察室で軍医長と2名であった。地震当日は、さいわい病人は0人であった。病室内の戸棚がガタガタ揺れ、今にも家が壊れそうになり前の家が傾いている。玄関前のガラス戸が道に倒れていく。2階の病室の階段から階下に降りられなかった。しばらくしてから、降りてみると未舗装道路が地割れしていく。こんな地震は生まれて初めてだ。震度8以上だったと思った。後に知ったことだが、紀伊半島沖が震源地だった。

地震の後に津波だ。串本港と隣の大島湾の海に白波が押し寄せてくる。不気味な音を立てて波が押し寄せてくる。港に停泊中の艦船は、白波に向かって湾外に出港していく。海岸の栈橋に積んである蜜柑箱<sup>みかん</sup>などが、大島の南方に流されて行く。串本港沖<sup>とうびょう</sup>に投錨していた3000屯級の船が、海岸まで押し流されて横倒しになる。地元の漁師が荒縄<sup>あらなわ</sup>を身体に縛りつけて、船を固定するため荒れ狂う海に飛び込んで対応するのを眺めて、海で鍛えた漁師である后感心しました。

20分後、再度白波が串本の町まで押し寄せて、陸岸で軒まで浸ってしまった。地元では、半鐘を叩いて女子・子どもに高台へ避難するよう呼びかけている。我々軍人は地元漁師とともに、望遠鏡で押し寄せてくる波の様子を町民に

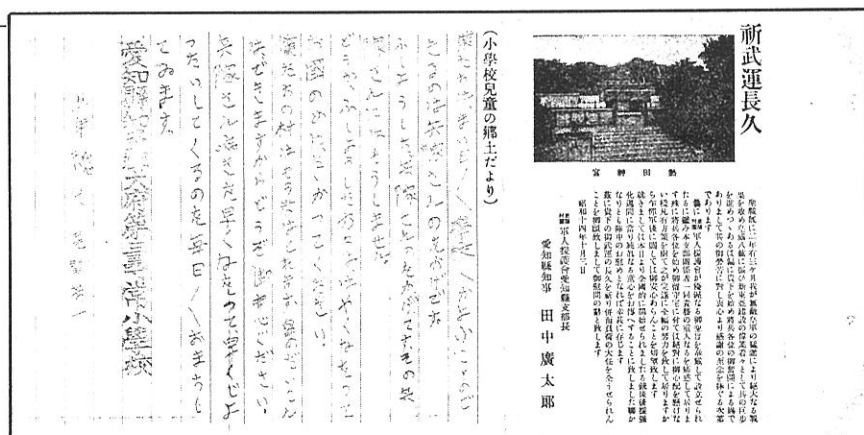
知らせたものです。数分後に、再び湾外から押し寄せる波の音、ゴウゴウと無気味な怒涛<sup>どとう</sup>の音とともに、白波が串本港に押し寄せてくる。波の引くのがまた素早い。今まで<sup>ひざ</sup>膝までの海水が、見る見るうちに大島の南方海洋に引いて行き、大島まで砂浜になる。水溜まりに小魚が浮いている。10分か15分後、再び地鳴り音とともに、北西洋上から逆巻く白波が串本港に向かって来る。大波が来たと思えば大島湾南の洋上へ流れて行く。3回繰り返して、ようやく収まった。この地震で、紀伊半島のホテルなどの被害が大であった。特に串本の南側勝浦温泉街の被害は大きかった。湾内に入った潮水が湾内で渦巻きし、ホテルの倒壊や地盤沈下で大被害を受けました。地震・津波などに遭遇<sup>そうぐう</sup>した折りには、まず安全な場所へ避難すること、タオル・手ぬぐい・運動靴・手袋・帽子着用が必要だと思いました。大府では津波の心配はまず無いと思いますが、刈谷市との境には、境川もあることですので、充分対処すべきだと思います。

なお、串本町の小学校の校庭に、1屯爆弾が昭和19年の夏に投下され、5m×10m四方の大きな穴が開いた。無気味な何ともいえない音を立てて、頭上に落とされたと思った。我々の配下の船から、B29の機体に向かって高射砲弾が発射されたが、機体までは届かなかった。B29は、太平洋上から潮岬沖上空を通過して、名古屋の軍需工場爆撃のため通過していた。当時は故郷が心配であったが、勝つまではという気持ちで、無我夢中で勤務しておりました。

なお、当時、多くの方から、兵隊さんへの慰問袋や慰問の手紙をいただきました。有難うございました。その一部を以下に紹介させていただきます。8年9か月もの長期にわたり、戦争にかかわって来たことが、今となっては、空しく<sup>むな</sup>思えます。戦争のない平和な世の中が続くことを願ってやみません。

### 慰問袋・慰問文

慰問袋は、戦地の兵士（兵隊さん）を慰めるために、日用品や手紙を入れて送る袋。慰問袋に入れる手紙（慰問文）は、小学生もよく書いたものである。





# 戦後50年を<sup>かえり</sup>顧みて

新田 武治

大東亜戦争の終戦から50年を迎えることとなり、各地で戦争犠牲者の慰霊<sup>いれい</sup>祭<sup>さい</sup>が行われています。私も在隊した第6飛行隊の慰霊祭に出席し、戦争で犠牲になった仲間の冥福<sup>めいふく</sup>を祈って来ました。当時を顧みると、犠牲<sup>ぎせい</sup>になった仲間は、だれも喜んで死んだのではありません。命令により死地に追いやられたのです。私たちパイロットは、次は俺<sup>おれ</sup>の番かと、戦中の毎日が、死と闘っているようなものでした。戦争がもう2か月続いていたら、私もこの世の人ではなかったと思います。今は、ただ亡き仲間の冥福を祈るのみです。

私たちの年代では、中・高等学校への進学は少なく、大半は義務教育終了で、それぞれの仕事に就いたものです。働きながら青年学校に入り、夜学で学び、毎月の第1・第3休日には、軍事教練<sup>きぎょうれん</sup>という学び方でした。教育の中身も大半が、精神的 content で軍事色の濃い思想が主でした。軍事色とか思想とか、全く頭に置いていなかった我ら若者だったが、学びの回数が増えるにしたがい、何かその方向に歩み出していました。その結果は、軍隊に入り、戦勝を信じていたのに、大敗という惨め<sup>みじ</sup>な結果でした。

私は、大東亜戦争の始まった年に、宇都宮陸軍飛行操縦<sup>うつのみや</sup>学校<sup>そう</sup>に93期生として入校しました。同年卒業し、飛行実践部隊で軍用機の実地訓練を受けて、航空本部から配属先命令を受け、第6飛行隊という空輸部隊に配属されたのです。空輸部隊の任務は、国内の航空会社で生産された軍用機を前線に空輸するのが任務でした。私たちの主に空輸した機種は、双発軽爆撃機<sup>ぼくげき</sup>と双発重爆撃機でした。出発の基地は、航空会社のある岐阜県<sup>かかみがはら</sup>の各務原飛行場、大阪の八尾飛行場、兵庫の加古川飛行場、滋賀の八日市飛行場だった。空輸先は、東南アジア全域で、シンガポール、フィリピン、サイゴン、上海の基地に多く空輸した。昭和19年春頃までは、この空域は安全で敵機飛来もなかったが、夏頃から敵機が飛来するようになった。10月からは全空域で敵機が優勢となり、フィリピンのクラーク飛行場へ空輸するのは至難<sup>しなん</sup>となった。当時、クラークは特攻基地<sup>とっこう</sup>として、陸海のパイロットたち



(飛行操縦学校修了時の記念写真)  
腹部の章はパイロットバッジ

が飛び発<sup>た</sup>った所です。戦況は敗色なるも、隊員は命令一つで行動せねばなりません。特攻隊として出撃させられたパイロットたちも、自ら望んだ者はいませんでした。映画などでは、望んでと言っているが、望んで死地に行った者は一人もいないと思います。私たちは、少なくとも毎週1回以上の空輸をし、特攻隊員とも語り合ってきたので、彼等の気持ちも良く分かりました。



〈双発軽爆撃機の訓練終了時の記念写真 後列右端が私〉

昭和も20年に入ると、本土各地が空襲され、飛行機も思うように生産されなくなった。敵はフィリピンへ上陸したし、台湾までの空海域は、完全に敵の空海域となり、特攻基地も九州各基地と上海・朝鮮の地となった。空輸する飛行機も、赤トンボの練習機までとい

う有様で、なんと見ても勝ち目はなかった。それに乗って死地におもむいた十代の若者は、泣いて発って行ったが、実に気の毒だった。戦後50年の今日でも、あの姿は忘れることができません。戦争も広島・長崎に原爆が投下され、終戦となったが、もう2か月も続いていたら、私も特攻でこの世にはいなかったであろう。

多くの仲間が、戦争の犠牲となって死地に発ったが、生きている自分が良かったのか、死地に発った彼等が良かったのか、今でも分かりません。いずれにせよ精神力は物量に勝てないことは明白であり、二度と戦争はすべきでないと実感しています。

私は、今、顧みて教育の恐ろしさを思うのです。私らの若い時代は、何も知らずに教導され、それを信じた若者たちは、戦争に駆り出され、命を失い、敗者となったのです。

# 私と終戦

— その頃 —

浅田善策

古川部落でも比較的高いといわれる大高山。その前を大高山前といい、西を大高山西、そこから西南に尾根続きで正官田、その最南端に通称行者山と言われる一段と高い山がある。東には弥左工門脇からヌメリ川、ウド北に長口があり、隣接の上野町へと続く丘陵地になっている。昭和16年三菱の飛行場の建設が決まった。関係者は吉田地区に多くいた。しかし、軍の命令でもあり、工事は急ピッチで進められた。工事は大林組が受け持ち、大高山前に飯場が出来た。大勢の人の力が投入され、ツルハシとスコップによる、人海作戦がとられた。山を削り谷を掘る工事には、土運びの唯一の方法としてトロッコが使われた。東はヌメリ川に、西は山ノ脇に2棟の格納庫が建てられ、長い滑走路が造られた。資材の運搬に、大府駅から江端の裏側を通り長口の南へ、鉄道の引き込み線が引かれた。鉄道による運送計画だけでなく、県道横須賀線が自動車による交通輸送の要として使われることとなり、見通しの悪い所は位置をかえ、全体に道幅も広げる工事が行なわれた。鞍瀧瀬川にかかる月見橋も南に架け替えた。この横須賀線の吉田北屋敷（現吉田町5丁目）の交差点から北進し、飛行場正門に至る道路が整備されると、飛行場も完成に近づき、昭和19年の春に試験飛行があり、大勢の人が見物に行った。

この飛行場警備のために、正官田の行者山に滞空監視哨が設けられ、その下にはいく通りもの防空壕が造られた。西には木造で兵舎も何棟か建てられ、小学校の南には高射砲陣地もつくられた。このころになると本土にも敵機の来襲がだんだんと増えてきて、一般家庭でも防空壕を造るよう通達があり、警防団が指導や点検に当たった。田舎のこと、自分の宅地内や周辺に壕を掘った。

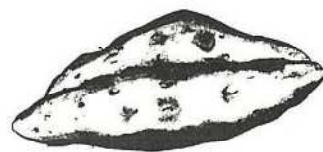
大阪や東京が空襲を受けたとの大本営発表のラジオ放送も、戦況のきびしさを訴えるようになって来た。昭和20年の初夏、ちょうど田植が始まろうとしているころ、岐阜の連隊に召集された。金華山山麓の谷間にある稻荷神社の境内で出陣式をすませ、私たちの部隊は岐阜駅へ向かった。部隊を乗せた軍用列車は東海道本線を東に進み、小田急沿線の厚木に到着した。そこから行軍で相模川の支流中津川の堤防沿いを進み、神奈川県愛甲郡三田村の小学校の宿舎についた。この中津川の上流地方は水資源の豊富な所で、横須賀軍港に出入り

する艦船に飲料水を送る配水管も埋設されていた。部落の近くには陸軍の飛行場が建設され、桑畑の中に土手を高く積んだ掩蓋壕が造られ、その中に飛行機が隠されていた。そして、すこし離れた所に滞空監視哨の陣地があり、綾瀬には海軍航空隊の厚木飛行場があった。

戦況はあまりおもわしくなく、東京を守るために京浜地区に関連各部隊が配備されており、わが部隊もその中の一つです。そのうちに艦載機がやって来て機銃掃射をするようになった。わが軍でも軍備の打ち合せ中に敵機の来襲にあい犠牲者を出した。相模湾から米軍が本土上陸作戦を仕掛けてくるといううわさがささやかれるようになった。事実このころから敵機の襲来が多くなり、今までは高い所を飛んでいた艦載機が、民家の屋根すれすれにきて、機銃掃射するようになった。

8月6日広島に原子爆弾が投下され、ソビエトが不可侵条約を破棄し、対日宣戦布告。旧満州国へ進撃し、千島列島や樺太を占領した。8月9日に長崎にも原爆が落とされ、戦況は絶望的となった。そして、ついに8月15日、重大放送があるから集合するように命令が出て、整列して待った。玉音放送があり、集まった兵隊の中からは嗚咽の声が次第に大きくなっていった。

それから数日後、部隊は解散となり家路につくことになった。家に帰ると戦争による極端な食糧不足が待っていた。何度も危機にあい困難を極めたが、農家である私たちは、米麦に次ぐ食料にと甘藷の栽培に励んだ。甘藷の持つ栄養素は、白米にも匹敵するといわれ、おもに「護国」という品種を栽培した。このサツマイモは特に澱粉を多く含み、緑黄色野菜と同じ機能を持つといわれ、焼いたり、蒸したり、米と一緒に粥で食した。甘藷のお陰で人々は食糧難を乗り越え、大勢の人々が生命を維持し食いつなぐことができたのである。このサツマイモの最初の開拓者である青木昆陽は、東京目黒不動尊の松林の境内に、松瀬の音とともに甘藷先生の墓としてまつられている。食糧不足に悩んだあの戦後から立ち上り、街も産業も復興し、民生を安定した活力ある今の国民の姿を、草葉の陰からどう見守っていただけることやら…。



# 大東亜戦争の開戦

—日本の少年飛行兵—

浜島五郎

昭和16年12月8日未明、大日本帝国は米国・英国に宣戦布告をした。

我々学生・生徒は日夜を問わず、開戦以来の戦果を華々しく耳にし、また、  
脳裏に焼きつかされた。

その裏に海軍航空隊の雄々しき働きがあり、それを支える飛行兵は、伝統ある海軍飛行予科練習生であった。

若干14～18歳で、祖国のためと海軍予科練に身を投じ、「大空の華」と  
全国民から称えられて、血気にはやる少年たちは、我も、我もと海軍飛行予科  
練習生を志願した。

南方で、北方で玉砕！ 玉砕！ の声を耳にするようになった。昭和19年  
8月1日に、本州最南端の練習航空隊鹿児島海軍航空隊に入隊した。

父母兄弟とも歓喜の中に、涙もひとしお深く溢れ出る出発のとき、お別れの  
言葉さえ充分に言えぬ少年たちが、決戦の地へ汽笛と共に向かって行った。  
我々予科練生活満1か年、共に入隊した若き戦友たちは転勤、転勤と九州各地  
を回り巡った友や、海を越えて種子島まで行った友もいた。運悪く二度と戻れ  
ぬ処へ「名誉の戦死」という言葉に送られて、昇天した戦友も多くいる。幸せ  
なことに、今我々は苦節を重ねながらも無事に郷里に戻ることができた。そし  
て今、還暦も十数年も過ぎ、孫たちに囲まれて平和な人生をおくっている。

ふとしたおりに、いや毎年の終戦記念日などに、つい昔話として予科練の話、  
海軍の話、銀飯に眼を光らせかぶりついた話、すいとんと薩摩芋の葉っぱの雑  
炊の話、それも丼の底に米粒が2、30粒より入っていない夕食の話など話す  
のだが、「またその話か」という子どもや孫たちの顔。このごろでは、それで  
いいのだと自分に言い聞かせるようになりました。二度と悪夢のようなあの悲  
劇を繰り返してはいけないからです。

ただ一つ良かったことは、青春の情熱を傾けることができた予科練生活、僅  
か一年の海軍飛行兵であったが、何と強い絆で結ばれた青春の日々であったこ  
とか。助け合い信じ合い、一本の紐で結ばれた親兄弟に勝るとも劣らぬ戦友が、  
東は愛知から西は鹿児島、沖縄までいて、互いに旧交を温め、話し合うことが  
できることである。



## 昭和20年上半期の思い出

齊藤正幸

### 1. 私の実家

5年ほど前になりますが、私の実家は、<sup>おい</sup>甥夫婦の世代となり、古い家を改築いたしました。改築前の建物は、私が生れ育った家でした。私は、次男であったこと、また、戦後はサラリーマンとなり、勤務地の関係などの理由で、居住する機会は余りありませんでした。その家（2階建ての<sup>おもや</sup>母屋、他に屋敷内に平屋建ての離れ、及び物置小屋が各一棟ありました）は、いわゆる<sup>いなか</sup>田舎造りでした。玄関を入ると、広い土間となっており、奥に居間、さらに座敷と続い



〈入校当時の私〉

ていました。土間と居間との境は、<sup>しょうじ</sup>障子で仕切られていました。この障子の一本の<sup>たてさん</sup>縦棧は、黒く焼け焦げたまま、家を解体するまで使用していました。私が、実家を離れて生活していた当時、<sup>つと</sup>帰る都度、今は亡き父は、この障子を指差しては「怪<sup>け</sup>我也せず、よくこの程度で消すことができたものだ。離れは焼失したが、母屋が無事に残ったのは、お前のお陰だよ！」と、よく言っていました。

それは、昭和20年5月17日、名古屋を空襲したB29<sup>ばくげきき</sup>爆撃機の1機が、大府へ飛来し、<sup>しょういだん</sup>焼夷弾を投下した時のことでした。ちょうど、その日は、私は海軍の学校へ入校するための出発日でした。前夜から眠らずに、居間で出発準備をしていました。その時、飛行機の爆音が聞こえ、しばらくすると、爆弾の<sup>くう</sup>空を切る音、続いて屋根瓦の割れる音がしました。そう思った瞬間、焼夷弾が廊下の屋根を突き破り、居間の上がり口の畳の上で、激しい炎を吹き出しました。私は、とっさに、燃え出した畳の隣の畳を剥がし、燃えている畳の上から<sup>おお かぶ</sup>覆い被せました。しかし、上下2枚の畳の間から、炎は衰えることもなく吹き出しました。防火用<sup>すいそう</sup>水槽から、バケツで水を何杯もかけた結果、幸い消すことができました。障子の縦棧の<sup>こ</sup>焦げ跡は、この時に出来たもので、空襲の証拠というべきか、メモリアルというべきか、この時の<sup>なごり</sup>名残でした。

私は、居間の消火を確認した後、母屋の各部屋を見回りましたが、異常ありませんでした。しかし、外が明るいため裏庭に出てみると、離れと物置小屋は

火に包まれていました。応援に来ていただいた皆さんと、母屋への類焼を防ぐため、バケツリレーで散水するのが精一杯で、この母屋以外は焼失してしまいました。

私は、このように被害を受けた自分の家の後始末もせず、また、近くの被害を受けた皆様の安否の確認も出来ないまま、大府を離れました。

## 2. 広島での訓練

私たちの広島県内での生活は、伝統ある兵舎、借上げの学校校舎、急造建設の簡易兵舎、さらには、艦務実習のため、大・小・新・旧の軍艦と、短期間に移動するのが常でした。その毎日は、人間の限界とも思われるほどの猛訓練でした。しかし、空襲警報が発令されると、防空壕など安全場所への待避が指示され、空襲時に敵機を見ることも、戦況を知ることも出来ませんでした。

このような立場に置かれていた私たちですが、7月24日の呉の空襲時（軍



(呉軍港の空襲で攔座した戦艦榛名)

港内に停泊中の戦艦伊勢をはじめとし、航空母艦、巡洋艦などの多くの軍艦が沈没したり、攔座・横転しました)に、待避した壕の近くに落下した不発弾を撤去しようと、同期生数名が、自発的に壕から飛び出したところ、機銃掃射

を受け死亡しました。この事故を目撃した私は、空襲の恐ろしさを改めて認識しました。そして、自分の家に落下した焼夷弾を、怖さも知らないままよく処理したものだと思います。また、機銃掃射を受けなかったのも幸運だったと思います。

後日、戦死者の慰霊祭の後、教官から「諸君の気持ちは良く分かるが、命令のない行動は取ってはならない。よく覚えて置くように！ 諸君たちには、近い将来には、重大なる命令が下ると思うから、覚悟を新たにし、訓練に励むように！」との、厳しい訓示がありました。

このような立場に置かれていた私たちは、空襲について垣間見る程度でしたが、8月6日の広島原爆攻撃は、偶然にも直視することになりました。

当日、私たちは、広島、呉を正三角形の一辺とした場合の、三角形の頂点の位置となる、現在の広島県加茂郡黒瀬町にあった演習場で、陸戦訓練（海軍では、陸上の戦闘訓練をこのように言っていました）中でした。B29爆撃機1機の飛来を確認後に、激しい閃光、強烈な爆発音、続いて高く上がったキノコ



〈広島に投下された原子爆弾のキノコ雲〉

雲を目撃しました。その時は、火薬庫の爆発だろうと憶測<sup>おくそく</sup>しておりましたが、翌日になって、広島に新型爆弾が投下され、市内は壊滅<sup>かいめつ</sup>状態であること、さらに、その後、原子爆弾であることを知らされました。

戦況の詳細も知らされず、私たちは、普通学・軍事学と、高度の講義を受けました。さらに、水泳<sup>たんでい</sup>・短艇・陸戦及び艦内勤務実習などの厳しい訓練を受けていました。そんな時、空襲による待避は、疲労回復することの出来る有難い一時だと思いました。その反面、国民が必死になって、戦争遂行<sup>すいこう</sup>のため頑張っているのに、戦うべき軍籍にありながら、余りにも、国民とかけ離れた日々を送っていること

に対し、切齒扼腕<sup>せつしやくわん</sup>の思いをしたものでした。戦後、いろいろの記録などを調べますと、私たちは本土決戦要員のようでした。

このような私たちにも、終戦詔勅<sup>しょうちよく</sup>の下った8月15日になって、急遽完全武装<sup>きゅうきよ</sup>での出動命令が下りました。それは、この時点では、戦争終結か継続か明確になっていないため、多くの武器が保管されている軍施設の警戒警備のためでした。数日後、戦争終結が明確になった時点で、帰校いたしました。休養時間<sup>ひま</sup>をとる暇もなく、呉市内・広島市内の被災地の整理作業に出動することになりました。

呉への出動時は、私たちは、三種軍装<sup>さんしゆぐんそう</sup>といわれていた草色の陸戦服を着用しましたが、広島への出動時は、新しい白の作業服が支給され、着用を命ぜられました。海軍では、二種軍装という夏服及び正装時以外に着用する服は、もともとは白服でありましたが、戦争末期には、国防色と称する草色に染めていたため、当時、私たちは、白服を持ち合わせていませんでした。これは、原子爆弾による二次被害を避けるためとの説明がありました。私たちには、これらの警備・復旧などの出動作業が、一段落した後、解散命令が出ました。

僅かな月日でしたが、私たちの精神・肉体を鍛<sup>きた</sup>えるとともに、人間の喜怒哀楽<sup>きどあい</sup>を教<sup>わづ</sup>えてくれた広島県を去ることになりました。私は、呉から無蓋車<sup>むがいしゃ</sup>（貨物用のトロッコ）で、山陽線・東海道線と乗り継いで大府駅に下車しました。

広島・呉の<sup>さんじょう</sup>惨状、また、途中の多くの都市の被害を目にして来ましたが、大府駅付近は以前と変化が見られなかったため、空襲の被害は少なかったのかと、<sup>あんど</sup>安堵しつつ実家近くまで来ました。しかし、実家付近は、家屋の焼失跡や、そのためか、通りからの見通しが良くなっているのに気付きました。大府も空襲による被害が、少なくなかったのだと、改めて、5月17日の空襲を思い出しました。そして、私たちも、国民の皆様も、戦争末期の<sup>つら</sup>辛さ苦しさを耐えて来たのは、何のためだったのかと、自問いたした次第です。

私は、自分の生れ育った、家や町の空襲による被害の後始末は、何も致しませんでした。しかし、呉・広島<sup>の</sup>災害地の後始末は、精一杯つくして来ました。そのことで、私のことも、お許しいただけるのではないかと思いました。なお、後日、空襲時の消火活動、その後の整理には、多くの皆様からご援助をいただいたことを<sup>うかが</sup>伺い、改めて、ここでお礼を申し上げます。

私は、名古屋を始めとし、金沢・大阪・東京で過ごした30年余りの勤めを定年退職して、生れ育った大府が大好きで帰って来ました。今後は、皆さんに負けないよう、大府を大切にしていきたいと思っております。

## — 原子爆弾 —

原子核反応のさい放出されるエネルギーを破壊目的に利用した兵器。一般には、ウラン235、プルトニウム239など核分裂反応のみを利用するものを原子爆弾とよび、核融合反応を利用するものを水素爆弾とよんでいる。アメリカは、開発したこの原子爆弾（新型爆弾）を太平洋戦争の末期に人類史上初めて使用した。

昭和20年8月6日、午前8時15分、広島上空約9600mから投下された、ウラン235を用いた原子爆弾は、50秒後に高度580mで爆発した。閃光が走り、火の球が上がり、15000mの高さまで、キノコ雲が上昇した。爆心地から半径2km以内の市街地は、瞬時に消滅した。テニアンから爆弾を運んだB29は、操縦士の母親の名をとって「エノラ・ゲイ」、爆弾には「リトルボーイ」のニックネームが付けられていた。

この原子爆弾投下により、広島市の人的被害は、死者78150名、行方不明13983名、重傷者9428名、軽傷者27997名（20年11月発表）であった（当時の広島市の人口は、336483名とされていた）。この数字は、その後の調査で修正が重ねられ、平成2年5月15日、厚生省は広島<sup>の</sup>原爆死没者数を201990名と発表している。

続いて8月9日には、プルトニウム239を用いた原子爆弾が、長崎に投下された。長崎市の人的被害は、死者23753名、行方不明1927名、重軽傷者40993名（20年11月発表）であった（当時の長崎市の人口は、270113名とされていた）。平成2年5月、厚生省は長崎<sup>の</sup>原爆死没者数を93966名と発表している。

『あの戦争』産経新聞社編より

## あの時・この時

—思い出の断片—

鈴置正農

私は、昭和の激動の時代を生き抜いて来た人間の一人です。今、こうして生きていることに、運命的な影を感じずにはられません。

サイパン島守備隊要員として、中部第二部隊に入隊。毎日、営庭の隅に設置された船艇で乗船・下船訓練。厳しく徹底した初年兵教育。瀬戸・豊橋・守山・名古屋北練兵場などの演習場・射撃場での、実戦に備えた戦闘訓練。兵舎内での毎晩毎晩の内務班教育と兵器（小銃・機関銃）の手入れ。初年兵だから、どんなに辛くても、歯を食い縛って辛抱するより外にない。

毎晩、点呼の終了後、「初年兵小間へ集合！」の声がかかる。古年次兵によるスパルタ教育だ。「歯を食いしばれ！」「足を半歩開け！」「腕を後ろに組め！」用意が出来ると、ビンタが飛ぶ。容赦はない。一番辛いのは“対向ビンタ”だ、初年兵同志が、向き合っただのビンタだ。軽く叩くと、見本を見せてくれるから、否応なしだ。三八式歩兵小銃の手入れが悪いと、“捧げ銃”をして直立不動。“鶯の谷渡り”セミの啼き声をまねて柱にとまりつく。…初年兵全員のシゴキが始まるのだ。

勤務では、不寝番の立哨。点呼前に天気が良ければ、毎日、厩の寝藁の乾燥干し、馬の水やり、馬体の手入れ、蹄鉄の手入れなど…心身ともに徹底して鍛えられました。どれもこれも、前線の戦場で役立つ兵隊になるためだと言われ、歯を食い縛って頑張り通したものです。この時ほど、体が丈夫であることの大切さをつくづく思いました。栄養失調症で入院・死亡した者もいました。

この頃、中部地区を中心に、サイパン島派遣軍への動員命令があり、現役の三・四年兵による精鋭部隊が編成されて出陣しました。この時の様子は、誠に悲惨な状況で、今でも心の痛みとして残っております。軍の秘密のため、家族や知人への連絡は無論、外泊も無く、夜間、笹島駅から軍用列車で、人知れず出陣したのです。その後、しばらくしての連絡で、目的地に上陸することもできず、敵軍の襲撃に遭って、輸送船もろとも海底へ沈んでしまったとのことでした。心から冥福を祈るとともに、戦争の非情さを憎んだものです。

その時、私は幹部候補生に採用されていたので、残留して他の任務についていたのです。その後、補充隊勤務の中で、本土決戦に備えて、山間部に弾薬保

管壕、海岸近くの山間部には、水際戦闘用の陣地や対戦車肉迫攻撃用陣地の構築などをしました。帰隊してからも、補充隊内に軍旗奉遷壕・兵員退避壕の構築と、多忙を極めておりました。

この頃、南方諸地域の戦局は、風雲急を告げ、玉砕に玉砕が相次いでおりました。そして、沖縄戦も…、戦艦大和も沈没。敵の本土空襲も激しくなりました。B29爆撃機による中小都市への絨毯爆撃が行われて、戦局も激しさを増して参りました。名古屋地区へも爆弾・焼夷弾が投下されて、お城も焼け落ち、街全体が焦土と化しました。戦争の恐ろしさ・悲惨さを心に強く感じました。こんな馬鹿げた戦争、人間と人間の殺し合い、全てを破壊し尽くすような戦争は、二度と繰り返してはならないと思ったことです。

いよいよ本土攻撃の時が迫り、新たな本土決戦のため、国内は勿論、北支方面からも九州・山陰・山陽・四国方面へ、新たに編成された陸軍部隊十数個連隊が投入されました。私もこの動員で鹿児島県出水地区へ、米軍の本土攻撃と上陸に備えて、決戦作戦により準備と警備に従事したのです。

昭和20年7月23日、新設陸軍歩兵部隊として、皇居で軍旗を拝受しました。その護衛（4名）の一人として鹿児島から上京、その途中、沿線の中小都市を眺めては、絨毯爆撃の被害状況に心を痛めたものです。そして、8月15日終戦。18日復員下令。残務処理に従事。9月15日復員。途中広島駅から見た街は、焼け爛れた枯木、半壊の土蔵だけが目につくばかり、人の姿は全然見えない。落ち着いた美しい街並みが、死の街に変わっていた。一瞬にして広島街が叩き潰されてしまった。この中で、無数の人間が、惨たらしく死んでいたのです。当時“ピカドン”と言われていた原子爆弾の投下、その悲惨さ・惨状は言葉では表現できません。どんなことがあろうとも、戦争は二度と起こしてはならない。戦争体験を持った者だけが言えることだから、次の次の世代まで、このことを強く申し送ります。

### — 本土決戦 —

昭和20年6月19日、沖縄の第32軍指令部の指揮は不可能となり、沖縄における組織的な戦闘は終了した。21日には、米軍が沖縄の占領を宣言した。政府は、6月22日、義勇兵役法を公布し、15歳以上（60歳以下）の男子、17歳以上（40歳以下）の女子は、国民義勇戦闘隊に編成し、1億玉砕も覚悟の本土決戦に備えることになった。

この頃、すでに米軍は、11月1日、鹿児島県の吹上浜と志布志湾、宮崎県の中央部の3か所に同時上陸（オリンピック作戦）、4か月後の昭和21年3月1日には、関東の九十九里と相模湾の2か所に同時上陸（コロネット作戦）する作戦を決定していた。

しかし、8月6日、広島への原爆投下。8月8日、ソ連の対日宣戦布告。8月9日、長崎への原爆投下などにより、日本は、ポツダム宣言を受諾し、連合国に無条件降伏し、本土決戦は回避された。

## せんぶ くりた 宣撫工作…栗田機関

召集令状の赤紙に対し、「白紙」というのがあった。「<sup>ちようよう</sup>徴用令状」のことである。軍はこの白紙で、作家・画家・音楽家・映画人・新聞記者・放送関係者らを宣伝班員（報道班員）として、戦場に狩り出した。戦地の様子を伝える仕事のほか、占領地での宣撫工作（占領地の住民に、日本の本意を理解させて人心を安定させること）を担当させた。

井伏鱒二の『<sup>いふせますし</sup>徴用中のこと』には、筆者が陸軍の徴用でマレー軍宣伝班に入隊したときの見聞が著わされている。その中には、こんな一節もある。「私たち第1回徴員として南方に派遣される宣伝班員は、フィリピン組（120名）マレー組（120名）ビルマ組（80名）ジャバ組（120名）の4班に分かれていた。ドイツのペン部隊を<sup>まね</sup>真似したものだと言われていたが、出先の軍人たちは徴員をどう扱っていいか、宣伝班員は何をしに来たか知らない者が多かった。私たち徴員自身も、何をしたらいいか全然わかっていなかった。輸送指揮官さえも知らなかったのではないかと思う。」と述べている。

その輸送指揮官については、「輸送指揮官は中学校の体操教師をしていた退役陸軍中佐で、仁丹の広告看板にある髭男のような大きな八字髭を生やしていた。」と記している。これが栗田朝一郎大佐（後に大佐に昇進）であると思われる。ご家族（栗田 一さん）より、当時のアルバムを1冊お借りしたので、その中の一部を以下に紹介します。



←マレー、セレンバン  
宿舎玄関と栗田隊長（昭和17年）

宿舎の庭の榕樹（ガジュマル）と  
現地の使用人たちとともに





←昭南興亞訓練所の生徒たち  
昭南興亞訓練所は昭和17年5月  
設立、翌年7月に閉鎖、この間、  
第3期生まで約280名を送り出  
した。青年を将来の中堅幹部とし  
て養成した。  
(昭南=シンガポール)

卒業証書授与  
↓



スマトラ、ランボン  
直接の部下・使用人とともに  
↓



↑ スマトラ、ランボン 現地婦人会の集会

## 敗戦の日本を救った人

元愛知県副知事 甲斐一政

今年も8月15日の「終戦の日」が近づいてきた。58年前、日本はアメリカとの壮絶な戦いの果てに敗れ、連合国に対して無条件降伏を受諾した。このとき一步誤れば国家は分割占領され、天皇は戦争責任を負って、流刑の身となっていたかもしれない。国体の護持もなく、経済的に発展した現在の日本という国も存在しなかった。

私たち日本人のほとんどは、その危機を救ったのはアメリカであり、マッカーサー（連合国軍最高司令官）だと考える。確かに占領後の表面に現れる史実はそうなのだが、日本の分割に反対し天皇制の存続をアメリカに説いたのは、実は日本の国情をよく知っていた中国の指導者蒋介石（国民党総統）だったことは、そんなに知られていない。

1945（昭和20）年、連合国側が日本政府に示したいいわゆるポツダム宣言は、43年に開かれたカイロ会談（米英中による戦後処理会議）までさかのぼる。この段階で米英とソビエト連邦の首脳が描いた日本占領の構図は、アメリカ合衆国外交関係文書（張・山陰共著「カイロ会談秘話」）によると、ソ連が北海道、中国が九州、米英その他が本州を分割統治するというものだった。この連合国側の占領政策を変えさせたのが、蒋介石であった。

ここでアメリカという国の最も優れている点に触れなくてはならない。ルーズベルト大統領は、日本を熟知している蒋介石にまず考えを聞いている。両者の間に交わされた数度にわたる書簡の中で、蒋介石は次のように言っている。

「日本の起こした戦争の主犯格は、実は日本軍閥であるから、日本の国体問題に対しては私は戦後の日本国民自身が解決すべきであると考え」。これがアメリカの対日政策転換の始まりであった。

また、ルーズベルトは、中国が日本の軍事占領に主要な役割を演ずべきとの考えを伝えたのに対して、中国は日本（九州）に進駐する考えのないことを、この時点で表明している。このことが、後になってソ連の北海道進駐を阻止する重大な起点になったのは言うまでもない。

それだけではない。45年8月15日、中国本土には日本の120万人の軍人と80万人に及ぶ民間人がいたが、彼らはただ茫然自失のまま敗戦を敵地で迎えた。いかなる迫害を受けてもやむを得ない厳しい状況の中で発した蒋介石の中国国民に対する布告は、次の通りであった。

「怨に報いるに徳を以てせよ」

蒋介石は10億の国民に向かって、重なる恨みへの報復をいさめ、武装解除した日本軍と民間人の無事な日本送還に踏み切ったのである。日本人の帰国には数年を要するといわれたが、10ヵ月余で送還は完了した。

私たち日本人は、終戦の日を迎えるとき、蒋介石に対するこの大恩だけは決して忘れてはならない。蒋介石の脳裏には、アジアの平和には、大国である中国と強国である日本が手を携えることが欠かせないという未来への思いがあったものと思われる。

これから大国としてその役割を発揮するであろう中国に対して、長い歴史に裏打ちされた日中両国民の信頼が、その底流にあることをものすごく大事にしていきたいものだと考える。

中国へ行く日本人はこの総統府旧跡に、わが国を友邦として大切にした中国の“国父”孫文と、第二次大戦に敗れた日本を救ってくれた蒋介石を訪ね、日本と中国の間に流れていた友情を振り返り、両国の未来を考えるのも意義のあることかもしれない。

1999年（平成11年）7月26日 中日新聞より抜粋

## 2. 空襲



こども　これは、どういう飛行機？

わたし　アメリカのB29という爆撃機ばくげききなんだ。南太平洋のサイパン島が、昭和19年7月7日に占領されると、そこから日本の空襲に飛び立つようになった。

こども　大府にも空襲があったの？

わたし　昭和20年5月17日、大府の街にも焼夷弾しょういだんが落とされ、幼い子が3名亡くなり、46棟の家が全焼した。

こども　戦争は、戦場だけではなかったんだね！

わたし　戦争は、軍人だけでなく、国民全部をいやおう否応なく巻き込んだ。現在も世界の各地で戦争があるけど、それは、否応なく私たちにも影響を与えるんだ。

# わが家が燃えてしまった

井村正則

昭和16年12月8日、太平洋戦争が始まったとき、私は国民学校の6年生でした。日本本土への空襲くうしゅうが始まった頃は、すでに学徒動員で軍需工場に行っていました。その時の空襲の恐ろしさ、名古屋の大空襲で上空が真っ赤に染まった光景は、今もまぶたに浮かびます。

日本本土は、アメリカ軍との地上戦こそ免れました。しかし、空からはほとんど全土がやられたのです。空襲により軍人に限らず、日本人すべてが地獄を体験することになりました。空襲警報が出なくても、常に夜間は家から灯火がもれないようにしなければなりません。それが灯火管制です。電球を黒い傘かさでおおい、真下の小さなちゃぶ台にしか光が当たらないようにして、家族がそれを囲んで座っていました。

毎晩のように空襲警報が出され、「敵機が潮岬を北上中」の警報に、肩までたれる分厚い防空頭巾ぼうくうずきんをかぶり、空襲警報が解除になるまで、防空壕ぼうくうごうで避難したのです。戦争も末期に近づくと、空襲に明け暮れる日がやって来ました。空襲警報のサイレンが鳴った時には、もう頭の上にB29が大きな爆音とともに飛来していました。

名古屋は、B29の100機以上の編隊で大空襲されたことが7回あったと言われます。昭和20年5月17日の夜は、その内の1回でした。編隊をそれた1機が、大府の町を襲ったのです。朝方の4時頃でした。「今晚の空襲は終わったな」と父親と言いながら、



〈焼夷弾を落とすB29〉

家の中に戻った途端のことでした。いつも父親が、空からシューッと空気を切るような音がしてドカンと爆発すれば普通の爆弾で、ザーザーザーという音がして落ちてくるのは焼夷弾しょういだんだとよく言いましたが、まさしくザーザーザーの焼夷弾でした。焼夷弾は火災を起こさせるのが目的の爆弾ですから、フワッと落ちて来るのです。数十個の焼夷弾がつまった爆弾には尾翼がついており、それが空中で分解した六角形の鉄の筒の焼夷弾は、一直線に屋根を突き抜け、畳の

上に落ちて来ました。そこから飛び出た青白い火花は、木造の家のあちこちに飛び散りました。入口では、すでに3か所で火を噴いているので、準備されていたバケツの水を1杯かぶせたら一瞬消えました。しかし、もう1杯取りに行っている内に、消えたはずの焼夷弾は激しく火を噴いていました。その時、父がフトンをかぶせよと言ったので、手探りでフトンをかぶせましたが、火はだんだん広がり消せる状態ではありません。そこで、荷物を持ち出すことにしました。しかし、常に準備された持ち出し荷物を2個出すのが精一杯でした。それでも父親は、半てんの裾を焦がしてまでも、数回も燃える火の中から反物などを抱えて軒下まで出しました。しかし、そこには、荷物を受け取る者がいなかったため、荷物の上に、炎となった軒が焼け落ちてしまいました。

翌朝、家の周りをよく見ると、家も着物も家具も何もかも、跡形なく灰となっていました。焦土と化した我が家を見たとき、疲れが一気に噴き出して来ました。隣の畑の向こうの家は燃えていない。裏側の用水の向こうの家も燃えていない。何ということだと思いながら地域を歩いて回ったら、広い範囲が焼けていた。家に戻ったときに、父親から役場へ行って罹災者証明書を取って来るよう言われた。現在の大府区役場の隣の町役場へ行ってみると、集まった人々は意外に多かった。あとで聞いてみると、37世帯の46棟の民家が全焼していた。そして、幼い子どもさんが3名犠牲になっていた。

戦争のために家を焼かれ、命を奪われた人が沢山いた。今考えて見ると、とても不幸な出来事であった。私は二度と戦争をしてはならないと思う。平和であることが、本当に幸せであるとしみじみと感ずるのである。

### — 焼 夷 弾 —

焼夷弾は焼夷剤（焼き払う薬）を弾体内に入れた爆弾。焼夷剤の種類によりテルミット焼夷弾・黄リン焼夷弾・油脂焼夷弾などがある。日本の都市の爆撃には、油脂焼夷弾が大量に使われた。それは、日本の家は、木と紙で作られており、焼夷弾攻撃が有効であったからである。実際、東京・名古屋などの大都市は、この攻撃により焼け野原にされた。

油脂焼夷弾は、太さ10cm、長さ60cmくらいの六角柱で、中にどろどろの油脂がいっぱい詰まっている。それが屋根を破って床や土間にぶつかると、そのショックで一番下にある信管（爆弾を爆発させるためにつける装置）が働き、火薬が爆発して、中の油脂があたり一面に飛び散る。粘っこいために、天井といわず、ふすま・障子といわず、火のついたまま激しく燃えながらはりつく。これでは木でできた家はたまらない。たちまち火の海となる。

このような六角柱の爆弾を18発たばにしたものを2弾、つまり合計36発が一つの爆弾としてB29から落とされる。すると空中で分解し、36発がばらばらになってザーザーというなり声を出して、雨のように落ちてくる。

# 戦争が残してくれた心の温もり

深谷 泰造

私の小学校時代は、太平洋戦争とともにあった。戦争は、悲劇と苦難<sup>ともな</sup>を伴うものであるが、中には、貴重な体験や人の絆<sup>きずな</sup>・心の温もり<sup>ぬく</sup>を残すことがある。

太平洋戦争は、小学校2年生のときに始まった。先生が、白い手袋<sup>ほうあんてん</sup>で奉安殿<sup>ほうあんてん</sup>から御真影<sup>ごしんえい</sup>を運ばれる式典<sup>しきてん</sup>があった。昼食時<sup>はんにやしんぎょう</sup>に般若心経<sup>はんにやしんぎょう</sup>を唱和した。教育勅語<sup>ちよくご</sup>の暗誦<sup>あんしゅう</sup>もした。時を経て、剣道や軍事教練も加わり、農作業や干し草づくりも行った。「武運長久<sup>ぶうちょうきゅう</sup>」の幟<sup>のぼり</sup>を持ち、軍歌を歌って、出征兵士を送った。「決して頭を上げてはならぬ。」と、先生の注意<sup>えきとう</sup>を受けて、大府駅頭<sup>おほふえきとう</sup>（豊田工場隣の原野）で行われた、天皇陛下<sup>ぎょうこう</sup>の行幸の送迎など、21世紀には、二度となかろう経験をした。

その中であって、忘れることの出来ないのが、大府を襲った戦禍<sup>せんか</sup>である。戦争も激しさを増して来た昭和18年頃から、名古屋への空襲も度を増して来た。そして、悲劇は、昭和20年5月17日に突如<sup>とつじょ</sup>やって来た。

ラジオ放送も、空襲の終わりを告げていたのであろう。「もう、いいだろう。」との親の声で、防空壕<sup>ぼうくうごう</sup>から頭を出し、南の夜空<sup>なが</sup>を眺めていたその時、遅れたのか、迷ったのか、B29と思われる1機が、名古屋に向けて飛んで来た。機首を少し右に向きを変えたかなと思った瞬間、パッと閃光<sup>せんこう</sup>が走った。光は大きな帯<sup>おん</sup>となって、轟音<sup>ごうおん</sup>とともに落下して来た。「爆弾だ！」皆、急いで防空壕の中へ身を縮めた。しばらくして外を見れば、一面火の海となっていた。

家族総出の消火作業や貴重品の持ち出しが始まる。動転<sup>どうてん</sup>していて要領を得ない。私は洗面器を持って走り回った記憶がある。大府に投下されたのは、油脂<sup>ゆし</sup>焼夷弾<sup>しょういだん</sup>で、水を強くかけると、消火されることなく飛散して、また燃えているという厄介<sup>やっかい</sup>な代物であった。当時、祖父は80才であったが、バケツで少しずつ水をかけ、周囲の消火に大活躍してくれたそうである。

私の家の周囲は、大家さんが多く、立派な家屋敷が並んでいた。その大きな母屋が、蔵が、納屋が、皆燃えている。家の前の、まだ青い麦畑に運び出された家具や衣類も燃えている。手が付けられない状態である。子ども心に、どうなるものかと心が痛んだ。

我が家は「萱葺き<sup>かやぶ</sup>」の家であった。一番早く燃えても不思議ではない。だが、

まだ残っている。気がついてみると、親戚の人、見知らぬ人も一緒になって消火してくれている。よく見ると隣のRさん達がいる。「自分の家は、大丈夫かあ！」と、誰かが声をかける。「もう自分の家は助からないから、この家を守ろう！」と、一生懸命に筵に水をかけて、高い萱葺きの屋根に並べ覆ってくれた。

大きな屋根の棟が、焼け落ちる時の炎の凄まじさは、今でも鮮明に臉に浮かぶ。皆さんの心が、我が家を火の粉から守ってくれたのだ。朝になり明るくなると、周囲の大半は焼け落ちていた。その中であって、一部を焼いたとはいえ、我が家は残っている。多くの人達から「あれは奇跡だったなあ！」との声を耳にした。

後で知ったことであるが、私の屋敷には、不発弾も含めて、38発もの焼夷弾が落とされていたという。その時の空襲は、南島から北島に向けて落とされ、家の前の藪には、焼夷弾のケースが落ちていた。家の辺りが、焼夷弾の雨の中心地であったようだ。この空襲で46棟が焼け、3人が死亡している。裏のS家では、焼夷弾の直撃を受け、幼児が焼死するという惨事となった。

それにしても、思われるのは「我が身、我が家」を忘れて、隣家の消火を手伝う「人の情、思い」の深さである。何という心の温もりであろうことか。今でも語り継がれる、我が家の戦争の思い出話である。

今一つは、戦時下に生まれた、人間の強い絆についてである。隣家の焼失によって、その家の離れ座敷に疎開していたNさんは、当時、豊田大府工場長をされていた。焼け出された後、我が家での不自由な生活環境の中で、大変苦労もされたと思う。また、この年の春3月、家の前にあった借家に、Hさんが疎開されていた。両家とも、私より少し下の男子がおり、良き遊び相手となった。東大で学び一流企業に入り、大成し、今では定年を迎えているが、当時は一緒になって、藁細工をしたり、太鼓や竹笛で遊び、魚掴みをし、時には田畑へ行ったり、焼き芋を食べたりした。短い期間ではあったが、この田舎での生活は、「良き経験であり、懐かしい思い出だったなあ！」と言っている。また、大人たちも、戦時下の苦難の中での、お互いに、助け合い励まし合っでの生活は、どんなに心をつなぎ、絆を強くしたことであろうか。疎開を引き上げてからも、長い間の親しい付き合いが続いて来た。忘わしい太平洋戦争、二度とあってはならない戦争ではあったが、戦火の中から、いろいろなドラマが生まれ、疎開を通じて人の出会いがあり、苦しい中から助け合いが始まり、人として大切な「心の温もり」「人の絆」が残されたことは大きな救いであった。

## しょういだん 焼夷弾で亡くなった妹の死を思う

斉藤久男

終戦の時、私は小学5年生でした。だから、戦争について、語れるほどの体験を持っている訳ではありません。でも、食料や衣類が乏しかったこと、空襲が怖かったことなどは、強烈な印象として、私の脳裏に根強く残っております。そして、それらの中で、一番悲しかったことは、わずか1才にもならない妹を空襲で亡くしたことです。後に、父母などから聞いたことも織り混ぜながら、その時のことを書き残して置きたいと思います。

太平洋戦争も終りに近づくと、空襲が激しくなって来ました。特に夜は、灯火管制がひかれ、家の電灯を最小限にして消したり、電灯に黒い風呂敷などを被せて、光が外へ漏れないようにしなければなりません。空襲警報が発令されると、私の家の庭に造られていた、簡易的な防空壕へ逃げ込み、息を殺してアメ公（当時、私たちはアメリカのことをそう呼んでいた）の飛行機が通り過ぎて行くのを待つのです。

昭和20年5月17日の午前3時過ぎ頃でした。空襲警報が解除され、防空壕から外に出てみると、何時ものように、西の空が赤く焼けているようでした。今夜は、名古屋のどの辺りが空襲に遭っているのか、家族皆で話をしていました。いつもは、父が区役所の方へ行っていて、留守が多いのですが、今日は、たまたま家にいたので、気が楽でした。

そんな時、一機の飛行機が、大府の上空にさしかかったのです。そして、閃光がはしり、焼夷弾がチョウチン行列のようにふわふわと落ちて来たのです。「危ない！」と大きな声で母が叫び、「早く防空壕へ入れ！」と言いました。私たちは、一目散に防空壕へ入り、最後に母が入った直ぐその時、入り口に焼夷弾が落ちて来ました。さいわい、防空壕の中へは、一発も落ちて来ませんでした。母は、わずか一步の差で助かりました。早速、入り口の火を消し、やっと外へ出た時には、母屋はかなり燃えていました。

母は、燃えているその家の中に入り、まだ、小さい妹が、一人で寝ていたのを助け、抱えて出てきました。父は、家の中にあつた荷物を外へ出していましたが、炎が家全体を包み、手の付けようがありませんでした。その時、父はあの燃えさかる家の中で、偶然にも先祖の位牌に手が触れたので、素早く抱え持

って来ました。そして、私に位牌を持って避難せよと言いました。その後、父は、自分の家の消火はあきらめ、まだもえている近所の家の消火の手伝いに行きました。私は、その位牌を抱え、母と弟や妹と、近くにある親類の家まで避難しました。さいわい、その家は燃えていませんでした。やれやれと思っていたその時、母が悲壮な声で叫びました。抱き抱えていた妹の足が、焼夷弾の直撃を受けていたのです。母は、すぐ病院に飛んで行きました。

そこで、私は、ここは家からさほど離れていないので、ここでは危ないと思い、弟や妹の手を引いて、もう少し離れた所の友達の家まで避難しました。その家は、焼夷弾の落ちる数が少なかったのか、家は無事でした。そこから自分の家の方を見ると、空が明るく燃えていました。近所のあちこちで、火の手が上がっていました。子供の私には、何もすることができず、ただ呆然と私たちの家の方を見ているばかりでした。

しばらく時間が経<sup>た</sup>って、空が明るくなって来ましたので、家に帰りました。すると、母屋は完全に焼け落ち、見るも哀れでしたが、さいわい、小屋と納屋は、延焼を免れ残っていました。そこが、しばらくは、私たちの仮の住まいになりました。

まもなく、妹を抱いて母も帰って来ました。しかし、妹は、もう帰らぬ人になっていました。病院では、いろいろ妹の手当てをしたそうですが、死んでしまったと、母は、泣きながら別れの様子を教えてくださいました。母は、よく「この子は可愛い子で、いつも笑顔で呼んでいるのが頭から離れない。」とつぶやいていました。

母は、何時もは、空襲警報が発令されると、幼い妹を背中に背負い、私たちと一緒に防空壕へ避難していましたが、たまたまこの日は、母屋に寝かせたばかりであり、突然の出来事でしたので、何時もの様ではなかったのです。母は、「この子は、生れ持った短い命だったかも知れないね！」と自分を慰めるように、よく話していました。

妹も、生を長らえておれば、もうじき60歳になるのです。私自身の、60余年の波乱に富んだ人生を振り返りつつ、あの妹が生きていれば、どんな人生が遭ったろうかと考えます。そして、戦争の惨<sup>みじ</sup>めさ・辛<sup>つら</sup>さを思い出します。現在も、戦争によって、何の罪もない幼い命が断たれる事例が、新聞やテレビで報道されます。妹のことを思い出し、心が痛みます。この地上に、戦争のない平和な世界を創りたいものです。

# 大府空襲と半田空襲の回想記

早川達郎

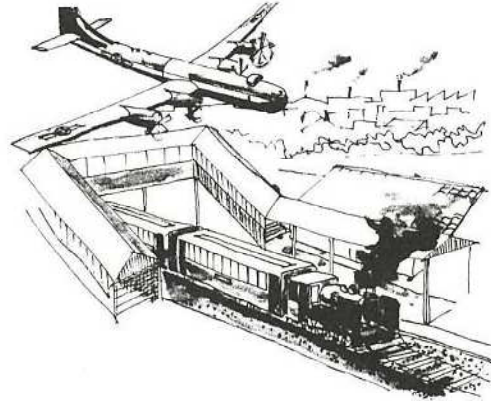
昭和14年4月、私は刈谷の亀城尋常高等小学校（現亀城小学校）に入学しました。父親が豊田自動織機製作所の技術屋であったため、昭和13年に新しくできた豊田<sup>こうめん</sup>光棉紡績株式会社（大府町大字大府字大根8番地、現株式会社豊田自動織機製作所大府工場）に移籍したので、14年5月に大府町<sup>むかえぼた</sup>向畑19の1番地に転居しました。以降、大府第一尋常高等小学校（現大府小学校）に6年間通学、卒業後昭和20年4月、愛知県立半田中学校（現県立半田高等学校）へ入学した。半田<sup>くうしゅう</sup>空襲の体験は、その通学途中でのことでした。

まず、大府空襲の回想ですが、当時マリアナ諸島のサイパン・テナン・グアム島で日本軍守備隊が<sup>ぎょくさい</sup>玉砕後は米空軍基地となり、B29<sup>ばくげきき</sup>爆撃機による本土空襲が激化し、昭和19年から20年の夏頃までは紀伊半島<sup>おわせ</sup>尾鷲上空から志摩半島上空を経て伊勢湾上空を北上、知多半島西岸をかすめて名古屋市上空を旋回し、<sup>しょういだん</sup>爆弾・焼夷弾による空襲が週1回は必ずやっていた。

昭和20年5月17日夜半に約100機くらいが名古屋市を空襲したが、最後に飛来した1機が大府の上空を西の方から急に旋回し、向って来たので急いで<sup>ぼうくうごう</sup>防空壕に飛び込んだ。間もなく「ヒュー」という音とともに大量の焼夷弾を落としていった。熱田社（現熱田神社）の森を中心に、<sup>たか</sup>棧敷・南島・西端・ヲシロ（現町名で朝日町周辺）あたりで50軒くらいの民家が焼失したのである。今でも焼け落ちていく農家が炎を上げている光景が目に見え始める。私が住んでいた向畑の家から3軒ほど東側の路上にも焼夷弾が1本落ちたが、幸い近所の人たちで消し止めてくれて事なきを得た。しかし、防空壕から出てきた時、頭の上を焼夷弾を束ねている六角形をした厚さ7ミリくらいの鉄板が風を切って落ちてきた。朝、明るくなって拾って見たらかなりの重さであり、当たっていたら私の命は無かったものと思う。また、熱田社の境内一帯に1メートルおきくらいに焼夷弾が落ちていたように記憶している。なぜ大府の中心をはずして熱田社周辺に落とされたのか不明であるが、当時、神社の森陰に数機の飛行機の主翼と思われる部品がシートからはみ出して木陰に隠されていたことを記憶しているが、それを狙ってきたのではないかと思われてならない。

次に半田空襲の記憶としては、終戦になる日も近い昭和20年7月24日、

マリアナ基地からのB29爆撃機600機、<sup>いおうとう</sup>硫黄島沖空母からの<sup>かんさいき</sup>艦載機1400機、合計2000機による関西と中京地区への大空襲が行われた日でした。B29は潮岬から紀伊半島を北上し、<sup>おのおの</sup>各々空爆地へ向けて分かれ、半田市へはこの内78機が飛来し、中島航空機を目標に爆撃を行っていきました。高度5千メートルの上空より2000発以上の250キロ爆弾、1トン爆弾も混ざっていたとのことです。



中学1年生の私は、その朝いつも通り武豊線の汽車に乗り学校へ向っていましたが、8時頃列車が亀崎駅に着いた時、<sup>けいかいけいほう</sup>警戒警報が出され、列車は亀崎駅でストップしてしまいました。ちょうど亀崎駅から乗ろうとしていた中学の同級生も数人おりましたが、汽車が動かなくてはどうしようもなく、その内に「B29」が半田方面に向かっているという情報も入り、亀崎駅の近くの同級生の家の防空壕へ逃げ込ませてもらいました。現在の亀崎駅も小高い山を切り開いたところにありますが、駅のすぐ東側の小高い丘に友達の家があり、庭の一角に大きな穴を掘って味噌樽を埋め込んで、かなりの土を盛ったしっかりした防空壕であったと記憶しています。壕の中からは爆撃の状況は見えませんでした、はらわたをえぐられるような金属音とともに「ドカーン、ドカーン」という爆弾の<sup>さくれつおん</sup>炸裂音が約2時間くらい続き、生きた心地がしませんでした。家の人たちもいっしょに防空壕の中に待避しておられましたが、「今日は学校へは行かず家へ帰ったら。」と言ってくださり、昼過ぎにお茶をいただき、持っていた弁当を食べ、3時頃に亀崎駅から汽車で帰ろうとしました。しかし、乙川・亀崎間が不通になっており、朝亀崎まで乗ってきた列車が折り返し4時頃に発車したので、それに乗り5時頃にやっとの思いで自分の家へ帰ることが出来たと記憶しています。家では母が心配していたようですが、汽車が亀崎駅でストップしてくれたお陰で命拾いができたと思います。

最近でも亀崎から乙川あたりを通るたびに破壊された中島航空機の鉄骨の工場や格納庫<sup>かくのうこ</sup>などが目に浮かび、終戦間近かの恐ろしい光景が思い出されます。

## 爆弾の投下された場所

鈴木 克 昭

昭和19年の冬、午後10時頃、通称一ツ屋（共和町清水口12番地）の畑に、B29爆撃機より1屯爆弾が投下された。地震のような大きな衝撃に、眠りを覚まされ飛び起きた。跡地には、直径18m。深さ3m、くらいの大きな穴ができた。これが、自分の家に投下されたらと思うとゾーッとした。きっと、家も人間も跡形なく吹き飛ばされたと思う。その折り、通称大川と言っていた現鞍流瀬川の堤防の西にも1屯爆弾が落とされた。さいわい、人的被害はありませんでした。大きな穴のくぼ地には、きれいな水も湧き出して、大きな水溜まりが出来ていた。そこで、皆で泳いだり遊んだ覚えがあります。

復旧作業には、地元の人たちがモッコやスコップ、鍬や備中鍬で、何日も奉仕作業で難儀をしました。被害場所には、水路（土管）が敷設してあったが、それが寸断されてしまった。応急の復旧のために、韓国の人夫たちが、土管の入れ替え作業をしてくれていた。

このような大きな爆弾は、現追分保育園の東南（当時は大池の東側）や、原や三ツ屋にも投下された。さいわい、どれも人的被害はありませんでした。これらの爆弾の投下された場所は、右の写真のように、現在ではその面影を見ることもできません。

爆弾投下が、何故であったのかはよく分かりません。名古屋空襲の帰途に余った爆弾を落として行ったのか。共和町（八ツ屋）の高台にあった照空灯部隊を狙ったものなのか。いずれにしても、サイパン島のアメリカ軍基地より飛来したB29は、照空灯で照らしていても、いつも悠然として飛んで行きました。



〈共和町清水口、現在は車庫が建っている〉



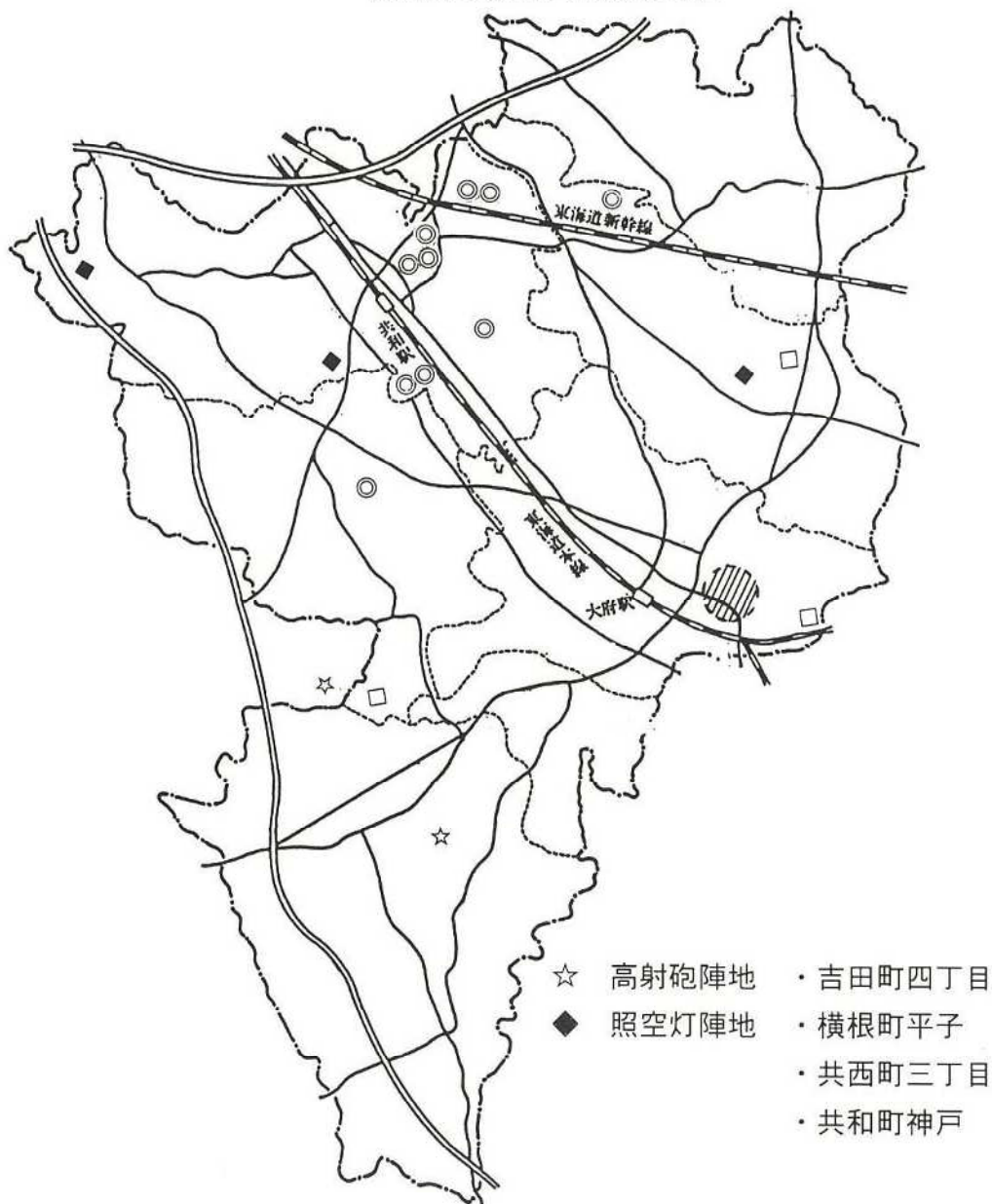
〈鞍流瀬川の堤防の西、現在は樹木が茂る〉



〈東新町六丁目、現在は追分保育園敷地内〉

## 大府町における爆弾の投下された場所

- ◎ 爆弾被災地
  - ・ 共和町清水口と五ツ屋下
  - ・ 東新町一、四、六丁目
  - ・ 梶田町二丁目
  - ・ 神田町一丁目
  - ・ 明成町二丁目
- 焼夷弾被災地
  - ・ 朝日町一帯
- 銃撃を受けた地域
  - ・ 吉田の飛行場一帯
  - ・ 横根の普門寺付近
  - ・ 朝日町の東海道本線の列車



## 東海道本線空襲

—昭和20年8月14日—

稲垣 信夫

私は、昭和19年4月1日、名鉄（名古屋鉄道管理局）の教習所に入り、そこで、3か月教育を受け、機関助手になりました。機関助手の生活は、朝の一番ということもあれば、夕方乗って泊まり、次の日、名古屋に向かって来るということもあります。稲沢機関区が、貨物専用で、名古屋機関区は客車専用でした。当時、竹内弘（後に半田市長）さんが機関手で、私が機関助手を勤めたこともあります。

機関助手としての乗務にもなれ、東海道本線・関西線・武豊線に乗るようになっていました。昭和20年8月14日は、天気が良く、気温も30度余という暑い日でした。この日の機関手は布施孝さんでした。朝7時に、名古屋駅を第711列車（上り名古屋発・浜松行）で出発し、10時に、浜松駅で折り返しの第710列車（下り浜松発・名古屋行）に乗務していました。

刈谷駅に着いた時、列車は10分ほど遅れていましたから、12時40分から50分の間と思います。助役さんが「空襲警報が入っているから、気を付けて行ってくれ。」と言いました。「よし、分かった。」と言って発車させ、今のJR逢妻あいつま駅附近で一旦停車しました。しかし、「これ以上遅れるとあかん。」と言うので、発車させ逢妻川の所に来た時、左手からP-51が3機、襲って来ました。



〈P-51 戦闘機〉

私は、終戦の時は、今でいうと、高校1年生の年齢ですから15才でした。15才の若者が、何百人もの人の命を預かる仕事をしていたのですから、大変な仕事だと、つくづく思います。

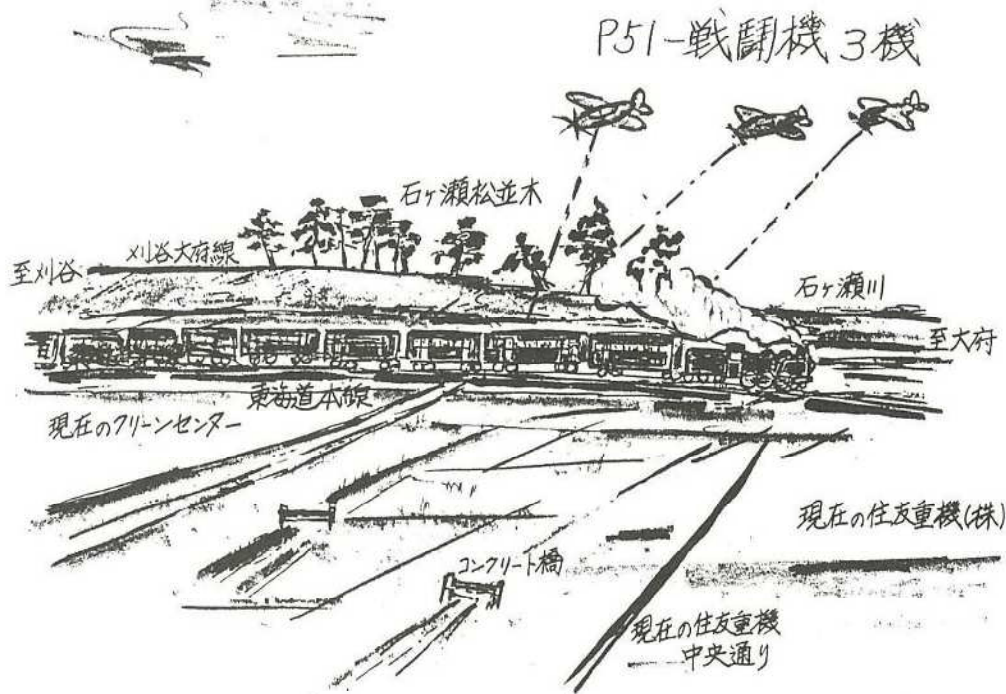
第710列車は、前の2両には、陸軍の兵隊さんを200人ほど乗せ、後の10両の客車には、一般の人が乗車していました。襲われたら、乗客を避難させる以外に方法はありません。列車を急停車させた所は、境川の西の、今の産業廃棄物処理場の裏手あたりでした。私たちは、運転席から降りて、炭水車の下へ逃げようと思いました。P-51は3機で、高度は100mくらい、飛行士の顔がはっきり見えました。私の負傷は、足を打ち抜いた弾が、線路の小石を

粉碎し、その破片が、後ろから左肩附近に食い込んだものでした。

しばらくして、知多運輸のトラックが来て、私たちは、刈谷の古居さん（今の刈谷総合病院）に運ばれました。その時、犠牲になったのは、兵士2人、一般乗客2人だったと思います。一人の兵士は頭を撃たれ、もう一人の兵士は胸を撃ち抜かれたと聞いています。この時、亡くなられた指揮官は、陸軍中尉さんで、特別の将校さんでした。何でも東久邇宮さまの甥にあたる皇族の方と聞いています。その方は、別の部屋で治療を受けておられましたので、よく分かりませんが、左肩を撃ち抜かれたようでした。

私は、古居さんに傷口から奥の方まで、丹念に消毒してもらいました。当時は、痛み止めの薬も何もなかったので、麻酔なしで、穴の口から消毒のためのガーゼを奥の奥まで突っ込んで、消毒されました。傷口は、弾の入り口で直径5cmくらい、出た方で8cmくらいありました。貫通してしまったから良かったと思っています。背中や肘の奥に入った石の破片は、1～2年経ってから浮いて来ました。古居さんにみんな取ってもらいました。

九死に一生をえて、現在、こうして健康でいられることに感謝しています。



<この空襲を目撃した朝日町の鷹羽秀信さんのスケッチ>

# 命を救ったシッカロールの缶

大島 康民

間もなく終戦という、昭和20年（1945年）5月、私が大府町第二国民学校（現在の神田小学校）の3年生のことでした。そのころは、男女別学で、私たち男組は学校西隣の畑で作業をしていました。そこへ、親戚のおじさんが息せききって私を呼びに来ました。早口で先生に話しているおじさんの表情から、何か重大なことが起きたらしいということだけは分かった。おじさんは黙って私を自転車の後ろに乗せ、家まで連れて来てくれました。

家に帰ると、母が「父ちゃんが、夕べの熱田の空襲で爆弾に当たって重傷を負った。全身火傷で死んじゃうかもしれない。」とおろおろした声で言い、会いに行くから準備をするように言いました。

父は当時国鉄熱田駅に勤務していて、5月17日の夜間大空襲で被爆し、名古屋鉄道管理局（当時の名古屋駅）の地下に收容されていました。

名古屋駅に行くといっても、既に東海道本線は攻撃を受け動いてはいなく、親戚のおじさんに自転車で乗せて行ってもらうしかありませんでした。

私は、ことの重大さが分からぬまま、急かされ足にはゲートルを巻き、国防色のシャツ、買ってもらったばかりの戦闘帽（少国民の服装）を身につけ、握り飯をかじりながら名古屋駅に向かいました。

途中、二つ池辺りで新しい戦闘帽が風に飛ばされてしまいましたが、おじさんは少しでも早く私を父に会わせようと必死にペダルを漕いでいたので言い出せませんでした。

旧東海道の笠寺観音辺りまで来ると、辺りの様相が一変しました。

道の両側の家々はほとんど焼き尽くされ、燻った煙が目に沁み、鼻をつき、息苦しくなってきました。道路脇の電柱は未だ炎を上げ、電線が垂れ下がっていました。

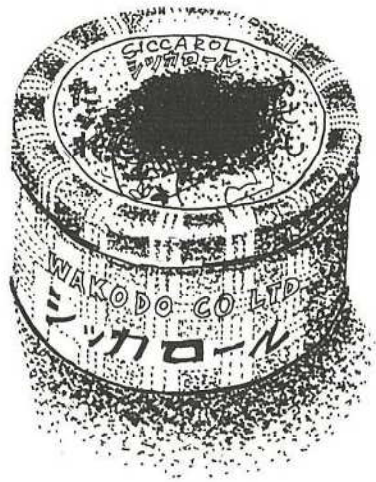
人々は着のみ着のままで焼け出されたのか、ほとんど何も持たず右往左往していました。そうした光景は、ずっと熱田神宮辺りまでつづいていました。神宮周辺は焼け野原で不気味なほど静かでした。

戦火の中をやっとの思いで、父の收容されている旧名古屋駅地下にたどり着くことができました。そこには目と鼻と口だけ残し包帯でぐるぐる巻きにさ

れ、横たわっている怪我人が沢山いました。どれが父か分からなかったが、名札で父を探し出すことができました。父はその夜B29、457機（「名古屋空襲」による）から投下された焼夷弾で全身火傷を負っていて、呼びかけても返事もなく、ただ荒い息をしているだけでした。私は、ここに来るまでの光景や変わり果てた父の姿に、ただ呆然と立ち尽くすだけで涙も出ませんでした。父のことは心配でしたが、私たちは母を残し、日暮れ前に再び焦土と化した名古屋の町を後にしました。

その後空襲は益々激しくなり、夜になると名古屋や岡崎、半田方面の空は夕焼けのように真っ赤になり、焼夷弾は赤い火の玉となって雨のように降り注いでいました。

終戦1か月ほど前、誰もが「もうだめだ。」と、思っていた父がひょっこり帰って来ました。火傷の痕が残っていて痛々しい姿であったが、紛れもなく父でした。



私たちが、声も出さずぼうっと立っていたら、父が「これが助けてくれたよ。と言ってポケットから潰れたシカロールの缶を取り出しました。当時父はたばこの「きざみ」（葉たばこを細かく刻んだもの）をこの缶に入れキセルに詰め吸っていたのでした。ポケットに入れていたその缶に爆弾の破片が当たり、致命傷を免れたということでした。

た。まさにこの缶によって、九死に一生を得ることができたのでした。

戦争で二人の叔父が戦死をし、更に父があわやというところまでになった戦争、そして何百万人もの戦争の犠牲者やその家族の悲しみを思うとき、二度と同じ過ちをくり返さないことを願うものです。

# 長い悪夢の一日から

深谷 俊二

日を追うごとに、戦禍<sup>せんか</sup>が本土に迫って来た。私たちは、聖戦という言葉を感じ、銃後を守るには、滅私奉公<sup>めっしほうこう</sup>あるのみと教えられていた。思えば、あの東南海地震が発生したのは、昭和19年12月7日でした。その時、私は、旧制中学5年生であった。

家では、朝食は麦飯<sup>むぎめし</sup>で、白米は数えるほど、味噌汁<sup>みそじる</sup>は塩辛<sup>しおから</sup>く、香の物は薄く切ってペラペラであった。制服制帽、足にはゲートルを巻き、亀崎発8時に近い列車に乗車する。「男女、席を同じうせず。」ということで、男子生徒は前部へ、女子生徒は後部に乗車するよう通達さ



〈ゲートル〉

れていた。大府・緒川・亀崎からの通学者15名は、乙川で下車し、半田重工業に行く。門衛<sup>もんえい</sup>の所で、各自がタイムレコーダーを押し、帽子に必勝と染め抜かれた鉢巻<sup>はちま</sup>きを締め、仕事に従事する。

そこは、ベアリングを生産する職場であった。細長い鉄棒を機械にセットし、表面<sup>けず</sup>を削り、正規の寸法に切断する作業であった。工場内では、藁草履<sup>わらぞうり</sup>が支給されており、場内にこぼれ落ちた鉄の削り屑<sup>くず</sup>が、容赦なく足の裏に刺さった。



〈当時の半田重工業のポスター〉

作業中は、機械の操作や製品の出来具合に熱中し、痛さも感じなかった。しかし、休みになると痛いので、昼食時間に、食堂へ行く途中に医務室に寄り、毛抜<sup>ぬ</sup>きを借りて、鉄屑を抜いた。食堂は、細長い机と、5人ほど座れる板一枚の腰掛けが置いてあった。昼食は、三分の一が御飯<sup>ごうまい</sup>で、後は、大豆か刻んだソバが入っており、惣菜<sup>そうざい</sup>は芋・大根の煮物であった。午後からは、登校日で軍事教練があった。

藁草履を各自の靴に履き替えて、工場から学校まで、約2 kmの道程を二列縦隊<sup>みちのり</sup>で歩いた。校門の入り口では、“歩調<sup>ほちよう</sup>とれ”の号令がかかった。足が痛い

が、我慢の一途である。到着後は、ただちに、兵器庫へ自分の銃を取りに行く。兵器庫の前には、教官が待っている。銃の手入れの悪い者は、赤印が付けてあって、その場で往復びんたを受けた。全員が校庭に整列し、着剣して突撃訓練を数回行う。ここでも、腰の引けた突き方、声の小さな者には、教官の木銃が尻に飛んで来た。教練が終わると、直立不動の姿勢で、全員が軍人勅諭を唱えて終わった。



〈教練用銃と木銃〉

工場への帰途は、緊張の糸が切れたように、皆が放心状態で歩いていた。5分ほど歩いたであろうか。足が…足が一步前へ…二歩ほど後ろへ…足が地に付かないとは…“地震”と直感した。右側は民家で、左側は田圃であった。安全な田圃へ逃げたというより、転げ落ちた。右側の民家の二階に置いてあった、用水用の大きな桶が、震え落ちた。数十秒逃げ遅れたら……命拾いであった。工場近くの武豊線、乙川～半田間の線路も餛飩のように曲がっていた。本日は“帰宅せよ！”とのことで、線路伝いに歩いて帰宅する。同級生の一人は、乙川から大府まで、暗闇の中を徒歩で帰った。

この地震により、半田の中島飛行機製作所へ派遣されていた、学徒動員生徒約数十名が、被災により亡くなられた。その後、10日ほどは、武豊線は不通のため、徒歩通学で、大府・緒川からの通学者は難渋した。

春から初夏にかけて、空襲警報の連続で、兵器生産も中断され、我々は全員が、防空壕掘りに回された。ツルハシやショベルを持つ日々が続いた。そんなある日、学徒部屋で休憩中に、突如、P51が2機来襲し、機銃掃射を受けた。10m先の事務所へバリバリ、バリバリと耳の鼓膜が破れるほどの連続音！真赤な銃弾が、低空飛行のP51から撃ち込まれた。この銃撃で、守衛さんと事務員さんが犠牲になられた。

恐怖・興奮さめやらぬ、その数分後、別の編隊3機が、鋭い金属音をたて、学徒部屋を襲撃して来た。部屋の隅に逃げる！ガラスの割れる音、砂けむり、同級生の一人の上着の第3ボタンを銃弾がはね飛ばして走った。幸いに、全員が無事であった。

このような空襲は、以後は、昼夜を問わず激しくなり、私たちは、生命の“巷”をさまよう時を過ごした。そして、ようやく終戦となった。

〈大府市老連だよりNo.28より〉

# 亡き弟への追想

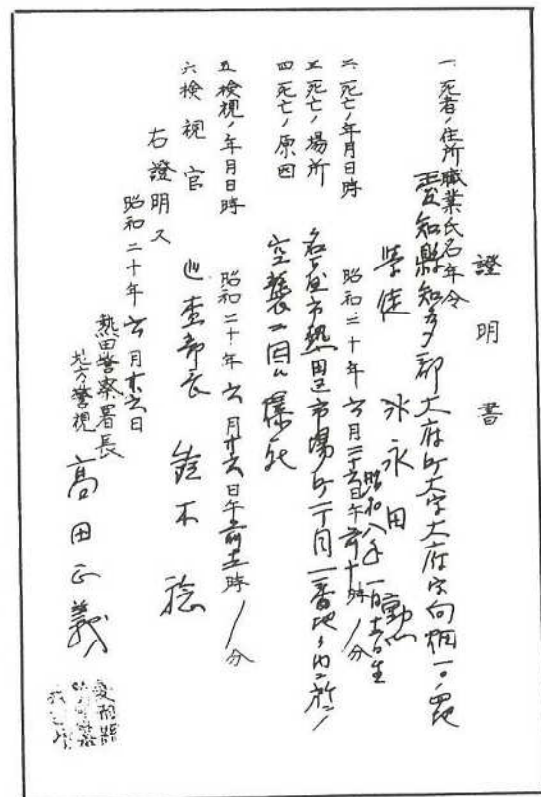
永田 雄一郎

昭和20年6月26日、今を去る50余年前、その記憶すら陰のように遠退いています。

名古屋地方の空襲の本格化は、昭和19年12月から始まり、当月13日は名古屋市東区三菱重工業が目標となったのを初めとして、爆撃は激甚の一途をたどってきた。数十回に及ぶ空襲は、B29による焼夷弾・爆弾の投下は容赦なく、多くの家屋を失い、大勢の人命を奪い傷ついた方々は数知れず、市街を焦土と化した。このような悲惨な状況は、有史以来のものであったであろう。

爆撃の続く状況下の中で、6月26日爆撃機B29の100機を超える空襲により、名古屋市千種区の陸軍造兵廠を初めとする5軍需工場がその猛爆の標的となったが、B29による100機以上の空襲は、これが最後であったと伝え聞いた。

昭和20年3月、大府小学校を卒業した永田勲（13歳）は、同年4月に名古屋市立第一工業学校へ将来に大きな夢を託して入学したものの、戦時体制の真ただ中で勉強より銃後の守りが優先となり、学校からの命により名古屋市街地の焼け跡整理作業に学徒動員として従事していたが、6月26日の最後の爆撃にあい、熱田区市場町1丁目1番地内（熱田神宮鳥居付近）において空襲警報発令と同時に付近の数多い防空壕の一つに避難したが、その壕のみ投下された爆弾により被爆し、爆死によりこの世を去った様子であったらしい。他の壕に避難していたらと、これが運命というものでしょうか…？



〈 死亡 証明書 〉

私も半田市の中島航空機製作所に学徒として航空機製作作業に従事していた

が、その日の帰路大府駅から向畑の自宅に帰る途中、その悲報を道行く近所の人から聞かされ、あ然としたことは今も鮮明に残っている。

“哀しみは時が癒す”と言うけれど、半世紀を過ぎた今でも、その傷跡は容易に消えるものではない。今は亡き両親の当時の胸中は、いかばかりであったか？ 26日の前夜、自分の持ち物、着ているもの全部に住所氏名を書き、また、母親に薄暗い電灯の下で氏名票を上着に縫い付けてもらっていたことは、忘れることのできない情景である。

これも“虫の知らせか？”と後日家族で語り合った言葉であり、爆弾により埋もれた状態のなか、奇しくも防空壕の壊滅した跡から足首が出ていたため、弟（勲）の遺体が判明したもので、他の壕の無事な人たちの手で救助されたが、すでに遅かったと知らされた。もしも足首が出ていなかったらと思うとき、これだけでも幸いだったのではないのでしょうか。

振り返り大府町史（昭和41年6月発行）をみても、過去の戦没者の中で、学徒としての死亡は、ただ一人であり、いかに悲運であったか…？

その後大府町関係者のお取り計らいもあり、戦時従軍の功績として、弱冠13歳ではあるが、昭和44年6月28日に勲八等瑞宝寶章の叙勲を受賞したことは家族にとって少しは心の癒しになったであろう。だが、その事は弟の命には代えることができず残念でならない。

ひとり戦争という名の下で犠牲になったということだけでなく、昨今では有事立法云々といわれていますが、このような惨禍の二度と無いよう祈念するとともに、他に学友や先輩たちが、激戦地や銃後を守る国土で、空襲や爆撃で亡くなられた大勢の方々のご冥福を心よりお祈り申し上げます。



〈亡き弟の記名がある武運長久の旗〉

# 太平洋戦争末期の出来事

小塚 義松

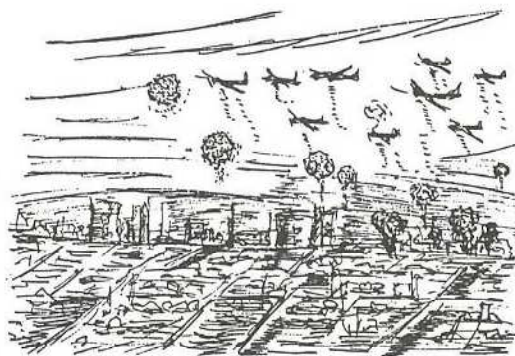
## 1. 爆撃による友人の死

私と友人は、当時、名古屋市熱田区西町にあった、名古屋市立第一工業学校に、大府小学校から入学した1年生でした。

この日（昭和20年6月26日）、登校後に、米軍機の来襲による警戒警報が発令されたため、「自宅へ安全に帰宅できる生徒は、下校するように。」との指示がありました。（これは、警報が発令された場合はいつも同じでした）熱田駅から汽車に乗車するため、学校から駅へ徒歩で向かいました。

熱田駅のホームで、同級生5～6人と一緒に、遅れて来る汽車を待っていると、空襲警報になりました。同じ学校の生徒たちは、それぞれ、駅前の防空壕か、熱田神宮の森の中にある防空壕に、分散して避難しました。駅前の数多くの防空壕の中は、すでに満員で、入れない者は、遠い熱田神宮の森の中の防空壕へ、避難しに行ったようでした。

駅前の防空壕に避難した、私ともう一人の友人は、中に入れなかったため、防空壕の入り口で、空から落下してくる、楕円形に見える爆弾を眺めていました。同じ壕に避難している人の話では、「落下してくる爆弾が、楕円形に見えるときは安全で、丸く見えるときは、自分たちのいる近くに落ちてくるときだ。」とのことでした。



この後、空襲が終り、警報が解除されました。私と友人は、他の者の消息が分らぬまま、数時間後に開通した汽車で帰宅しました。

そして、家に着いたら「よく生きて帰って来た。」と言われました。私が帰宅する前に、同じように熱田駅から帰るはずだった永田君の家に、「米軍機の爆弾によって亡くなった。」という訃報が入っていたためでした。

後日、聞いた話によると、永田君は、熱田神宮の防空壕で、爆撃によって生き埋めになったらしく、土の間から足が出ていたために発見が早かったが、発見された時には、すでに亡くなっていたとのことでした。

## 2. 艦載機による銃撃

これは、期日の記憶は定かではないが、昭和20年の、ある暑い日でした。学校からの帰宅の途中（私は、東海道線で熱田駅から大府駅間を通学していた）突然、艦載機が走行中の汽車に機銃掃射をしてきました。このとき、客車の中は大混乱となりましたが、乗客の中の国民服を着た人が、座席をあげて、窓際に立てかけて、窓を覆うように指示しました。機銃掃射の弾丸は、客車の屋根にバリバリと凄い音を立てながら当たりました。乗客は、皆生きた心地がありませんでしたが、さいわい、怪我人などはなかったようで無事帰宅することができました。

学校へ通うのも命がけであったあの戦争が、今でも時々、心によみがえります。そして、平和の有難さをしみじみと感ずるのです。

### 無差別爆撃

50機を超えるようなB29爆撃機による名古屋の空襲は、以下の通りである。

日 時	B29の機数	主な被災場所	被害の状況
昭和19年			
12月13日 午後1時50分ころ	約 70機	三菱重工業名古屋発動機製作所等	被災戸数 264戸 死者 330人
12月18日 午後1時ころ	約 70機	三菱重工業名古屋航空機製作所等	被災戸数 323戸 死者 334人
昭和20年			
1月 3日 午後2時46分ころ	約 70機	名古屋市街地	被災戸数 3588戸 死者 70人
1月14日 午後2時50分ころ	約 60機	三菱重工業名古屋航空機製作所等	被災戸数 194戸 死者 94人
1月23日 午後2時50分ころ	約 70機	三菱重工業名古屋発動機製作所等	被災戸数 297戸 死者 125人
2月15日 午後2時すぎ	約 60機	三菱重工業名古屋発動機製作所等	被災戸数 709戸 死者 61人
3月12日 午前0時20分ころ	約200機	名古屋市街地	被災戸数25734戸 死者 519人
3月19日 深夜	約230機	名古屋市街地	被災戸数39893戸 死者 826人 大須観音も焼失
3月24日 午後11時56分ころ	約130機	三菱重工業名古屋発動機製作所等	被災戸数 7066戸 死者1617人
4月 7日 午前11時	約160機	名古屋市街地	被災戸数 5191戸 死者 302人
5月14日 午前8時ころ	約440機	名古屋市街地	被災戸数21905戸 死者 279人 名古屋城焼失
5月17日 午前2時すぎ	約100機	名古屋市街地	被災戸数23695戸 死者 505人 大府にも焼夷弾投下
6月 9日 午前9時18分ころ	約 42機	愛知時計等	被災戸数 1153戸 死者2086人
6月26日 午前8時30分ころ	約120機	五軍需工場等	被災戸数 4016戸 死者 426人
7月24日 正午すぎ	約 90機	名古屋市南部	被災戸数 ……戸 死者 167人 半田市空襲

『焼け跡に立つ虹』愛知県教員組合編より

6月9日の空襲では、2086名の死者がでる大惨事となった。それは、空襲警報が、いったん解除され、工場も就業中だったからである。当日、愛知時計を被害視察に訪れた軍司令官に、軍の警報ミスをなじって食ってかかる者がいた。軍司令官は、「済まなかった。」と謙虚にわびた。その人は、東海軍管区司令官・陸軍中将岡田資であった。

彼は、5月14日の市街地爆撃のおり墜落機から脱出した11人の搭乗員を軍法会議にかわる略式の軍律会議で処断したが、その後、捕らえた27人は、方面軍司令官の権限で全員斬首刑に処した。当然、戦後、戦犯として裁かれることになったが、「無差別爆撃という残虐行為を行った搭乗員は、ジュネーブ条約でいう捕虜扱いはできない。これは重罪容疑者で、処刑は報復でなく処罰である。」と主張し、一人絞首台に昇った。

これらのいきさつは、大岡昇平の『ながい旅』で紹介されている。

# 戦時中の消防活動の思い出

榊原 昭 治

私は、昭和17年に大府町第一国民学校高等科を卒業しました。満年齢で数えれば14歳という年齢です。卒業後は、お世話になっていた愛知工務店で大工見習いとして働いていました。戦争が激しくなってくると、一人前の若い男達は、戦争へと駆り出されて行きました。町を火災や災害から守る消防団（昭和14年より警防団というようになりました）も、団員不足に悩まされることになりました。そこで、未成年の私たちも警防団に入るようになったのです。

警防団に入ると、自動車部員に配属され訓練が待っていました。毎週月曜日は、午後7時から、各地の池まで出かけ放水訓練でした。また、空襲が行われるようになると、灯火管制が厳しくなり、私達も見張りや夜回りに忙しくなりました。また、消防車を動かすガソリンも、配給制になり貴重品になってきました。ある日、数人の団員と共に横須賀の養父のガソリンスタンドまで、一斗缶を持って自転車で配給のガソリンを受け取りに出かけました。帰る途中、加木屋から吉川に入る辺りの坂道で、艦載機の銃撃を受け、空襲の恐ろしさを実感しました。また、この貴重品のガソリンを空襲から守るため、北島の山之神神社近くのくぼ地に穴を掘り、ガソリンの入ったドラム缶を保管していました。

昭和20年5月14日は、名古屋大空襲の日でした。440機のB29が飛来し、2679トンの焼夷弾を投下したといわれています。この空襲による名古屋の被災戸数は21905戸、死者279人、負傷者783人といわれています。この時、名古屋のシンボル名古屋城も焼失炎上しました。

15日未明、私達にも名古屋への出動応援の要請がありました。夜の明けぬ道を大高から鳴海に出て、国道1号線を北上しました。笠寺まで来ると、煙が一面に立ち込め、視界も悪くなって来ました。八丁畷で1号線と別れ、鶴舞を北進中に、左側で八幡（現在、知多市）の四輪消防車が放水準備をしていました。それを見て「何ぞ、八幡には負けないぞ。こちらは三輪車でも、エンジンはフォードV8の強力エンジンの消防車だぞ！」と、全員が奮い立ちました。

やがて、指令の目的地、東新町（現、広小路線東新町交差点の北東角・中電ビル向い側）の赤煉瓦造り（窓・入口・開口部は全てシャッターが降ろされ、店？事務所？銀行？か判らない）の建物に近づきました。近づくと暖気を感じ

ます。早速、消火栓に給水管を繋ぎ、ホースを延長して準備作業を終えました。そして、消火活動に取りかかりました。外から十分に放水して建物を冷やし、鳶口で二人がかりで窓のシャッターを打ち破ります。その間も放水はシャッターに続けます。やっと内部に放水を始めることが出来ました。20分ほど放水を続け、温度も下がり鎮火の様子なので、入口へ回りシャッターを破壊し、内部に入り、なお放水を続けました。完全消火を見極め、放水を止めました。内部の隅に、黒い灰のような物があるので、鳶口で捌いて見ました。何と、想像もできない銀杏の山でした。それも丁度食べ頃に焼けていました。また、片方の隅からは、灰の山の中から香油（化粧用）の瓶がゴロゴロ出てきました。

鎮火の報告をその筋に連絡したら、折り返し、老松方面へ行ってくれとのことでした。急いでホースなどを積み込み、老松町（現、新栄町二丁目付近）に向かいました。こちらの現場は、陸軍の軍人用の、木綿製の肌襦袢・股下を縫製している工場でした。工場内の木綿布は、出来るだけ確保せよという命でした。放水にも気を使い、全員一生懸命に消火作業を進めました。2時すぎに、ようやく鎮火したので、放水を止め、任務完了となりました。

この間、食事を採った覚えがありません。しかし、何の苦痛も感じませんでした。帰途に着いた頃には、西の空が夕焼けでした。うす暗くなった頃に分団詰所（現、大府公民館前駐車場の一画）に着きました。後片付けをし、顔を洗い、身体を拭いて、「ご苦労！ご苦労！」と、お互いの肩をたたき合いました。

5月17日は、大府空襲の日でした。丁度その時、私は町役場の屋根上の監視所で、3名の仲間と見張りをしていました。B29が1機飛んで来たなど見ていると、突然「ヒュー、ザー」という音がしました。そして、各所で火の手が上がったのです。「お宮が燃えているぞ！」と叫びながら、梯子をすべるように急いで降りて、すぐ消防車に乗り、熱田神社に向かって出動しました。途中、すでに燃えている家が何軒もありましたが、炎の間を抜けて、まず、熱田神社に向かいました。幸い、神社は無事でしたが、あたりには燃えている家が何軒もありました。放水の準備をし、消火活動に取りかかりましたが、残念ながら、多くの家が焼失してしまいました。被災者の方々には申し訳なく、本当に、泣くに泣けれぬ悔しい思いが致しました。

戦争が終わってからも、ずっと消防団に入っていましたが、この戦時中のような消火活動の体験はありませんでした。消防が活躍しない時代が、本当に嬉しく思われます。

# 日本空爆の時代

竹内 富久

私は、直接戦場<sup>せんじょう</sup>に行くことはなかったが、毎日戦場にいるような気持ちだった。当時は、名古屋の南区に住んでいた。

私は、15歳で中島航空機<sup>なかしまこうくう き</sup>に入社。養成工<sup>ようせいこう</sup>として、6か月間の軍事教練<sup>ぐんじきょうれん</sup>と職場における基本的な訓練を受けた。養成所は、乙川地区の若宮というところだった。幸い近かったので家から通勤することができた。詳細<sup>しょうさい</sup>については分からないが、多くの養成工がいた。そして、10月頃にはもう決められた現場<sup>ばい</sup>に配属<sup>はい</sup>された。自分の希望通りの職場に配属された人もいたが、大部分の者は決められた所に行くしかなかった。南区にあった不二興業<sup>ふじこうぎょう</sup>という会社へ、中島航空機の派遣社員<sup>はけんしゃいん</sup>として仕事についた。もちろん一日も早く一人前の職人になろうとして一生懸命<sup>いっしょうけんめい</sup>働いた。

仕事は、厳<sup>きび</sup>しかった。まさに灼熱<sup>しゃくねつ</sup>の鉄鋼<sup>てつこう</sup>を相手の作業です。鉄は1000度以上です。熱さと熱風で近寄ることも出来ないほどです。「鉄は熱いうちに打<sup>う</sup>て」というが、このことをいうのかと思った。灼熱地獄<sup>じごく</sup>の中でエアハンマーのものすごい響きは、まさに戦場そのものです。体は火傷<sup>やけど</sup>だらけで、これぞ男の仕事だと思ったりした。空襲警報<sup>くうしゅうけいほう</sup>があっても仕事は続けた。私のいたところも軍需工場<sup>ぐんじゅこうじょう</sup>がどんどん建設され、煙突が林立していた。南区の工場群の中でも愛知時計・岡田工業・三菱等は爆弾の被害が大きかった。1トン爆弾の音と震動は、ものすごかった。また、昭和19年12月と昭和20年1月の大地震では、何トンもある鉄棒<sup>てつぼう</sup>が転<sup>ころ</sup>がったほどだった。隣の工場<sup>がくとどういん</sup>では学徒動員<sup>がくとどういん</sup>で働いていた女生徒が多数瓦礫<sup>がれき</sup>の下敷<sup>したじき</sup>になってしまった。

一般の工場は1日と15日が休みだったが、私の鍛造工場<sup>たんぞう</sup>は、週1の休みがあり、それだけが楽しみであった。毎日の仕事がきついためである。また、風呂も毎日入れた。ただ風呂といっても、反射炉<sup>はんしゃろ</sup>の裏側にレンガを積んだ簡単なものだが、一日の労働<sup>あせ</sup>の汗と埃<sup>ほごり</sup>をおとすには十分だった。一番ひもじい思いをしたのが食料である。それでも3食食べられたのは幸せだった。主食の米はどんぶりの中をさがさなければならぬほどで、麦とさつまいも・大根切干<sup>たか</sup>・高菜<sup>たかな</sup>・季節の野菜等がまじったものが、どんぶり一杯分です。副食<sup>ふくしょく</sup>は、まれに出されたものがイナゴの佃煮<sup>つくだに</sup>だった。味噌汁は少しの野菜が入っていた。休日は

家に帰って、母が準備してくれたさつまいもを寮に持ち帰った。それを工場の  
炉の上の砂の中むで蒸し焼きにして、みんなで食べた。そのおいしかったことは  
忘れられない。



松坂屋百貨店屋上より名古屋港方面を望む。手前は矢場町。『一億人の昭和史』より

名古屋の大空襲だいくしゅうは終戦の年の春ごろでした。それより一日も早く戦争が終っ  
て、平和がもどってほしいとこのころから思うようになった。空襲警報が発令  
されたので寮を出たのだが、途中焼夷弾しょういだんが落下するものすごい轟音ごうおん、思わず近  
くの防空壕ぼうくうごうに飛びこんだ。壕の中は誰もいなかった。友人たちはどうしたのだ  
ろうかと思った。自分一人、こんな所で避難ひんあしていいのだろうかかと心の呵  
責しゃくにかられた。やがて近隣の民家の人たちが、防空壕の中に入って来た。壕の  
中は真暗闇まっくらやみで、人の顔の確認はとてもできない。やがて第2波の焼夷弾はが落ち  
てきた。あちこちで人の悲鳴ひめいや呼び声よびこゑがする。外は火の海と化したようだ。そ  
の一つが防空壕を突き破って、私のとなりに穴があいた。外は昼のように明る  
くなり、建物は焼け、焦土しょうどと化していた。私は、この防空壕も危ないと思っ  
た。その時、一人の怪我人けがにんが壕の中に助けこまれてきた。怪我人が運ばれてく  
るくらいだから、まだ、ここも安全な方かと思った。やがて時間の経過とともに  
外が薄明るくなってきた。私は外に出た。人々の顔は、みんな煤すすで真っ黒だ  
った。自分の顔もそうだと思った。不思議と笑えなかった。外はあちこちで、  
まだ燃え残りの家屋がくすぶっていた。私たちの寮も完全に焼けて何も残って  
いなかった。私も着のみ着のままになってしまった。工場は不思議と延焼ふしぎ えんしょうを免  
れた。しかし、私の恩人おんじんである組長をこの空襲で亡くした。思えば、私が仕事  
中、不注意で大怪我をしたとき、組長は自転車で内田橋の病院まで毎日通院し  
てくれた人だ。その後は、転々と寮が変わるうちに終戦の日となった。

## 防衛隊での思い出

深谷 薫

私は、昭和19年4月1日防衛隊に入隊しました。その隊は、疎開で空いていた名古屋の中村小学校を兵舎にしていました。

以前、畑にある大根の切葉の枯れた物を出荷せよとの要請で、出したことがありました。こんなものを出して、にわたりのえさにするのかと思いながら出荷しました。それが、どうでしょう、私たちの入隊の初日の夕食に玄米と大根の枯葉の入った食事が出されたので、びっくりしました。

だが、空腹でほかに食物がないので、にわたりのえさのような物も食べました。数日にわたるそのような食事が災いし、兵隊たちが身体をこわしたので、玄米を三分搗き米に加工するようになりました。18歳の若者ばかりの隊でしたので、空腹はどうしようもありませんでした。

防衛隊でしたので、毎日陸軍2等兵の教育は休みがありません。朝はかけ足で、教官に連れられて中村の遊郭廻りをしました。どうも今思うと、あれは、教官の遊郭廻りの楽しみであったらしいと思われます。

隊員は、大府、東浦、名古屋の人でした。校庭に穴を掘り防空壕を作りました。我々は、学校の防火に努めるように残され、残りの者は、皆広間の方へ行くことになっておりました。

私は、学校に残り、こんなところで空襲を受けて死ぬのかと思うと、なんとなくさびしい気持がしました。しかし、無事空襲にも会わずにすみしました。

野外演習で、我々が庄内川の堤防を行軍中に、B29の空襲を受けました。堤防に散らばって空襲を見ているだけでした。銃はあっても弾がなく、B29をうつこともできません。庄内川の水面には、雨のように高射砲の弾や機銃の弾が降ってきました。さいわい150名程の兵には、当たった者はありませんでした。

市内水道管の埋設工事に、弁当を持って数日出かけたことがあります。1つの飯盒に2人分の昼食を入れて、上水道管入れの重労働です。近所の人が、兵隊の昼食を見て雑炊を差し入れてくれました。それが空腹の腹の底に入ったことは、忘れられない思い出でした。兵隊は皆、目玉だけが大きくなり骨皮になりました。

ある夜、友が空腹で、何でもよいから口に入る物がないかと言いました。私は、梅干<sup>うめぼし</sup>がある所を知っていたので、夜そっと梅干を出しに行き、彼にも分けてあげました。次の日演習<sup>えんしゅう</sup>に出たとき、口が渴<sup>かわ</sup>き、北練兵場<sup>れんべいじょう</sup>で昨夜降<sup>ふ</sup>ってたまっていた雨水を手ですくって飲みました。

1期の教育を終えて、大府へ帰りました。家に帰るのに腹が空いて、足が出ず、大府駅前<sup>おほふ</sup>の店でところ天<sup>てん</sup>を数杯腹へ流し込んだ勢<sup>いきお</sup>いで帰りました。しかし、いくら食事をしていても腹いっぱいにはなりませんでした。

家では農業をしていたので、食べ物<sup>け</sup>は防衛隊<sup>ぼうえいたい</sup>にいた2年を思うと、何とかましでした。でも、米<sup>いも</sup>はいうに及ばず、さつま芋<sup>いも</sup>から芋づる<sup>きょうしゆつ</sup>まで供出<sup>きゆうしゆつ</sup>しました。

大府町でも、南島<sup>なんじま</sup>（現朝日町）にB29<sup>しやういだん</sup>から焼夷弾<sup>せういだん</sup>が落とされ、丸焼けになった家も数十軒<sup>すうじゆけん</sup>ありました。

昭和19年12月7日には大地震<sup>おほいづみ</sup>があり、多くの家が倒れたりしました。家の風呂水<sup>ふろみづ</sup>が30cmほど入っていたのが、10cmほどを残して飛び出したほどでした。軍需工場<sup>ぐんじゆ</sup>などもたくさん壊<sup>こわ</sup>れましたが、当時はあまり知らされませんでした。農家<sup>のうか</sup>などは肥料<sup>ひりよう</sup>もなく、都市肥料<sup>としひりよう</sup>といって、名古屋方面<sup>なごや</sup>より人糞尿<sup>じんふんによう</sup>を運び、畑<sup>はたけ</sup>に作った「かめ」に入れて貯蔵<sup>ちよざう</sup>しました。その肥料<sup>ひりよう</sup>が地震<sup>じゆん</sup>で半分以上<sup>はんぶんじゆう</sup>流れ出してしまったことも忘れられないことでした。地震<sup>じゆん</sup>の場合<sup>ばい</sup>、地盤<sup>じばん</sup>のやわらかいところは、こんなにも怖<sup>こわ</sup>いものかと思<sup>おも</sup>い知らされました。

## — 天皇の人間宣言 —

大日本帝国憲法（明治22年発布）は、天皇について、「大日本帝国ハ、萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス」（第1条）、「天皇ハ神聖ニシテ侵スベカラズ」（第3条）などと定め、天皇は現人神といわれた。

戦争に敗れて、昭和21年1月1日、天皇の人間宣言が出された。その間の事情を、これを書いた幣原総理大臣は、次のように書き残している。「私は、かねて陛下に命ぜられていた詔勅の起草に着手し、一生懸命に書いた。日本よりむしろ外国の人たちに印象を与えたいという気持が強かったものだから、まず英文で起草し、約半日かかってできた。あとで日本語に直してもらって陛下にご覧に入れたら、よろしいとのことであった。マッカーサー元帥も非常に喜ばれた。あの詔勅は外国人に非常によい印象を与えたようで、私は今も喜んでいる。そのときの詔勅が世にいうところの人間天皇の宣言である。」

幣原平和財団編「幣原喜重郎」より

## 第二次世界大戦の回顧<sup>かいこ</sup>

安藤 みね

昭和20年8月2日は、我が家にとって戦争の傷跡を残された、忘れることの出来ない日であります。戦後生れの家族たちは何も知らず、今は私1人のみ当時を思い出します。

日本の本土が戦場と化した19年からは空襲と地震の災害で、恐怖の毎日でした。それである当時を思い出しながら順次たどってみることにします。

昭和19年12月7日昼過ぎ突如大地震、立っても居られない程のゆれ。道路の常夜燈<sup>じょうやとう</sup>、普門寺の大きな燈籠<sup>とうろう</sup>、墓石<sup>ほとん</sup>は殆ど倒れ、北尾下（横根町後田）の境川堤防<sup>ほうかい</sup>が崩壊、五箇村<sup>ごかそん</sup>川の川原からは青泥が吹き出していた。また、近くの家<sup>なや</sup>の納屋<sup>なや</sup>が倒れ、山羊<sup>やぎ</sup>が押しつぶされて死亡。震源地は熊野灘<sup>くまのなだ</sup>とのこと。

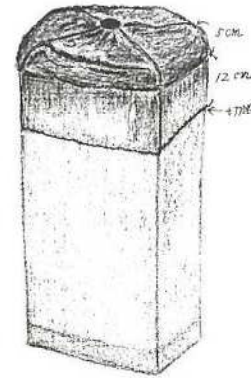
数日後の12月13日は名古屋大空襲。この日は昼頃から警報、午後2時～4時頃迄、銀翼<sup>よく</sup>を連ねたB29爆撃機<sup>はくげきき</sup>が何十機と編隊を組み、東方より続々と波状攻撃<sup>はじょうこうげき</sup>をして来た。報道によればこの日は、1部<sup>も</sup>を以って帝都、阪神方面を、主力を以って愛知、静岡の工場<sup>おら</sup>を狙<sup>ねら</sup>って来た由<sup>よし</sup>。銀翼を連ねて悠々と立ち去る敵機<sup>こうき</sup>を、呆然<sup>ぼうぜん</sup>と見ていたことを思い出す。

年明けて20年1月13日、新年早々、午前3時半頃、またもや大地震、庭へ飛び出す。普門寺の本堂が傾き、第二国民学校（神田小）の玄関、阿弥陀寺<sup>あみだてら</sup>の鐘楼<sup>しょうろう</sup>、横根山のパイオリン会社の2棟が倒壊、我が家も大分傾いた。震源地は碧南方面とか。大浜<sup>たな</sup>、棚尾<sup>たな</sup>方面は相当な死傷者が出た由。1日に何回となくゆれる不気味な地震が毎日続き、不安な日々を過ごした。

その後3月12日夜0時頃より空襲警報発令、敵機B29名古屋爆撃。その頃米田地区にも何百個の焼夷弾<sup>しょういだん</sup>落下、山火事になった。やがて5月17日は大府の街にとって初の空襲、焼夷弾が雨のように落下。大府の南島、熱田神社、延命寺のあたりが一面火の海と化し、数十戸焼失。焼跡は悲惨、死者もありと聞き、眠れなかったことを覚えている。

このようにして戦場となった土地ではあるが、食糧増産のため毎日横根山を越えて、山田（追分町）の田圃<sup>たんぼ</sup>へ農作業に出かけた。その7月1日の正午頃、警報が入り、B29の爆音が頭上でした途端、目の前へヒューヒューヒューと異様な物が落ちて来た。爆弾かと思い急いで小川へ身を伏せ、耳をつめてじっ

としていたが一向に爆ぜない。恐る恐る落下物を見に行ったら、それは宣傳ピラを撒き散らした空のケースだった。そのケースが落ちてくる時、白い紙切れが空一面に舞い落ちて来た。敵国の思想がしたためられ「降伏せよ」とのピラだったのか？ 後でケースを持ち帰り、短く切ってかまどを焚く時の腰掛にした。破れて真黒になったケースが今でも残っている。



(宣傳ピラの入っていたケース)

斯くして遂に昭和20年8月2日は、我が家にとって戦跡を残された忘れることの出来ない日となった。この日正午頃空襲警報発令、岡崎、半田方面へ数えきれない程のB29が襲来。爆弾の炸裂音、空には幾筋かの白い飛行機雲が浮き出され、悠々と立ち去る敵機をただ悔しく見送っていた。その時、突然東南の方向より艦載機P51一機が飛来。境川堤防に人がいたらしく、銃撃して来たのがはずれ、その弾が普門寺門前の大松と我が家の屋根、壁、窓に数十発当たり、もうもうたる砂煙りが立ち上った。たまたま義母と私は外にいて、家の横におり、義父は二階から降りて外へ出た瞬間だったので、幸いにして命は取り止めた。アッという間の出来事だった。その直後、隣人達がかけつけ、火事になったらと心配して、天井を破り見届けて下さったことが、つい昨日のことのように思われる。

あれからもう五十有余年。古くなった我が家の棟には今も二箇所、弾丸の傷跡があり、家の中の壁には弾丸の貫いた穴が数か所残っている。天井裏にはその弾丸が残っているだろう。天井板の傷もそのままになっている。

そして8月14日、またもや空襲警報発令。この日は大府刈谷間で東海道本線の列車が襲撃され、高津波や吉田の陣地が撃たれたとか。

翌8月15日正午は、永久に忘れることの出来ない、ポツダム宣言受諾、陛下の「玉音放送」、遂に日本無条件降伏となる。日支事変、そして真珠湾攻撃により始まった長い戦争は幕を閉じました。

ふり返ってみれば、私たち老人は幾多の戦争、天災に出合い、それらの災害をのり越えてよくぞここまで生きられたものと、万感こもごも胸に迫り来て感慨無量です。戦没者の皆様に心から感謝し、このことを未長く子孫に伝えていかねばと思っております。

# 昭和20年5月17日、空襲による大府の街の被害

\* 全焼家屋…37世帯46棟（現在の住宅地図上に記載）  
「大府町史」では、65棟全焼と記載されている。

\* 犠牲者…3名

〔井村正則氏・鷹羽秀信氏の調査による〕



### 3. 戦中・戦後の生活

#### 1. 銃後のささえ



〈大府実践女学校報国農場〉

こども ほうこく  
報国農場って？

わたし 戦争が続くと、食糧不足になったんだ。働き手の男は、戦争に行ってしまったから、女や子どもも働いた。学校も農場を作り、食糧増産に励んだんだ。これは、今の大府小学校の裏辺りだ。

こども 子どもも大変だったんだね！

わたし 昭和13年には、国家総動員法が作られた。戦争が激しくなった昭和18年には、中学生以上の軍事教練と勤労奉仕が法律で決められ、子どもも戦争と無関係ではいられなくなった。

こども 勉強どころでなかった？

わたし 本当に、勉強どころでなかった。「ほしがりません勝つまでは」とか、「撃ちてし止まん」「1億玉碎ぎよくさい」とまでいわれた。

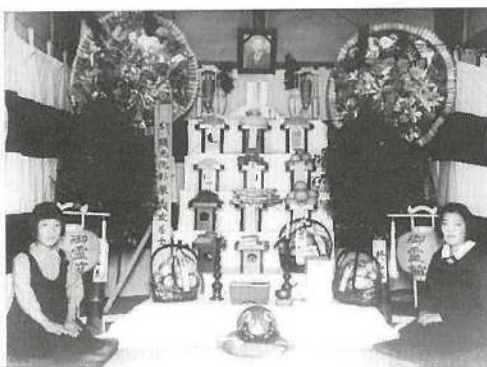
## あの<sup>つら</sup>辛く悲しい思い出

村田 静枝

戦後50年は、何と幸せな世の中でしょう。今さら、このようなことを言っても解っては頂けないでしょうか。しかし、私には、一生忘れることが出来ない、あの辛く悲しい思い出が、戦中・戦後の時期にはあったのです。

主人は、昭和17年、私と小学1年と4才の子ども2人を残し、出征して行きました。一度、伊勢まで子どもたちを連れて、面会に行ったことがありますが、やがて戦地へ行ってしまいました。そして、「ルソン・ボルネオにおいて戦死」との悲しい知らせが、昭和20年1月15日に来たのです。間違いではないかと、何度も何度も確かめました。そして、一時は放心状態でした。こんな辛く悲しいことはありませんでした。

やがて、遺骨を受取りに<sup>かくおうざん</sup>覚王山の<sup>にったいじ</sup>日泰寺まで行きました。白木の箱の中には、名前を書いた木片が入っていただけでした。近所の方々の助けを借りて、何とか葬式を済ませることが出来ました。しかし、これからどう生きていこうかと途方に暮れました。気を取り直し、まず子どものことを思い、今後、いかに暮らしていくのかを考えました。そのうちに終戦となり、会社へ勤めに出ることになりました。しかし、毎日働いても、ろくに食べることも出来ません。少しの配給も並んで買わねばなりませんでした。<sup>ぞうすい</sup>雑炊・<sup>だんごじる</sup>団子汁・芋づるや



〈葬式の時の写真〉

姉の房枝9才、妹の和恵7才でした。



〈出征の時の記念写真〉

武運長久の書きも空しく  
帰らぬ人になりました。

よもぎの葉など、食べれるものは何でも口にしました。子どもたちの弁当は、さつま芋を蒸した物でした。それも毎日持って行けませんでした。弁当も持たせれない。弁当の時間には、子どもたちはどうしていたのでしょうか。「外で遊んでいる。」と言っはいましたが、親として、こんな辛く悲しいことはありませんでした。でも、自分たちだけがこのような生活ではありません。どこ

の家も同じようなことだったので、何とか我慢できたのだと思います。

戦後50年を経て、今は、本当に有難い世の中だと思っています。この戦後の50年の間には、辛く悲しいこと、苦しいことが数多くありました。多くの人が、犠牲になってくださり、現在があるものと思っています。今では、子どもたちも社会人となり、孫も出来ました。私は、良いおばあちゃんに居たいと願っております。現在は、本当に幸せで喜んでいます。子どもたちや孫には、こんな辛く悲しい思いはさせたくありません。

## 町 葬



〈昭和14年7月23日、大府第一尋常高等小学校の運動場で行われた町葬〉

町葬は、当日の合祀者が、他字の戦死者と併葬される場合は、大府小学校。吉田地区の人のみの場合は、吉田小学校で行われた。当日は、早朝、喪家を村人の見送る中出発して、会場まで悲しみの行進がなされ、会場祭壇に遺霊を安置して開式となる。葬儀委員長を務める町長の式文に始まって、各界代表による弔辞が延々と続いた。

また、葬儀は校庭で行われ、参加者は小学生始め青年団、国防婦人会、消防団、一般と各層の人たちで、小学校の校庭が埋めつくされた。かくて町葬は終了するが、当時は花らしい花もなく、在郷軍人会を始め、各界から送られる生花は、太い猛宗竹に十字型の台がつけられ、ちらさぎの枝葉を中心にしきびをあしらって、ろうそくの火の形に大きく盛られ、戦中といえども人々の真心込めた生花が列をなした。

しかし、この町葬も、戦況捗々しくなくなった昭和20年に入って、空襲の影響を受け、執り行なうこともできないような状況となった。8月15日、思いも寄らぬ戦争終結となり、間もなく、戦死公報の入っていた人たちの遺霊の帰還を待つこともなく、合同葬が執り行なわれた。これも、敗戦という過酷な条件の中、占領政策の方向も分からない時になし得た、唯一の方法であったのであろう。 〈伴 武量著『文集』より〉

## 節目を大切に

伴 米 子

大きな「節目」の戦後50年、この間、私には繰り返し言いたいことがある。日本中のどこかに私と同じ運命をたどった人がいるだろうか。それは昭和14年4月、結婚式の朝、夫となる人へ赤紙召集が入ったのだ。静岡県三島で即席の兵士に仕立てられた。すぐ外地へ出発の日、駅で一針ずつ頂いた千人針を渡すべく目の色変えて今や遅しと列車を待った。窓は同じ軍帽の顔々々…名を呼ばれ飛んで行く。2分の停車で包みを渡し、手を握る間もなく時間は容赦なく二人を引き離れた。

戦地に上陸した兵士は、南支（中国南部）での戦いが始まった。食糧不足から草や木もトカゲも食べながら、栄養失調で戦えなくなって野戦病院へ入る。そしてまた戦闘はつづく。マラリア熱にかかり満2年の野戦から帰還した。しかし、熱病のため寝たり起きたりの幾月間、生々しい軍隊手帳の戦跡に涙をこぼしていた。そして、身ごもりながら夫に先立たれた私は、やがて女子を生んだ。名前は夫が言い残した名だ。

義弟が二人いた。不要になった私は、親類から「子どもはこちらで育てる。お前さ、若いに再婚したら。」と言われたが、子どもは手放さぬと心に決めていた。折から戦いは激しくなり、義弟は中支（中国中部）へ、つづいて末弟も北支（中国北部）へ出征した。やがて、一人はビルマで敵戦車めがけて壮烈な戦死。末弟をこの家の後継ぎにと待っていたのに、北支で戦死の知らせだった。落胆した年老いた両親は見るに忍びなかった。これほど気の毒な親がこの他にいたら話をしたい。とかく、他人のことは聴いてもその場限りが多い。このショックは到底計り知っては貰えない。けれど、両親は力強く立ちなおり、至らぬ私をこの家に置いてくださり、女の子は「一粒種よ！」と手の玉のごとく可愛がって育ててくれた。

戦いは日増しに激しさを加えた。婦人は竹槍訓練を受けたが、こんなことで戦争に勝てるかと思っていた。地下に防空壕を掘り、畑で仕事をしていた時、裏山の飛行場の格納庫めがけて敵機は弾を乱射し、逃げ惑う人々にも弾を浴びせかけた。夜は電灯に黒い布をかけて、灯火が外に漏れぬように気をつけた。ガラスには紙を張り爆風防備をした。百姓をしながらも、米は強制的に供出さ

せられ、親類に頼まれても分けられない程苦しい食糧事情の毎日で、嫁入り道具を物々交換もした。タンポポやよもぎは上等食で野草や芋づるまで食べた。

今思えば惜しい家宝の数々、はては仏具まで強制的に供出となるようでは、とても無理な戦争だったと思った。20年8月15日、玉音放送を聴いた。「日本は戦争に負けたぞ！」誰かが大声で言っていた。「敗戦」。信じられない。とにかく涙がとめどなく流れた。しかし、言い知れぬ安堵感と虚脱感。そして、混乱と失意の中にいた。

放心状態で畑へいったとき、土手に紫の桔梗の花が目に入ってきた。花好きな私は、群生していた花を一握り折り帰宅した。わが家の庭にはくちなしの木があり、白い清楚な花を咲かせていた。以来、私は白と紫の花がますます好きになった。忘れ得ぬ花、白いくちなしと紫の桔梗は、私の一人の花言葉として平和の花としている。

夫は、護国神社へ祀ってもらえない。戦争犠牲者の内で欠格者扱いの沙汰があった。もう何年も前に資金3000円を出したが、何の話もない。死んだ者損とは、余りにも酷な言葉である。

非常に出来の良かった姑が、床に臥せる日が多くなった。何とか元気になってほしいと家族で相談し、一人娘は学校の帰りに毎日口合う物を調べてきた。その日暮らしのわが家では、とても派手なことだと身内に言われながらも介護の万全を期さねばと看護婦を頼んだ。職業柄とはいえ見事な介護に目を見張り多くを学ばせていただいた。とても優しく最後まで見守ってくださった。しかし、看護婦はレベルが高く、一通りの指導をすると後は私たちには出来ぬ注射等のみをした。続いて義父も病み床についたが、介護には及ばずながら困らなかった。しかし、いくら惜しい人でも寿命尽きれば、人は誰でも逝かねばならない。義父も惜しまれながら亡くなってしまった。

農業の下手な私は、思い切ってヘルパーを志した。昭和45年3月のことである。大府町初の老人家庭奉仕員として採用された。以後15年、その道一筋に歩み、幾人もの別れに立ち合った。その中に、忘却できぬ優雅な人がいた。京都出身の一人暮らしの婦人であった。短歌、生け花と趣味もピッタリ、奉仕の後、時を忘れ話し合った。私が脳梗塞を起こして退職した後も、娘が老人ホームを訪問していたが、つい先日亡くなるまでお付き合いをさせていただいた。

私は、明日をも知れぬ老いぼれとなり車椅子生活である。市にも大変お世話

になった。昔は人を助けたが、今は助けられ感謝の毎日である。50年前、あのような悲惨なことがあったんだと語り伝えたい。そして二度と戦争の起きない世界平和をひたすら祈る。

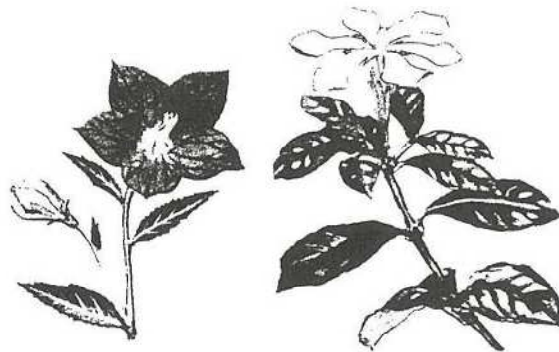
そして、遺骨箱に石ころ一つの戦死者を、今でも「オイ！ただいま！」という声が聞こえてこないかと待っている。

### 遺 骨 迎 え

武運つたなく、戦華に散った軍人の悲報を伝えるのが戦死公報であった。一片の赤紙によって、家族も家も省みることなく、戦場に赴いた軍人たちの家族へ、ある日突然、町吏さんによって届けられるのが、この悲しみの公報である。我が子、我が夫の無事を祈り続け、銃後の守りに精魂の限りを尽くしているのに、何の前触れもなく戦死を告げる無情の公報は、家族にとって、例え様のない大きなショックであったことであろう。戦死公報を受け、悲嘆にくれる家族を励ます隣人愛は、戦時なるが故に耐えられた悲しみの場面であった。

あの日「一意専心、軍務に精励します」と力強い挨拶を残し、歓呼の声に送られ、勇躍征途についた若者が、むなしくも白布につつまれた白木の柩に収められて、故郷へ無言の帰還。凱旋、名誉の戦死と褒めたたえられたが、青春の喜びを投げ捨てて、非情な戦場の強者に化身して勝利を信じながらも、虚しく戦場の露と消え去った我が子、愛する夫の無念さを思えば、家族にとっていたたまれない悲嘆のどん底に追いやられた感一杯であったことであろう。駅頭に立った戦友の胸に抱かれた白木の箱を目にする時、迎える人達は、皆ただ悲しみに明け暮れ、すすり泣く遺族の姿に投げかける言葉もなく、黙々とするのみであった。駅から故郷の吉田まで悲しみの行進がなされ、村はずれまで迎えに出た小学生・並み居る村人たちも、瞬時にして悲しみに包まれるのであった。行進は学校まで続き、校庭で慰霊祭が挙行され、初めて我が家への無言の帰還であった。また、通夜には、各界各層の人たちの弔問があり、多くの村人による融通三編の念仏唱和など、町葬が執り行なわれるまで連夜にわたって行われたのである。

〈伴 武量著『文集』より〉



# おみやげ

伴 久代

当時、私は3歳の幼女。叔父は、最後まで私に楽しみを残してくれた。今でも、はっきり目に浮かぶ。狭いわが家の玄関先で大勢の人に囲まれた中で、一人だけカーキ色の軍服を着た叔父が背筋を伸ばし、皆さんに挨拶をしていた。私は少し離れた所で母にしがみついて眺めていた。すると突然、叔父がくりとこちらを向いて、まっすぐに私の所まで来て、「おみやげを買って来るからね！お利口にして待っているんだよ！」と。この言葉は「ワイ！」と大声を上げたいほどうれしかったが、周囲の状況から喜びの声は出せず、ただうなずくのが精一杯だった。



叔父は父の弟です。父は、私が母のお腹にいる時に亡くなったので、叔父が私を可愛がってくれた。お風呂上がりに「おへそ取っちゃうぞ！」と追いかけて家中走り回ったりもした。そんな叔父だったから、「おみやげ」がどんなに楽しみだったことか。残った家族は祖父母に母と私だけになった。

ある日、祖父が仏壇の前で小さな封筒のような物を手にして「こんなもの、遺骨じゃないわなあ…」と。「叔父さんは？遺骨って？」といていたそうです。いつまでも諦められなく、ひょっこり帰って来るのではと、祖母が待っていたのを覚えている。戦場に送る家族の気持ちが、どんなに辛いことか知る由もない。密かに「おみやげ」を待っていた自分が情けなくなる。

はや、戦後50年。私も2男1女に恵まれたが、今お国のために息子を出せと言われたらと思うとき、当時の人々の心情が理解できるような気がする。死を覚悟しての出発の時、叔父は小さな私に「おみやげ」の言葉を残してくれた。暗灰色の時代の中にあっても、小さな望みを与える思いやりを教えてくださいました。

## 戦争の悲惨さ

鈴木久子

昭和19年12月生まれの次男は、生まれる早々、裏庭に造った防空壕<sup>ぼうくうごう</sup>の中での生活でした。当時、主人は名古屋市熱田区の愛知時計電気KK・軍需工場の技術者で、海軍関係の仕事に従事していました。3日に1度くらいの帰宅、たまたま防空壕の中をのぞいて「大丈夫か、ここにいたのでは子どもは育たない。早く疎開<sup>そかい</sup>した方がいいな。親は子のために犠牲になるものだ。」と言う。当時、1歳半と生後1ヵ月の2児を連れ、昭和20年1月上旬、母に付き添われ、子どもを一人ずつおんぶ<sup>くじょうはちまん</sup>して、郡上八幡へ疎開しました。

雪の深い郡上八幡は、毎日のように雪に見舞われ、生野菜などは店頭にはなく地下貯蔵でした。主食などを得るには、私の衣類が生活の資源でした。乳児の粉乳も月に一缶の配給、あとはほとんど、わずかなお米を水につけておき、小鉢<sup>のりじょう</sup>ですって水を加えて煮て糊状にし、うすめて少量の砂糖で味をつけ、それが授乳の代用でした。

来る日も来る日も雪降り、軒下を流れる溝の氷を割り、おむつを洗い、家の中で炭火で乾かす。物を洗うにも家には井戸もなく、近くの共同の井戸<sup>やかた</sup>館まで、バケツを下げて水汲みに行く。そうこうしている内に、郡上八幡にも夏が訪れました。

昭和20年6月9日午前9時頃、変な警報が入りました。空襲警報、続いて解除、またすぐ空襲警報。何だろうと思っていました。その内に、名古屋の愛知時計はB29の集中攻撃を受け、会社は全焼、死者多数、主人も会社とともに爆死、との知らせが来ました。



〈送られてきた遺品のバックル〉

栄養もとれず、栄養失調になりかけた次男に、医者は「母乳でなければ回復の見込みがありません。」と言う。近くに赤ちゃんを亡くされた方のあることを聞き、1日に4～5回ほど授乳していただきました。お陰で、徐々に回復に向かい、生命を取り止めることが出来ました。「地獄で仏に遭<sup>あ</sup>う。」とは、このことでしょうか。感謝の念で一杯でした。主人を失い、また、子どもの命さえ救<sup>ひつぜつ</sup>うことが出来ないかと、その時の心境は、筆舌では現すことは出来ません。

8月15日、次男をおんぶしての医者からの帰り道、電気屋の前の人だけに足を止めました。丁度、天皇陛下の玉音放送ぎょくおんの途中でした。玉音を拝聴し、終戦・戦争に負けたことを知り、ただ茫然ぼうぜんとしてしまいました。その後、いろいろなデマが飛び「男の子は、みんな連れて行かれてしまうそうなの。」とか。私も幼児2人とも男子なので、何としても離してはならないと思いました。

8月下旬、主人の白木の箱（遺骨）が、郡上に届きました。ささやかな葬儀をすませ、9月下旬に父のいる蒲郡がまごおりに引き上げました。収入は無く、わずかの貯金と配給米では、また、毎日が竹の子生活の明け暮れでした。父が田舎で物々交換して、1升の小麦を得て、それを粉にしてもらい、パン屋でコッペパンに焼いていただき、子どもに与えるのが精一杯でした。

戦没時、主人は34歳、私は28歳で、主人の勤続年数11年、退職金が翌年2万4千円ほど送られてきました。このお金には手はつけられない。せめて子どもたちの学資金にと貯金しました。しかし、貨幣価値は変わり、預金封鎖になって、自分のお金すら自由に引き出すことが出来ませんでした。

家には収入は得られない。何をしようと考えている時、学校の先生が足りないことを聞き、父の勧めもあって、教員の試験を受けることを決心しました。23年4月、適格確認書が届き、近くの小学校ほうしよくへ奉職することになりました。

しかし、戦前の高女卒の私、単位が足りませんので助教諭、教諭になるためには、相当の単位が必要でした。就職は出来たものの、それからというもの大学の通信教育、学大の単位習得試験、認定講習、土・日や夏・冬の長期休暇中に行う講習会、休みという休みはほとんど返上、私の戦争でした。やっと教諭の資格を得て、定年まで勤め、さらに、産休補充教員として65歳まで勤めさせていただきました。

その間、教職にあっても、自分の子どもの勉強まで手が回りませんでした。逆に、手助けしてもらったことも忘れられません。父の顔を知らない遺児2人とも、大学を卒業し、それぞれの道を歩いて、今年の暮れには、長男は52歳、次男は51歳になります。今こうしてペンを走らせていますと、無我夢中で走り続けて、走馬燈そうまとうのように半世紀が過ぎてしまったような気がします。

有望な、あの賢い若い人たちが、戦争により無残にも散ってしまい、本当に残念に思います。戦争の傷跡は永遠に消えません。世界中の一人一人が正しい考えを持ち、二度と戦争の悲惨ひさんを味わってはならない。平和な世界を皆さんで築いていただきたいと願っています。

## 50年の歩み

渡辺 志げる

子どもは手元に、嫁に出すまでは外に出さない。そんな親の心に背き、私は家を出たのです。学校の先生が父母に会い、私の性格なら向いている道と勧めてくれた。それに、国費で養成される日赤なら、義務もつくけれど、自費制度の総合病院附属看護婦学校というので、やっと、父のみが許してくれ入学となった。母は、女としての修行が出来ないとあくまで反対。でも、私はそれも身につけてみせると、茶華道・料理・和裁・洋裁・習字・琴・三味線、出来ることは何でも、母への意地もあり、お稽古は休まず続ける。看護学は言うまでもなく、見るもの聞くもの教わること、全て新鮮で充実した日々。何よりも恵まれたことは、それぞれの先生方が皆素晴らしい。我が青春は、何一つ悔い事の無い幸せいっぱい毎日の毎日。何時までもこうしていきたいのに、母に強く叱られてお見合い。名古屋人と結婚。その幸せな生活は、1年と9か月。生まれた子どもが78日目の昭和17年3月、打ち砕かれた。夫は出征。秘密部隊なので、ただ一人、私が鶴舞電停前で見送った。それが、最後の別れになろうとは……

その後、別に住む主人の家は、36発束ねの焼夷弾がそのまま2階に落ちてたちまち火の海。私は、鶴舞公園の南の町に借家住まいでしたが、高射砲の陣地めがけて、B29の攻撃は昼も夜も。当時は、地震と交互で、近くの歯医者の先生が、メリヤスシャツにモモ引き姿で夜中に飛び出して「えらい世の中じゃのう！ 上からと下からと！」と叫びながら、桜の幹にしがみついておられた姿が目につかぶ。

夜の空襲は、まず、照明弾により昼より明るくなり、焼夷弾・爆弾と次々に。子どもは防空壕に、大人は消火に必死で走り回る。

36発一束の焼夷弾は、地に落ちるまでに1坪に1本の割に分かれ、20cmか30cm地に広がり、花火のように火を噴き出す。すかさず、



〈空襲で廃墟となった名古屋中心部〉

昭和21年8月

その火柱に砂をかけ、スコップの背で強くパンパンとたたくと消える。そんな繰り返し。戦火の煙に、苦しまぎれにグランド横の電話ボックスに逃げ込み、死を免れた時のことでもあります。上前津あたりの空襲でそれはひどく、鶴舞公園の図書館の横には、遺体が山積み。引き取り手もなく、何日か経ってから、何処かに処理されたらしい。その悲惨さは、とても筆舌には表現できません。

戦火はいよいよ激しく、出征家族は早く疎開をと、下呂より4里山奥、そして、さらに1里山に登り、東白川村神戸に疎開。食糧輸送はきかないが、名古屋よりはまし。ワラビ・ゼンマイ・竹の子・カボチャ・野菜は少しは山で採れるので、何とかやりくり生活。山には空襲は来ないけど、夜の名古屋の空は赤く、攻撃の様子は遠く響き渡り不気味。

そんな20年8月15日昼、天皇陛下がラジオで国民に終戦を告げられる。その時に、主人の父母の元に、夫の戦死公報が。1日遅れて、私のところに届く。敗戦の惨めさ、この悲しい知らせに、この世に神も仏もなきものかと、悲嘆に暮れ、何も手につかない日々が幾日か。可愛い子どもがいるゆえに、心を取り戻し「子どもは立派に育てます。お父様どうぞご安心下さい。」と深い思いを心に誓い、病院に勤務するようになりました。

看護業務は厳しいけれど、私は、生徒の頃より外科が好きで、主に手術患者さんの相手。命をかけての仕事だけに、心の休まる時は一時もないけれど、それだけにやりがいもある。忙しさに追われ、ただただ夢中で働く。ナースの皆様や若いドクターが、代わる代わる子どもを遊んでくれ有り難く思う。こうして、多くの人々に支えられて、子どもが成人式を迎えた時ほど、充実した喜びを感じたことはありません。

母には何時も、悪いことや人に迷惑をかけてはいけない。学校も仕事も休んではいけない。良いこと悪いことは、背中合わせ。「苦あれば楽あり」と聞かされ励まされました。その言葉は、今でも時々私の心に迫る。

そんな母は、93歳で世を去る4～5日前も「この人には病気はなく、治療することはない。」と、ドクターに言われ、静かに世を去った。母の教えを守り、戦後のあの激動の世を精一杯誠実に、30年間1日も欠勤せず、母子共健康で過ごせれたことは、最大の幸せと喜び。これからは、人とのふれあいを大切に、母のように病気もボケもなく、残る人生を送りたいと祈るのみです。

# すぎ来し人生

中嶋たき

終戦50年と一口に言うなれど、過ぎし日のこもごもを偲ぶ時、実に長き道程であったと思う。昭和20年8月15日、昭和天皇御自ら、終戦を放送されました。あの御声こそが、今もって耳に残る。あれから50年、よくぞ今日まで生きて来たものと、感慨無量の胸の内です。

私の主人は、19年5月召集令状を頂き出征。家には1月に生まれた赤子2人に長男・長女。その後、子どもが大病。赤子の一人は看病のかいなく死亡。長男も毎日病院通い。長女は実家に預け、専ら私は看病。地震と空襲、夜は星空を眺め家の外にて寝る。

B29、名古屋に爆弾投下。空は真っ赤に燃えるような凄さ、共和に爆弾投下された時の凄さも忘れられない。戦雲いよいよ激しく、広島・長崎と原爆。田舎とて、明日をも知れぬ命の中、竹槍の練習に一生懸命励みました。しかし、8月15日終戦。やれやれ終わった負けた。何のための悔しさ悲しさ、いい様のない思いをした国民。でも、私には一つの希望がありました。主人が帰って来る。そういう思いで、毎日を待ちました。

やっと帰って来ました。白木の箱でした。私はその箱を見た瞬間、脳裏に走ったのは、人様は帰って見えるのに、何故、ただ、その何故だけの思いで、涙も出ませんでした。

それからが私の戦争の始まり。実家では、伊勢に帰るようにと勧めましたが、主人が出征したこの地こそ、私たち親子の住む所と決心。親子4人、細くとも太き絆で結び合い、生きて行こうと決心しました。されど、働くにも子どもは幼い。でも、心の支えは、ただただ子どもの成長あるのみ。でも、すり鉢の底の生活、子どもに、お腹一杯食べさせてやれない悲しさ。戦争は終わったというのに、何故。いっそのこと、母子で主人の元へと思う夜の悲しさが、幾夜ありましたことか。子どもの寝顔を見ては、また思い直し、幼子を抱いて、泣き暮れる夜が続きました私。

それから、学校給食が始まり、お世話くださる方があり、勤めさせて頂くことになりました。親子そろって校門をくぐり、母は調理場、子は教室、末っ子は外で遊ぶ。苦しい中にも、朝はお天道様、夜はお月様を拝むことの出来る、

心のゆとりも出てきました。生活はまだまだ厳しく、夜は編み物や絞<sup>しぼ</sup>り結び、生活の足しにと、近所の友達と遅くまで仕事をしました。

初めて遺族年金を頂いた時の嬉しかったこと。子どもに、あれもこれも買ってやろうと心はずみました。それから、年毎に頂く年金も増し、本当に助かりました。この頃、私の心も落ち着き、給食作りに専念する毎日。あの子この子の顔を<sup>また</sup>に思い浮かべ、一人でも残すことのないよう、おいしい給食をと、毎日毎日楽しく勤めました。

そのうち、長男は高校を卒業し、社会人。長女・次男も兄を見習い成長。私も生まれながらの楽道家となり、世の中の<sup>すさ</sup>凄まじき発展とともに、勤めに励みました。時追う日々、時成りて長男結婚。その日こそ、私の最大の喜びの日でした。また、その日こそ、亡き人に<sup>わ</sup>詫びる私でした。<sup>ぶつだん</sup>仏壇の前に座り「あの時は、本当に<sup>あなた</sup>貴方を<sup>うら</sup>恨みました。また、私は残されし子を成長させねばと、苦勞もしましたけれど、こんな良き日を神様から頂きました。あの子もこの子も天を仰ぎ、人様にも、まともに挨拶できるまでに成長しました。子<sup>ぼんのう</sup>煩悩であった貴方に、今の子どもの姿を一目でも見て貰えたらと思います。」と真心から話しました。

これと言うのも、あの苦しい時、ご厚情を頂いた世間の皆様のお陰と感謝する私。これからは、少しは楽になります。これまで頂いたお情けを、これから、私なりに社会の一切れの<sup>こまふ</sup>駒布ともなり、お返し致したいと誓いました。しかし、今もって、ご恩返しの出来ない自分を恥じています。

二度と繰り返してはならない戦争とともに、今日ある日本。また、国の繁栄を思う時、忘れてはならない<sup>えいれい</sup>諸英霊。お国のためと<sup>ささ</sup>捧げられし、尊き命こそが<sup>いしずえ</sup>礎となり、今日の幸せがあります。生きとし生ける<sup>みたま</sup>御霊安かれと祈るのみであります。

## 学校給食

戦後の学校教育の中で、画期的な事柄の一つに学校給食がある。第二次世界大戦後の国内は、食糧事情が極めて悪くなっていた。そのため、弁当持参ができないため、午前中授業も多かった。愛知県においては、昭和22年1月、愛知県学校給食実施要項ができ、同年4月には、市制地域の小学校に、米軍用缶詰が放出され、補助給食が開始された。

当時の大府町では、現在の吉田小学校が昭和21年度から、捕食の給食を開始したという記録が残っている。

給食内容については明確ではないが、22年秋に、米国援助の脱脂粉乳の配給、23年には、ユニセフ寄贈の脱脂粉乳による給食、そして、パン・ミルク・副食の三種による完全給食は、米国政府贈与の小麦をもって25年より開始された。

学校給食は、児童の体位向上に大きく貢献し、食生活を大きく変えることになった。

# 大東亜戦争銃後の体験記

伴 ちゑ子

## 開戦と出征

昭和16年12月8日 太平洋戦争開戦、日本軍が真珠湾攻撃<sup>しんじゅわんこうげき</sup>で戦果をおさめたとのニュースがラジオで報道された。

毎日、ラジオは、「東海軍管区情報」を流し、戦果を伝えていた。

2歳ころから長男は「とうかいぐんかんくじょうほう、とうかいぐんかんくじょうほう…」と、よくつぶやいていた。

昭和17年1月、召集令状<sup>しょうしゅうれいじょう</sup>を受領し、夫が名古屋師団指令部11連隊へ入隊することになった。入隊を伝え聞いた親戚<sup>しんせき</sup>、知人たちが、我が家に集まり写真を撮るなどし、祝った。そして歓呼<sup>かんこ</sup>の声で送られて、大府駅から、名古屋11連隊に向かった。二度程面会が許され、その折り、北支那派遣軍野砲兵<sup>しなやほうやほう</sup>として、出征することを知った。当時、夫30歳、私22歳、母58歳、妹17歳、長男10か月だった。



中国にて



親戚がそろっての出征祝



出征記念(夫)

## 大府への空襲

昭和20年5月になると、戦雲急を告げ、大府の町も焼夷弾<sup>しょういだん</sup>の空襲を受けた。大府駅沿線を目標にしたと思われるが、少しそれて熱田社、南島(現朝日町)周辺に投下された。当時、家が駅に近い<sup>くうしゅう</sup>ため、空襲の恐れがあった。それを避ける為に熱田社近くの知人の家にながしかの物を預か<sup>あず</sup>ってもらっていた。それは、長持ちとその中に衣料、薬、革靴、客用ふとんなどであった。しかし、予想に反して熱田社付近が空襲に遭<sup>あ</sup>い、預か<sup>あず</sup>ってもらっていた家の焼失と共に燃えたのが惜<sup>お</sup>しまれる。黒焦げになったものの臭いが生々しく記憶に残っている。

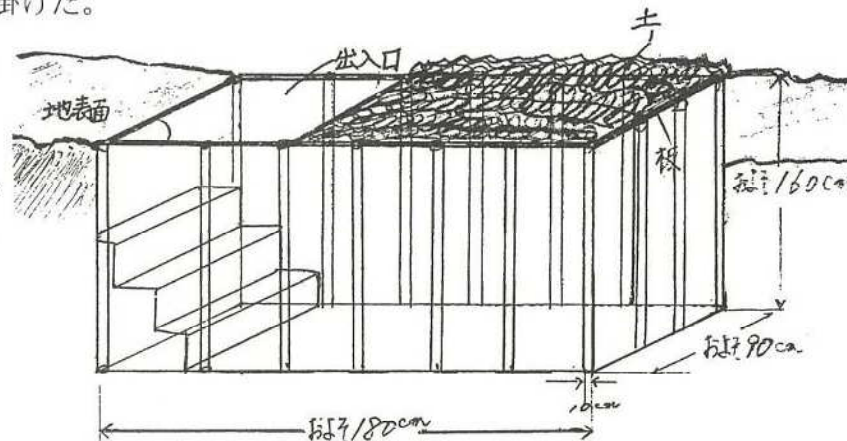
空襲後、救護所に生後3か月位の赤ちゃんももと太腿ももに直撃を受けた重傷の女性がご主人に付き添われて運ばれてきた。その女性はももの皮膚の糜爛びらんした状態が今も目に焼き付いて離れない。また、生後3か月の赤ちゃんは、かわいそうに命が絶え、亡骸なきがらとなつての帰宅となつた。

### 防空壕を造る

B29の来襲が頻繁ひんぱんになつてきた。昭和19年頃、隣人の親戚の人（50年配の男の人）に頼んで家の裏に土地を借り、壕ごうを掘ってもらつた。知人から、柵山から切り出した松の木を分けてもらい、リヤカーで運搬した。初めての作業で苦勞した。壕は、地面を掘り、譲り受けた松の木で直径10cmくらいの柱をたて、その上に板をかぶせ、その上に土を厚くかけ完成した。天井の板の一部分が動かせるようにして、出入り口とした。広さは、畳一畳分位たたみだった。高さは、160cm位だった。雨水は壕の中には、あまり入らなかつた。（カット参照）

ある日、母は買い出しで不在、私は女子警防団へということで、3歳の子供を一人残して出掛けた。

帰宅してみると子供は壕の入り口で佇たたずんでいた。万一壕に直撃を受けていたらと思うと、ぞつとした。



### 供出

貴金属きやうしゆつの供出の要請があつた。金火鉢かなひぼち、かんざし、指輪ゆびわ、仏壇ぶつだんの中の仏具、アクセサリー等をすべて供出した。戦争が、早く終わってくれればよいと思ひ協力した。

また、軍馬えさの餌にする為に、枯れ草の供出もした。大府新田の堤防で母と二人で草を刈り天日で干し、乾燥させてリヤカーに積んで、供出をした。集荷場は、当時の大府町役場北にあつたたばこ集荷場（現大府公民館付近）であつた。

# 私の脳裏に残る 昭和17年に別れた父

浜島房子

私の戦争体験は、父が出征して行った、昭和17年2月から始まりました。「勝って来るぞと勇ましく」の軍歌と、小さな日の丸の旗をふる村人たちに送られて、大府駅まで歩いて行きました。

その年の4月、外地派遣になるからと、最後の面会に出かけました。当時、小学校5年生になったばかりの私、2年生の妹、そして、3歳の妹と母の4人で、名古屋へ行きました。幼い妹たちは、何も分からず、ただ汽車に乗れることが嬉しく、とても喜んでいたことを覚えています。この時が、父との最後の別れとなりました。



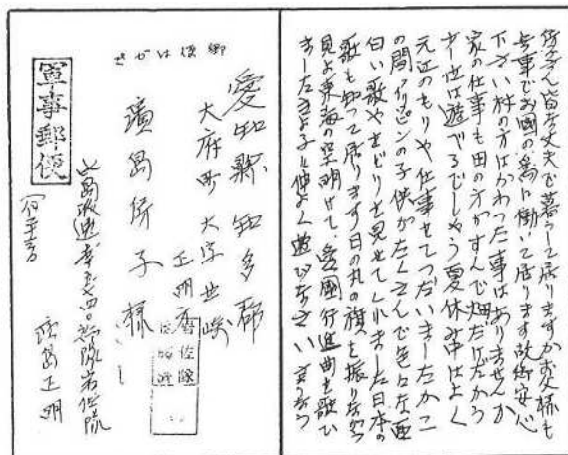
〈出征の時家族と共に、左端が私〉

母は、神経痛の持病がありましたので、農業の仕事がきつく、私たちも、この頃から、よく家の仕事を手伝いました。近所の方々に助けられて、何とか農業を続けることが出来ました。

父は、フィリピンに派遣されて行きました。昭和17年、18年の初め頃は、日本も勢力が強く、攻めの戦いでした。父からの手紙もどんどん来ました。私も、手紙とともに学校で書いた習字や図画の作品を送りました。そんな時の、父からの手紙は、本当に嬉しく楽しみに読みました。今も何通かは、私の宝物

として保存しています。父は、妹たちには、それぞれ年齢に合った、ひらがなばかりの手紙やカタカナばかりの手紙をくれました。だんだん戦争も激しくなってきた19年頃には、手紙もほとんど来なくなってきました。

こんな頃、日本でも空襲を受けるようになりました。20年を迎えた頃は、ますます激しくなり、父の消息は、何も分



〈フィリピンから来た父からの手紙〉

からなくなりました。当時、刈谷高女の学生であった私ですが、学校の中に、工場の機械を持ち込んでの勤労学生でした。兵隊さんの持つ、軍刀の一部を造

っていたと思います。学校の運動場は開墾し、さつまいもを作って、食事の代用食としていました。空襲警報が出されると、学校の近くの知り合いの家に避難させていただき、防空壕へ入れていただきました。

こんな生活をしている時に、昭和20年8月15日の終戦の日を迎えました。多くの人たちが、家や家族を失いましたが、私たちの家族は、皆が無事にここまで過ぎて来ました。

終戦になりますと、すぐ出征していた人たちが、復員して来るようになります。20年も後半になりますと、外地へ行っていた人たちも、どんどん帰って来るようになります。ラジオでは、毎日「尋ね人」の時間が設けられ、復員して来た兵隊さんの名前も放送されました。私たち家族は、叔父に買ってもらったラジオにかじりついて、父の名前を求めました。母は、フィリピンから帰った人がいると聞けば、どこまでも尋ねて行って、父の消息を聞きました。しかし、何の手掛かりもありませんでした。畑仕事をして家に帰ったら、父が帰っているのではないかと、また、今晚寝ているうちに帰って来て、雨戸をたたいて私たちを起こすのではないかと、一日千秋の想いで待ちました。

こうして待っているうちに2年が過ぎました。そして、やがて帰って来た父は、白木の箱に入った小さな紙切れ1枚でした。昭和22年12月、みぞれの降る寒い日でした。今でもはっきり記憶しています。「紙切れ1枚では、父の死は信用できません。1人として、父の死を見届けた人はいないんだ。」と、自分に言い聞かせました。それから、何年も何年も待ちました。しかし、とうとうそれっきり父は、私たちの前に姿を現してくれませんでした。昭和17年に別れた父が、今もなお私の脳裏に焼き付いています。

戦後20年を過ぎた頃だったと思います。グアム島生き残り日本兵のことが報道されました。この時も、もしや父も、どこかのジャングルの中に生きているのではと、希望を持ちました。戦後50年を過ぎた今、生きていれば、もう90歳を超えている父です。

母も苦勞して、私たち姉妹を育て、61歳の若さで亡くなりました。残された私は、長女として、亡き父と母が安心して永眠できる家庭を築き、守って行かねばなりません。わが家には、今、育ち盛りの孫たちが3人もいます。この孫たちに、私のような辛い想いはさせたくありません。二度と戦争はしてはなりません。今の平和が長く続くことを願っています。

# 戦中・戦後の厳しい生活

—今は飽食・物のあふれる時代—

村 瀬 富美代

1925年（大正14年）に生を受け、4分の3世紀を生き・生かされて、2000年を迎えました。この大府の地に生まれ・育ち、後いくばくかの日々を周囲の皆様を支えられ、定められた生の日々を過ごして行きます。思えば、私の生涯のモットーは、中庸<sup>ちゅうよう</sup>を守って行くことでした。しかし、今、それとはかけ離れた数年を振り返り、おぼろとなって来た日々を思い起こして見たいと思います。

「軍国日本」との言葉に躍らされ、昭和16年、真珠湾の奇襲攻撃作戦に喜び舞い上がりました。しかし、その後、数年を経ずして、私たちの生活にも厳しい日々が訪れました。

昭和17年頃より、米や衣類などは配給となり、生活も苦しくなってきました。やがて、米に混ぜて、トウモロコシや大豆、小麦粉などが配給されるようになりました。当然、それにともない米の配給量は差し引かれました。衣類も切符制になっていましたが、戦争が激しくなると、切符があっても、欲しい品物が、ちゃんとあるというわけではなくなりました。

衣料切符の点数は年齢・性・職業の別なく、一人につき一年間で都市一〇〇点、郡部八〇点だった。以下は買うに必要な点数。	
あわせ、長じゅばん、綿入、丹前	四八點
背広、モーニング、燕尾服の三ぞろい	五〇點
国民服、学生服の上下	三二點
婦人ワンピース	二五點
海軍水着	一二點
男女学童服上下	一七點
労働作業衣、防空服	二四點
モンペ	一〇點
ワイシャツ、開きんシャツ	一二點
くつ下、くつ下カバー	二點
パンツ	四點
数きぶとん	二四點
毛布	一八點
手ぬぐい	三點
ぬい糸	一〇点

その頃、私は、勤務先の刈谷のトヨタ車体に汽車で通勤の毎日でした。しかし、列車の数は少なく、乗客は多かったので大変でした。乗客の多くは、窓より出入りしていましたが、背の低い女では、窓からは入れません。乗降口のドアも開かないので、昇降デッキの棒につかまり、刈谷から大府まで、手がしびれる思いで、ぶら下がって帰ったこともありました。

昭和20年春に、勤務先の出張命令で、焼野が原となった、名古屋の東別院裏に急造された、輸送挺身隊<sup>ていしんたい</sup>愛知支部に勤務することになりました。早朝6時に家を出て、熱田駅まで列車で、さらに、市電で東別院までの通勤でした。

家を出る時には、警報が発令されていなくても、途中で警戒警報が発令されることもありました。熱田で降りると、市電は止まっています。そして、空襲警報発令です。「あーあ、今日もまた、別院まで歩くのか。」と思った。そして、途中で防空壕<sup>ぼうくうごう</sup>に飛び込むこともたびたびありました。歩いて勤務先に着けば、10時を過ぎていました。

当時、食糧事情は、ますます厳しくなっていました。昼食に出されるのは、大豆の煎<sup>い</sup>った物に醤油をかけた一品のみでした。私は、栄養の不足からか、重度の結膜炎になり、2か月ほど休みをとりながら、眼科通いでした。私を含め3人が、そうゆう状態でしたので、全員が休むことはできず、交替でしか休むことができませんでした。

そうした中、終戦の2日前に当たる8月13日、名古屋に米軍のビラが撒かれました。「ポツダム宣言受諾<sup>じゅたく</sup>により、大日本帝国は降伏せり……」の文面の一部が、今も脳裏<sup>のうり</sup>に残っています。しかし、その時は、拾った人も、見た人も、こんな文面に躍らされては……と、丸めて捨てて、一生懸命働いたことを思い出します。

戦争が終わって、食料の配給事情はますます悪くなりました。物価も上昇し、やみが横行しました。確か東京の裁判官だったと思います。配給が遅れ食べる

配給米価格年表

年 月	価格(10キロ)	1945年 基準指数
1943 2	3.32	0.50
1945 12	6.00	1
1946 2	6.65	1.1
3	19.50	3.25
11	36.35	6.06
1947 7	99.70	16.62
11	149.60	24.93
1948 7	266.00	44.33
11	357.00	59.5
1949 4	405.00	67.5
1950 1	445.00	74.14
1952 1	515.00	85.83
8	620.00	103.33
1953 1	680.00	113.33
1954 1	765.00	127.5

1956年 総理府統計局

ものがなくても、裁判官だから、法律を破って、やみで米を買うことをよしとせず、飢えて死んだという話があったと思います。あの頃は、本当に皆が、食べることに必死の時代だったと思います。

今、私たちは、世界で有数の食品の数と味を食べて、飽食<sup>ほうしょく</sup>に浸っております。そして、ダイエットだ、痩せる薬<sup>や</sup>だと、太ってしまうことを心配しています。これは、食料のなき時代を生

き延びて来た悲しい反動なのではないでしょうか。しかし、世界には、まだまだ飢えに苦しんでいる人が沢山いるといいます。また、広い世界には、今も鉄砲の弾の飛んで来る所が、何箇所も有ります。どうして……の思いは、今だに絶えません。世界から飢えがなくなり、戦争のない平和な世界が何時来るのか……そんな時が、一日も早く来ることを願います。

# 今も鮮明に残る私の戦争体験記

酒井秀雄

また、今夜も警報が鳴り出した。子ども等を連れて裏の防空壕<sup>ぼうくうごう</sup>へ逃げ込む。  
灯火管制<sup>とうかかんせい</sup>のうす暗い穴の中で身を縮めていると、西の方からB29の爆音と  
ともに「どどん」と聞こえてくる爆弾の音、皆が体を縮めてじっとして警報の  
解除を待つのだが、その間の恐ろしいこと。こんなことが数日おきに、一体何  
時までつづくのだろう。

寿命がちぢまるとはこのことだ。

## 敵機

仕事中、何の気もなしに表の空を見上げたら、丁度右手から小型機が1機だ  
け工場の屋根すれすれに飛んで来た。そして、いきなり「ぱりぱり」と物凄い<sup>すご</sup>  
何とも言えない爆音。驚く間もなく機体はあっという間に、左の空へ隠れてし  
まった。

自分は今でも工場の屋根に敵機の車輪がすった音だと思っている。

## 詔勅<sup>しよく ちよく</sup>

戦局もいよいよ激しくなり、遂に広島に特殊爆弾がおとされた。と言われて  
も我々には何のことやらさっぱり分らない。数日後、天皇の勅語<sup>ちよくご</sup>がラジオで放  
送されるから、日本国民は皆一斉にこれを聞くようにとの軍の達しがきた。

愈<sup>いよいよ</sup>愈その時が来た。我々は一同襟<sup>えり</sup>を正してラジオの前に集まったが、肝心の  
放送は雑音ばかりでさっぱり天皇のお言葉は何一つ分らず仕舞で、次の日にな  
って敗戦の言葉だったと知る。

天佑神助<sup>ゆうしんじょ</sup>があり、神風<sup>かみかぜ</sup>を信じて居った自分たちのがっかりは何とも言えな  
い。何と言ったら良いのか言葉が出なかった。

## 終戦ノ詔書

朕深ク世界ノ大勢ト帝國ノ原状トニ鑑ミ非常ノ措置ヲ以ツテ時局ヲ收拾セムト欲シ  
茲ニ忠良ナル爾臣民ニ告グ

朕ハ帝國政府ヲシテ米英支蘇四國ニ對シ其ノ共同宣言ヲ受諾スル旨通告セシメタリ  
抑ク帝國臣民ノ康寧ヲ圖リ萬邦共榮ノ樂ヲ偕ニスルハ皇祖皇宗ノ遺範ニシテ朕ノ拳々措

措カサル所曩ニ米英二國ニ宣戰セル所以モ亦實ニ帝國ノ自存ト東亞ノ安定トヲ庶幾スルニ出テ他國ノ主權ヲ排シ領土ヲ侵スカ如キハ固ヨリ朕カ志ニアラス然ルニ交戰已ニ四歳ヲ閱シ朕カ陸海將兵ノ勇戰朕カ百僚有司ノ勵精朕カ一億衆庶ノ奉公各々最善ヲ盡セルニ拘ラス戰局必ズシモ好轉轉セス世界ノ大勢亦我ニ利アラス加之敵ハ新ニ殘虐ナル爆彈ヲ使用シテ頻ニ無辜ヲ殺傷シ慘害ノ及フ所眞ニ測ルヘカラサルニ至ル而モ尚交戰ヲ繼續セムカ終ニ我カ民族ノ滅亡ヲ將來スルノミナラス延テ人類ノ文明ヲモ破却スヘシ斯ノ如クムハ朕何ヲ以テカ億兆ノ赤子ヲ保シ皇祖皇宗ノ神靈ニ謝セムヤ是レ朕カ帝國政府ヲシテ共同宣言ニ應セシムルニ至レル所以ナリ

朕ハ帝國ト共ニ終始東亞ノ解放ニ協力セル諸盟邦ニ對シ遺憾ノ意ヲ表セサルヲ得ス帝國臣民ニシテ戰陣ニ死シ職域ニ殉シ非命ニ斃レタル者及其ノ遺族ニ想ヲ致セハ五内爲ニ裂ク且戰傷ヲ負ヒ災禍ヲ蒙リ家業ヲ失ヒタル者ノ厚生ニ至リテハ朕ノ深ク軫念スル所ナリ惟フニ今後帝國ノ受クヘキ苦難ハ固ヨリ尋常ニアラス爾臣民ノ哀情ヲ朕善ク之ヲ知ル然レトモ朕ハ時運ノ趨ク所堪ヘ難キヲ堪ヘ忍ヒ難キヲ忍ヒ以テ萬世ノ爲ニ太平ヲ開カムト欲ス

朕ハ茲ニ國體ヲ護持シ得テ忠良ナル爾臣民ノ赤誠ニ信倚シ常ニ爾臣民ト共ニ在リ若シ夫レ情ノ激スル所濫ニ事端ヲ滋クシ或ハ同胞排擠互ニ時局ヲ亂リ爲ニ大道ヲ誤リ信義ヲ世界ニ失フカ如キハ朕最モ之ヲ戒ム宜シク舉國一家子孫相伝傳ヘ確ク神州ノ不滅ヲ信シ任重クシテ道遠キヲ念ヒ總カヲ將來ノ建設ニ傾ケ道義ヲ篤クシ志操ヲ鞏クシ誓テ國體ノ精華ヲ發揚シ世界ノ進運ニ後レサラムコトヲ期スヘシ爾臣民ト共ト克ク朕カ意ヲ體セヨ

御 名 御 璽

昭和20年8月14日

内閣総理大臣男爵	鈴木 貫太郎	國 務 大 臣	下 村 宏
海 軍 大 臣	米 内 光 政	大 藏 大 臣	廣 瀬 豊 作
司 法 大 臣	松 阪 廣 政	文 部 大 臣	太 田 耕 造
陸 軍 大 臣	阿 南 惟 幾	農 商 大 臣	石 黒 忠 篤
軍 需 大 臣	豊 田 貞 次 郎	内 務 大 臣	安 倍 源 基
厚 生 大 臣	岡 田 忠 彦	外 務 大 臣 兼 大 東 亞 大 臣	東 郷 茂 徳
國 務 大 臣	櫻 井 兵 五 郎	國 務 大 臣	安 井 藤 治
國 務 大 臣	左 近 司 政 三	運 輸 大 臣	小 日 山 直 登

# 戦時体験回想記

久野 與 吉

戦前の日記・記憶をたどり、前市議会議員渡辺房枝さんの戦時の思い出の呼び掛けにより私の戦時回想について綴ってみました。

振り返れば昭和6年7月、万宝山事件を始め満州鉄道爆破など幾多の争いがきっかけにより満州事変が発生した。

以来日本は、大軍を中国に派兵して制圧し、満州国の建国を宣言し軍事大国へと歩み始めた。

そして、昭和12年7月7日盧溝橋事件で日中戦争へと拡大し、昭和13年4月国家総動員法が施行され、続いて経済統制等新体制運動を展開し戦争色が一段と濃厚となった。

その頃、国民の合い言葉の「欲しがりません、勝つまでは」は、記憶に残るところである。

中国大陸では激戦に次ぐ激戦により、戦果は大本営発表があり、幾度となく祝賀ムードに酔いしれた。昭和15年、「金鷄輝く日本の栄えある光、身に受けて」の歌とともに、国民あげて祝賀一色となっていた。

一方、日中戦争の長期化と日本軍の南方派兵等米英との対立が深まった。ついに、昭和16年12月8日真珠湾の奇襲攻撃となり、第二次世界大戦へと発展した。戦時体制下、銃後の護りと、一億国民は軍需工場で働くことになった。学校では男子は軍事教練が行われ、女子は出征兵士の千人針作りなどをした。農家は食糧増産に次ぐ増産と重責をさせられたのである。

昭和19年8月には、学徒動員の徹底強化が決定された。

その頃、B29爆撃機による本土襲来が始まり、以来数度の空襲で、主要都市や軍需産業の施設は焼け野原と瓦礫の山と化した。他方戦況は、海戦では空母4隻を失い制空権、制海権とも奪われた。昭和20年5月ドイツが無条件降伏した。本土も8月6日・9日に広島・長崎に原子爆弾が投下され、多くの犠牲者を出した。そのうえソビエト軍の参戦という事態となった。忘れもできない昭和20年8月14日、ポツダム宣言を受諾し、翌15日正午詔勅が下され、そしてアメリカ等連合国の占領下におかれるようになった。

その頃、私は備中平野の自然豊かな片田舎から昭和20年1月、戦時下の治

安維持にと愛知県警察官を拝命し、警察練習所（警察学校）に入った。基礎教育を受けながらB29の空爆のつど、被災地の警備の応援に出動した。被災地域は黒煙がもうもうと立ち込め、助けを求める人、焼夷弾の直撃を受け倒れている人、一帯は焼け野原となり、地獄とはこのことであろうと思う日々であった。

その年の3月末に警察練習所を終了し、横須賀警察署に配属された。当時の大府には新任警察官の任務とされていた召集令状の伝達をした。また、東海道本線の列車が艦載機によって襲撃された時に出動した。半田の中島航空機工場の爆撃の後、警備の応援として出動した。戦時中は物資はもちろん、食べるものさえ無い時代であり、大府は農作物の生産が盛んなため野荒らしが多かった。当時は刑法の戦時特別法で野荒らし等は厳罰が適用された。特に空襲警報中の窃盗は厳しい刑罰が課せられていた。これらの取締りは、今までに経験したことのない重労働で、よく辛抱したものだと思う。

森岡は、昭和17年に国防婦人会の竹槍訓練が行われたり、19年に八幡神社境内の雑木林の中に飛行機の破片が落ちた。大府南島では、焼夷弾落下等が記憶に残っている。終戦当日は、知多半島一帯を占領する進駐軍が入国するといううわさが流れ、不安のためか自殺者が多かった。当時私は、刑事課に配属されており、幹部と検視に出動したものだ。ここであらためてご冥福をお祈りします。

以来50年、良き上司・同僚・部下、また地域の人達の協力に恵まれ、感謝の気持ちでいっぱいである。そして、永久に戦争のない平和な社会が続くことを祈るのは、戦争を体験したものの切なる願いでもあります。

### 戦時下の国民生活年誌

戦争の重圧は一般国民の生活の上にも重くのしかかった。米麦の供出、食糧その他の配給、貯蓄や公債の割り当て、防空訓練などで、生活のすみずみまで統制されるようになった。

そのための上意下達のルートとして、都会では町内会、村では部落会が整備され、その下部組織として隣組がつけられた。

年表で主な事柄を上げてみると、次のような事柄が上げられる。

〈筑摩書房『日本の百年』より〉

- |    |   |  |     |                      |
|----|---|--|-----|----------------------|
| 45 | 7 | 主食の家庭配給量一割削減される。                       | 101 | 戦時下国民生活年誌            |
| 11 | 8 | 雑草が配給制となる。一日六本。                        | 37  | 7                    |
| 7  | 9 | 学童疎開を強制的におこなうことになる。                    | 11  | スフ服用規則施行される。         |
| 44 | 3 | 長距離旅行が制限される。                           | 38  | 6                    |
| 43 | 5 | 木炭のほかマキ、タキギも配給制となる。                    | 39  | 6                    |
| 43 | 5 | 金鼠の強制回収はじまる。                           | 6   | バーマネット廃止される。         |
| 2  | 1 | 衣料品の点数切符制度実施される。                       | 9   | 物価統制令（家賃・地代・物価等くぎづけ） |
| 42 | 1 | 食糧が通帳配給制となる。                           | 10  | 女子の常服はモンペ、男子は軍服規格の服。 |
| 41 | 4 | 六大都市で米が配給制となり大人一日二合三勺。この年のうちに全国に施行される。 | 12  | 白米の使用が禁止される。         |
| 41 | 9 | 隣組制度ができる。                              | 40  | 6                    |
| 40 | 6 | 六大都市でマッチ・砂糖が切符制となる。                    | 9   | 隣組制度ができる。            |

## 戦争と大府の発展

渡 辺 房 枝

高等女学校在学中の私たちは、軍需工場や農家への勤労奉仕をはじめ、軍事教練に明け暮れる毎日でした。特に、軍事教練の中でも、安城から今村（現新安城）・知立・有松・鳴海・八丁畷を経て、熱田神宮に至る40キロ余を夜通し歩き続ける強行軍は、とてもつらいものでした。また、当時実践女学校生や一般婦人は、校庭で竹槍の猛練習をしておりました。街かどや駅頭では、敵の弾丸銃撃を避け千里離れていても必ず生まれ故郷に帰るといわれる寅の由来にちなんで、戦地へ出征する兵隊さんに贈る「千人針」をお願いしました。町内会では、日章旗に「武運長久」を祈願しつつ名前などの寄せ書きをして、熱田社や大府駅から出征兵士を見送りました。こうして若者や壮年は戦場へ狩り出されて行きました。しかし、戦局は日増しに悪くなり、大府にも警戒警報・空襲警報のサイレンが頻繁に鳴るようになりました。19才で大府町役場に奉職



〈千人針〉

した私は、酒井鼎一町長のもとで、都市よりの疎開者を含めた15000人余の町民の生活安泰に必死でした。特に、戸籍簿や土地家屋台帳など重要書類を持って、防空壕を出入りする回数も多くなりました。

昭和19年12月7日、初冬にしては暖かい小春日和の昼下り、突如震度8といわれる東南海地震が起きました。大府の各所で道路などの地割れ被害がありました。年が明けて昭和20

年1月13日未明、ゴーッ！という地鳴りとともに震度7.1といわれる三河地震が発生しました。震源地は渥美湾で、蒲郡・形原・西尾など三河地方では、疎開先のお寺の本堂など大きな建物が倒壊して、おおぜいの人たちが犠牲となりました。余震は頻繁にあり、とても母屋へ入れる状態ではありませんでした。多くの家庭では、竹藪や地盤の固い土地に戸板やムシロやワラなどで粗末な小屋を作り、40余日寝起きする不安な毎日が続きました。ますます空襲は激しくなり、B29爆撃機が不気味な金属音をたてて通過する時は、身も心も震えながら、防空壕と小屋を行き来していました。

やがて春が近づくにつれ、超低空で機銃掃射する艦載機<sup>かんさいき</sup>におびえる日々が続きました。この頃から、もう食糧難で主食である米は激減、小麦粉・芋粉・とうもろこし粉・豆粕などを使った代用食が多くなりました。だんご汁は、その代表格です。また、芋づるやよもぎ・タンポポなどの野草は貴重なビタミン源でした。大府本町の松村豆腐店には、オカラ（うのはな）を買い求める人々で長蛇<sup>ちようだ</sup>の列ができました。

5月17日、真赤に染まった名古屋上空から、B29の1機が突然向きを変え、大府の上空に來襲し、轟音<sup>ごうおん</sup>とともに焼夷弾<sup>しょういだん</sup>を雨のように降らせました。焼夷弾<sup>さくれつ</sup>の炸裂する音とともに、熱田社や延命寺のあたりからたちまち火の手が上がりました。避難する人、被災地に向かう大府第一国民学校（現大府小学校）に駐留していた兵隊さん

などで大混乱、大変なパニックでした。夜が明けても、あちこちの被災現場では、まだ燻<sup>くすぶ</sup>っており、あたり一帯キナクサイ火



〈昔なつかしい木造校舎時代の大府小学校〉

葉の臭気がただよっておりました。死者3人、全焼家屋46棟と数多くの負傷者が出ました。急抛<sup>きゅうきょ</sup>、役場の奥（現大府公民館）にテントを設営、愛知療養所の医師と看護婦さんが懸命に診療にあたってみえました。二度と経験したくない思い出です。

名古屋空襲は、南部の工業地帯をはじめ市街地にまで及び、ますますエスカレート、風向きによっては、灰が大府各地に降って来ました。この頃、歓呼の声に送られて元気よく出征して行った若者たちの、悲しい戦死公報が届くようになりました。仕事柄、小娘の私とその家庭に連絡したりしました。過日、その英霊を町の人々や学校の生徒・児童が大府駅前通りへ出迎えに行きました。その列は、地藏庵<sup>じぞうあん</sup>の墓地の端（現カトウ薬局の南）の交差点近くにまで及びました。「故〇〇君」と白地に墨で書かれた幟<sup>のぼり</sup>に続くあの葬列の光景は、複雑な印象として脳裏にしっかりと焼きついております。

8月14日には、東海道本線刈谷・大府間で、列車が艦載機に銃撃され立往生、乗客が石ヶ瀬川の堤防の松林に逃げこみました。鮮血がしたり落ちる負傷者をトラックで刈谷の古井病院へ搬送しました。

そして、8月15日天皇陛下による玉音放送<sup>ぎょくおん</sup>で終戦。焦土と化し、混乱した

社会に新日本建設の機運が急速に高まってまいりました。大根列車に代表される農業を基幹とする大府の町は、(株)豊田自動織機製作所大府工場を軸とする工場の進出により産業経済が急速に発展し、町民のくらしも大きく変わってきました。大府工場は、昭和13年竣工、コーメンとして親しまれておりました。大府駅近くで育った私たちは、当時の国鉄官舎の前から線路下の排水路をくらながせがわ通過し、鞍流瀬川に沿った広場へよく遊びに行きました。町のイベントなどもよく行われ楽しい思い出の多い場所です。

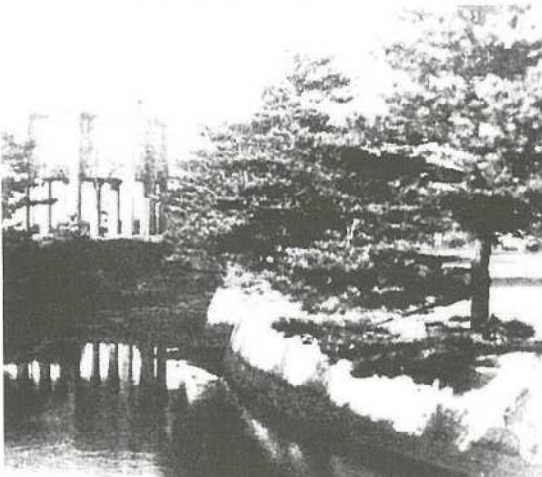
やがて共和工場が現在地へ、愛三工業株式会社本社工場が進出。山林原野とみかん山の共和の町が急速に発展することとなりました。また後に、大府飛行場の跡地6万坪には、長草工場が進出。それにともない30余社の関連工場や、住友重機械



〈豊田自動織機大府工場（昭和40年ころ）〉

工業(株)等々が相次いで操業することにより、次第に町に活気が出て来ました。これら豊田自動織機製作所とその関連企業の町への貢献度は、実に大きなものであったといわざるを得ません。長年行政に携ってきた私にとっては、感謝の念でいっぱいでありませぬ。

また同時に、大府町の黎明期に懸命に努力された斉藤義博さん、酒井鼎一町長さんをはじめ、戦後まもなく教育に尽力された公選初代の斉藤幸信町長、大府織物取締役で後に愛知県副知事として活躍された森勇さん、満州・北支・山西省等の陸軍病院や各地の野戦病院で、白衣の天使としての功績によりナイチンゲール賞を受賞された近藤とよさん、支那事変以後、陸軍衛生兵として3度応召。戦後、県議会議員2期と農業をはじめとする産業振興に寄与された鈴置理樹雄さん。後にそれ等の功績により県知事表彰などを受賞されました。それと大府家禽研究所を創立し、愛知県を全国第一の養鶏県とした功労者高橋広治さんたち先駆者の存在は、決して忘れることはできません。



〈貯水タンクと池のあったころの桃山公園〉

また、「つつじまつり」など市民の

憩いの場所となっている大倉公園や桃山公園を開いた大倉和親氏も、忘れ得ぬ一人であると思います。大倉氏は、弱冠29才で日本陶器（現在のノリタケ）の社長に就任、世界に日本の陶磁器の名を知らしめた陶業界の先駆的存在となった人です。大府でも製陶工場を建設するために土地を購入、そこを桃園として住民の目を楽しませるところとしました。そして桃の花に囲まれたこの地に別荘を建てました。現在は、大倉公園として別荘の建物と茅葺き門<sup>かやぶ</sup>が残され、市民の憩いの場として利用されております。また、大倉氏は大府ではじめて区画整理を行い、桃山丘陵のまちづくりを行いました。



〈カゴメ(株)大府工場〉

〈桃山丘陵住宅地パンフレット〉

日清・日露戦争の勝利にはからずも意を強くしたわが国は、第2次世界大戦に及んだものの、あまりにも大きな犠牲と悲しむべき大きな傷跡を残して終戦を迎えました。今思うと、よくぞ必勝の思いと神風の加護を信じていたものだと痛感しております。あの地獄絵のようなどん底生活から、現在の繁栄を誰が想像し得たことでしょうか。いうまでもなく、先人たちの並々ならぬ労苦と勤勉実直な国民性があつたればこそと思います。私たちは、二度とこのようなあやまちを繰り返してはなりません。今こそ日本の歴史や大府の過去を再認識し、今をいかに生きるべきかをよく考え、行動し、誇りある郷土を次代に継承すべくがんばらねばと思う今日この頃です。

## 戦争と流行歌

「歌は世につれ、世は歌につれ。」と言われてますが、戦争の時期には、戦争に関連する歌が流行りました。別冊朝日年鑑「早わかり20世紀年表」で、日中戦争の始まった昭和12年から、戦争の終わった昭和20年までの、主な流行歌を拾ってみました。

- 昭和12年・「露営の歌」「愛国行進曲」「青い背広で」「かもめの水兵さん」
- 昭和13年・「旅の夜風」「支那の夜」「上海だより」「満州娘」「海ゆかば」
- 昭和14年・「父よあなたは強かった」「愛馬進軍歌」「兵隊さんよありがとう」
- 昭和15年・「暁に祈る」「隣組」「蘇州夜曲」「紀元2600年」
- 昭和16年・「大政翼賛の歌」「そうだその意気」「長崎物語」「船頭さん」
- 昭和17年・「朝だ元気で」「落下傘部隊の歌」「南から南から」
- 昭和18年・「海軍航空隊の歌」「予科練の歌」「新雪」「勘太郎月夜歌」
- 昭和19年・「一億総進軍の歌」「炭坑節」「ラバウル小唄」「若鷺の歌」
- 昭和20年・「お山の杉の子」「リンゴの歌」

という具合でした。全部が戦争の歌ではありませんが、それが多くを占めています。歌詞も読んでみると、当時の雰囲気や様子も忍ばれます。

### 露営の歌

一、勝つて来るぞと 勇ましく  
誓って故郷を 出たからは  
手柄たてずに 死なれよか  
進軍ラッパ 聴くたびに  
暇に浮かぶ 旗の波

歌 中野忠晴  
松平 晃  
伊藤久男  
霧島 昇  
佐々木 重  
作詞 萩内喜一郎  
作曲 古関裕而  
編曲 奥山良吉  
伴奏 コロンビア・オーケストラ

二、土も草木も 火と燃える  
果てなき曠野 踏みわけて  
進む日の丸 鉄兜  
馬のたてがみ ながながら  
明日の生命を 誰か知る

三、弾丸もタンクも 銃剣も  
暫し露営の 草枕  
夢に出て来た 父上に  
死んで還れと 励まされ  
さめて呪むは 敵の空

四、思えば今日の 戦場に  
朱に染まって につこりと  
笑って死んだ 戦友が  
天皇陛下 万歳と  
のこした声が 忘らりよか

五、戦争する身は かねてから  
捨てる覚悟で いるものを  
鳴いてくれるな 草の虫  
東洋平和の ためならば  
なんの命が 惜しかろう

### 愛馬進軍歌

一、くにを出てから 幾月ぞ  
共に死ぬ気で この馬と  
攻めて進んだ 山や河  
執った手綱に 血が通う

二、昨日陥した トーチカで  
今日は假寝の たか軒  
馬よぐつすり 眠れたか  
明日の戦は 手強いぞ

三、弾丸の雨降る 濁流を  
お前たよりに 乗り切つて  
つとめはたした あの時  
泣いて秣を 食わしたぞ

四、慰問袋の お守りを  
掛けて戦う この粟毛  
ちりにまみれた 髭面に  
なんて懐か 顔よせて

五、伊達には佩らぬ この剣  
まっさき駆けて 突込めば  
何ともろいぞ 敵の陣  
馬よ嘶け 勝陣だ

六、お前の背に 日の丸を  
立てて入城 この凱歌  
兵に劣らぬ 天晴れの  
勲は永く 忘れぬぞ

歌 水田絃次郎  
長門美保  
作詞 久保井敏夫  
作曲 新城正一  
編曲 藤原正雄  
伴奏 キング・ダーク・オーケストラ

日中戦争が始まると、軍国歌謡と愛国流行歌が登場しました。コロンビアから発売されたA面「進軍の歌」とB面「露営の歌」のレコードは、6か月で60万枚売れた当時のベストセラーでした。特に「露営の歌」は、戦時下の国民に愛唱されました。昭和19年には、「勝利の日まで」が発売され、人々にアピールし歌われましたが、勝利の日には遂に訪れることはありませんでした。戦後最初に流行った歌は、「リンゴの歌」でした。

## 2. 総動員体制



〈中京女子大学より北方を望む（中央の上方へ伸びる道路は県道大府＝有松線／手前が大府駅方）〉

こども　これは、どこなの？

わたし　わからない？ 今の写真だよ！ 中京女子大学から梶田町六丁目の交差点<sup>こうさてん</sup>の方を写したんだ。

こども　ああ、そこのサークルKで買い物をしたことがあるよ！

わたし　昔は、この辺りには、ほとんど家もなかったんだ。そこへ、三菱の工場が<sup>みつびし</sup>疎開<sup>そかい</sup>して来たんだ。

こども　工場も疎開したの？

わたし　名古屋の工場は、<sup>くうしゅう</sup>空襲<sup>ぜんめつ</sup>で全滅状態だったから、この横根山の山の中に工場を造ったんだ。今では、当時の建物は一つもないけれど、現在の三菱の社宅やグラウンドは、当時の工場<sup>あと</sup>の跡に造られたんだ。国中が総動員体制で戦争をしようとしたんだ。

# 今は幻

—三菱「名航大府」—

廣瀬治雄

「大府に三菱重工が在った？」「そんな事、聞いた事も見た事もないよ！」

昭和16年10月17日、我が大府町と隣の上野町に跨がる知多丘陵上で、  
「三菱知多飛行場・知多組立工場」新設のための地鎮祭と起工式が、密かに執  
行された。当時のこととて、文字通りの人海戦術で、中国兵捕虜や強制連行さ  
れた朝鮮人等が、日夜、苛酷な労役に服した。それでも足りず、周辺町民や近  
隣の小学生までが動員された。大府駅から三菱専用側線が敷設され、戦後も、  
長くその跡を残していた。竣工は昭和19年4月6日、三菱待望の“自前の飛  
行場”が完成し、当日は陸軍の各務原飛行場（現航空自衛隊飛行場）から、九  
九式双発軽爆撃機とMC20型輸送機の2機が、爆音高らかに飛来し、新設の  
滑走路（長さ1360m・幅100m）に、余裕の離発着反復を披露して祝福した。

この時代、すでに戦局不利の中で、同年12月7日、突如発生の東南海地震  
（M7.9）により、当時の三菱大江工場は甚大な被害をこうむった。さらに追討  
をかけるように、同月18日私暁と午後にはB29による集中爆撃を受けて、  
壊滅的打撃を被った。これにより、大府への緊急疎開となった。工場の場所  
は、飛行場の東側の横根山地区であり、所長室を始めとする管理部門は、大府  
駅周辺の各種建物に分散配置の余儀なきに至った。



## 1. 横根山地区の部品工場

当時、この地には、鈴木バイオリン製造(株)大府分工場と日本家禽研究所が在るのみで、人家も極めて疎らな点在域であった。この二つの施設を現場関係の管理部門とし、打ち続くなだらかな丘に横穴を掘削し、半地下掩体壕方式の部品工場（一棟最高300坪）50余棟が建設された。陸軍航空本部「築地監督官事務所」もここに移った。この地域一帯への工場の展開は、次の通りであった。

その1. 有松街道の現「梶田町六丁目」交差点周辺とそれより約500m北西側の丘、現在三菱社宅ビル群の在る箇所。

その2. 上記の反対側、その東約400m、現在防護ネットが一際目立つ三菱グラウンド地区。

その3. 現在の中京女子大学・二つ池公園の南部一帯。

〈三菱重工業・名古屋航空機製作所 大府町横根山地区「部品工場」展開図〉

工場は付近の丘を掘削の半地下式木造で1棟最高300坪程の建物を主体として50余棟が構築された



これらの内、各種現場管理部門の本部を鈴木バイオリン工場と日本家禽研究所の建屋に当てたが、収まり切らず、検査課などは、研究用鶏舎も使用した。鶏舎とはいえ、軒高のある木造2階建ての立派な鶏舎で、応急に対処できた。休止中の共和駅も朝夕停車が復活し、通勤への足も確保された。

## 2. 大府駅周辺管理部門

①所長室は、平野医院の洋式住宅で、主な使用建物は以下の通りであった。

幹部室と会議室……平野医院北の堤邸（今はマンションとなった）

②庶務課……大府町役場2階（昭和33年取り壊し）

③人事課……高山組公会堂（現在も公会堂として健在）

④調査課・業務課……栄組公会堂（現在も公会堂として健在）

⑤労務課・企画課……大根切干同業組合事務所（現在、民家として使用中）

その他、各課が各所に点在していた。



①所長室（平野医院住宅棟）  
戦後、南方貨物線工事にともない姿を消した。



②庶務課事務所（大府町役場2階）



③人事課事務所（高山組公会堂）



④調査課・業務課事務所（栄組公会堂）

### 3. 飛行場と総組立工場

総組立工場は、戦後昭和27年まで、知多丘陵上で休眠していたが、現在の三菱重工業(株)名古屋航空宇宙機器製作所小牧南工場内に移築され、<sup>※</sup>第一格納庫として蘇<sup>よみがえ</sup>っている。往時は爆撃機「飛龍・キ67」の総組立工場として活躍した三千坪の格納庫様式の建物。別に整備工場として四千坪。そして、関係建屋多数が、丘陵上に軒を連ねた。<sup>※</sup>(小牧での数年間は、朝鮮戦争による米軍機B-26及びC-46の修理等の施行)

なお、飛行場関係詳図は、「大府市誌」P. 532～P. 534参照。(ただし、編集時に加筆された部分に誤記がみられるので、要注意)

また、大府地区は、陸軍機関係が、昭和20年6月より全面移転(海軍機関係は三重県下等に移転)。

1995年(H.7) → 1945年(S.20)

**現代図にその往時を重ねてみる!**

三菱重工業：名古屋航空機製作所「知多飛行場と知多組立工場」



総組立工場(昭和27年まで知多丘陵上で休眠の後、当時の新三菱名古屋製作所小牧工場に移築)



試作機「キ67」4式重爆撃機「飛龍」1号機

## 三菱の飛行機製作所の場所

中井 鉄次郎

昭和18年当初、現在の梶田町二丁目、共和病院南側の山林地内に、飛行機製作所を設置するため、国が強制的に道路を拡張して、道路を造成した経緯があります。それは、飛行機部品はんしゅつの搬出のために、道路幅が狭く、運搬ししょうに支障があると判断したからだと思います。この道路拡張工事には、地元の人も応援し、朝鮮人も多数従事した記憶があります。当時は、私たち地元の者も、容易には作業場付近に近寄ることはできませんでした。



ただ、飛行機部品を組み立てるために、山林内の各所に作業所が数箇所あったようです。それも終戦後になって、私たちに分かったことでした。（本書の『今は幻・三菱「名航大府」』広瀬治雄の項を参照）

作業所の周辺には、土囊どのおうを以て積み上げ、その中に作業小屋を築造していたようでした。そして、そこで製作したものを、今の東海市新日鉄団地東側に飛行機



〈半地下式の「航空機部品組立工場」模型〉

2000年「平和のための戦争展」に展示された高校生による立体模型愛知航空機の「瀬戸菱野地区」大府町横根山付近の三菱名航の部品組立工場も、これと類似様式で、丘陵地に50棟ほど設けられた

広瀬治雄氏 提供

機きの滑走路があったので、そこまで運搬していたものと思われます。戦地へ飛び立って役立つよう、作業員は頑張って働いたものと思うが、飛行場から製作した飛行機が飛び立ったという話は、私は、あまり聞いた記憶がありません。当時は、憲兵さんや地元の巡査さんおんが見張って居られ、私たちは、遠くから眺めていることしかできませんでした。

その後、時を経て、3年ほど前

に、名古屋の大学教授の先生方が、製作所の跡地を調査に来られ、写真を撮って行かれたことがありました。考古学の専門教授だと言って居りました。この時、私も同行し、初めて現地に足を踏み入れて、製作所の跡地を知った次第です。地元の人でも現地へ入った人は少ないと思います。隣地の畑所有者の故本田篤<sup>あつし</sup>さんの案内で、現地を細かく山林を踏み分けながら歩きました。作業所は1箇所だけでなく、数箇所あったと思います。何人くらいで部品を製作して居られたかは、いまだに分かりません。なお、その時の調査では、飛行機製作所の跡地は、現在の名南製作所技術研究所裏から、新幹線の線路脇にかけ、何箇所か確認されま



〈梶田町二丁目から三丁目にかけての新幹線の北東の山林には飛行機製作所の跡地らしき所が何箇所か残っている〉



〈山林の中には、土のうを積み上げた跡と思われる1～2mの高さの土盛りが残っている〉

した。右の現地写真は、後日追分町の鈴木久式さんが写されたものです。

なお、余談になりますが、昭和19年11月の暮、ちょうど、稲刈りをした翌日に、原の裏田に1屯<sup>とん</sup>爆弾が、共和の三ツ池西側と、原の墓地の西側にも爆弾が投下されました。故本田篤<sup>あつし</sup>さんの話だと、投下直後、金属の破片が沢山飛び散り、民家の屋根瓦が多く被害にあったとのことでした。さいわい、家の者は防空壕に逃げ込み、無事であったと話されていました。また、これは名古屋の大曾根の軍需工場、三菱重工業名古屋発動機製作所の爆撃の帰途、B29より投下されたものであるとも話されていました。

(※ 記録によると、三菱重工業名古屋発動機製作所への最初の爆撃は、昭和19年12月13日午後1時50分頃で、B29が約70機来襲、186トンの爆弾と焼夷弾<sup>しょういだん</sup>が投下され、名古屋市東区・千種区などで、被災戸数264戸、死者330人の犠牲者を出した。)

## ぐんじゅ 軍需工場になった愛知トマト

鷹羽 治 幸

私が愛知トマト株式会社（現カゴメ株式会社）に入社したのは、昭和28年のことでした。2年ほど大府工場にいましたが、その後は営業に異動し、東京支店勤務となりました。従って、戦中・戦後の工場の様子は、あまり分かりません。そこで、その頃大府工場にみえた、鈴置両持（75歳）、成田はな（79歳）、鷹羽喜久彦（81歳）の3人の方に集まっていただき、当時の思い出話をお聞きしました。（平成14年、鷹羽治幸宅にて）

はじめに簡単に自己紹介をお願いします。

鈴置 愛知トマトの大府工場が操業を始めたのは昭和9年だったと思います。私は、父の勤務の関係で、11年の夏（小学5年の時）から工場内に住むようになりました。休み時間に皆さんによく遊んでもらいました。事務室や工場内も遊び場でしたので、幼いながらも、いろいろ記憶に残っています。実際に愛知トマトで仕事についたのは、戦後になってからのことでした。



〈昭和9年完成の大府工場〉  
場所は現カゴメ興業のある桃山町二丁目

成田 私は北尾の出身ですが、昭和13年から、鈴置さんのお父さんに誘われて勤めるようになりました。昔は時期の物しか作らなかったから、お父さんに頼まれると、その時期だけ働きに出ました。仕事のないときは習いごとをしていたと思います。昭和21年の5月に結婚して大府に来ました。

鷹羽 私は、愛知トマトに昭和15年から勤めるようになりました。時期によっては、本社工場（上野工場）まで出掛けました。自転車で通いましたが、その頃は道路も砂利道で大変でした。でも、今のように自動車は通らなかったから、交通事故の心配はありませんでした。

私も大府工場ふくじんづけで2年ほど福神漬を作った記憶がありますが、その頃はどんな物を作っていましたか。

成田 トマトケチャップは無論ですが、モモやアスパラ、タケノコ、グリーンピースなどの缶詰を作っていたと記憶しています。

鷹羽 グリーンピースは戦後だったと思います。上野工場では、ミカンかんづめの缶詰も作っていました。それに、戦時中は野戦食というか、鳥飯や鳥肉の缶詰も作っていました。

鈴置 私が聞いたところによれば、昭和16年に愛知県内の食品会社10社ほどが統合して、愛知缶詰興業株式会社が設立されました。そして、大府では中島（森紡績）、豊田自動織機、種村織布、愛知缶詰興業の4工場が軍需工場に指定されました。それで、会社では野戦食を製造するようになったわけです。鳥の五目飯や鳥肉の缶詰は、確認した訳ではありませんが、潜水艦食として採用され、供給されたと聞いています。

成田 そう言えば、学生さんも工場に来ていましたね。私どもは鳥肉を切っていましたが、学生さんは鳥の毛抜きが専門でした。毛抜きで、一本一本根気よく抜いていた記憶があります。

鈴置 軍需工場になってから学徒動員を受けるようになり、大府の高等科1・2年の女子生徒50名が、毎日交替で来ていたようです。

工場での楽しみというか、何か印象に残っていることはありませんか。

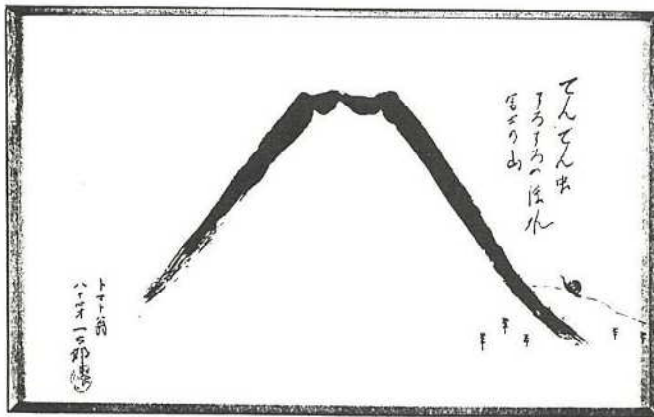
鷹羽 そう言えば、よく栄劇場に連れて行って貰いました。また、慰労会ということで旅行に行ったことがあります。「トマトに行くとは旅行に行ける。」と、羨ましがられました。

成田 よくコンブを分けてもらいました。トウガラシが入っていて辛かったのですが、味付けして食べると美味しかった。終戦後のことだと思うけど、砂糖を分けてもらい、それを米と代えて飢えをしのいだ覚えもあります。

鈴置 砂糖は貴重品でしたが、軍需工場だったからあったのだと思います。漬物の樽に入れて、工場のあちらこちらに置いてあったのを覚えています。朝礼は毎朝元気に行なっていました。軍事色の濃い頃は、ラジオ体操は無論ですが、詩吟の斉唱や雨兼池一周もよくやっていました。

私は、東京支店時代に愛知トマトの創業者である蟹江一太郎にお会いしていますが、蟹江一太郎さんについては何か記憶がありますか。

鈴置 子ども心に強い印象があります。たまに大府工場にも見えることがありました。工場に見えると、まず稲荷さんに参拝していましたね。それから、おじいさん（小島菊次郎）のところに行き、「おじいさん元気ですか。」と必ず声を掛けてみえました。それから社長室に入るのが常でした。それから、地元に戻元できる物を造るという創業の精神を大切にしてみえましたね。トマトにしろ、アスパラやミカンにしろ、地元の農業発展のためにも貢



〈でんでん虫の書画、「急がず慌てず」は一太郎の信条であった。〉

にわたり、貴重なお話をお聞かせいただき、有難うございました。

けん 献したと思います。本社工場へ行くと「でんでん虫 そろそろ登れ 富士の山」という額がありますが、一代で財を成す人は、我々凡人とは違うところがあるということでしょう。

創業期や戦中・戦後の苦難の時期があって、現在のカゴメがあるということを実感致しました。また、物の大切さを改めて感じました。長時間

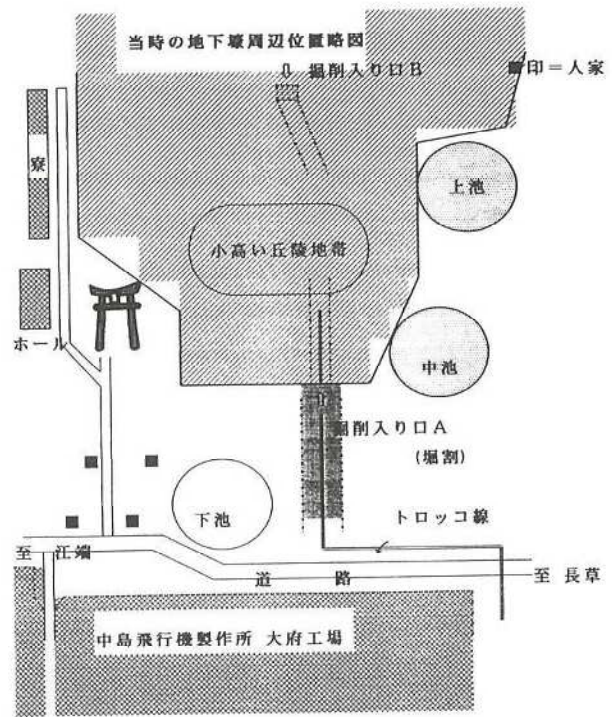
皆さんの話をお聞きして、蟹江一太郎が、明治32年に愛知県の一隅でトマトの栽培を始めてから、今日の世界のカゴメとして発展するまでに、いろいろな時期があったことが分かりました。

## 柁山の特殊地下壕

久野 栄一

小学4年生当時（昭和18年）、親や先輩たちから聞いた話では、戦火も激しくなり、中島飛行機製作所大府工場の西側の小高い丘の下に、地下工場を建設しようという構想があったようだった。

終戦後、どの程度進捗していたか、中に入って見なかったのが解らないが、2か所から掘削作業が進行していた。当時の状況は、右の概略図のようであったと子どもながらに記憶している。あの頃は、建設用のトロッコが、作業終了後、私たちの遊ぶ乗り物であった。大人たちの注意も聞かず、遠距離をトロッコに乗って、スピードとスリルを味わった。今、当時を思うと、危険なことをしたものと反省する。



〈当時の特殊地下壕周辺位置略図〉

終戦後は、入り口付近は、掘割状態になっていたので、三角ベースボールの格好の遊び場でした。

昭和45年、議員になり、「特殊地下壕対策事業実施要領」（建設省が昭和49年8月3日発行、時限要項）をたてに、市当局に対応を促し、翌年ボーリング調査費500万円の補正予算が計上され、調査した。その結果、一番危険箇所約1メートルという調査結果が地域住民に発表され、対応されることになった。しかし、急遽、対応策が中止となった。危険状況が判明しながら、突然の中止で、地域住民の一人として、市当局に不信を持ったものだ。

その後、時限切れとなったが、平成9年6月、約6千万円強の工事費、約4か月の工期で薬液（主液セメント5：硬化剤1）注入施工が行われた。市当局の計らいで戦時中の傷跡もなくなった。

戦後52年間放置されていた、戦争の傷跡とも言える特殊地下壕は、幸いに



(掘割りに切り開いた入り口付近)

椋山地区は、大府の町中から鞍流瀬川をはさんで、北西方面にあたる集落でした。父の話では、名古屋に勤務していた大正初期の頃まで、鞍流瀬川の橋は丸太橋だったとのこと。道も草道のため、足下が濡れるので、馱で袴をはき、汽車に乗ったと聞きました。

昭和8年になり、森織物工場（その後、大府紡績に改名）が来て、電灯が付き発展した。それでも、昭和10年頃は、20数軒という小集落であった。

大東亜戦争（太平洋戦争）になり、大府紡績が中島飛行機製作所大府工場に系列化され、椋山地区の急速な開発が進められるようになった。子どもながらに聞いていたことは、中島飛行機という軍需工場と、西側に隣接する僕たちの住む集落、小高い山を挟んだ西側の飛行場を結ぶ構想だったようだ。

昭和18年頃、地下工場建設工事が進行され、僕たちの集落も北側に移転する計画だったが、終戦により中断された。

戦前は、僕たちのトンボ採りの場所であった、西側の山中にあった2か所の溜め池、水泳場所であった、北西にあった3か所の溜め池も、工場の厚生施設用に開発されていった。開発は人力が主体だったが、発破の音もよくしていた。作業者は、朝鮮半島から送られて来た人達で、家族持ちの作業者も多く、友達も急増して終戦まで賑やかであった。

椋山地区の主な道路は、工場内を東西に通ずる道路しかなかったが、集落の南側を馱から飛行場まで、軍需専用道路が、知らぬ間に突貫工事で敷設された。

軍用専用鉄道として、隣接集落の江端地区をとおり飛行場まで、単線の線路も敷設された。これは撤去され、現在は跡形もなくなったが、軍需道路は、現在も私たちの生活道路として利用されている。

も、地盤沈下と言う災害も発生せず、議員在任中に対処でき、ありがたく思っている。

現在は、掘割りに切り開いた入り口付近を見ても、左の写真のごとく、雑木、竹、草が覆い茂り、周りの土砂で地面も相当高くなり、何事もなかったかのごとく野菜畑に変わっている。

## 勤労働員の思い出

深 谷 哲

終戦の時、私は15歳であった。60年近くたった今、その頃を思い起こしても、記憶は断片的でおぼろげで、間違いもあるかも知れないが、思い出すままに辿<sup>たど</sup>ってみたい。

戦争の真<sup>ま</sup>ただ中の頃、私たちはそれまで受けてきた『日本は神国である。不敗不滅である。大東亜共栄圏を確立しなければならない。鬼畜米英討つべし。お国の為、天皇陛下<sup>おんたみ</sup>の御為に一命を捧げるは男子の本懐である。』等々を堅く信じ、日本が勝つ為なら、どんなことでもするとの<sup>きがい</sup>気概に満ち溢<sup>あふ</sup>れていた。

昭和19年4月、当時工業学校の2年生（現中2）であった私たちは、勉学を投げ捨て、軍需工場<sup>にな</sup>で兵器増産の一翼を担うこととなった。学校で知識や技術を身に着けることの出来ない<sup>いちまつ</sup>一抹の危惧<sup>きく</sup>はあったが、勉強しなくてもよいとの安易な気持ちと、国の為に奉仕出来る喜びを感じ、張りつめた気持ちで指定された工場に出向いて行った。

私たちが配置されたのは、特殊鋼を生産する工場であった。最初の工場案内で、巨大な圧延機より繰り出される真<sup>く</sup>っ赤な鉄鋼が、次第に長く、または薄く変形されていく様子に、驚異の目を見張ったものであった。

埃<sup>ほこり</sup>と騒音にまみれ、また、冬でも暑い熱気のただよう職場で、私たちの仕事は始まった。もちろん、私たちの仕事は高度な技術や、強<sup>きょうじん</sup>靱な体力を必要とするものではなかったが、休憩時間が待ち遠しく心身の限界を感じても、弱音を吐<sup>は</sup>かずに頑張り通したものだ<sup>だ</sup>った。

級友の中には、銃弾作りや研究所など、比較的軽作業の部所に配置された者もあったが、私に与えられた仕事は鋼板の検査であった。鋼板の厚さが基準内であるか測定し、<sup>きず</sup>瑕の有無を点検し、瑕があればそれを消去修復する作業であった。単純な作業であったが、扱う物が重い鋼板であっただけに、疲れもひどく一日の作業が終ると、一休みしてから家路についたものだ<sup>だ</sup>った。

職場の人たちは、私たち学生には親切で優しく、勝つまでは、共に力を合わせて増産に励むのだという<sup>ふんいき</sup>雰囲気<sup>ふんいき</sup>が満ち溢<sup>あふ</sup>れていた。

19年度の一学期は週に一度は学校に戻り、数学・物理の基礎教科の授業と配属将校による厳しい軍事教練を受けた。日々緊迫<sup>きんぱく</sup>の度を増す戦局の下、夏休

みはなく、2学期からは軍事教練以外は学校から遠ざかった。

工場には、あちらこちらにインゴットが山積みされ、それを牛車で移動していた。積み降ろしの作業は、ほとんど人力で行われ、時間の掛かる危険な重労働であった。大相撲の力士さんたちも動員され、特に力を必要とするインゴットの移動や、トロッコ押し等に従事していた。休憩時間に馴染みの力士に声をかけるのも楽しみの一つであった。力士たちには各工場慰問の面もあったようで、短期間の滞在で次の工場に巡回して行った。

工場設備の長時間活用のため、私たちの勤務は早出、遅出の二部制となった。7月にはサイパン島守備隊の玉砕が報じられ、そこを基地としたB29の絶え間ない本土空襲が始まった。私たちは空襲警報が発令されると、工場内の防空壕に避難することになった。しかし、12月13日に大曾根の三菱発動機がB29の集中攻撃を受け、工場内の防空壕で多数の死傷者が出た。それ以後、私たちは警戒警報が出ると、最小限の要員を工場に残し2、3キロ離れた川の堤防に避難する事になった。そこで、私たちは、ゆうゆうと飛来するB29や到底届かぬ高射砲の硝煙を見上げていた。また、自分たちの工場に爆弾が落ちるのや、東海市に爆弾が投下されるのも目撃した。私は恐怖感もなく、なるようにしかならないとの諦観に支配され、ただ茫然と見守っていた。

19年12月7日の東南海地震の被害に加え、翌年のB29の爆撃によって破壊された工場の機能は、麻痺状態となり復旧も遅々として進まず、増産は掛け声だけで、生産量は減少の一途を辿っていた。

食料の配給は質量共に低下し、唯一の楽しみであった工場での豆いりご飯の給食も減量され、空腹を抱えての作業は耐えがたいものとなってきた。そんな日々の中で終戦の日がやって来た。

級友の中には家を焼かれ、焼夷弾で怪我をした者はいたが、動員中に爆死者が出なかったのが慰めであった。

今、戦争を振り返り、世界で自爆テロが繰り返されている現状を考えると、世界の恒久的平和の為には、自己中心で自分の国の利害だけを考える狭い心でなく、全人類の幸福を願い、世界的視野にたって行動の出来る人々を育成する、教育の重要性を痛感している。

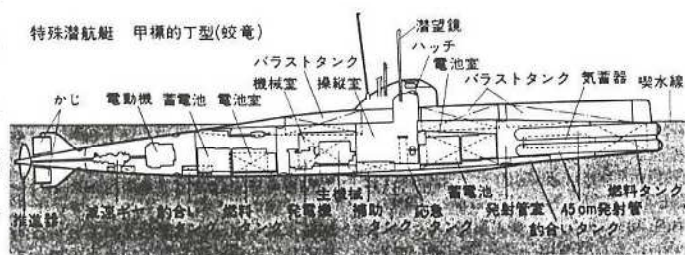
## 特殊潜航艇の製造

加藤 金松

戦争も激しさを増し、米軍機による本土空襲も昼夜を問わず行われるようになった。物量に劣る日本は、「国民総動員」「打ちてし止まん」「一億一心」を合言葉に、昭和19年より、当時の中学生も軍需工場（戦争に使用される兵器を造る工場）へと勤労働員された。

当時在学中の県立刈谷中学校からも、刈谷市内の各軍需工場へと勤労働員された。そして、私たち東海道線利用の通学者は、現在のJR刈谷駅西の日本陶管へ、19年9月より行くことになった。

当時の日本陶管は、海軍特殊潜航艇を造るための部品を制作していたということを、終戦後、工場の人たちから耳にした。…当時は、工場内のことは、絶対に他人には話してならないことになっており、したがって、我々には、肝心なことは何一つ話してもらえず、ただ黙々と与えられた仕事を遂行するのみであった。



特殊潜航艇は日本海軍が昭和9年から建造した小型潜航艇。重量46トン、全長23メートル90センチ、直径185センチ、乗員は2人。真珠湾攻撃、シドニー湾攻撃などに参加。「世界百科事典」より

通学（通勤）は、最初のうちは東海道線の列車であったが、そのうち、その列車も何時来るか分からず、（一応、時刻表はあるにはあったが）来ても満員で、その様な時には、車両と車両との連結器や、車両の屋根に乗ったり、乗車口の手すりに片手でつかまり、踏板上に片足だけ乗せて、大府・刈谷間を必死に通った。特に屋根に乗っていた時に、境川あたりで米軍の艦載機に機銃掃射を受けた時は、生きた心地がしなかった。それからは自転車で通うことにした。

米軍機の空襲が激しくなり、昼間は艦載機のP51・グラマンを中心に、夜はB29爆撃機を中心に空襲され、防空壕暮らしが多くなった。昭和20年になると、米軍機からまかれた「降伏勧告」のチラシが、爆弾とともに落ちてきた。ある日、友人がそのチラシを拾って見ていたところを配属将校（軍隊から学校へ派遣され、主に軍事教練を指導していた士官）に見つかり、その場で友人は、何回も何回も殴られていた。それを目撃しても、どうすることも出来な

かった。当時は、軍人のすることは絶対であったからである。

当時の食事は、現在の食事に比べたら食事の中に入らない。主食はカボチャ、サツマイモ、トウモロコシ、ダイコンの葉、サツマイモのつるなどであった。それらの食材の間に、玄米に近い米粒が、かすかに泳いでいたのである。ある日のこと、こんな事があった。同じ職場で働いていた、浜名湖の近くから通っていた仲のよい友人のH君が、生の鰻を持ってきてくれた。涙の出るほど嬉しかった。その日、家に帰り、さっそく料理して食べたところ、翌日は猛烈な下痢であった。日頃、ろくな食物にありつけない腹には、栄養豊富な鰻は合わなかったようだ。でも、その事はH君には、一言もしゃべらなかった。

昭和20年8月15日、午前中の作業を終え、現場監督から「正午になったら工場内にある広場へ集合せよ。」との伝言があった。さっそく、作業着を国防服に着替え、広場へ集合した。真ん中の机の上に、小さなラジオがポツンと乗っていた。やがて整列後、「玉音放送」が始まった。でも、小さなおそまつなラジオを遠くの方から聞いていて、はっきりと内容は聞き取れない。放送が終り、突然に現場監督が「日本は負けた。」と大声で叫び、泣き出した。皆も泣き出した。それで、ようやく日本の敗戦を知ったのである。その時は、ただただ呆然としていた記憶しかない。

### 真珠湾の九軍神

昭和17年3月6日、午後5時のNHKニュースは、冒頭にしめやかな「海ゆかば」の前奏が流れた。「軍艦行進曲」に続く、輝かしい戦勝のニュースを聞き慣れてきた国民にとって、これが初めての「海ゆかば」。開戦の日に、特殊潜航艇でハワイ真珠湾攻撃に参加、「還らぬ5隻、9柱の…」と歌われることになる、岩佐直治大尉ら特別攻撃隊員の偉勲をたたえるニュースだった。翌日の新聞は、この記事でうめつくされた。



九軍神を報じた朝日新聞（東京）の紙面

# しょうい しょうい 傷痍軍人愛知療養所に まつわる思い出

伴 武 量

昭和12年、<sup>ろこうきょう</sup>廬溝橋事件に端を発した日中戦争が、徐々に拡大の様相を見せ、現役軍人に加え、在郷軍人の人々へも赤紙による召集令状が日増しに多くなり、次第に戦時色が濃くなってまいりました。そんなころ、<sup>きゆうきよ</sup>急遽、<sup>げんごやま</sup>森岡の源吾山に建設決定されたのが、<sup>しょうい</sup>傷痍軍人愛知療養所<sup>りょうようじょ</sup>でした。もともと8万坪に及ぶ県有砂防林であったこの地は、大正時代に砂防工事が

行なわれ、松・はんのき・アカシアなど植えられて順調な成育をして、大緑地帯となった<sup>せいちよう</sup>空気清澄・<sup>こうそうかんせい</sup>高燥閑静な地でありました。それだけに、傷痍の

兵の健康回復施設の設置場所としては、申し分のない好適の地でありました。昭和13年この地に敷地決定、ただちに着工へと急ピッチに進められました。これまた、戦時色深まってきた当時のこと、近隣はもとより県下各地から、各種団体・小中学生に至るまでの勤労奉仕団によつ



〈勤勞奉仕の様子を伝える当時の新聞報道〉

て、山林が切り開かれて行きました。ただ、施設が療養施設であったので、地形を変えるようなことなく、原形を残したまま施設建設がなされました。かくて、昭和13年11月、定床500床の傷痍軍人愛知療養所の完成を見るに至ったのでした。のちのち増床されて、昭和18年には820床になりました。

なお当時、一般の人たちは、戦場に傷ついた将兵の養生のための施設と見ていた人が多かったのですが、徐々に、当時は不治<sup>ふじ</sup>の病と恐れられていた、結核性疾患<sup>しっかん</sup>に侵された兵隊さんの療養施設であることがわかって来ると、少なからぬショックを受けたのも事実でした。



〈傷痍軍人愛知療養所の開所当時の正門〉

出来上がった施設は、近代的本館・療養所としての環境配慮の行き届いた病棟・林間には数十の個室建物が点在するという、療養所ならではの施設配置でありました。当時、結核性患者の施設と

しては、全国に先がけての設備だといわれていました。竣工式典しゆんこうの後、建設にあたって勤労奉仕に汗した地域関係者への一般公開がなされ、施設見学に多くの村人が訪れました。開所と同時に、入院患者の受入れが始まり、たちまち満床となり、前述の個室建物に小さな灯がともされ、闇い林間に点々と見える様には、何となく、一抹いちまつの淋さびしさをさえ感ぜしめられました。そのころ、結核という病は不治の病とさえいわれ、急激に患者数が増えていった時代でした。軍人といえども例外ではなく。従軍した軍人さんの中にも、結核に倒れた兵の数は非常に多かったのです。一方、当時は、まだまだ結核に対する的確な化学療法は確立されておらず、当時としては、最善の投薬・安静療法をもって療養生活がおくられ、快方に向かった患者さんは軽作業療法につくなど、懸命な努力がなされ、多くの人たちが社会復帰をされたと伝えられています。反面、薬石の効なく、帰らぬ人となった患者さんも多く、霊安室から聞こえる遺族のすすり泣きに涙を誘われたものです。このことは、地元に住む者にのみ記憶に残る悲劇の場面でした。特に戦後、外地からの復員軍人を含め、急激に患者数が増え、病床はいっぱい、ベッド無き所にまで患者さんを寝かせるという、最悪の状況かもを醸かしたことすらありました。

救援物資とて何一つない戦後社会での病院生活、極端な表現をすれば、ただ死を待つのみのもめ場とさえ思える時期すらあったのです。したがって、今の時代では想像することの出来ない、死亡者が出たのも偽りのない事実であります。連日、しかも、日によっては二人三人と霊安室を後にされる姿を見せつけられました。加えて、職員・看護婦さんの中にも、過労・感染による犠牲者があって、その悲惨ひさんさには、目を覆いたくなる場面が多々あったと、一部の伝えを耳に致しております。今、健康の森体育館の横、こんもりとした緑の小高い丘に建つ、療養の碑ゆらいの由来文に目をうつすとき、当時の悲惨ひさんさが蘇よみがえる思いがいたします。同所に建立いれいされている慰霊の碑の碑文を記します。



〈今も残る慰霊の碑〉

この丘に眠る 幾多の僚友 並びに 殉職者の方々の 御霊の 永遠に安らかならんことを祈る。 元陸軍大佐指導官 柳山正員 書

昭和20年代後半になって、化学療法が確立され、不治の病といわれた結核の恐ろしさが忘れられようとしている今日、遠き日しのを偲んで感無量の思いです。



〈大きく変貌をとげた、現在のあいち健康の森公園一帯〉

## 戦争体験 思い出

木 村 一 子

思い起こせば、戦後57年の月日が流れました。太平洋戦争の恐ろしさや、私たち女学生が体験した生々しい思い出は、一生忘れることは出来ません。

各学校命令にて、私たち女学生は女子挺身隊員<sup>ていしん</sup>として、勉強を投げ捨てお国のために働くことになりました。以前、中日球場のあった場所には紡績工場がありました。その工場が戦争中には軍需工場<sup>ぐんじゆ</sup>に変わっていました。私たちは、そこで男子生徒と一緒に通信機の製作に従事しました。ハンダ付けをした発信機や受信機が、正しく機能するかどうかを、慣れないテスター<sup>な</sup>を使って指導員の方の指示に従って検査し、只ひたすら頑張りました。

昭和19年12月7日、お昼過ぎに、あの恐ろしい東南海地震が起こりました。上下動の大地震で、あっという間に工場は倒壊し、土煙が昇り、人間一人がすっぽり入る位の大きな地割れが出来るほどの、ものすごさでした。

その時、私たち女子挺身隊員の半数は工場内で作業し、半数は外で防空壕の補強作業をしていました。私は工場外の作業でしたので助かりましたが、工場内ではたくさんの方々が亡くなられ、私は友人を何人か失いました。

そして、その数日後、今度は、工場が敵機の焼夷弾攻撃<sup>しょういだん</sup>を受けました。私たちはどうにか避難出来ましたが、工場は火災となり、燃え尽き、廃墟<sup>はいきよ</sup>となってしまいました。

私たちは、しばらくの自宅待機の後、今度は、現在の東芝に行くことに決まりました。私たちの勤務時間は8時から5時まででしたが、慣れない仕事で、とても疲れしました。私たちの唯一<sup>ゆいいつ</sup>の楽しみは給食でした。その頃は、食糧難でお米の殆ど入っていないジャガイモや大豆ばかりの給食<sup>おい</sup>でしたが、空腹の私たちには、たいへん美味しく感じました。

昭和20年になると、三河大地震、名古屋大空襲と続き、夜中には、毎夜上下に揺れる地震に悩まされ、B29の空襲もあり、殆どが防空壕の中での生活となりました。

8月15日、工場内のベルが一斉に鳴り響き、上司<sup>じょうし</sup>の方から重大ニュースの連絡がありました。天皇の玉音放送<sup>ぎよくおん</sup>でした。「終戦です」との一言で幕が下がりました。

いろいろのデマが飛び交い、女子は外出禁止でした。終戦後の学校生活については、ほとんど記憶に残っていませんが、女学校の卒業資格は頂き、今でも同窓会からの案内が参ります。

私の家は、名古屋の中村公園の近くにありました。高射砲の弾丸の破片等で、きずついていましたが、運よく焼失だけは免れました。



〈三ヶ根山 比島観音〉

私の兄は、召集を受けて出征し、満州から南方方面に転戦した、名古屋師団泉五三一四部隊にいました。私は、時々兄に慰問袋を送っていましたが、その兄は、昭和19年にフィリピンのレイテ島で戦死いたしました。階級は戦歴を物語る軍曹でした。

昭和26年に大府に参りましてからは、仕事に明け暮れる生活を送っていましたが、やっと少しばかり時間にゆとりが出来ましたので、皆様との趣味の交流を深めようと思い、民踊を始めました。

その民踊の先生が、たまたま、私の兄が属していた名古屋師団泉部隊の数少ない南方戦線生き残りのお一人で、戦死された戦友の

方々を思い出され、追悼の本を出版されました。また、亡くなった戦友たちの霊を慰め、供養するために、奉納舞踏を企画されました。毎年、4月の第一日曜日に、南方戦線フィリピンで亡くなられた、50万同胞の霊が祀られている三ヶ根山比島観音で、戦没者供養の大祭が行われます。全国各地から、犠牲者の遺族の方々が参拝に来られます。名古屋師団泉五三一四部隊の生花も供えられています。私たちの民踊のグループは、刈谷の方々と一緒に、供養のための奉納舞踏に参加します。私は、戦争の悲惨さを思い起こし、不戦の誓いを新たにし、兄の霊を慰めるためにも、今後も、毎年参加したいと思っています。平和で暮らせることに感謝し、元気で居られる限り、地域のために、自分なりに努力して行きたいと思っています。

## 勤労働員に明け暮れた学生生活

鈴木大昭

私は、昭和8年、第三尋常小学校（現在の共長小学校）に入学しました。小学校時代の楽しい思い出としては、共和駅から大府駅まで2銭で乗車し、栄劇場で演劇や映画を見て帰ったことがあります。後に知ったことですが、昭和8年、時の町長さん（後の名誉市民）の酒井鼎一<sup>ていいち</sup>さんが、私財を投じて共和駅の竣工<sup>しゅんこう</sup>を見たということでした。そのお陰だったわけです。

戦争という社会状況の中で、学校生活を振り返って見ると、昭和12年、小学校4年生の記憶ですが、学校から竹箕<sup>たけみ</sup>を持って、国立愛知傷痍軍人療養所<sup>しょうい</sup>の整地作業に行ったことが思い出されます。昭和13年に入って、支那事変（日中戦争）で戦死された勇士の町葬が、町長さんをはじめ来賓多数を迎えて、校庭で厳かに<sup>おごそ</sup>行われたことも悲しい思い出です。

太平洋戦争が始まっていましたが、昭和17年、半田農学校に入学し、武豊線で通学しました。一両目は男子学生、二両目は女子学生と決められ、ガソリンカーで通学したのです。知多半島の先生方で、教護連盟が結成され、生徒の生活指導が行われていたのです。2学期からは、英語の使用が禁止になり、反米英の思想高揚<sup>こうよう</sup>が、いっそう凶られるようになりました。

生徒の勤労働員で、出征のため労力不足になっている農家の応援に活躍しました。最も長期に活動したのは、東浦町森岡地区北側の石ヶ瀬川までの約40～50ヘクタールの湿田対策でした。食糧増産のために、11月から翌年にかけて氷を割っての暗渠排水<sup>あんきよ</sup>作業をしました。1mほどの溝に松・竹の枝を埋め込む仕事でした。区の公会堂に泊って、風呂は各農家に分散して入りました。この事業への参加生徒数は100名で、地元の30名位の農家のリーダーの統率力のある命令が、すごく印象に残っています。

また、時には、なれない農業関係の工場に動員されました。半田市成岩<sup>ならわ</sup>の浅井農機具工場で、旋盤・プレス・ボール盤などに向かい、農機具生産に取り組みました。成岩の尾張製粉や半田の日清製粉で、うどんの製造にたずさわったこともありました。

2年生のとき、碧海郡上郷村<sup>へつかい かみごう</sup>の寺に泊り、海軍航空隊の飛行場の造成にも出かけました。また、遠く北海道の勇払郡早来町<sup>ゆうふつ はやきた</sup>の大型農業経営の農家の手伝い

に、文部省命令で出張もしました。歌の文句に『北海のはて樺太に、斧鉞入らざる奥深く、北斗輝く蝦夷の地に……』と斉唱して、汽車に乗ったのは強烈な印象です。

昭和19年4月から、吉田の大高山地区から東海市富木島富田地区にまたがり、三菱航空機組立工場と併設された滑走路がありました。多くの機材が、牛馬車数十台にて輸送されたものでした。一方、大府駅より引込線が敷設され、多量の機材が輸送されました。そこには大勢の人が生産に励んでおられたと思われました。滑走路より、組立てられた中型爆撃機が飛び立つ勇姿を見て、歓声を上げたものでした。

また、大府の農会に派遣されて、農業に関係する生産資材の受入・配布・出荷計画・計算などを手伝っていました。昭和19年12月7日、午後1時半頃だったと思います。突然の大地震が起こり、棚の書類や本が落ちてきて、思わず机の下に潜りました。一步外へ出て見ると、防火水槽の水が、壁の1メートルくらい上に水位を付けていて、二度びっくりしました。いかにすごい地震であったか。後にこれが、東南海地震であったことを知りました。

なお、大府駅では、農産物の野菜・いも類の集出荷が毎日行われ、一方農業用資材の各現数量の計算・出荷立会いを手伝っている中、何度もグラマンの機銃掃射の激しい攻撃を受けました。内地でも戦争の恐怖を体験しました。

同級生の桑山釗一さんと大高農会へ派遣され、熱田神宮の下宮の氷上姉子神社境内で、献穀の大豆の調整に精を出していた折、突如、空襲警報になり、大勢の人が避難して来ました。30分くらい経つと空襲警報が解除になり、職場へ戻られて30分も経つと、また、空襲警報になりました。東方から数十機のB29の編隊による大空襲になり、大勢の犠牲者が出た爆撃でした。

昭和20年1月13日、三河地震に襲われ、戦争被害の厳しい毎日の生活の中に天災の被害が重なり、傷心の上に重なる防空壕の暮らしは、想像できない生き地獄でした。7月頃だったと思いますが、追分保育園の北端に爆弾が2か所、東新町一丁目に1か所、共和町西畑の鞍流瀬川沿いに1屯爆弾が投下されました。朝日町一丁目地内には、焼夷弾の投下もされました。

3年間を通して、勤労働員と、時間があれば、武豊町六貫山の名古屋大学の農場で、薩摩芋や野菜の増産に、グライダーの滑空訓練に取り組みました。校庭でも軍事訓練の毎日で、考えられない学生生活でした。

# 売れたリュックサック

加古豊蔵

## ◎忘れられない戦争の記憶

私は、昭和4年生まれですので、戦争中は小学生から中学生でした。そんな中で、忘れられない戦争の記憶がいくつかあります。

小学校1年生のときだったと思います。大府から召集令状の一番の方が出征しゅつせいされる時、熱田神社で門出の式に参列し、その後、大府駅でお送りしました。その66年前の出来事が、今でも忘れられません。翌昭和12年、日本は太平洋戦争の前哨戦ぜんしょうせんである日中戦争（支那事変しな）に突入したのでした。

太平洋戦争（大東亜戦争）の始まった翌昭和17年、半田商業学校に入学しました。この時期は、勉強よりも学徒動員で軍需生産に明け暮れていた記憶の方が鮮明です。

半田商業学校4年生（今の高校1年生）のとき、半田市乙川の軍需工場で、働いていたときに空襲に遭いました。幸いにも、警報で前もって避難していらしたので、無事でした。しかし、工場に帰る途中、艦載機かんさいきからの機銃掃射を受けました。素早く陰に隠れましたが、機銃の火花を見た時は、生きた心地がしませんでした。その後、工場に戻りましたら、彩雲さいうんという飛行機を造っている工場をはじめ、広い工場の半分以上が爆弾でやられていました。戦争の恐ろしさをまざまざと見せつけられました。後で聞いたことですが、この時の空襲で、半田・武豊地区で300人近くの犠牲者が出たとのことでした。

これは戦争ではないのですが、昭和19年12月7日午後1時頃、東南海地震が起きました。半田市山方新田（現半田市役所付近）の軍需工場の山方工場は特に被害が大きく、そこで働いていた工員さん、ならびに学徒動員の生徒さんが沢山たくさん死なれました。これも後で聞いたことですが、この工場だけで153人の方が犠牲になったとのことでした。

その中には、大府から半田高等女学校に通学されていた横根の大島初枝さんがいらっしやいました。九死に一生を得た私は、武豊線が地震で不通でしたので、大府に帰るのに、一人で線路づたいに歩いて帰ることにしました。途中で夜になり真っ暗でした。東浦町の森岡まで来たときに、大島初枝さんのご遺体をリヤカーに乗せられて、とぼとぼと歩いていらっしやるご両親を発見しまし

た。今になっても忘れることができない光景です。

この小さな大府の町に、思いもよらぬ焼夷弾しょういだんが落ちた時にも、本当にびっくりしました。そのために沢山の家屋が焼失しました。その難に遭われたお方は、本当にお気の毒でした。大変だったと思います。あれはアメリカのB29が、名古屋の空襲の後、たまたま大府の上空を飛行中、残りの弾を落として行ったのではないかと想われます。

### ◎リュックサックが売れに売れた

私の家は雑貨店を営んでいました。私の父の実家は呉服店ですが、次男の父が分家するとき、呉服を買っていただいたら、その入れ物も必要だろうということで家具屋を始めたそうです。その後、手を広げて家具屋から雑貨屋になったと聞いています。

戦中・戦後は、私もまだ子どもでしたので、その頃の商売の本当の苦労は分かりません。

戦中は「欲しがりません勝つまでは」の時代で、金属回収のために家庭の鍋・釜、さらには仏壇の仏具・お寺の鐘まで供出させられました。また、生活必需品の不足が目立ち、米を始め塩・砂糖・味噌・醤油・タバコ・マッチ・木炭・ガソリン・石鹼・家庭用綿製品なども配給制や切符制になりました。

戦後は悪性のインフレと深刻な食料難で生活はさらに大変でした。昭和21年2月には、預金封鎖ふうさ・新円の発行が行われ、人々は手持ちの品物を食料に換え生活しなければなりませんでした。

そんな経済情勢の中にあって、リュックサックが売れに売れたという記憶が残っています。リュックサックを買ってくれたのは、故国へ帰る人や買出しに行く人たちであったと思います。急いで名古屋の問屋さんに注文する訳ですが、今のように、自動車ですぐ持ってきてくれるという時代ではありません。牛車を用意し、問屋さんを回って品物をかき集めなくてはなりませんでした。しかし、商売人にとって、買っていただける物があるということは、大変嬉しいことでした。

### — 預金封鎖・新円発行 —

昭和21年2月17日、政府は総合インフレ対策として、金融緊急措置令きんゆうきんぎょくさうじゆうれいを公布した。これにより、金融機関の預貯金一切の支払いを禁止し、封鎖預金ふうさとした。そして、手持ちの現金は、すべて金融機関に預け入れさせ（旧円）、改めて新円は、一人一ヵ月100円限り払い出せるとし、賃金収入は、一人500円まで現金、後は封鎖支払いとした。こうした新円切り換えが実施されたのである。

## 戦時、戦後の農業の誇り

浜島久雄

忘れかけた戦時下の農家のことなど思い出すままに記してみます。

当時は学校の先生も、親からも、「物を大切に、節約し、粗末にするな！」と口ぐせのようによくいわれ、食糧増産のため、小さな空地も花などは作らずに食べものを作れと指導された。

○ 小学校の高学年になったころ、秋になると農家の人の稲の収穫作業のすんだあと、広い田んぼを廻って落穂拾いを何回かした。

○ 山や森に行って、ドングリの実も拾って、燃料の油の足しにした。

○ イナゴ捕りも何回かし、つくだ煮にした。大変おいしかった。

恋心が芽生える自分たちの青春時代は、戦争の真最中でした。雨が降って農作業ができない日、映画を見に行きました。刑事さんに見つかって、「昼間から遊んでいてはいけない。働きなさい」と叱られたものです。

何しろ、働け、働けの一点張り、軍需工場で働きなさいといわれ、今思うとうそみたいに日本人は、がむしゃらに働きました。

何でも配給制度になり、お金があっても買うものがない時期もありました。

○ 特に、主食の米・麦等は代表的な品です。生産に必要な肥料も反別割の配給で、十分に施せなかった。

○ 現在の韓国から赤い牛を買い入れて、反別の多い農家から強制的に飼育せよとの命令で、草を飼料にして育て、牛糞は大切な肥料にした。

○ 牛車は、荷物をはこぶ等、大事な運搬手段であった。

○ そのころの農家は、ほとんど鶏がいた。他の家畜もいろいろ飼育して家計の一助にしていた。そのせいか蠅が多くて、家の中でも何十匹と飛んでいました。蠅取り紙等で困った思いもありました。

○ 池の中の泥も、みんなで掘り、かついで出し天日干しをして肥料として使用した。また、名古屋の一般家庭から出る「ゴミ」を開墾地まで運んで発酵させ、使いやすくして畑に使用した。

○ 私たちの部落は、農家の中で若い働き手のいる家庭が多く、県所有の山林を払い下げていただき、入植増反しました。1戸当り3反くらいで鋤やびっちゅうでの開墾作業は大変な重労働でした。

- 食糧不足の時期で、味より量で、たくさん収穫のできる作物が重点的であった。また、この部落（北崎町）からも刈谷の会社等へ<sup>しもこえ</sup>下肥取りに行きました。

今考えると何もかも不足の時期で不自由な生活であったが、戦争に勝つまではこの目標にむかって大変はりきっていた。

- 学校の先生からも勝ち戦<sup>いく</sup>さのニュースや、今日はどこの海戦で大勝利、「ロシア」バルチック艦隊を迎えうった話などを聞いて、一億日本人は、「火の玉の精神」でがんばった。しかし、だんだん情勢が悪くなり、これで勝てるだろうかと思うことが増えてきた。

- <sup>だいほんえい</sup>大本営発表は、負け戦<sup>いく</sup>さはない、予定の作戦でしたとのことであったが、そういう中で「8月15日」を迎えた。

- 戦後の食糧事情は、ますます悪くなり名古屋方面からの買い出しの人が毎日のように来ました。「米・芋など何か食べものをください。これは私の大切な着物です。これで分けてください」と言って、食料<sup>か</sup>に換え、リュックにつめ名鉄の豊明駅へ2 km余の道を歩いて帰って行きました。

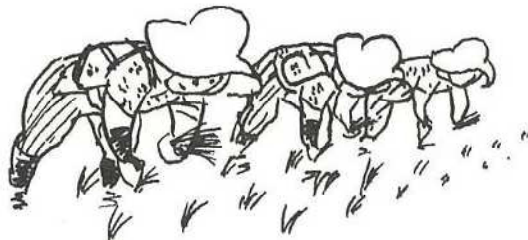
- こんな時、私は農家に生まれてよかったと思った。うまい物は食べないが満腹感<sup>みんぷくかん</sup>は味わい、ひもじい思いはしたことがなかった。

- 当時のご飯には、麦・大豆等の穀物や、大根・大根切干等も入っていたので体に合わない人は、下痢等をしたと聞きました。

農家に嫁入りして、真白いお米のご飯が一回腹いっぱい食べたいと、買い出しにみえた人が切実にいっておられたことを思い出します。

- 当時は、農家でも麦をたくさん入れたご飯を食べた。麦は、大変身体に良いとのことで、まずいと思ったことはない。

食料は最大の武器であり、「確かに」その通りだとつくづく思った。食料ほど大切なものはない。農家の誇りを持とう。



## 戦中・戦後の農家の暮し

加古新吉

日中戦争が起こった時、私は小学2年生であった。そのため、戦中に少年時代、戦後に青年時代を過ごしたことになる。

私の家は4代続いた農家で、田・6反5畝（約6400m<sup>2</sup>）、畑・9反3畝（9300m<sup>2</sup>）を所有し、戦中・戦後は、畑では薩摩芋、天向豆、馬鈴薯、南瓜、大根、玉葱、黍などを作っていた。

私は一人っ子で、物心ついたころより父子家庭で、主に祖母に面倒を見てもらっていた。戦中や戦後間もない頃の農作業は、殆ど人力で行われ道具といえは鍬、鎌の類が主であり、朝早くから夕方暗くなるまでの作業が要求された。肥料は人糞、堆肥、藁灰等が主で農薬は殆ど使わなかった。田植えの準備の田起こし、田ならし、終日腰をかがめての田植え、炎天下での田の草取り、一株一株を鎌で刈って束ねる稲刈り等の作業は大変であった。私の家は働き手が一人少なかったため父、祖父母の仕事はとてもきつかった。

戦争の激化と共に、一家の働き手の中心となる男性が召集され不在となった農家や、特に、お国のために一命を捧げられ帰らぬ人となられたご遺族のご苦勞は筆舌に尽くし難い。悲しみに耐え、女手中心で重労働をこなし、立派に子育てされた方々、健全に成長されたご子息の方々に心より敬意を表し、賞讃の言葉を送りたい。

多忙な農作業を手伝うために、私は小学4年の頃から草取り等をしたことを覚えていた。私は農業が好きだったので、小学校を卒業し高等科2年を終えれば当然家業を継ぐものと考えていたので、進路についての不満や迷いは無く勉強にはあまり関心がなかった。

戦中や戦後間もない頃の私の家の食事は極めて質素で、朝は麦飯に味噌汁に漬物、昼は日の丸弁当（弁当箱の真ん中に赤い梅干しを入れたもの）が普通、夜は市場に出した残りの野菜を煮たものが主で、時々焼き魚か煮魚がつく程度であった。すき焼き、たまり飯（鶏肉を入れた混ぜご飯）等は特別の日、寿司はお祭りの日、赤飯は祝い事の時だけであった。米作り、野菜作りの苦勞が身に染みつき、一粒の米も残さず食べ、お菜なども好き嫌いを言わずに食べ尽くしたものだ。

戦争が厳しさを増すにつれ、稲は刈り取る前に出来高を厳密に調査され、自家用に<sup>くずまい</sup>屑米を残し、良質米は<sup>くんじゆ</sup>軍需用、配給米として政府に供出することが義務づけられた。

昭和17・18年、私が高等科1・2年（現中学1・2年）の頃、父とリヤカーや大八車に大根を積んで、家からおよそ4キロ離れた大府駅まで運んで行った。そのため、授業の始業に間にあわず遅れた理由を報告し、<sup>ゆる</sup>許しを得てから教室に入れてもらったことを覚えている。（高等科は大府小に併設）

小学1・2年の頃は、お菓子屋でだ菓子を買い、おやつとした記憶はあるが3・4年の頃より菓子類はめっきり少なくなり、夏はトマト、<sup>すいか</sup>西瓜、さとうきび（茎を<sup>か</sup>噛んで甘い汁を吸う）、秋は柿、みかん、冬は薩摩芋のふかしたもの、正月過ぎは自家製の餅せんべい、あられ等が主なおやつであった。

終戦間近には、軍隊も食糧不足で3キロ程離れた飛行場近くの高射機関銃陣地の兵隊さんが「腹がへってたまらん、さつまいもを分けてくれんか」と私の家に頼みに来たこともあった。

戦後、食糧事情が特に悪く、配給の食糧だけでは栄養失調になり、<sup>がししゃ</sup>餓死者が報じられた頃、戦時中に<sup>しんせき</sup>親戚や知人の所に分散させておき、運よく焼け残った一度も<sup>そで</sup>袖を通したことの無い着物や、大切にしまってあった家宝を持参し、何でも良いから食べ物と交換してほしいと、物々交換を<sup>こんがん</sup>懇願する人がよく訪ねて来た。父が情にほだされ、たしない自家用米やさつまいもを分け与えている姿を目にし、ほっとしたこともあった。また、ブローカーと呼ばれる人たちが、<sup>かぼちや</sup>南瓜、馬鈴薯、さつまいも、豆、玉葱など、腹の足しになりそうな物を買いきりに来た。私の家の畑のさつまいもが、昼食をとりに帰ったごく短い時間のうちに、ごっそりと持ち去られたこともあった。

戦後もある期間続いていたが、学校は農繁期には数日休暇になった。農家の子は家の手伝い、非農家の子は人手不足の家に手助けに行った。

現在、各種の農機具が普及し、耕地の整理も進み農作業は戦中と比較するとずいぶん楽になり<sup>うんでい</sup>雲泥の差を感じずるが、若い人たちの中には農業を<sup>さ</sup>避けたがる人が多く、所々に荒れた田畑を見かけるのは残念である。国民の食生活の変化<sup>ともな</sup>に伴い米の消費量が減少し、政府が米の生産量調整のため休耕田に補助金を出したり、他の作物への<sup>すす</sup>転作を薦めているが、食糧自給率が極端に低い日本の現状を考えると、他国からの食糧の輸入が不可能になった時の我が国の窮状<sup>きゆうじょう</sup>を今から<sup>きく</sup>危惧している。

## 慰問文の取り持った縁

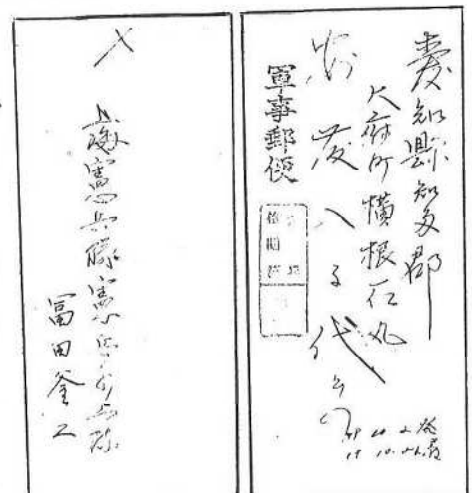
富田 八千代

昭和12年7月7日、中国大陸の盧溝橋で起きた一発の銃声から、日支事変（日中戦争）が始まった。上海の敵前上陸作戦による犠牲者も出て、戦時色も強まっていった。私は小学4年生だったと思う。各部落からは、軍籍のある人や徴兵検査に合格した青年が、次々と出征して行った。入隊に当たっては、村人や小学生の高学年が参加し、各部落の神社に集まり、出征兵士の武運長久を祈願し送り出す。そして、婦人会・青年団・警防団など、各団体の方々と皆で列をなし、大府駅まで歩きながら、大きな声で軍歌を唄い続けた。駅頭では、どうぞご無事と挨拶があり、万歳三唱をして見送った。

5年生になった春、出征した方々の武運長久を祈るため、名古屋の熱田神宮への日参団が、地区ごとに結成された。私も学校から帰って、親の代りに記帳と団旗を持って、武運長久と必勝祈願に行った。その後、戦死者の公報が入ると、町葬が学校の運動場で、大勢の参列者によって厳粛に行われるようになった。各団体や役職者の弔辞が延々と続き、暑さ寒さに参ったこともある。

紀元2600年を迎えた昭和15年、小学校を卒業し高等科に進級した。物資不足で食糧が乏しくなり、今の桃山公園の南側の平地を開墾するために、農業実習時間が多くなった。現在の市役所のあるところの雨兼池から、二人一組で、天秤棒をかついでの水運びが日課だった。化学肥料のない頃だから、豚や鶏の糞尿を薄めて撒き、成果を上げるのに懸命だった。

軍隊に召される方々が多くなり、高等科2年の女子は、2クラスを10班に分け、当番制で、今の中日新聞の前身、新愛知新聞を毎日50部ずつ、地元出征兵士のもとへ発送することを命ぜられた。内・外地ともに、部隊名などの名簿を預かり、放課後交替で、新聞を折りたたんで12cmくらいの帯封を巻き、〇〇方面軍〇〇部隊と個人宛名書きをして発送した。そして、1か月後くらいに、運よく中支（中部支那）の兵隊さんから「月遅れの故郷の新聞受取り、嬉し



〈頂いた軍事郵便…検閲済みの印がある〉

くて隊全員で回し読みをしました。」と礼状をいただいた。私たちが嬉しくなり、礼状にまた礼状を出して、慰問の文通が始まった。私は吉田・横根・共和出身の方から、軍事郵便ハガキをいただいた。やがて大東亜戦争が始まり、戦線が南方諸島やインド・ビルマ方面まで広がり、通信もままならずで、何時しか新聞発送も途絶えた。兵隊さんの方も異動があり、慰問文も届かなくて、返送されて来るようになった。

昭和17年3月、高等科を卒業。私は学校へ行きたくて、刈谷の裁縫女学校に進んだ。しかし、勉強は1学期だけであった。体育の時間に、南の方から黒っぽい機影が低空で飛来し、私たちの真上を北の方へ飛んだ。胴体には日の丸ではなく、見たこともない印があった。翌日の新聞によると、米軍の偵察機であった。それから急に勉強どころでなく、軍需産業へ女子挺身部員として勤務することになった。

髪を引き詰めてくくり、女子工員も化粧は許されず、モンペ姿でした。朝礼では、軍隊帰りのバリバリ上等兵さんが、号令して点呼をとり、社是と意気ごみを大きな声で唱和して、駆足で職場に入った。昼食の御飯は、干甘藷と豆粕の粒が入り、米粒は探す程しかなかった。あるだけ幸せと思い食べた。

工場勤務にも慣れて、一日中、立ちっぱなしの作業も、何とか苦にならなくなった。その頃、私の父は大府郵便局の集配人だった。共和・長草地区を配達する日で、現在、私が住んでいるこの地の畑で、麦刈りをしていた親・息子に話しかけたとのこと「今日は見慣れぬ人がおられるが、お手伝いかね？」と。親父さんは「いや、これは息子で、今、休暇が許されて、上海から帰っておるんです。」と。「それじゃ、家の娘にハガキを下された方ですか？」と父。高等科のとき、新聞発送の礼状を下された方と分かり「せっかく帰っておられるなら、一度ご来遊下さい。」と、無愛想な父にしては珍しい言葉。わが家を訪ねて下さり、初めて会った日に「結婚休暇を願い出て許可され、親の顔は見えたが、結婚相手が決まっていないので、任地へ帰るに困っている。俺の所に来て欲しい。」と乞われた。断りも出来ずに、1週間目に式を挙げ、8日間の新婚生活で、また上海へ向かった。写真が出来てくるまでに、主人の顔を



〈結婚の記念写真…自宅の裏庭で〉  
昭和19年7月7日撮影

忘れてしまいそうな幼な妻だった。上海へ帰隊して、終戦までは便りの行き来もあり、元気であることを喜んでいたが、終戦の詔勅<sup>しよくちよく</sup>があった後は、中支の全憲兵<sup>にっかぼう</sup>は日華紡という所に集められ、捕虜<sup>ほりよ</sup>となって自由なし、音沙汰なしの不安な日々が、1年4か月続いた。幸いに、弾丸にも当たらず、戦犯にもならず、昭和21年の暮れ、中支からの最後の艦<sup>ふね</sup>で帰国出来て、本当に嬉しかった。主人も、命永らえて、無事故国に帰れたことを「ああ良かったなあ。」と、復員直後は、寝言のように言っていた。

私はそれから50余年、わが人生に悔いなし。いろいろなことに遭<sup>あ</sup>い、体験し頑張ったことが、心の内に勲章<sup>くんしょう</sup>のように光輝いている。

### 兵隊送り

昭和12年、支那事変<sup>しな</sup>（日中戦争）の勃発<sup>ほつぱつ</sup>により、徴兵検査合格者による現役入営者のみでなく、いわゆる赤紙による召集令状入隊者の数が多くなった。次いで、昭和16年に太平洋戦争（第二次世界大戦）へと、戦争拡大ともなって、文字通り国民皆兵の時代となっていった。現役・召集・志願と、それぞれ入隊者を送る場面の中には、当時の世相の中では、口にすることのできない悲喜こもごもの事情をかくした悲壮感<sup>ひそうかん</sup>が、漂っていたものであった。血気盛んな現役入営者は、徴兵検査による甲種合格を誇りと考え、国家の千城<sup>せんじょう</sup>たらんと決意を新たに兵役に服した。一方、突如として舞い込んで来た一片の赤紙による召集令状に、私情を捨て、親・妻子を残し戦場におもむく者の心には、言葉には出し切れない苦衷<sup>くちゅう</sup>が隠されていたであろう。また、若くして軍人たらんと、志願兵として入隊する若者の心には、一途<sup>いちず</sup>に国のためにという思いに、若き血をたぎらせ戦場へと馳せ参じさせたのであった。

今の世では、とても理解できない国民全体の心理状況であったが、その裏では、個々の問題を考える時には、複雑かつ諦め<sup>あきら</sup>とも言える様々な苦しみが、隠されていたことも事実であった。しかし、世が世なら、このような心の内は、いかなる理由があろうとも、口外することは許されず、表向きは喜び勇んで陛下<sup>へいか</sup>の思召<sup>おぼめ</sup>しにに応じて行ったのである。

入営を控え、慌ただしい日時の中に、村人による送別会が行われ、その場でも、女々しさは曖気<sup>おくび</sup>にも許されず、晴れの入隊として、悲壮な決意で挨拶<sup>あいさつ</sup>が述べられたのである。また、入隊前夜には、応召者自らが、親友・知人を招き、晴れの入隊とばかりに祝宴<sup>しよくえん</sup>を開き軍歌と激言の中で、興奮<sup>こうふん</sup>の坩堝<sup>るつぽ</sup>の中に自らが溶け込んでいった。

入隊当日は、小学校の校庭で全校生が整列、村人・青年団員・国防婦人会員と各層の人達が見守る中で、代表として校長先生の送別の言葉があって、その後、入隊者の挨拶が行われた。何れの入隊者も「天皇陛下の思召により…一意専心軍務に精励します。」と、力強い決意が述べられた。そして、区長さんの音頭で、声高らかに万歳が三唱され、村はずれまで学童の軍歌行進に送られ、壮行の旅についたのである。なおかつ、村人達は大府駅まで送り、歓呼の声・軍歌の嵐・手に手の小旗の波、一種の興奮状況の中、列車が遠く姿を消すまで、声を枯らして励ましを送り、武運を祈り続けたものである。

伴 武量著『文集』より

## 4. 戦中・戦後の子どもたち

### 1. 子どもたちの生活



こども      これは、だれの<sup>せきぞう</sup>石像なの？

わたし      <sup>にのみやきんじろう</sup>二宮金次郎の石像だよ。昔の学校には、どの学校にもあったんだが、今の学校には、もうないかな？

こども      僕の通っている学校では、見たことがないよ。何かを<sup>せお</sup>背負って、本を読んでいる？ 二宮金次郎って、どういう人なの？

わたし      二宮金次郎は、江戸時代の人なんだ。貧しい中で、働きながら勉強をし、農村の改革に取り組んだ人だった。

こども      どうして学校にあるの？

わたし      「働きながら、勉強に<sup>はげ</sup>励んだ二宮金次郎をお手本にせよ。」は、先生の<sup>くち</sup>口癖だった。学校でも校門の横とか、玄関の前とか、一番目立つところに置かれていた。

## 戦中・戦後をふりかえって

加古和美

ぼくが大府第三国民学校に入学したのは、昭和16年4月でした。この年に小学校は国民学校に変わりました。日中戦争は始まっていましたが、その頃、内地は比較的平和で裕福な時代で、革の鞆を背負い、革靴をはき、サージ仕立ての服を着て、入学した子もたくさんいたように思います。

一学期も過ぎ夏休みに入ると、上級生がいろいろな遊びやおもちゃの作り方などを教えてくれましたが、なかでも一番楽しかったのは、両親には、しかられる水遊びでした。川では以前から遊んでいましたが、上級生に連れられて初めて大きなため池に行きました。ぼくが浅い所で遊んでいると、深い所で泳いでいた上級生が来て、「そんな所では上手に泳げるようにはならない。」と言ってぼくを深い所に連れて行って、いきなり突き落としました。3～4m沈んだでしょうか、水を冷たく感じたことをおぼえています。やっとの思いで浮き上がり、岸にたどり着き水を吐き、大きく息をはきました。こんなことを何度もくり返すうちに、夏休みの終わり頃には、泳ぎも上手になりました。自然の中で遊びができる、おだやかな時代でした。その年の12月8日に太平洋戦争が始まりましたが、ぼくたち子どもは、何か楽しいことが始まったぐらいにしかなっていませんでした。その内、近所からも兵隊に行く人たちがだんだん多くなり、母たちも白いエプロン姿で、よく見送りに行くようになりました。よく遊んでくれた隣の家の兄さんも、少年飛行隊にあこがれて、「予科練に入隊する。」と言って、行ってしまいました。

2年生になったある日、先生から「皆さんの近くから戦地に行っている兵隊さんに慰問袋を届けましょう。」といわれ、皆で近所の出来事をつづり方で書き、絵や作品等を慰問袋に入れて送ってもらいました。

少し寒くなった頃、学校の行き帰りに、見慣れない服装をして木の車を引いた、外国人らしい大勢の人たちに出会うようになりました。その人たちは、道仙の山の方に飛行場ができるので、その工事に行く人たちだと聞かされましたが、ほんとうにあんな所に飛行場ができるのだろうかと思いました。

また、毎日家庭で使っている金属類を供出することになり、砲金などを出し、寺の釣り鐘、学校の二宮金次郎さんの銅像も出征して行きました。ぼくたちは

道路や空地等に落ちている、古釘などの金属類を拾い集めました。

この頃になると、食べ物を始め、日用品の不足が目立ち、衣服などはおじいさんやおばあさんの古着を仕立て直してもらって、着なければならぬようになりました。履物は、わらぞうりを自分で作ってはきました。戦争が始まってから少しの間に大きな変化がありましたが、子どもだったぼくたちは、何の抵抗もなく受け入れていました。

学校では、うさぎや鶏をたくさん飼い、当番を作って飼育していました。ぼくの家でも、うさぎを初めはみかん箱で飼っていましたが、子うさぎがたくさん産まれたので、父に頼んでうさぎ小屋を作ってもらいました。学校から帰ると、うさぎの餌さ取りに追われる毎日でした。うさぎの毛皮は、飛行服や寒い所で戦っている兵隊さんの防寒服を作るのだと聞き一生懸命に育てていました。

ぼくが3年生、昭和18年6月頃、34歳になる父に突然召集令状が舞い込みました。父は若い時から病気がちで徴兵検査も不合格だったので、まさか召集令状が来るとは思ってもいませんでした。しかも海軍と聞いて、泳ぎの出来ない父は困ってしまいました。そこで早速、ぼくが先生になり泳ぎの練習をすることにしました。以前、上級生が教えてくれた方法でやるつもりでしたが、大人は体が大きいので方法を変え、自転車のチューブを体に着けて浮かせ、疲れるとロープで引き寄せる方法で特訓しました。夏休みの終わり頃には、どうにか泳げるようになりました。9月中頃、父は同じ日に入隊される2人の方と共に、天神社で祈願式を行い、白いエプロンの国防婦人会の人たちに送られて、呉海軍に出征していきました。

この頃になると食糧が不足しはじめ、学校の西にある山を畑にし、芋や豆などを作りました。しかし、肥やしがないため大きくなりません。そこで学校の下にあるどぶ池から泥を出し、天日で干して、生徒全員で畑に運びました。畑だけでなく運動場のすみや道路の土手などにも芋を作り、出来たさつま芋は、運動場の下に造った防空壕に保管し、長い間食べました。

学校の畑の奥山の方に兵隊さんの陣地がありました。そこには敵の飛行機を見つかる聴音機（ラッパのようなものが何本も付いたお化けみたいなもの）と、飛行機を照らし出す探照灯があり、ときどき遊びに行きました。

4年生、昭和19年になると、名古屋方面にも空襲があるといわれ、疎開令が出されました。名古屋の今池に住んでいるぼくの伯母も疎開することになりました。主な家財道具は牛車で運びましたが、こまごまとした物はリヤカーで

運ぶこととなり、長草・今池間を伯母と何回となく通いました。東海道を笠寺観音まで行き、そこから、大江から大曾根まで行っている大きな道路を今池まで行くのです。天白川の堤をいつものように行くと、突然人だかりがあり、何があったのかと思ったら、昨夜の空襲の不発弾があり、通行止とのことで大回りしたこともありました。この年には田舎の長草にも、五ッ屋前の田んぼに爆弾が落とされました。空襲が激しさを増した12月7日、東南海地震が発生しました。地震のあったのは、第三国民学校で戦死された方々の慰霊祭が町葬として行われ、ちょうど、式が始まる時でした。ぼくたちは3時限で授業を終え、講堂造りをし、運動場にいました。大きな音と共に校舎がゆれ、大勢の人が窓から飛び出すのを見ました。その余震がまだ収まらない翌年1月13日には、三河地震が起き、多くの犠牲者が出ました。ぼくは何か月もわら小屋を建てて暮した記憶があります。空襲におびえる日が続いた5年生の8月15日、やっと終戦の日が来ました。

昭和20年8月、終戦後の夏休みの終わり頃、ぼくは友達と5人で飛行場に出かけました。行ってみると飛行場は意外と静かで人影も見えません。格納庫に近付き周りを見回っていると、窓ガラスの破れている所があったのでそこから中に忍びこみました。中に入ってびっくりしました。大きな飛行機がぎっしり並んでおり、その中の一機に梯子はしごが下がっていました。3人がおそろおそろ乗り込んだ時、機外で大きな音がして、煙が立ち昇るのが見え、下にいた2人が爆発するから逃げろと叫びました。5人は一目散いちもくさんに逃げ帰りました。後で聞いた話では、下にいた二人が消火器を倒したとのことでした。ぼくたちの乗り込んだ飛行機は「飛龍」で、何か月か後、アメリカ軍が来て毎日爆破していました。その格納庫の一部は、名古屋の金山体育館に使われたとも聞きました。

戦争が終わり、あたりは静かになりましたが、なぜか皆、力が抜けたようになりました。うさぎの餌さ取りや、さつま芋掘りは、いままで通りやっていましたが、食糧はますます不足し、自分たちの食べ物は自分たちで確保しなければなくなっていました。この頃、軍隊から帰る人や、都会から田舎へ食糧の買い出しに来る人たちで駅や列車は大混乱をしていました。

ぼくの父は10月に帰って来ました。海軍に入隊しましたが軍艦には乗らず瀬戸内海の小島で「回天」という人間魚雷を格納する壕を造っていて、その特攻基地で終戦を迎えたと言っていました。また、少年飛行兵にあこがれて予科練に入隊した隣の兄さんは、12月に帰ってきました。特攻基地にいて二度出

撃したが失敗したと言って、しょげていましたが、ぼくはうれしかったです。しかし、慰問袋を送った近所の方は、南方方面で戦死され帰らぬ人となられました。こうして5年生は終わり6年生になりましたが、食べることに追われていたように思います。食糧難や交通事情のためか、ぼくたちが楽しみにしていた修学旅行はありませんでした。1年生に入学した時は裕福でしたが、卒業する時はつぎはぎのズボンなわをしば縄で縛り、はだしで卒業した思い出があります。

私たちが中学校に入学したのは、昭和22年4月でした。この年から教育制度が変わり、6・3・3制になりました。2、3年生は自由入学でしたので、新制中学1年生からの入学は私たちが最初でした。しかし、校地、校舎もなく勉強する場所がありませんでした。そこで間借りし、大府小学校の所にあった高等科や実践女学校の校舎を使うことになりました。しかし、全員は入りきれず私たち1年男子は、ひいらぎやま終山の分教場に行くことになりました。そこは戦争中は工員さんたちの寮であったと聞きました。しばらく放置してあったので掃除が大変でした。やっとA・B・Cの3教室が出来、落ち着くことができました。

2学期初めに組替えがあり、男女共学になりました。私の組は小学校にある教室で学ぶことになりました。引き続き分教場で学ぶクラスもあり、まだまだ学年全体が一堂にそろうことはありませんでした。

3学期になった頃、現在の大府中学の位置に校舎が一棟出来、2年生が新校舎に移りました。その頃、よく校舎の建設の手伝いに行き、土運び等をしました。新校舎が3棟出来、生徒全員が一緒になることができたのは、私たちが3年生になってからでした。

長草地区の天神社のどぶろく祭りだけは戦争中も続けられていました。祭りの中心は青年会で、小学校5年生の3学期に入会し、25歳までの人たちで運営されていました。戦争が激しくなるにつれて工場への動員や軍隊に行く人たちで、だんだん会員数が少なくなり、笛や太鼓たいこを出すのに困難な時もありました。終戦になり軍隊からの復員や工場から帰られた人たちで青年会もにぎやかになりました。ぼくは予科練から復員されたばかりの隣の兄さんに連れて行ってもらって青年会に入会しました。青年会活動は活発で祭りのほかに、しろうと素人の青年芝居しばいも行われ、ぼくは二度出演した楽しい思い出があります。

今、当時を振り返ってみると、記憶は年々おぼろげになり、苦しかった思い出は薄らいできています。しかし、私たちが体験した悲惨な戦争を二度と起きないように、こうきゆうてき恒久的な世界平和に向けて何をなすべきか考えなければならない。

# 戦時中の頃

浜島平和

昭和18年ごろになると、だんだん食糧難が深刻化してきました。外国と戦争状態となっているので、食糧は輸入できないし、兵隊さんたちに食糧を送らなければならなかったからだと思います。

当然、私たち小学生も食糧増産のため、河原や空地<sup>あきち かいこん</sup>を開墾し、畑にし、作物を作りました。一本木堤や境川の河原の開墾を4・5・6年生が、私たち1・2・3年生で一本木堤<sup>つつみ</sup>の農地になった一角に、そば・さつま芋<sup>いも</sup>を植えました。先生方も男の先生はほとんど兵隊に行ってしまう、女の先生でしたが作付けについていろいろ教えていただきました。

昭和20年ごろには皆瀬川の所（ドボドボ）より横根川の入口までさつま芋を作付けしました。食糧不足は、当然私たちの食事も変わりました。さつま芋・いものつる<sup>かぼちゃ</sup>・南瓜のくき・もくさ・こじきのさとのきなどいろいろ食べました。

夏から秋にかけては、小学1・2・3年生は、いなご取り・おちぼ拾いなどの手伝いをしました。一方、4・5・6年生は、夏休みの宿題として軍馬のえさにしたのでしょうか、青草を刈って干草にする仕事が課せられました。4年生は5貫<sup>かん</sup>（1貫は約3.75kg）・5年生は7貫・6年生は10貫を学校に提出するのです。これは、なかなか大変な仕事で、刈った青草を道などに干すのですが、かなりたくさん刈ったつもりでも干草にすると、ほんのわずかになってしまいます。私は、3年生のとき経験をしましたが、高学年の人たちの苦勞がよくわかりました。

昭和19年、20年のころになるとB29という飛行機が飛んで来て、警戒<sup>けいかい</sup>警報<sup>けいほう</sup>や空襲警報<sup>くうしゅう</sup>が出るが多くなりました。名古屋の方は、毎晩のように空襲で火の海のように真赤な空になりました。朝になるとその灰が飛んで来ました。そして、ついに大府も攻撃を受けました。大府の農協の東から森にかけて焼夷弾<sup>しょういだん</sup>が落とされ、たくさんの方が燃えました。また、この北尾にも爆弾が2発落とされました。山畑の浜島富雄様の田、石原清治様の田です。

B29だけではありません。艦載機<sup>かんさいき</sup>からの攻撃も増えてきました。これは、洋上の航空母艦から飛び立ってきて、屋根すれすれぐらいに低空で機関銃を撃

ってきます。こんなことがありました。私と近藤正夫様の俊夫君の二人で境川に魚をとりに行ったとき、警戒警報が出た。二人で西堤防に上がったとき刈谷上空に艦載機（グラマン戦闘機）が飛んでいて、その中の1機が私たちの方へ飛んできました。そこに丁度トロッコの箱があったのでその中へ飛びこみました。それと同時に「バリバリッ」というものすごい音がしました。頭上10メートル位のところから機関銃で撃って来たのです。一瞬、機中の人影がみえました。恐ろしくて体がちぢむ思いでした。通り過ぎた後、外に出て辺りを見てみたら、箱の1メートル位下に弾丸の跡がありました。後で聞いたことですが、他の飛行機は普門寺方面にいた10人位をねらって撃ったということでした。

夜、横根の陣地（藤井神社の西方の高台に1個小隊ほどの兵隊が駐留していた）に探照灯（サーチライト）を見せてもらいに行きました。幾筋かの探照灯が名古屋上空に飛んで来たB29を照らし出していました。高射砲を撃ってもとどいていないようで、悠々と飛んでいました。毎日、毎晩のように名古屋や岡崎、半田などが空襲を受けていました。幸い横根山の航空機の倉庫や、大府の飛行場などはまだ攻撃を受けていませんでした。そのうちに大府も大空襲を受けるのではないかと心配されていました。

戦争が激しくなってくると人も物も不足して来ました。学生も女の人も軍需工場にかり出されました。兵器をつくるためです。特に、資源の乏しい日本だけに兵器をつくるための金物の回収がさかんに行われました。寺の梵鐘、火の見櫓、神社の金属製の神馬、普門寺では弘法大師像などをはじめ、各家庭のもち焼の網や、「ごとく」にいたるまで金物という金物すべて供出しました。私の家は山持ちであったので、松の木の大きいものを何十本も出しました。物不足は食糧をはじめ、私たち生活のいたるところに表われてきました。靴はなく、自分で編んだわらぞうり、雨が降ればはだしで登下校をしました。夜は灯火管制で、光が外に出ないよう電燈を黒い布で覆っているのです。暗い部屋にじっとしていたり、空襲警報が出れば防空壕にもぐりこむという日々でした。

やがて、昭和20年8月15日を迎えました。サイレンが、昼12時に鳴るようになりました。「あっ！ 空襲警報だ！」と行って防空壕にかけこむことはなくなりました。日々の苦しい生活は、それからまだ当分続きましたが、びくびくして生活することはなくなりました。

## あの頃は

加古悟朗

### のうはん きたくししょ 農繁期託児所

私の手元に古い写真がある。  
60年以上も昔の、今はやりの  
言葉でいえば、まさにセピア色  
の代物である。昭和16年初夏  
の長草地蔵寺で開設された託児  
所の記念写真だと思う。



〈長草地蔵寺 託児所記念写真〉

地域の農業が多様化したこの  
頃では、農繁期の実態がややぼ  
やけた感じがするが、米麦中心

で、しかも食糧増産が叫ばれていた当時の6月は、一年の内でも最も大変な季節であった。田畑一面に実った大麦・小麦を穫り入れ、田起し、代掻き、田植えと進む農作業を、動力なしの人手によって全てをしなければならないから、その忙しさは想像を絶するものがあった。“猫の手も借りたい”という諺もまさにこの時期を指したものだと思う。

大人達は、暮しをたてるために仕事第一であり、子どもの世話などしておられるものではなかったのだろう。そこで、学校や、地域の人達が、農繁期に幼児を預かる託児所を開設されたのだと思う。

写っている大人の人達は、学校の先生や寺の住職、区長さん、それに実際に遊び相手になってくれた高等科や実践女学校のお姉さん達である。家が農家でない方々だったのだろう。

保育園も、幼稚園もなかった頃の私達には、長草中の同年代の友達と逢えるはじめての経験に、胸弾ませて通った束の間の楽しい託児所であった。

わが国が、戦争突入の足を早め、やがて来るあの悲惨な敗戦の憂き目を見ることになるのも知らずに…。

### 食糧難時代

飽食の時代といわれる今日、食糧難といってもアフリカや、中東地域をはじめとした開発途上国の情報が、メディアによって知らされる程度で、食糧自給

率35%といわれても、一般にはさし迫ったことと感じられていない。

けれども、戦中戦後の食糧不足は本当に深刻であった。特に、戦後の数年間は、大陸からの引揚者や復員軍人によって人口は増加して、失業者が溢れ、食糧の不足は、まさに極まった。農村では、米麦は勿論、さつま芋や雑穀に至るまで統制の中で供出が義務づけられた。稲作に於ては、毎年現地検見が行われて実収高が算定され、種子と自家保有米を差し引いた量を供出米として国に買い上げられた。

しかし、当時国民一人当りの年間消費量とされた120キロは到底確保出来ず、米不足は恒常化し、配給米は遅配・欠配の連続だったと聞いた。食費は収入の60%以上だったとも聞いた。

私達の地域でも空地はすべて、非農家の人や都市からの疎開の人々、引揚者の方々によって開墾され、麦や芋が作られた。今の東海～緑線（県道）の両側2メートルほどにも作物があったのをよく記憶している。

学校の運動場も学級毎に区切られ、麦と芋を作って出来具合を競った。それほどに皆が協力しても食べ物は不足して学校では弁当が盗まれて、貧しかった子どもが悲しい思いをさせられた。学校は弁当を持ってこられない生徒のために、昼食を家に帰って食べることも認めていた。

盗難は村でも日常化していた。米、麦、芋、牛に至るまで、食物はすべて盗みの対象になっていたと思う。

「ドロボーが捕まった」と聞くと、私は何度となく消防団詰所へ走った。ここでは泥だらけで血を流して縛られ、許しを乞う男の姿があった。ほとんどは貯蔵穴からさつま芋を盗って捕まった人だった。

あの頃の思い出として鮮烈に頭に残るものに、もうひとつ買い出しの人達の姿がある。食糧買い出しの人には、ふた通りあった。家族に食べさせたいために、衣類や置き物などと、交換する人と、農家で大量に買って都市の闇市で売りさばく、闇ブローカーと呼ばれた人達である。主要な道路や、駅では、時々警察による検問があったが、捕まるのは大抵家族のために買った米や芋を持った人達だったと聞いた。

暗い悲しい時代であった。しかし、私達はあの体験によって、自立する心を養ったのかも知れないと思う。

## 戦中・戦後の子どもの遊び

山口 勝久

私が国民学校に入学したのは昭和17年4月で、その前年の12月に太平洋戦争が勃発していました。その頃の男の子の遊びはパンツク（メンコ取り）、ポコペン、ビー玉、軍艦遊戯、兵隊ごっこ、などで、女の子はお手玉、おはじきで遊んでいました。お正月には、羽子板、カルタ取り、双六などで遊びました。また、2月の天神社のどぶろく祭りで買った凧や、自分たちで竹を割って竹ひごを作り、絵や文字をかいた紙を貼って作った凧を、土手や電線のない田の畦の風のよくあたるところで、高くあげる競争をしました。また、自分たちで竹馬を作り、それに乗って鬼ゴッコをして楽しみました。

暑い日には、学校から帰るとすぐに、日の落ちるまで白鮎池や宮池、車池で泳いだり、魚取りをして遊びました。その頃、池の水は今よりずっときれいだったと思います。

長草、共和地区の方言だと思いますが「カエドリ」もよくしました。魚のいそうな小川の上下を鍬を使って土で堰き止め、バケツで水をかき出し、魚を捕る方法です。鮎、川エビ、ドジョウ、鯰等をバケツに入れて持ち帰り、母親に料理してもらい、夕食の貴重な一品として家族で食べました。地藏寺や、天神社の森で、蟬やカブト虫を捕って遊びました。トンボ釣りに、よく出かけました。

戦争が厳しさを増してきた頃、子どもだけで学校区外に出ることは禁止されていたのに、親に内緒で子どもたちだけで、刈谷市の境川まで釣り竿を担いで歩いて、ハゼ釣りに出かけました。ハゼ釣りをしていたら空襲警報が発令され、アメリカのグラマン戦闘機の機銃掃射を受けました。恐ろしさのあまり泣き出す仲間

もいました。今でも、その時の戦闘機の乗員の恐ろしい顔を忘れることはできません。弾が少しそれて誰も怪我をしなかったのが幸運でした。後日このことが学校に知られて、こっぴどく先生に叱られました。

学校の西側に高射砲陣地があり、職員室が軍の連絡本部になっていましたので、連日兵隊が連絡に走っていました。飛行場襲撃のため、名古屋の方から来



て長草のお寺の屋根スレスレに低空飛行していく敵機の飛行士が、左右をキョロキョロ見ていた顔の恐ろしさは、今でも決して忘れることはできません。

1年の時の受持ちは怖い男の先生で、授業中子ども同志で話などしているとそっと近寄ってきて、竹の根元で作ったムチで叩かれ、痛い思いをしました。

天皇陛下が伊勢神宮に参拝される時、東海道線を利用されます。その時には共和・大府間の大浜街道に横一列に並び、菊の紋章のついた列車が来ると、土下座して通過するまで頭を上げることはできませんでした。

戦後間もない頃、ある女の先生は、進駐軍が来ると、剣道の防具はだめだと言って、広い防火用水の中に投げ入れ、全部隠してしまいました。後でソフトボールで遊ぶようになって、お面を取り出し捕手用マスクとして再利用しました。

5年生の頃、学校で豚も飼育していました。担任の男の先生は私たちに豚の餌にするので蛇を捕ってくるように言いました。私たちは畑の畦や土手を捜し回り、何匹も捕えて学校に持ち帰り、豚小屋に投げ入れてやりました。見ていると、豚は蛇の頭を砕いて頭からボリボリと素早く食べてしまいました。私は蛇捕りで蛇に噛まれたことがあります。

進駐軍の兵士が、カメラを持ってジープに乗って、お寺や神社を見物に来ました。私たちが行くとチョコレートやガムをくれました。長草では、飛行場と日本軍が使っていた通信施設に短期ではありましたが、米軍が駐留していました。私たちが行くと野球を教えてくださいました。

進駐軍が去ったある日、私たち子どもは今までの遊びにあきて、何か面白いことはないか話し合い、持主不明で放置してある飛行場の格納庫を壊して遊ぶことに決めました。各自が家からノコギリや道具を持ち出し現地に集まり、格納庫を壊して遊んでいました。そのうち、次々と大人も加わり壊しはじめ、壊した材木を大八車や牛車で家に運んでしまったので、次の日の朝には土台が残っているだけでした。今思い出してみると、大変なことをしてしまったのですが、楽しい一日でした。大人たちは、後日、お寺の本堂で警察の取り調べを受け、始末書を一通書いて一件落着したと聞いております。

食糧も不足し、遊びのおもちゃの少なかった時代ですが、自分たちなりにいろいろ工夫し、戸外で無邪気に遊び回っていた時代が懐かしく思い出されません。

# 私の体験をひもといて

久野源之

私は、1937年12月生まれで、第二次世界大戦が終局を迎えた1945年は、8歳で大府第二国民学校（現・神田小学校）の2年生だったと記憶しています。

## 家庭生活の中での思い出

当時の私の記憶のなかで、家庭生活では、私の父は、戦争中、兵隊として中国大陸に出兵しておりましたが、途中で体をこわし、除隊して自宅に帰って来ました。私が学校から帰ると、見知らぬ男の人が家で寝ており、びっくりしてお婆さんに聞いたところ、私の父であると知らされ、子ども心に突然父親が現れ、たいへん戸惑った思いがあります。

父は、前に書いたように、兵隊さんであったため戦争のことには詳しく、アメリカのグラマン戦闘機が飛来した時には、庭で私に、あれがグラマン戦闘機であると即座に解説してくれたことを記憶しています。

当時、現在の北崎町小山（ゴルフ練習場・大樹）東の市道横根・北崎線東側の山には、軍隊の倉庫が建てられ、その中にアルミ管等が収納されていました。そのアルミ管の中に糸紐がはいっており、これが欲しくて仕方なく、近所の子どもたちと、失敬して来た記憶もあります。

この頃の私の日課は、祖父の指示により毎日学校から帰ると、「ビク」に一杯の「ゴかき」（落ちた枯れ松葉をクマデで集めること）を命ぜられ、山に行くことが日課でした。また、松を切った切り株の「アカシ」もよく採り、夜の自宅の明かりに利用しました。

特に、終戦直前は、アメリカ軍による空襲と大きな地震が恐ろしく、私の家でも庭に穴を掘って「防空壕」を造りました。そして、その「防空壕」の中で寝起きしていました。特に、名古屋の三菱重工が爆撃された夜は、西の空が真っ赤に染まり、朝目がさめると空から灰がどんどん降ってきたことを



〈防空ずきん〉

覚えています。

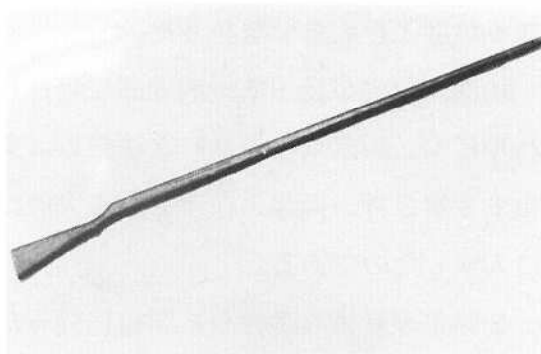
### 学校生活での思い出

終戦前は、ご多分にもれず私たちは「防空ずきん」を持って登下校した記憶があります。

当時、大府第二国民学校（現・神田小学校）に、小萩先生という先生が在職してみえて、小萩先生に引率されて現在の横根町午池の山に行き「戦争ごっこ」をおそわった記憶が、まず浮かんで来ます。

その頃、学校には大きな車輪のような輪があり、子どもが両手両足を結んで中にはいり、転がして体の平行感覚を保つ訓練になるという訓練用の輪のことを思い出します。

また、訓練用の木の鉄砲もあって物珍しく持って、子ども同志でエイッヤッと突いたりしたことを思い出します。



〈 訓練用の木製銃 〉

さらに、当時、食糧増産が叫ばれ、子どもたちも「境川のえんば」でのさつま芋の植え付け作業と収穫作業等の思い出があります。境川まで1 km以上の道のりを歩きで、時にはリヤカーを引いて作業に行きました。行きは農具を積み、帰りは収穫した作物を積んで帰ります。作物は、主にさつま芋でしたが、所によっては麦をつくったり、周りに大豆をまいたりしていたように思います。なかでも、収穫したさつま芋を学校で蒸してもらい、頬張ったあの時の「ふかし芋」の味は、今でも忘れることが出来ません。

### 田畑での思い出

当時、家の近くに多くの田畑がありました。終戦前後は食糧難でしたから、田んぼの稲につく「イナゴ」を採ってくると、母親が炒ってつくだ煮にしてくれたものを食べたり、さつま芋の芋づるまで煮て食べました。

池の近くの小川へ遊びに行くときは、たいてい「タモ」や「四つ手あみ」を持って行き、川にいる小さい「フナ」や「モロコ」を捕らえては持ち帰り、つくだ煮にしてもらった思い出があります。また、秋の稲刈りが済んだ田んぼでの「落ち穂拾い」などの情景を記憶としてたどることができます。

以上、幼かった頃に体験した第二次世界大戦での記憶をひもといってみました。

## 終戦の頃の思い出

千賀重安

終戦の日、昭和20年8月15日は、大府第四国民学校（現吉田小学校）3年生の夏休みの最中であつた。水遊びから帰ってきたら、なんとなく大人たちはしょんぼりとしたような、ほっとしたような顔をしており、日本は戦争に負けたのだと知らされた。しかし、何のことやらピンとこず、ましてその後どうなるかなど考えもしなかつた。

私は、父親が満州鉄道調査部に勤務しており、中国大連で生まれた。以後、ハルピン、新京（現長春）と移動し、父親が新京で死亡したため、終戦前の昭和18年3月、母親の在所である大府に引揚げてきて、現吉田小学校の1年生に入学したのである。

3年生の夏休みが終り、学校に行ったら朝鮮出身の同級生たちが、「俺たちが勝つて、お前らが負けたのだ」と急に威張りだしたのには参つた。今にして思えば、私たちはそんなに意識してないつもりでも、彼らには日頃の抑圧された思いがそうさせたのであろう。

なぜ朝鮮出身の子どもたちが大勢吉田小学校に通学していたかと言うと、現在の豊田自動織機長草工場や上ノ台一帯は、なだらかな丘陵地帯になっており、ここを飛行場にするための労働力として、朝鮮半島の人たちを家族ぐるみ移住させたのである。両親は飛行場の建設作業に従事し、子どもたちは吉田小学校に通学したのである。

戦争末期には頻りに空襲警報が発令されるので、通学団別に一時避難用の防空壕を自分たちで運動場の隅に掘つたのだが、朝鮮通学団は自分たちの両親は土方のプロだという自覚からか、どの通学団にも負けない深い防空壕を掘つた。あまり深すぎたので雨で崩壊してしまつたことを思い出す。

当時の吉田小学校の教室は、飛行場防衛のための高射砲、探照灯陣地勤務の兵隊さんたちの宿舎になっており、運動場は食糧調達のため兵隊さんたちが開墾して畑になっていた。飯盒にわずかばかりの米を入れ、さつま芋の葉や茎で増量した雑炊に、今日のご馳走だといつて捕らえてきた蛇を料理して、煮込むのを恐る恐る見ていたものである。

長草の飛行場には、大府駅から柞山を通過して資材を運搬するためにレールが

敷かれ、日に数本列車が走っていた。今は、レールの跡はかなりの部分が道路  
 になっている。また、終山には飛行場守備隊の本部があり、今でも防空壕跡の  
 陥没が問題になっている。

戦争末期には、若者だけでなく近所の友だちの父親たちも出征していき、出  
 征兵士の見送りや出征家族の家の農作業手伝いなど、小学校低学年の我々でさ  
 えも、結構多忙な毎日を過ごした気がする。

終戦後の食糧難を迎え、弁当を持ってこれず、学校給食の粉末ミルクを割当  
 ての一杯だけ飲んで、そと出て行く級友や、名古屋方面から来たと思われる  
 野菜泥棒の上品なおばさんと目が合ってしまった時のやりきれなさ。子ども心  
 にもいろいろな強烈な思い出を経て、西欧諸国に追いつけ追い越せと頑張り、  
 やがて飽食の時代を迎えた。戦後60年を振り返る時、人と人との争い、殺し  
 合う戦争というもののむなしさ、悲しさを深く思う。そして、平和というもの  
 の真の意味とありがたさを今さらながら痛感し、つらく悲しい戦争の思い出を  
 風化させないよう語り継ぎたい。

## 日本の使った戦費

大蔵省(財政史)は昭和二十八年、支那事変と太平洋戦争での戦費(戦争のための政府による直接的な金銭支出)の推計を行っている。

〔昭和財政史〕によると、戦費総額は約七千五百五十九億円。臨時軍事費特別会計(総額二千二百二十一億円)を中心にして、同会計に含まれない特殊な経費(国防献金、外資金座)などを加算。一般会計、特別会

### 90年分の予算

計の歳出の中から、直接戦争を目的とする経費を加え、復員費は臨時軍事費整理費が計上された二十二年度分までを計算した。

恩給、年金、遺族扶助料などにつ

### 戦争に使う

除外するはかなかったとしている。しかし、約七千五百五十九億円は単純な合計で、インフレによる物価変動などは考慮しない額。このため、同史は、東京の卸売り物価指数をもとに各年度の支出額を換算、修正を行っている。

昭和二十八年の貨幣価値で表した戦費総額は約八十九兆二千三百九十五億円。この数字は、この年の日本の一般会計予算の約九十年分に当たる額だった。

一般会計予算額と臨時軍事費(「昭和財政史第四巻」より)  
 (単位100万円)

年度	一般会計 予算額	臨時軍事費
昭和12	2,981	2,540
13	3,550	4,850(第1次追加)
14	4,882	4,605(第2次追加)
15	6,173	5,460(第3、4次追加)
16	8,657	11,673(第5、6、7次追加)
17	9,317	18,000(第8次追加)
18	14,459	27,000(第9次追加)
19	21,788	63,000(第10、11次追加)
20	28,951	85,000(第12次追加)

『あの戦争』産経新聞社編より



〈戦時報国債券〉

## 第二次大戦の思い出

藤 戸 衛

約60年前の薄れゆく不確実な記憶をたどりながら、第二次大戦を思い出してみたいと思う。静かな山村に生を受けた自分には、戦争による悲惨な体験はない。しかし、幼児期における心身への影響は大であったと思う。

“天祐ヲ保有シ萬世一系ノ皇祖ヲ踐メル大日本帝国天皇ハ……朕茲ニ米国及ヒ英国ニ対シ戦ヲ宣ス……”で始まった大東亜戦争。真珠湾の奇襲戦果、マレー半島コレヒドール上陸、ジョホール水道の進攻、昭南島（現シンガポール）の占領、一方、ビルマ（現ミャンマー）のラングーン（現ヤンゴン）を占領してマンダレーまでの進攻、また、チャンドラ・ポーズ氏による日本国のかいらい政府の樹立。目まぐるしい戦果を追って地図上に日章旗を表示した。また、学校では神武・綏靖・安寧・懿徳・孝昭・孝安・孝霊・孝元・開化・崇神・垂仁・景行…と歴代の天皇名を棒暗記することが、学業成績の基準になっていたものである。“朕惟フニ我皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ……爾臣民 父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ……”の教育勅語。

校長先生が奉安殿から恭しく取り出し、ゆっくり朗読された。その経過時間の長いこと、その結果生理現象に支障をきたしたこと、いろいろたくさんの思い出を残してくれた。

当時、1・2年生の低学年の小学生には、無理強い面が多かったと記憶している。習字の時間には、“撃ちて止まん”“鬼畜米英”“盡忠報国”など、戦争一色の字句であった。そして、戦地への慰問袋に同封されたものである。

一方、唱歌の時間では、“天に代りて不議を打つ忠勇無双の我が兵は、”とか、“花も蕾も若桜 五尺の命ひさげて国の大事に殉ずるは 我ら学徒の面目だ 嗚呼紅の血は燃ゆる”（学徒動員の歌）など音律による教育をされたことも思い出される。

時を経て敗戦色が濃くなると、新聞紙上に転進、玉砕という文字が見られるようになってきた。また、アッツ島玉砕、タラワ、マキン、サイパン島、硫黄島と続き、本土決戦の字句もちらほら見られるようになった。

一方、各家庭においても戦需品の原料とするために、金属類の回収が行わ

れ、我が家も大小の火鉢を供出した覚えがある。

時を経ずして制空権を失ったせい、空襲の被災都市名が並び、「軽微なり」と新聞で伝える一方で学童疎開が始まった。田舎の親戚へ、また親戚のない学童は、集団疎開として親元を離れ、遠くの寺院などで集団生活を強いられることになる。10歳前後のまだ母親の乳房が恋しい子どもにとって大変な負担であった。我が家においても、被災した、神戸・大阪等からの疎開で5世帯19名の生活をした。農家であったために、少ない食糧をみんなで分かち合いながらの生活であった。ただ芋づる等食べられるものを巾広く採取して、食卓にのせてくれた。祖母や母親には、毎日が苦勞の連続であったことと思う。

“ただ感謝”こんな生活が続いて、ついに昭和20年8月15日を迎えた。よく晴れた暑い夏日であったと記憶している。

“堪工難キヲ堪工、忍ビ難キヲ忍ンデ”の終戦の詔書を聞くことになった。12時のラジオ放送であったが雑音が多くよく聞きとれなかった。ただ、父親は落胆して“氣力がなくなった”とがっかりしていた姿が思い出される。

ある時、今まで自分が信じていたことが、無惨にも砕けちったらどんな態度をとるだろうか。私は小学校6年生12歳であったため、如何なる行動をしたか定かな記憶はない。

以後、復員、ヤミ市、戦災孤児と混乱の戦後に突入する訳であるが、“教育の重要性”をあらためて身に感じる今日この頃である。

ましてや、現在の世相を見るとき……やはり、教育は百年の計である。

## 教育勅語

教育勅語は、明治23（1890）年10月30日発布された。勅語は、さっそく全国の学校に配られた。学校では、奉読式がおこなわれ、三大節（旧制の三大祝日、新年・紀元節（建国記念日）・天長節（天皇誕生日）のこと、のちに明治節（明治天皇誕生日）を加え四大節）などの式では、朗読されるのが例になった。また、子どももこれを暗唱させられた。後には、学校には奉安殿がつくられ、御真影（天皇の写真）とともにその中に保管された。教育勅語は、これ以後、教育の目的と理念を示すものとなった。

教育勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹  
ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心  
ヲ一ニシテ世世厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精  
華ニシテ教育ノ淵源亦実ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝  
ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉已レヲ持シ  
博愛衆ニ及ホシ学ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓発シ  
徳器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ  
重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天  
壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ独リ朕カ忠良  
ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顕彰ス  
ルニ足ラン

斯ノ道ハ実ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ  
俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外  
ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ拳拳服膺シテ威其徳  
ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日  
御名御璽

## 四国での戦争体験

三好誠雄

私は今年古希を迎え大府市に在住して40年が過ぎた。生まれ育ちは、四国の愛媛県新居浜市磯浦町、山が近く海は瀬戸内海に面して風光明媚な町です。四国山脈には住友別子銅山があり、それがもとで四国一番の工業都市になりました。

9才、小学生の3年生の12月8日に第二次世界大戦が勃発し、ハワイ真珠湾攻撃等、当時の大本営発表の戦勝のニュースが、ラジオから流れていたことを記憶している。戦争も3年を過ぎ、4年目になると明らかに旗色が悪くなり、特攻隊や占領していた島が敵の巻き返りで玉砕の報道もされるようになった。

私たちの小学校も国民学校に変わり、3年生までは男女共学だったが、4年生からは男子だけの組になり、軍隊帰りの先生が担任になった。組で誰か一人悪いことをしたときは、全体責任だと全員を並ばせて、竹で作った敢闘精神注入棒で頭を叩かれた。運動場は食糧不足のため開墾して、さつまいも畑やなんきん畑にして、収穫したものを小使室にて茹でてもらい食べた。登下校は6年生が班長で集落ごとに整列し、カバンと防空頭巾を持って通った。教科書は兄弟のいる者はすべてお下がり、着る物なども木綿か人絹のお古です。履物は下駄や八つ折、藁鞋で、運動靴などは配給でめったに履けません。学校での運動はドッジボールぐらいだった。

家庭での食べ物というと、お米は殆どは軍部へ供出となり、一般の家庭ではむぎ、支那米、こうりゃん、さつまいも、じゃがいも、なんきん、かんころ粉等が主食で、食べ盛りの子どもの多い家庭の母親は大変でした。私たちの少年時代は、「欲しがりません勝つまでは」と、貧困にも耐え戦争遂行のためにすべてを犠牲にしたものです。

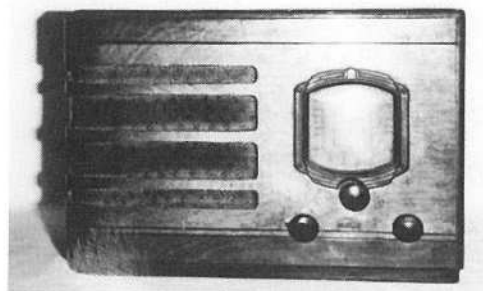
昭和20年に入ると、愛媛県の主要都市、松山市・今治市は、焼夷弾攻撃を受け、遠くからでも火の手が見え、その後は焼野原になっていた。私たちの町新居浜は、住友共同電力会社を目標にした爆弾攻撃を受け、私たちが避難している集団防空壕から50メートルの所に直撃弾を受けた。壕の中まで爆風が入り、みんなその時は大人たちは口々に手を合わせて、南無阿弥陀仏をと覚えて

お祈りをしていた。今思うと、まさに「生と死と隣り合せ」だったといえる。その時、同級生のお父さんが防空壕に入っていなかったので、爆風による破片を首に受け即死された。それから、戦闘機による（グラマン）機銃掃射を何回か受けた。そんな時にも我が国の防戦の抵抗は何もなく、四国山脈の上空をB29爆撃機が飛行機雲を引いて悠々と飛んでいくのを見て、子ども心に我が国の軍事力の無力さを感じたものです。そんな中でも、日本人は神風精神で敗けるとは思っていなかった。8月に入って6日広島、9日に長崎へ原子爆弾が投下され、8月15日の玉音放送を耳にして、戦争が終ったことを実感した。戦争が終って、大人の話だと、四国の新居浜市も広島や長崎のように原子爆弾の標的にされていたが、新居浜市の西部海岸に捕虜収容所があり、約300人ぐらいの外国軍人が収容されていたため、爆弾や機銃掃射のみですみ、焼夷弾と原子爆弾を免れたと聞かされた。捕虜収容所のあったおかげで現在生きておれると思うと不思議です。終戦になってその捕虜の人たちに対して、飛行機から落下傘で多くの物資の投下がなされた。その物資とは、私たち少年には戦争中見たことも食べたこともないチョコレートやチューインガムで、彼らはそれを持って玉子等と交換にきていました。また捕虜の人たちは終戦と同時に自由になり、近くの海で水泳を楽しみ、勝利を喜んでいるように思えた。

私たち日本人が敗戦によって失ったものは、多数の人命や美しい自然など数限りない。ただいえることは、軍国主義がなくなり、民主主義の国に生れ変わったことが唯一の救いだと感じています。

私たち戦争体験者、特に核兵器の恐ろしさを体験している国民ですが、今後戦争が起これば核が使われる。そうなれば、人類滅亡の危険さもあります。

「戦争を知らない子供たち」が60才を迎え、国のリーダーになっている。そういう人たちが体験の話を耳にして、世界の人たちに訴えていかなければいけないと思います。



〈終戦前後のラジオ〉

## 三弘法参り

青山郁博

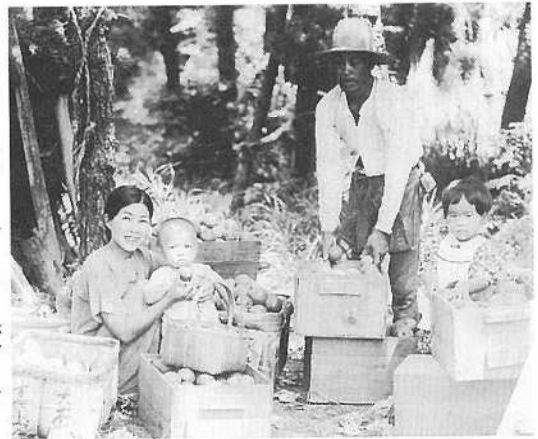
戦争が終わったのは、私が小学校1年生の時でした。戦争の恐ろしさやその悲惨さを、直接体験することは有りませんでした。空襲警報が鳴って防空壕へ逃げ込んでいたことや、探照灯の光の中を飛び交うB29の姿や、名古屋の空襲により、雪のように空から降ってきたおびただしい灰のことは、克明に脳裏に残っております。

また、食糧事情が厳しく、農家であった私の家でも、米だけのご飯を食べることはありませんでした。大根雑炊や薩摩芋の入った芋粥をよく食べていたことを覚えています。食糧にしたのだと思いますが、学校にも自分で集めたドングリや薩摩芋の葉を持っていった記憶があります。

戦争の体験といえばそんなことですが、そんな時期でも、子どもなりに楽しかった思い出は沢山あります。近所の川や池は、今より自然も豊かで水もきれいでした。「良い子は、ここでは遊ばない」という看板もありませんでしたから、子どもにとっては絶好の遊び場でした。そこで泳いだり釣りやかえどりをして遊びました。また、家の人に家族旅行や遊園地に連れて行ってもらった記憶はありませんが、家の手伝いをしたり、たびたび三弘法参りについて行った記憶があります。

三弘法参りとは、弘法大師が刻んで残したといわれる自像（弘法大師像）を祀っている知立の遍照院、刈谷の西福寺・蜜蔵院の三つの寺を参拝することをいいます。大府の桃山の私の家から、この三つの寺を巡ると、距離にすると約30kmになります。これを歩いて巡るのです。毎月、旧暦21日の縁日には、お参りをする人で大変賑わいます。

子どもの私に信仰心があったわけではありませんが、「郁やあ、弘法さんに行くかあ」とおじいさんに声をかけられると、嬉しそうに「行く、行く…」と答えたものでした。ひよっとすると、ダンゴやウドンにありつけるかも知れないという、はかない期待があったからだと思います。



（梨の出荷作業の手伝い？昭和16年頃か？）  
左から母、私、祖父、従姉の三枝子

次の日は、朝早くから起きて、喜び勇んで出発です。横根から境川を超え、中手山から一ツ木の西福寺に向かいます。その頃は足取りも軽く、のどかな田舎道を遊びながら進みます。そして、一里山の蜜蔵院を参拝し、知立の町中に入ると大変な賑わいです。出店も多く、キョロキョロしながら、おじいさんにはぐれないように付いて行きます。おじいさんも興味があると、立ち止まって品物を物色したり、売る人の口上を聞いたりしています。おじいさんの買い物は、農作業に関連するものが多かったように思います。鋸の目立てをする鑿、鎌を研ぐ砥石、ある時は大八車もあったと思います。

遍照院を参拝すると三弘法参りはお終いということになりますが、帰りも刈谷の銀座の店々に立ち寄ってくるのが決まったコースでした。熊野から境川を渡り、大府新田が見えてくる頃には、もう疲れてくたくたですが、はるか向こうに桃山が見えれば元気を取り戻します。

おじいさんは、特別信仰の厚い人だったとは思いませんが、毎日、朝起きると必ず神仏にお参りをしていました。大きな木を切るときや土地を新たに耕すようなときにも、必ずお参りをしていました。そんな姿からは、現在の私たちに欠けている、人間の謙虚さや忍耐強さを学ぶことができたと思います。

また、歩くことは、あまり苦にしませんでした。若い時には、名古屋の市場まで桃をよく運んだものだと話しておりました。だから30kmコースの三弘法参りも苦にならなかったのでしょうか。そんな健脚は見習いたいものです。



### 空海 = 弘法大師

空海（774～835）は平安時代の僧、真言宗の開祖、おくり名が弘法大師。31才の804年に入唐留学の僧に選ばれ長安に行く。33才で帰国。43才の816年に高野山金剛峰寺をひらく。62才で高野山金剛峰寺において入寂した。

空海は、文学・美術・教育の各面でも著名である。また、彼は日本の書道界の祖としても重視され、嵯峨天皇・橘逸勢とともに三筆と呼ばれている。教育面における業績としては、綜芸種智院の開設があり、これは日本で初めて一般庶民の教育を行おうとしたものである。そのほか、濟世利民の業績はいろいろと口碑伝説がある。

なお、大府にも、お霜井戸の伝説が残っている。『大府市誌』本文編P888を参照

# 少年野球チームの復活

小田正年

## ◎野球のメッカ鳴海球場なるみ

ふううんきゆう 風雲急を告げる時代であっても、野球というスポーツは、人々の心の中において、生活にうるおいを持たせていました。国民的スポーツとして愛されていました。しよくぎよう 職業野球、じつぎようだん 実業団野球、大学野球、中等学校野球、少年野球、一般社会人野球として、その底辺は幅広いものでありました。

「野球王国愛知」という言葉が、なつ 懐かしく思われてなりません。それは何と云っても、野球のメッカ鳴海球場があったことです。球児たちの心をゆさぶりました。甲子園への道として、いだ あこがれを抱かせたものでした。東海道本線の大高駅から鳴海球場まで、歩いて見に行った少年の日の思い出…。

## ◎無敵大府第二小（現神田小）クラブ

きんべい 久野欽平投手を擁する大府第二小クラブの活躍。県一となった日の喜び!! 全村こぞってのことに違いありません。今日は試合だといえ、農作業の忙しい5月でも、弁当持ちの応援に出かける地域。“大府第二”向かうところ敵なし? 無敗の“大府第二”クラブとは、どの様なクラブだったのでしょうか。それは、地域と学校の呼吸があっていたということ!! それは、現在にも通じるものです。

その野球も、戦争が激しくなると、てきせい 敵性スポーツということで禁止され、学校から姿を消すことになったのです。

## ◎終戦の日＝昭和20年8月15日

この日はちようそう 町葬の日でした。高等科女子の教室を式場として行われた正午12時。ぎよくおん 玉音放送によって知らされたものです。はっきり聞き取れなかったが、周辺の様子からして“敗戦”戦争に負けたらしい? ことが察せられたのです。一瞬にして式場内は異様なふんいき 雰囲気となり、私も運動場へ飛び出しました。暑い夏の日、素足のままほうぜんじしつ 茫然自失、あまがね 雨兼の池もよどんで見えませんでした。名状し難い気持ちで、棒切れでもって、池へ小石を打ち込むのでした。

一夜明けた翌朝、若者の考えは一変していました。「よし、これで物理的に死ぬことは無くなったのだ。もう一つ上級学校へ行って、教師となる資質を身につけよう。健康で明るい子どもたちにするには、スポーツに限る。野球をや

らせよう。半田商業の4年生繰り上げ卒業、  
代用教員では駄目なんだ。」

自宅にある野球用具一式を学校へ持って  
行き、4年生以上の男子に野球部をつくる  
ことを伝えました。希望者は大きい手袋を  
作ってもらえということで、グローブの型  
紙を見せたのですが、本物のグローブが、

またまた  
瞬く間に集まったのです。これは、戦前か

ら社会人野球が盛んで、大府クラブのあったおかげだと思います。

授業後は、明けても暮れても練習でした。校長さんの英断で、いも畑の運動  
場もグラウンドとなるなど、めきめきと上達するのですが、練習試合の相手のい  
ない半年間でした。学校も復員して来る男子教員で活気づいて来ました。

#### ◎大府第一に負けるなんてことがあるか

昭和21年の秋、大府第二小と練習試合ができることになり、部員の子らと  
自転車天国気取りで横根街道を…。楽しい思い出です。試合は一日の長があっ  
て、言うまでもなく快勝。ところが負けた第二学区の人々が納まらないので  
す。「第一に負けるってことがあるか。あの時の先生は、今どこにいるんだ。  
あの先生にもう一度戻って来てもらおう!!」この剣幕には、驚き以外なもの  
もありませんでした。

自転車天国も帰路は地獄でした。「先生が、二人乗りしているとはけしから  
ん!!」横根の駐在さんに一喝され、あわや罰金というのですから。学校へ帰  
り、校長さんに報告…。校長さんの陳謝で許していただけました。

#### ◎女の子にお転婆なことを

6年女子にもソフトボールを教えた昭和21年秋、上野町の平洲小に1点差



〈女子ソフトボール選手の面々、桃山公園で 21.10.18〉

で負けてしまいました。強いチームでし  
た。長草街道を歩いて上野町まで行っ  
たのです。クラスぐるみの応援です  
ので、遠足気分が想像されますが、  
帰りは涙・涙でした。「女の子です  
から、野球なんてことやらせない  
てください。そんな、お転婆なこ  
とを!!」

昭和21年！ かくせい 隔世の感を抱くものです。



〈復活した少年野球チームの面々、正門前で 22.4.14〉

# 私の戦争の記録

伊藤 一雄

戦後57年、世の中の景気が悪いとか、生活や子育てにお金が掛かり過ぎると言っておりますが、戦争当時を思えば、まさに天国と地獄のようである。

私は、大府市でも一番北のはずれ、通称井田山<sup>つうしょういだ</sup>と呼ばれている所で、昭和8年に生まれた。中央の山には、数百本の桜が植えられていて、山あり、谷あり、いくつもの池から連なる小川のほとりには、四季の花が咲き乱れていた。桜の花が咲く頃には、阿刀山<sup>あとうざん</sup>から井田山に連なる桜は特に見事で、大勢の花見客が名古屋からやって来たとか。当時の写真がないのが非常に残念です。そんな井田山は、養蚕<sup>かいこ</sup>と果樹を栽培する農家が、僅かに十数軒ほどで、静かで穏やかな山村でありました。

昭和16年12月8日の真珠湾攻撃<sup>しんじゅわん</sup>、ついに日本はアメリカとの戦争に突入してしまった。それから、4年近くの太平洋戦争となり、歴史は大きく変わっていった。翌年4月18日午後、アメリカの飛行機が初めて飛来したのに驚き、先生方は大変な騒ぎであった。戦争が次第に激しくなって、食糧増産によって村の環境も大きく変わった。桜山はなくなった。桑畑も果樹園もみんな伐採された。村の農業は、畑では麦とさつま芋の作付けで二毛作、田んぼでは米と菜種、あるいは麦の二毛作、人の手間も増えて子どもも一人前に手伝った。

昭和19年になると、戦局は日増しに激しくなり、先生とともに境川の河川敷<sup>かせん</sup>を耕し、さつま芋を作った。運動場もさつま芋畑になった。勉強もさることながら、時流に従わざるをえない時代であった。お寺の釣鐘や、真鍮の仏具、火鉢<sup>ひばち</sup>など、みな供出した。

警戒警報が発令されると、学校から即帰るが、途中で空襲警報が発令されることも多かった。時には、よその家に飛び込んで隠れたこともあった。この時ほど、学校が遠く感じられ辛いことはなかった。真夜中にB29が名古屋の大江<sup>おお</sup>辺りを空襲のときは、裏山の高台から良く見えた。人の叫ぶ声が聞こえると誰かが言った。身震いがしたので家に帰って布団に潜ったが、朝まで寝付けなかった。空襲も度重なり、本土決戦が叫ばれるようになった。大府の米田にも爆弾が投下され、南島も数十軒が空襲に遭った。先輩たちが境川の河川敷で農作業をしていたら、艦載機の銃撃を受けた。幸いに、全員無事で何事もなかつ

た。それた弾が、普門寺と隣の安藤さんの家を直撃したが、被害はなかった。

昭和19年12月7日午後、大地震が襲った。地割れがした所、道路がずれたり、家が傾いたり潰れたり大変であった。学校から急いで家に帰ると、納屋が倒れて大騒ぎをしていた。その納屋の隅で但馬牛と鶏数十羽を飼っていた。納屋の合掌には、上三垂木が数屯も入れてあった。牛と鶏が下敷きになり、親戚や村の人達の応援で、夕方遅くやっと牛を引き出すことが出来た。翌日も、村中総出で後片付けをしてもらった。この村には、老いを従容として受け入れる風があり、それなりに元老として称えられ尊敬され、その一言で村全体が動いた。私は登校した。道路ぞいの墓石も随分倒れていた。学校は大きな被害はなかったが、境川のさつま芋畑付近、清水橋の両脇500mくらい堤防が崩れた。鉄道線路も曲がった。続いて、昭和20年1月13日未明、また地震があり、揺れが激しく戸が開かず障子を倒して外に出た。この時は、大府も随分被害があったようだ。

大きな地震が二度も重なり、空襲は激しくなり、家は焼かれ人が死んだ。本土決戦の意味も分からず、私たちの心は落ち着かず、まさに戦場といった最悪の状態であった。名古屋からの疎開者が急に増え、教室は一杯になった。勉強どころではなかった。横根山一帯には、三菱重工が大江から疎開してきた。愛知時計が空襲された時は、生きた心地はなかった。警戒警報が発令され、急いで家に帰る。何時ものように空襲警報になった。3人の友達と藁のツボケに潜った。間もなく警報は解除された。やれやれと思い、5～600mほど歩いた時、突然ゴオーッと音がして、しばらくしてドンドンドンと物凄い爆発と地響きである。辺りが暗くなり、太陽が赤く見えた。一面田んぼと池で、身を隠す所がなかった。地獄の一丁目である。皆小川に飛び込んだ。しばらくして顔を見合す。一人が言った。「よかったね！」皆も言った。「よかった！よかった！」子どもながらに無事を確かめ合い家路に急いだ。

やがて8月がやって来た。待望の夏休みであるが嬉しくなかった。麦刈りや田の草取りが待っていたのである。昭和20年の夏は、特別に暑さを感じた。その夏の日、広島と長崎に原子爆弾が投下された。これが引金になって、4年間にわたる太平洋戦争は終止符がうたれた。日本は絶対に負けないと教育をされて来たので、なかなか理解できなかった。大事な基礎教育を学校で受けることが出来なかった。この戦争中の4年間のギャップは、一生かかっても埋まらなかった。(文中、大府の米田にも爆弾とあるが、正確には東浦町地内であった。)

## 踏みにじられた人間性

小川 雅 康

枕もとに防空頭巾、寝巻きに替えることもなく、着の身着のまま寝床に横になるのは、十分な睡眠を約束されることもなく、つらい毎日の連続だった。寝付けないままに、いつも思い出していたのは、戦争前の近所のお菓子屋さんで交わした、おばちゃんとの楽しいやりとりだった。

「おばちゃん一銭ちょうだい」「またマコロンかい?」「うん」「あいよ」と、新聞紙を四角に切って作った三角袋に、手際よくマコロンを入れ「一つおまけだよ」といって渡してくれたおばちゃんのこと。三角袋をポケットに押し込んで、マコロンを口にほおばった時の、落花生の香ばしい香りが口一杯に広がったときの満足感。おぼろげに、このあたりまで記憶があることを思えば、この後眠ったのだろう。

寝るときには、いつも姉と、お菓子の買える日がこれから先くるのだろうかとか、警戒警報のない日があるのだろうかなど、布団の中で泣く泣く話し合った。「お菓子が買える」というのは、当時のもののない時代において、子どもにとっては、平和そのものの象徴であったように思われてならない。

年を追って、食糧も色々な生活物資も逼迫の度を増し、学校生活にもいろいろな変化が現れ始めた。学校には軍人が入り込み、児童の学校生活にもいろいろな制約が加えられ始めた。学校のある一部には、絶対に近寄ってはいけないとか、何か秘密めいた不穏な空気が流れ始めた。

くる日もくる日も、硬い硬い運動場を掘り返し、塹壕と称する深さ1メートルほどの穴掘り、食糧増産と称して運動場の土起こし、サツマイモの栽培など、およそ勉強とは縁のない学校生活の毎日であったように思う。

しかし、ひもじさに逆らうすべもなく、パン半斤に釣られて、何に使うかわからない木材運びをしたり、モッコでの土運びと、小学生にとってはかなりきつい労働を強いられたことは、忘れることが出来ない。

授業らしきことはほとんどなく、理科の授業と言えばモールス信号と手旗の練習。体操は、もっぱら木剣での紅白試合。子ども心に、こんなことで算術や国語はやらなくてもいいんだらうかと、心配になるほどだった。

戦時中の子どもは、程度の差こそあれ、一種の知的飢餓状態にあったことは、

否めない事実であった。従って、<sup>とうかかんせい</sup>灯火管制の中、教科書にしがみついて、必死になって漢字を勉強したことを昨日のこのように思い起こす。考えてみると、人間あまり恵まれすぎた状況に置かれると、当然のことながら何事にも飢餓的状态は起こりにくい。その意味では、戦争は非人間的行為ではあるけれども、極限における人間の行動様式に、良くも悪くも大きな影響を及ぼしたことは事実である。このことは、現代日本の教育の実態を重ねてみると、様々な面において興味ある論評が交わされてもおかしくない。

戦争が激しさを増す中で、「<sup>ぜいたく</sup>贅沢は敵だ！」とばかり、金属の回収が何度も行われ、「<sup>けんい かたまり</sup>憲兵」と称する<sup>けんい</sup>權威の塊のような軍人が、町内会長と共に集められるものについて目を光らせて監視する有様は、子ども心に恐ろしさを感じたものだ。子どもは現在の資源回収よろしく、種類別に金属を分別させられ、整理する役割を負わされた。しかし、金属回収も色々トラブルつづきで、「あそこの家は出さなきゃいけないものを隠している」とかいなとか、住民がお互い<sup>せんさく</sup>に詮索しあうというようなことが起こって、町内会の人間関係は「とんとんとんからりと隣組」というようにはいかなかったようだ。

父親の転勤もあって、半田に一時移住したのは6年生の2学期からで、その年の冬の朝、登校途中に、名古屋方面から黒い灰がまるで雪のように降ってきた時の光景は、今でもはっきりと目に焼き付いている。

移住先にはまだ<sup>ぼうくうごう</sup>防空壕も無かったため、急いで<sup>てっきん</sup>鉄筋コンクリートの<sup>がんじょう</sup>頑丈なもの<sup>を</sup>父親が用意してくれた。爆風を防ぐための<sup>じょうぶ とびら</sup>丈夫な扉が何となく心強かった。間もなく中島航空機への<sup>くうしゅう</sup>空襲があり、1トン爆弾のそれ弾が、防空壕から10メートルと離れていない場所に落下した。爆弾が空気を切り裂いて落ちてくる音や、着弾のものすごい振動と爆風は、恐怖そのものだった。

社宅の近くには、女子<sup>ていしんたい</sup>挺身隊の寮があり、空襲で傷ついた挺身隊の方々が、血まみれになって「助けてください！」と、泣き叫びながら壕に転がり込むようにして入って見えた時には、もう日本も終わりだと、子ども心に確信した。

空襲の翌日傷ついた馬が解体され、町内の希望者に配給され、みんなバケツを持ち、先を<sup>きそ</sup>競って配給を受けた。一方犠牲者がたくさん出たため、<sup>かそうば</sup>火葬場が間にあわず、野原で何体もの遺体が<sup>だび</sup>荼毘に付され、その炎と煙が夕焼けの空を一段と赤く染め上げていた様子は、<sup>まぶた</sup>臉上に焼き付いて離れることはない。

# 生きること

田 邊 泰

暑い夏だった。夏休みの楽しみ、蟬とり・とんぼとりに夢中だった。突然、頭上を黒っぽい飛行機が低空飛行をしていった。後で教えてもらって分かったことだが、アメリカのグラマン戦闘機であった。木陰から見た戦闘機は、操縦席も見え、そのときは格好よく見えた。

その日か、次の日だったか記憶にないが、あの聞き覚えのある凄まじい飛行機の轟音が耳をつんざいた。次の瞬間、バリバリともものすごい音がした。庭先で、飼っていたにわとりと遊んでいた私は、反射的に、家の中に飛び込んだ。機銃掃射で近くのおばあさんが亡くなった。改めて、戦闘機の襲来・機銃掃射の恐ろしさを知った。

顧みれば、小学校3年生であった私には、戦争の恐ろしさや戦争の惨たらしさが何であるか知らなかった。ただ、グラマン戦闘機の機銃掃射で、おばあさんの「貴い命」が失われた。このことが戦争体験として私の記憶に強く残っている。

私は、常滑で生まれ育ち、昭和40年10月から大府市在住となった。

## 【その1】終 戦

昭和20年8月15日、確か夏休みなのに、学校へ行った。何のために何を聞いたか定かでないが、午後、裏山から海を眺め、ああこれで戦争は終わったのかと子どもごころに何かを感じた。

灯火管制下の生活、防空壕生活、上空を通過するB29の異様さ、空襲による名古屋の空の異状さなどから解放された。

## 【その2】野菜づくり

戦後の食生活は、苦しかった。私の父は、サラリーマンであった。大家さんから畑地を借りて、米以外の麦、野菜類、いも類、まめ類を栽培した。麦の脱穀を夜間、玄関内でやった。ご飯は、米の姿が見えにくい麦飯ばかりであった。未熟のトマト・サツマイモは、空腹の私を満足させた。

## 【その3】開 墾

自宅から4kmほど離れた知多丘陵にある開墾地を手に入れたが遠い。農具・

肥料を運ぶガタガタ車を引く我が身は空腹、藁ぞうりがすぐ切れ、肥がピチャピチャ身体にかかった。道端の小川で銭亀を捕らえたことが懐かしい。樹木を倒し、根っこを掘り起こす、知多特有の礫層地の開墾は、半端じゃない。水は、近くの池から運んだ。こうもしなければ、親子6人が生きられない。あの頃の両親の農作業姿が目には焼き付いている。

#### 【その4】買い出し

父親の趣味は、写真であった。自慢の愛用カメラがいつの間にか姿を消していた。後で、これが米・いもに代わっていたことを知った。必需品以外のものから手をつけたようだ。母親の結婚したときもって来た着物も食料に代わった。私は、母親に連れられて「買い出し」に出掛けた。母親の手には、いつも風呂敷包みがあった。帰りには、両手に少しの米といも・野菜があった。育ち盛りの私には、何物にも代えられない貴重な「生きる糧」であることを強く感じた。小学校高学年になっていた私には、家のたんすの中が寂しくなっていたことが分かっていた。栄養失調で命を落とす人もたくさんいたところのことであった。「生きることの大変さ」「生きることの喜び」とは、このことなのか。

#### 【その5】弁当

小学校高学年の学校給食では、味噌汁・イナゴの佃煮が出た記憶がある。主食が出たのかよく覚えていないが、家に帰って蒸したサツマイモ・ジャガイモをよく食べた。そのためか、今では好んでこれらを食べようとしなない。中学生のころの弁当には、強烈な辛い思い出がある。貧しいわが家にご飯の弁当をもって行ける余裕はない。アルマイトの弁当箱は、皆と同じだ。その中は「いもご飯」、いや、ほとんどいもばかり。恥ずかしかった。弁当箱の蓋を少しずらして、辛うじて口元に食物が入るように、背中を丸めて食べた。回りの級友の弁当の中味が眩しかった。羨ましかった。

それでも、元気でいられた。病気もしなかった。

#### 【その6】結局は…

その1から書き始めて今気が付いた。詰まるところ、「食べる」ことしか思い出せない。食糧難・育ち盛りであったこと、子どもゆえ大人の苦勞を知らなかったことは、確かにあった。それにしても、あのころは苦しかった。

戦後、50数年たった今、多くの子どもは、親や周囲の愛情を一杯にもらって、健やかに成長している。この子どもたちに、私たちが苦しんだあの体験を再び味わわせてはならない。世界の平和を心から願う。

# 赤い防空頭巾

長坂幸子

突然「ブーン」という音がした。

帽子をかぶせられた私は、叔母（母の妹）に手を引かれ、母の実家（現在の尾張旭市）の屋敷の中にある、竹藪の中へ連れて行かれました。逃げ込んだ穴の中は、水溜まりが所々にあり、叔母は水の無い場所を探しました。それ以外のことは何も覚えていません。私たちはそこにどの位いたのでしょうか。叔母に抱っこしてもらっていたので、怖くなかったのでしょうか。ただ「ブーン」という響きと、私の手を強く握っていた叔母の手の温もりだけは、（その叔母もすでに故人となり、子どもの頃に従兄弟たちと遊んだ防空壕も無くなりましたが）今もまだ忘れることの出来ない思い出となっています。

母は、戦時中昭和17年生まれの私と乳飲み子の弟（昭和19年1月生まれ）を抱え、大家族の中で百姓をしたり、主婦として生活をするのに大変だったので、父が復員するまで、私をほとんど母の実家に預けていたようです。その日が、昭和20年春の昼頃で、前日は雨降りだったこと、祖父母や叔父たちは外出中で、叔母と一緒に留守番中の空襲警報で防空壕に逃げたことなどを、小学生の頃に祖父が話してくれたような気がします。そして、その帽子が「防空頭巾」であったことも。



また、終戦直後母の実家へ行く時の光景も忘れることが出来ません。大府駅は、復員兵の大きなリュックサックを背負ったおじさんたち、買い出し袋や風呂敷を前に後ろに掛けたおばさんたちで溢れていました。ホームには、人が一杯で貨物列車が来ると弟を背負った母に手を引かれた私を、おじさんが荷物空き間に乗せてくれました。汽車が動きだしても、乗れない人もいたり、ぶら下がるように貨車の外側にへばりついていたり、途中で振り落とされた人もありました。乗れないというより積み残された人も沢山あって、次のいつ来るか分からない汽車を待っているのです。おじさんたちの親切は、母にとってどんなにか嬉しかったことでしょう。

大府駅の今の南口にあたる方面は、駅を少し出ると田畑ばかりで、広々とし

て家も無かったような風景が思い出されます。そして瀬戸電に乗り換えるために着いた名古屋駅。現在では、暫く行かないと、吃驚する程変身している名古屋駅西。今の新幹線の駅側になりますが、当時は駅裏と呼ばれ、その広場には闇市というお店が沢山並んでいました。やはり、そこにも復員兵姿のおじさんや買い出し姿のおばさんたちが沢山居て、そこには、浮浪児と呼ばれた戦災孤児も一杯いました。そこへ行くと母が何時もお菓子を買ってくれました。それが楽しみでした。そして、私の近くへ寄って来る浮浪児とお菓子を分け合っ  
て食べたことも懐かしい思い出です。私は、父が、復員して来たおかげで、今の幸せがあるのだと何時も感謝しておりますが、私よりお兄さん、お姉さんだったあの子どもたちは、どんな人生を送っているのだろうか。また、靖国の遺児と呼ばれた私の友だちも何人かありました。紙一重の幸せに感謝しながらも、その人たちのことを思うと心が痛みます。

小学校入学をひかえ、父の子どもの頃使っていたという大きな古い机を貰い、父が大好きだった私は、嬉しかったのを覚えています。そして、その部屋の窓際に置かれた机の前に座った時、机の横にある棚を見上げた私は、そこに赤い布のような物を見つけました。あの「赤い防空頭巾」だったのです。懐かしい人に逢ったような、大切な宝物を見つけたような、あの感激は忘れることは出来ません。そのとき「幸子に作った防空頭巾だよ。空襲の時に何時もそれを被ってたんだよ。」と母が話してくれました。真っ赤では無いけれど、薄い縦縞のある赤い布地で、綿の入ったものでした。

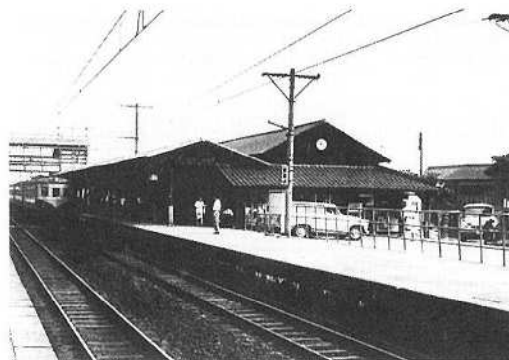
昭和23年4月、私の小学校入学当時は文字どおり物の無い時代で、ランドセルも母の帯芯で作った手作りの物、履物は祖母が作ってくれた藁草履（鼻緒に自分の好きな色や柄の布を織り込んで貰って、結構楽しんで履いていました。）靴は、配給制で近くのお店屋さんで配給切符を貰い、今の農協の広場にトラックが来て、買ってもらったような気がします。あまり、靴は履けません”でした。ノートや鉛筆は無く、石板に石筆で“さいた さいた さくらがさいたと書いたような気がします。教科書も、ほとんど上級生のお下がりをお母さんが買って来てくれました。このような時代を体験した私たちには、物を大切に  
する心と我慢する心だけは育ったような気がします。また、今の神田町一丁目の名所が峰の近くにあった防空壕へは、みんなでよく遊びに行ったものです。その頃は、格好の遊び場を見つけた私たちは、戦争のことや、そこに兵隊さんが隠れていた？ ことなど、何も考えずに遊びに夢中だったと思います。（近くの

山にも兵隊さんがいたそうで、終戦になった時、不用になった物をその穴に残して行ったそうです。)

今年も8月15日に終戦記念日が巡って来ました。

この日「第84回全国高校野球選手権大会が開かれている阪神甲子園球場では、正午にサイレンが鳴り響き、二回戦の川之江（愛媛）と浦和学院（埼玉）の試合中だったが、選手たちはプレーを中断し、グラウンドで黙禱した」という記事を読み、このような場所でも、戦死者に感謝と祈りの行事が行われていることを初めて知り、感動いたしました。8月末に、高浜市の“かわら美術館”へ戦没画学生の「いのちの絵展」を見に行った折り、孫と同じくらいの年齢のお子さんが「この絵なに？」「どういう絵なの？」と同じ言葉を繰り返して聞いているのに、そのお母さんは、ご自分が絵を鑑賞するのに一生懸命だったのでしょか。何時迄も返事をされませんでした。私は、そのお子さんに話しかけたい気持ちで一杯でしたが、お母さんの立場を考えて、ぐっと気持ちを押さえて帰って来ました。私も、自分の子どもたちにささやかな戦争体験など話したことがあったらどうか。自分の娘たちと同じ年代のお母さんに、自分の子どもたちの姿が重なり良い反省の機会をいただきました。

戦争が風化して行く中で、家庭で戦争体験を語り継いで行くのは難しい時代になったと思います。でも、良い服が着られて、美味しい食事が食べられるのは戦争により、いろいろな形で犠牲者となった方たちに感謝しなければならないこと、そして、芋粥、芋づる粥を食べた経験を持つ者として、「赤い防空頭巾」を二度と幼子に被せないためにも、家庭や地域の子どもたちに話していきたいと思います。8月15日を、ただ単に慰霊と祈りの日に終わらせることなく、「戦争の世紀」を本当の意味で過去のものにするためにも、語り継ぐ責任を感じ、「平和な世紀」を願って、つたないペンを執らせていただきました。



〈昭和30年代頃の大阪駅〉

## 2. 学校での生活



〈第2分教場での1年修了記念（昭和23.3）〉  
初めて第2分教場に入った1年B組。担任は築波先生。校長は杉野辰五郎先生。

こども おじいちゃんは、どこにいるの？

わたし どこにいるか、わかるかな？ 新制中学1年生のときの写真だ。昭和22年4月から、戦時中の国民学校にかわって、新しい小・中学校による6・3制が始まったんだ。

こども みんな坊主頭ぼうずだね。中学なのに制服ではなかったの？

わたし 昔は、みんな坊主頭だったんだ。物のない時代だったから、制服なんかなかったし、買えなかった。

こども 校舎や教科書は、どうだったの？

わたし 校舎もなかった。大府小学校を借りていたんだ。1年生の3クラスは、終ひいらぎ山やまの分教場だった。戦後は、学校も私たちの生活も、大きく変わっていったよね。

# 大府第一国民学校では

祖父江 茂 子

「あゝ腹が減った。」1時間目の放課になって職員室へ帰って来られた先生方の第一声です。2時間目の長い放課が終わって、教室へ戻って来た子どもたちの中から「あっ、僕の弁当が無い。」と大騒ぎ。あちこち探し回ってトイレの裏に空の弁当箱を見つけました。放課に友達のもの食べる程空腹の子がいたのです。

校内でこの様なことが繰り返されるのは、食物の配給不足と闇物資が入手出来ず、親も子もひもじい思いをしていたからです。弁当を持参出来ない子は、昼は家に帰りますが、いも粥や、大根や豆などを入れた雑炊や、すいとんしかありません。食べるものが無くて欠食児童もいました。

生活物資も欠配し、石鹼や衣類も不足して来ましたが、工場では兵器の生産を最優先に切り替わりました。衣服は夏でも飛行機から目だたない黒っぽいものを着るようにとの通達があって、親の着物を再生し、モンペなどを作ってもらいました。

履物は、ほとんどの子が藁草履で、すり減って鼻緒が切れてしまい、帰りには良いのを失敬して帰る子、自分のが無いと泣く子に、前緒に布を裂いて裏側へ木など挟んで履ける様にして帰したことも度々ありました。

衛生状態が極端に悪くなると真っ先に虱や蚤が増加します。授業中ぼりぼりと頭を掻いている子を放課に見ると、いる、いる、毛虱がざわざわ這っているのです。保健室で薬を散布して頂き家で毛を短くするよう連絡しました。

全校集会のあと児童の去った床に回虫が這っていたこともありました。その頃学校では、年に一度、海人草と言う駆虫薬を一斉に飲ませていました。あるお母さんが、「家の子は、丼一杯もの回虫が出ました。学校で飲ませて頂けるので有難いです。」と驚く話をして下さいました。当時は、田畑の肥料として人糞や堆肥が主でしたから回虫のいる子は、たくさんいました。

教科書は、うすっぺらいものとなり、学用品も満足にない状態でしたから、風呂敷にくるみ腰へ巻きつけて登校する子もいました。ただ防空頭巾は何時も必ず肩に下げ、体から離すということはありませんでした。

だんだん戦局が逼迫してきた昭和19年夏には、3年生以上は、軍馬用の青

草刈りが毎朝の日課となり、学年割当てで3年は1学期10kgときめられ、目標を刈れば授業になるので児童も教師も草を捜して一生懸命草刈りをしました。

授業後は、軍事教練が導入され3年生以上は、手旗信号や団杖訓練、集団行動では、「歩調とれ」「かしら右」と猛練習がありました。

高等科には、学徒動員令が出され兵器工場へ配属され、工員さんに交じって日の丸に神風と染め抜いた手拭いをしっかりと頭に巻いて、飛行機の部品作りに携わり、半日工場で働き、半日は学習と縄ないをして、出来上がった縄束は会社の学徒課へ納めました。その外に昼休みを利用して、河川敷の開墾作業や、出征兵士の家の田畑の手伝い等の勤労作業が増え大変な日々が続きましたが、みんなお国のためと精一杯働き続けました。仕事の途中で警報が入ると、頭巾を被り一目散に帰宅します。途中敵機の機銃掃射に遭遇し、バリバリと音を立てて屋根瓦をころがる音に驚き、地面に伏せて通過を待った児童もありました。

校庭では、広い運動場が開墾され、さつまいも畑になりました。全校児童で受持つ田畑は10町歩と言われ、一番遠くは、現在の愛三や豊田共和工場のある所の畑でした。そこに大豆やいもを作り1年生から全校児童揃って草取りなどの農作業に行きましたが、暑さの中それは大へんな作業でした。

一方地域では、戦死された兵隊さんの遺骨が帰られると、その地区の通学団がお宅に伺い心経を唱えてお参りをします。心経は、全校児童が校内放送に合わせて昼食前に唱えていたので、みんな唱える事が出来ました。

このように戦争によって、子どもから戦場で戦う兵士に至るまで、有無を言わさず容赦なく過酷な生活を強いられました。今改めて学校とは、何をすることでだろうと考えさせられます。本土決戦を避け、無謀な戦争に幕を引くまで至難な日々を翻弄された国民、わけても小学校の児童に与えられた苛酷な戦時教育は、生涯忘れ得ぬ出来ごととして、深く銘記されなければならないと思うのです。

原爆投下により、不幸な戦争に終止符を打つことになりましたが、戦後も長く苦しい生活が続いたことを忘れることは出来ません。悪夢が去って半世紀余、まだ世界の各地では愚かな戦火に苦しむ人達がたくさんいます。

私どもは、平和に甘んじることなく、限りある地球の資源を大切にしてお互いに相手を思いやる優しい心を持って、世界平和の実現に努力し、戦争体験を風化させないために後世に語り継がなくてはならないと思います。

# 国民学校の終えん<sup>しゅう</sup>

新 美 英 子

戦勝の報<sup>ほう</sup>たけなわな昭和18年刈谷高女を卒業しました。その年の春、代用教員に来てくれと小学校から要請<sup>ようせい</sup>がありました。当時は太平洋戦争開戦2年目、男性は召集<sup>しょうしゅう</sup>され各職場は人手不足、教育現場もまた然<sup>しか</sup>りでした。進学するか、就職するかしなければ徴用<sup>ちょうよう</sup>というご時勢<sup>じせい</sup>でした。当高女からは約1割12名が女子師範学校へ進学しました。全寮制で戦時下<sup>せんじげ</sup>厳しい寮生活を体験、それでも、授業も付属小学校での教育実習も何とかすることができました。しかし、2年になった頃は、学徒勤労働員令<sup>とくじんじゆ</sup>に依り軍需工場<sup>か</sup>へ駆り出されました。私たちは家より通勤できましたが、九州や地方からも動員され、空爆<sup>くうぱく</sup>の犠牲<sup>ぎせい</sup>になった学徒も多くありました。有無<sup>うむ</sup>を云わさず一億総決起、勝利に向けてのムードに包まれていました。昭和20年3月名古屋大空襲、この時学校も寮も焼失し、焼跡卒業式をしました。軽い卒業証書に、重い辞令<sup>たずさ</sup>を携え、昭和20年4月、大府第一国民学校へ奉職しました。

高等科に実践女学校も併設<sup>だいきほこう</sup>された大規模校<sup>だいきぼこう</sup>でした。広い運動場も、いも畑と化していました。当時高等科の生徒は市内4か所の工場へ勤労働員され、校内は初等科の児童のみでしたが、縁故疎開<sup>えんこそかい</sup>の児童の受け入れがあり、急激に定員増加、担当した五年女子組も70余名、室内に溢れる程でした。机間巡視<sup>きかんじゆんし</sup>もままならず、子供たちも机・腰掛けの上を渡ることもしばしばという状態、それに加え農繁期には幼い弟妹を連れての登校<sup>にぎ</sup>、賑やかなものでした。日を追うにつれ戦況<sup>せんきやう</sup>益々悪化、B29の本土来襲も激しさを増し、米軍は沖縄に上陸し、特攻隊の出撃も激しくなり、本土決戦<sup>そな</sup>に備えての軍事訓練<sup>へい</sup>にも拍車<sup>はくしゃ</sup>がかけられました。男子師範の生徒は学徒出陣<sup>とくしゆしゆん</sup>ということで半年繰り上げ卒業となり、5月には最終の教育実習生を受け入れることになりました。4か月前、私自身が実習生であったのが指導教官<sup>とまど</sup>、戸惑<sup>とまど</sup>いました。女性は銃後の護<sup>まも</sup>り、男性は前線にて命をかけて戦うというのが現状でした。卒業後、直ちに戦場<sup>おもむ</sup>に赴く教生<sup>きやうせい</sup>の心情を思うと、計り知れないものがありました。児童たちも胸に名札をさげ、防空頭巾<sup>ぼうくうずきん</sup>を肩に、警報が発令されれば、ただちに避難、雨ふりでない限りは食糧増産の畑作業で、まともな勉強はできませんでした。大府にも焼夷弾<sup>しょういだん</sup>が落され民家が焼失、8月には艦載機<sup>かんざいき</sup>による機銃掃射<sup>きじゆうそうしや</sup>に見舞われ、壕<sup>ごう</sup>の中で激しい

銃弾音を震えながら聞きました。

8月15日、終戦の日、前日重大放送があるから正午に職員室に集合との通知を受けました。“朕汝らに告ぐ”に始まる終戦の詔書、暗く重苦しい沈痛なる玉音が流れました。何のことも素直に受け止めることのできた職員は少なかったと思います。神国日本を信じ、滅私奉公の精神をたたきこまれた国民学校教育は、学徒動員、果ては神風特攻隊として終えんを迎えました。その時「負けた」と大声で云われた先生のひと声に一瞬皆の顔に緊張が走り、同時に張り詰めていたものが総崩れとなり、脱力感にさいなまれました。

動員されていた高等科の生徒も学校に戻り、担任の編成替えが行われました。新卒で受け持った5年女子組の児童と涙の別れをして、高等科一年の担任となりました。当時は食糧事情も最悪、学力の充実よりも食糧増産が優先で、飛行場の跡地へ農作業に通うのが日課となりました。

一方、米軍の進駐について色々なデマが流れる中、教育現場では教科書の焼却削除、黒塗りと早急に処理することが山積していました。二学期も始まり、児童も大変な日々を強いられました。毎日毎日教科書の中の不適切な部分を塗り潰していく、教師から云われた通り「なぜ」「どうして」ともいわず、下の活字が見えない様になる迄塗り潰しました。上からの命令で、有無を云わせず行動をさせる状態は、戦後も暫く続きました。教育の軌道修正には相当長い期間が必要でした。

いも畑が運動場に戻り、元の学校の姿になっても、依然食糧事情は悪く、加えて衛生面の不備からくる蚤や毛虱に禍いされ、休日誰も居ない廊下や教室を歩くと、蚤の襲撃を受けることもありました。女子の毛虱の退治は教師の仕事でした。これらはDDT散布に依り退治も可能となりました。進駐軍のララ物資の配給で、脱脂ミルクに依る学校給食が始まりました。現代の給食の比ではありませんが、食糧の窮乏する中、発育盛りの児童にとっては救いの神でした。疎開児童も引揚げ、昭和22年六三制に依る新制中学発足、裏の桃山に中学校が建設され、国民学校は、大府第一小学校と改名されました。



〈当時の大府第一小学校〉

あまがね  
雨兼池の思い出

安藤 剛

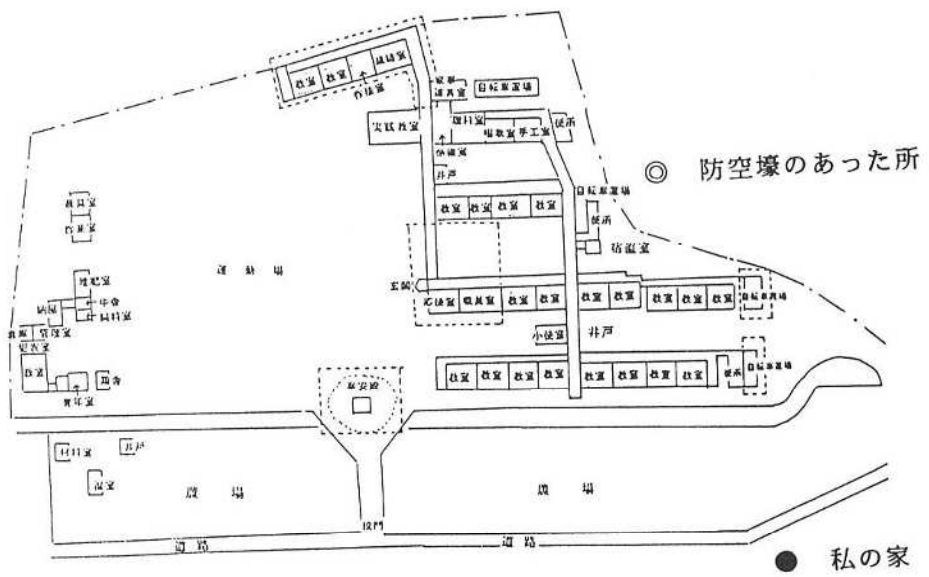
終戦のとき、私は中学1年生でした。空襲の爆弾の降り注ぐ中、名古屋の学校まで頑張って通った記憶があります。汽車の切符が買えず、自転車で通学したこともありました。しかし、1年生だったため、学徒動員などで軍需工場に行くことはありませんでした。

大府第一国民学校時代には、農作業を一生懸命<sup>けんめい</sup>やった記憶があります。学校には牛・豚・山羊<sup>やぎ</sup>などがおりましたので、餌<sup>えさ</sup>をやったり乳搾り<sup>ちちしぼ</sup>などを実施しました。搾った牛乳は森永乳業<sup>にゆうぎよう</sup>（現在の郵便局の西側あたりにありました）まで運びました。また、食料増産のため、現在は住宅地になっている学校の裏辺りを耕し、薩摩芋<sup>さつまいも</sup>などをつくりました。この土地を耕すと、鉄道の枕木<sup>まくらぎ</sup>や線路をつなぐ金具などが沢山<sup>たくさん</sup>出てきました。父の話では、名古屋駅を造るときに桃山の土を鉄道で運んだから、その時の物だろうとのことでした。

その他、戦争の記憶としては、飛行場造りがあります。小学生ではありましたが、父に連れられて作業に参加しました。隣組に人数の割り当てがあり、人数不足のため私も一人前に数えられたのだと思います。鍬<sup>くわ</sup>ともうこで土を運ぶ作業は大変でした。

また、学校の運動場の南（現在行者堂のある所）の崖<sup>がけ</sup>の麓<sup>ふもと</sup>に防空壕<sup>ぼうくうごう</sup>がありました。学校に滞在<sup>たいざい</sup>していた軍人の指導で穴を掘ったと思います。現在は埋め戻<sup>もど</sup>してしまっただので、

大府第一尋常高等小学校平面図（昭和9・13年当時）



[雨兼池]

どの辺りかはっきりしませんが、現在の運動場のバックネットの辺りが入り口になっていたと思います。

そんな戦争の記憶とともに、その頃の記憶として、私の脳裏に強く残っているものに、今は無き雨兼池があります。私の家は、学校の前、雨兼池のかたわらにありましたので、朝に夕に雨兼池を見て暮らしていたのです。魚釣りをし



〈雨兼池埋め立てころの校舍写真〉

たり泳いだり、遊びの場でもありました。6

月頃、雨が降って家の前にあった川池からの導水路の水量が増すと、<sup>ふな</sup>鮒や<sup>こい</sup>鯉や<sup>うなぎ</sup>鰻など小魚が上ろうとして堰に集まります。それを父と一緒に四つ手網で捕らえました。すごく沢山捕れたことを記憶しています。秋には、毎年ではありませんが、<sup>おど</sup>躍り込みがありました。

米の収穫が済んで、池の水が必要でなくな

った頃、池の水を抜き、魚を捕らえるのです。たもを持って、どろんこになって魚を追かけました。本当に楽しい思い出でした。

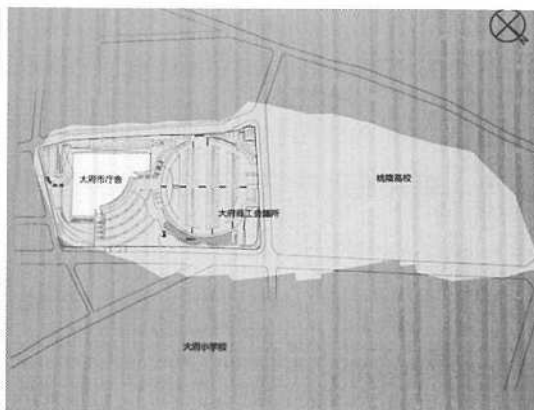
雨兼池は、この辺りでは一番大きな溜め池だったと思います。周囲は1kmと言われていました。体育の時にも良く走りましたが、罰でもよく走らされました。「罰だ！雨兼一周！」の先生の声で走るようになるのです。途中で少し<sup>なま</sup>怠けると、高台の学校からは丸見えですので、「もう一周追加！」の声が降りるのです。また、この池には2隻のカッターが<sup>けいりゅう</sup>繫留されていました。学校が管理していたと思いますが、よく船遊びを楽しみました。

そんな雨兼池も、昭和29年頃より埋め立てが行われ、碧南線のバイパスが通り、<sup>とうりょう</sup>桃陵高校や市庁舎が建設され<sup>あとかた</sup>跡形もなく消え去りました。時代の流れは、本当に<sup>かんがいむりょう</sup>感慨無量です。

## 雨兼池の由来

古来より池の形状は 面積55,000m<sup>2</sup>のだ円状でした。江戸時代初期には「甘金池」と記されており、後期には「雨かね池」「雨兼池」になりました。

池は灌漑用として長く利用されてきましたが、昭和29年(1954)に桃陵高校(旧大府高校)用地を最初に埋め立てられました。以後、町役場・中央公民館の建設などで徐々に小さくなり、現在では修景池としてそのなごりを留めています。



〈雨兼池の由来を記す看板が市役所の前に設置されている〉

## 奉安殿と子ども銀行の思い出

伴 茂

昭和13年5月、大府第一小学校に木造建築ですが、当時としては立派な職員室と共にモダンな玄関が新築されました。その折り、校舎裏にあった奉安庫が取り壊され、玄関の西側にある正門の登り口に奉安殿が新築され、その中に両陛下の御真影と教育勅語が納められました。それ以後、朝晩先生も全校児童も拝礼したものです。



〈奉安殿（昭和13年ごろ）〉



〈奉安殿に納められた勅語〉

昭和20年8月、大東亜戦争は、終戦となり、それ以後の小学校は米進駐軍の管理下に置かれ、神社と共に奉安殿のような施設や記念像（二宮金次郎）も取り壊されることとなりました。その折り、取り壊された跡地で全職員の、また学級の記念写真を撮りました。服装はともかくも、校長始め男の先生の半数以上が丸刈りの頭でした。

昭和21年4月、米進駐軍の許可があって、満3年の戦地（中国北部）から復員してきた私は、はじめての3年の組を担当しました。その時の児童数は約60名で20坪の教室はいっぱいでした。写真は、元奉安殿の跡地の土手の下で、谷校長と担任の私と3年児童です。写真の児童は、現在53才ぐらいです。（平成5年現在）

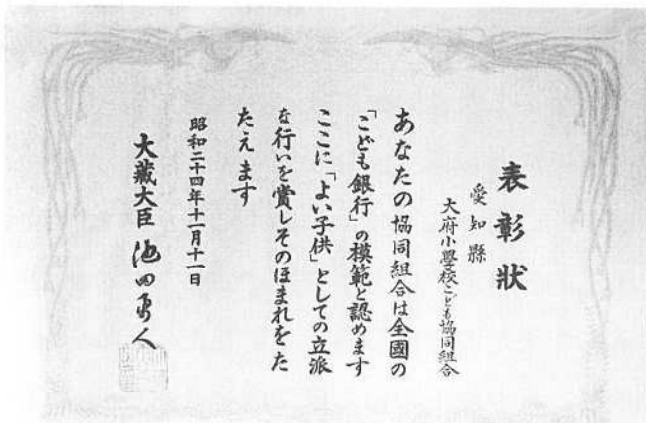
昭和23年、小学校にPTAが結成され、各学校に子ども銀行が発足しました。大府小学校も大府農協の協力を得て、子ども銀行が結成され、クラブ活動の一つとして、5、6年の児童により運営されました。



〈奉安殿取り壊し跡地で記念写真〉

その実績が認められ、昭和24年11月11日に全国表彰をされました。全国1万余の小中学校の子ども銀行の中から小学校7校、中学校3校が選出されました。大府小学校子ども銀行もその7校の中に入り、東海地区の代表として東京神田の共立講堂<sup>きょうりつ</sup>で表彰式に参加し、学校を代表して谷新一校長と6年の上野寛子さんが出席し、受賞しました。

後日、大府公民館で町主催の祝賀会が開催され、町民の祝福を受けました。



〈大蔵大臣の表彰状〉

〈子ども銀行と子どもたち〉



# 大府第三国民学校（共長小） 戦中・戦後の移り変り

深谷 よし子

二度と戦争はしてはならない。今、世の大人は口を揃えていう。けれどその戦争の様子を知る人は70歳以上、孫に話をすると興味深く聞いてはくれるが実感はないと思う。昭和16年に大東亜戦争が勃発した。戦局が次第に不利になり、サイパン島を基地にしたB29が、編隊を組んで伊勢湾を名古屋に向かって飛んでくるようになった。日本の飛行機がそれを迎え撃つために飛び立つと、B29は名古屋に入れず中間地点の共和で旋回し、大府の町を通り三河湾に逃げていく。その時積んできた爆弾、焼夷弾は全部大府に落としていくとの噂が流れ、共和・大府は大変な恐怖におびえていた一時期があった。

第三国民学校（今の共長小）の防空壕は南舎の南側の低い所にあったが、児童が全部入れるような大きなものではなく、空襲警報（サイレン）が鳴ると直ちに家に帰した。防空頭巾をかぶった児童は長草、追分・一ツ屋、木の山・三ツ屋・原・八ツ屋、それぞれ西・東・北の門から下校し、途中敵機が来た時は土手に腹這いになり避難した。時には名古屋近くの上空で空中戦になり人間が飛行機より先に火だるまになって落ちて来たのを目の当たりに見たことがある。

長草から運動場の南側を低空で飛び、五ツ屋下の田んぼに爆弾を落として行った時、谷校長先生が運動場においてメガネが飛んだこともあった。田んぼに落ちた爆弾の穴は、言葉では表現出来ない程すごい大きな深いものであった。

当時、第三国民学校に大府より勤務してみえた斎藤先生の家が焼夷弾で燃え、後片付を手伝いに行った時、タンスの中の着物が見た目では全く変りはないのに、取り出してみると、ポロポロで焼夷弾の恐ろしさにびっくりしたことがある。

朝、出勤してくると高根（今の共西町）に陣地をかまえていた兵隊さんが、中庭で大きなハソリで農家でとれた野菜をスコップでかきまぜていた。煮えた「がた煮」をバケツに入れて陣地に運び朝食にしていた。米は一粒も入っていなかった。時々私達もご馳走になり、とても美味しかったことを憶えている。

明日の命がわからない日々で勉強には気が向かなかった。運動場には芋を植え、東海市の上ノ台の荒地には麦を作り、共和駅の北の田んぼに米を作っていた

た。収穫時には教室は麦や稲の山、芋は大きな釜で蒸して食べさせていた。都会から疎開して来ていた児童も多く、喜んで食べていた。登校して来るとまず鎌、鍬を手に食糧の生産に取り組んでいた。

町内で戦死された兵隊さんがあると、学校で町葬が行われ、町内のほかの国民学校の6年生も参列した。昭和19年12月、大府第三国民学校の新校舎の講堂での町葬の最中に大地震があり、祭壇から遺骨が転げ落ちたこと、他校の生徒が窓から跳びだして怪我をしたことなどがあった。

今まで、伊勢への一泊であった修学旅行は、昭和18年には日帰りとなり、19年、20年にはなかったように思う。でも、毎日ラジオからは日本は勝った、敵を全滅させたと、軍艦マーチが流れて来ていた。

昭和20年8月15日、校長先生から今日は大切な放送があるので、全校生徒教室で静かに聞くように指示された。北舎の二番目の教室で、65名の生徒を静かに腰掛けさせ放送を聞いた。天皇陛下からの放送でしたが、さっぱりわからなかった。ただ、「たえがたきをたえ、しのびがたきをしのび」と言われた言葉は今も耳に残っている。

戦争に負けたことがわかってからは、「女、子どもは道路に寝かせて、その上を戦車が引いて皆殺しにされるそうだ。」とか「娘さんは進駐軍のなぶりものになる。」とか、いろいろなデマが飛んだ。

終戦後は忠とか孝という文字は消え、教科書も変り、自由自由となんとも自分勝手な社会になったような気がする。東門の所にあった奉安殿は取り壊され、入学式、卒業式もすっかり様変わりした。天皇陛下の御写真、日の丸の旗、教育勅語、君が代など厳かに行われていた式典も一変してしまった。戦争中は児童のお手本として、「芝刈り縄ない わらじを作り 親の手助け 弟を助け 兄弟仲良く孝行つくす 手本は二宮金次郎」と歌にまで歌われて、職員室の玄関前にあった二宮金次郎さんは、門外の栗の木の下にひっそりたたずんでいる。

運動場は、上と下に大きく段がついていて、入学式には土手に児童を並べ記念写真を撮っていた。上運動場の土をならして、今の広い運動場が出来た。体育館の東にある桜の木が、元の運動場の高さを示している。桜の木だけは変わっていない。時々眺め、当時を懐かしんでいる。

## 戦時中の学校

加藤 鶴子

私は大正14年生まれで、今年77才になりました。青春時代を戦争で過ごし、楽しい思い出はありません。物資・食料が乏しく、大変な生活を経験してきました。両親は少しばかりの田畑を耕し、農業を営んでいました。採れた米・麦・さつま芋などは、供出に出さなければならず、定められた分が足りない場合は、闇で買ってでも出さなければならないという厳しい状態でした。その故か、苦勞に耐えるということだけは、今の若い人に負けないと思っています。

昭和17年12月に、3か月繰上げで安城女子職業学校師範部を卒業しました。



〈モンペで正装〉

私は病気になり療養しましたので。皆さんより半年遅れて、昭和18年9月に現大府小学校に就職しました。その頃は、学校に勤める事を奉職するといいました。また、この頃から活動しやすいように、女性の服装もモンペ姿が多くなりました。私も学校へモンペ姿で通うことが多くなりました。

最初の担任は、3年生の男子65名で教室は児童で一杯でした。新米先生でも、その頃の児童は素直でよく先生の言うことを聞いてくれました。規律正しい軍隊式の厳しい教育で、グループの中の一人が悪いことをすれば、そのグループ全員が罰を受けました。どんな罰かといえば、一番多かったのは「ピンタをつる」といって、頬を殴ることで日常茶飯事でした。それでも、悪いことをした児童を皆で苛めるということはないと思います。今では、体罰は絶対禁止ですから、こんなことは想像もできないかも知れません。

戦争が激しくなり、空襲警報が発令されるようになると、防空頭巾が子供たちの必需品になりました。学校にも必ず持って通学しました。また、授業中でも警戒警報が入ればすぐ下校させました。私たち教師は、真夜中でも警報が入れば、学校に駆け付けました。大府でも爆弾や焼夷弾が落とされ、今の熱田神社から南島付近にかけて家が何軒も焼けました。学校は運よく難を逃れましたが、燃え上がる炎

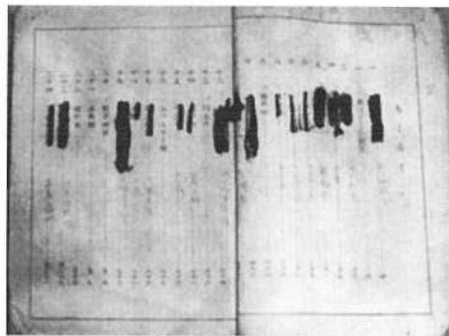


〈防空頭巾姿〉

を見て、身体が震え言葉も出ず、涙が出ました。また、こんなこともありまし  
た。名古屋が夜中に大空襲を受け、沢山の家・工場が焼けました。その煙が大  
府方面にも流れて来て、馴れた道でも全然分からなくなり、友人の先生と手  
つなぎ手探りで家に帰りました。

学校の授業も勉強はできず、高学年（高等科）の生徒は、勤労働員で工場で  
働くようになりました。また、食料確保のため、荒地や運動場を開墾して畑  
にし、さつまいも作りをしました。馬の餌の草刈りなどもノルマになりました。  
このように、殆ど作業ばかりでした。低学年の児童でも、ドングリ・木の実な  
どを拾い集めるのが宿題でした。集めた量をグラフにして競争させ、沢山集め  
るようにしました。体育の時間には、<sup>きょうれん</sup>教練とか手旗信号の訓練などが多くなり  
ました。

昭和20年8月15日、戦争も終りホッとしました。しかし、今度は教科書  
の墨塗りが始まりました。全教科書ですから、かなり時間がかかったように覚



〈墨で消された教科書〉

えております。食料はなく、その他の物資も  
みな配給で、衣料品などは点数制で、苦しい  
生活が長く続きました。夕方になれば、節電  
で電気が切られ、ろうそくの灯で食事をしな  
くってはなりませんでした。

戦後57年にもなり、世の中も大きく変わ  
りました。あの頃に教えた子どもたちも、今  
は老人クラブに入って活躍する年代になりま  
した。時々教え子に会いますと、「先生は厳しい先生だったね。でも今は懐か  
しい思い出です。」とよく言われます。時代を振り返ると、本当に感慨無量で  
す。かつての貧しさは嘘のようで、今は食べ物・着る物・何でも豊かになりま  
した。しかし、心の方は、今の方が貧しくなってきたように思います。

### 墨で消された教科書

昭和20年8月15日「終戦の詔勅」が発せられ、日本の無条件降伏という形で太平洋戦争は終わった。日本に進駐した連合国軍総司令部（GHQ）は、10月11日には①婦人の解放 ②労働者の団結権 ③教育の民主化 ④専制政治の廃止 ⑤経済の民主化、の5大改革の指令を出した。これにより軍国主義を教育からなくすことが急務とされ、児童の教科書の軍国主義的部分に、墨を塗って使うように、その教科書を教えていた教師たちが児童に依頼するというのが、日本全国の学校で起こったのである。

その後、昭和22年3月31日には、教育基本法・学校教育法が公布され、国民学校が廃止され、新小・中学校による6・3制がスタートした。

# 私の戦時中の生活

相木久代

昭和十六年の三月、春休みの二十五日、私は境川の向こう知立市の八橋から大府市の北崎へ嫁いできました。教員経験は二年で、三河から尾張へ来るといふ事はこんなにも違いがあるものかと思いました。言葉のアクセントも違い、宗教もこちらは禅宗が多く、三河の私の村は一、二軒を除いて全部真宗、そして「お東」でした。こちらへ来てお寺の多いのと池の多いのも驚きでした。向こうは明治用水が早く引かれ、幅広い川には川縁の草まで、滔々と水が流れていました。こちらでは「およめ」と言っていたようですが、三河では「かもめ」が、優雅に泳いでいました。三河でも少し入った山地には池もないわけではなかったのです。

大府小学校に赴任したのですが、四、五、六月を経た三ヵ月後に、夫に召集令状が参りました。主人は前の年に一回目の召集から復員したばかりだったので、時局の転回の急なことが私共にも分かりました。

校長先生に夫の召集のことをお話すると、直ちに「入籍は済んでいるか」と問われました。家に帰ってその事を告げると、独身の時の召集とは違い、色々複雑な中ですぐ手続きをしてくださいました。その時、私は校長先生ともなると気付かれる事が違うと思ったものです。

特に始めは好調であった事もあるのでしょうか、校内の様子は一時には変わりませんでした。しかし物資、食糧については厳しいものがありました。私の嫁ぐ時にもう衣類は急騰、そして粗悪になりました。三ヵ月の新婚生活の内、もう妊娠していたのです。村には産婆さんがあり、家には二人の姑がおりましたので、そちらの指導は十分で、牛乳を学校の小使室へ配達して貰っていました。学校は追々農業優先となり、学校の近くの大倉別荘の中までさつま芋を作りに行きました。

私の教えていた家庭科（「裁縫」と言っていました）で、面白いことに、校長先生が町から頼まれたのが、朝鮮人の奥さんに裁縫室で和裁を教えてくれという事で、何回かに分けて一組分位の人に教えました。向こうの方は朗らかで袖が出来れば両腕に通して皆で楽しそうに踊るのです。又、身頃が大体の形になれば、それを着て一層嬉しそうに踊りまくるので、お腹を抱えて笑い合った

ものです。

また、職員にも食糧を心配して一坪農園と言って校門下に畑を貸して下さり、野菜を作りました。私たち農村の者はそれ程ではありませんでしたが、町からいらっしゃる方は真剣でお付き合いに何度も水をかつぎました。

家々は庭先に防空壕<sup>ごう</sup>を掘り、いざ警報ともなれば食糧と子供の必需品<sup>ひつじゅひん</sup>を持ち込んで逃げ込むのです。この時分はもう昭和十八年位で、夫の行っていた中支の方は引き上げで主人も三島まで帰還<sup>かん</sup>し、皆様はみんな出迎えたのに、我家は年の大きい祖母とお姑さんは子供の世話、私は学校勤めのため休めません。主人は出迎えのなかったことが淋<sup>さび</sup>しかったらしく、後で不平を言われました。

当時家には母屋<sup>おも</sup>の二階（本二階ではありません）、前と裏の別棟<sup>むね</sup>に、三世帯の方が疎開<sup>そかい</sup>しておられました。井戸家の別棟もあり、屋敷は広がったのですが、三軒分の食事、洗濯は大変だったでしょう。私は家に居ないから余り苦にはなりませんでしたが。

農家の方は食糧を作っていますから、割に豊かだったのでしょう。娘の嫁入りにお布団<sup>ふとん</sup>を分けて欲しいと言われ、木綿<sup>からくさ</sup>の唐草、しかし色入りの総模様の物を米一俵で替えて差し上げました。あの布団<sup>ちよつとお</sup>だけは一寸借しいと思ったものです。その他、お姑さんは納豆をお風呂場で上手に作って下さいました。ご自分は嫌いで召し上がらない。私も三河では食べなかったのですが、こんな栄養のある物は背に腹は替えられないと、戴<sup>いた</sup>きました。さつま芋の葉の茎はきんぴらにしてとても美味<sup>おい</sup>しいと思いました。

その他、私にとって一番大変なのは夜中の警報です。警報が出ると職員は直ちに学校へ詰めるのです。砂川の橋を越えると冷汗が流れるのが分かりました。帰りは泉田からいらっしゃる加藤先生、沢田先生がご一緒して下さいました。

横根から安藤先生が通ってみえましたが、僕の家<sup>かんさい</sup>の棟に二箇所、艦載機<sup>たま</sup>の弾か、弾痕<sup>だんこん</sup>があると二、三度言われました。数年たってから、やはり我家の裏の別棟に二箇所見分かりました。それから五十数年を経て、今年やっと屋根替えをしましたが、その事に触れる人は一人もありません。遠い遠い昔の事になってしまったのですね。

それにしても村の家々の普請<sup>ふしん</sup>の立派になったこと、小地主からかつての大地主に嫁いだ者として、国内では出来なかった農地解放、これはよかったのではないかしら。

# 小学校に入ったが

—大府第二国民学校—

神谷孝明

## 1. 国民学校になった

わたしが入学したのは尋常小学校であるが、次の年は国民学校初等科となった。名称変更の理由は、「八紘一宇の肇国精神（世界を天皇中心の一大家族国家をつくる）」をねらいとした国民の育成といわれるが、何のことやら分かるはずもなかった。

当時の多くは、教科書を兄姉や知人から譲り受けていたが、この年は全員がなけなしの家計費から購入せざるを得なかった。教科も、国民科（修身・国語・国史・地理）、理数科（算数・理科）、体錬科（体操・武道）、芸能科（音楽・習字・図画工作・裁縫）に再編された。なかでも、5・6年生の体錬科には男子は剣道、女子は薙刀が加わり、週授業時間も3から6に倍増した。男子は素足にパンツ一枚の裸という格好で、木刀を振り回さなければならなかった。

## 2. ペンだこができた

国民学校4年生のころだったと思う。毎週のように慰問文を書かせられた。「兵隊さん、お元気ですか。」に始まる手紙である。当時は家族に出征兵士がいなかったので、肩身の狭い思いで不特定の人に向けたものだった。ひたすら、銃後で頑張る自分たちの生活状況を綴った。

なんとか戦意高揚への意気込みを伝えたいと、鉛筆をなめなめ力強い文字で書こうと頑張った。年間の作文の時間はほとんどこれだけで終始した。それも授業後や宿題になり、書き終えるのに長い時間がかかった。

そうしたうちに、右手中指の先に硬いものを感じるようになった。後で、これがペンだこだと分かった。当然ながら、今もそれは残っている。

## 3. 将来の希望は軍人だ

軍艦マーチをBGMに、「大本営発表、我が軍は、多大なる戦果を挙げ…」という午後7時のニュースに聞き入っていた国民学校5年生のころのある日、担任から「将来何になりたいか」と問われた。

男子の答えは、1名を除いて全員が「軍人」と答えた。当然ながら、わたしもその中にいた。みんな、鸚鵡返しにそれを口にしていて、例外の者も、身体的理由があって「銃後の戦士」としていたのだ。

他に<sup>せんたくし</sup>選択肢はなかった。教科書も雑誌も放送も、まわりは全て戦争一色だった。少国民<sup>しょうこくみん</sup>（戦時下の小学生）も戦争のための「予備軍」とされていたのだろう。高学年になると、手旗<sup>てはた</sup>信号やモールス信号の学習をさせられるようになった。ただただ暗記するだけだった。登校すると黒板に「-・-・-」と書かれていた。始業前にそれを解説して、提出するのが日課となった。

#### 4. 集団登校が始まる

昭和19年になり空襲のニュースが届くころになると、学校生活も戦時色を強くしていった。

集団登校が行われるようになった。班ごとに隊列を組み行進した。上着には青少年団<sup>せいしょうだん</sup>の胸章と大きな名札<sup>なせ</sup>を縫い付けていた。その名札には、学校名・学年・住所・氏名・生年月日や血液型が書き込まれていた。緊急事態のためだ。ズボンのポケットは縫い付けられていた。手を入れられないようにして、姿勢を正すためである。肩には、ランドセルのほかに家庭で作った<sup>ぼうくうずきん</sup>防空頭巾をかけていた。<sup>くうしゅう</sup>空襲に備えるために常時携行するようになった。<sup>げそく</sup>下足は自作のワラ草履<sup>ぞうり</sup>だ。途中で先生に会うと、不動の姿勢<sup>きよじゆ</sup>で挙手の礼をした。校門には、「鬼畜<sup>きちく</sup>英米、撃ちして止まぬ」「欲しがりません、勝つまでは」と標語が大書されていた。校門を入ったところで班長の号令<sup>ほうあんてん</sup>で、奉安殿<sup>ほうあんてん</sup>に向かって最敬礼<sup>さいけいれい</sup>をした。奉安殿というのは、天皇・皇后<sup>こうこう</sup>の写真や教育勅語<sup>ちよくご</sup>の写しが収められている小さな建物である。最敬礼は、天皇に対して行う敬礼のことである。

敵の空からの攻撃から身を守るために、運動場の周りに幾つもの<sup>ぼうくうごう</sup>防空壕を作った。それは、十人ほど入れる<sup>すほ</sup>素掘りの穴に、丸太を渡して上に土をのせた簡易なものだった。到底役に立つ<sup>しろもの</sup>代物ではない。幸い、訓練以外に使うことはなかった。防空訓練も回数を増やしていった。

食料や資材の不足を補うためのいなご捕り・落穂拾いや桑の皮むき等々が授業に取り込まれた。その分、教科学習の時間は減らされた。空襲<sup>けいほう</sup>警報が発令されれば授業中止になるので、なおさらである。わたしには、高学年のころに勉強したという記憶はほとんどない。

#### 5. 宿題は苦痛だ

授業らしいものはないのに、宿題はやたらに多い。それが、わたしにとってはたまらなく苦痛だった。数十年たった<sup>いま</sup>未だに、宿題アレルギーは治っていない。

宿題その1、いなご<sup>と</sup>捕り・どんぐり拾い

実りの秋になると、いなご捕りやどんぐり拾いの宿題が出る。それは、食料や燃料としてお国のために使われると教えられていた。学校の東に広がる秋の田んぼには、いなごが飛び交っていた。捕らえることはそれほど難しくはない。しかし、虫そのものが苦手な人にとっては、大変つらいことだ。

山遊びの不得意なわたしにとっては、どんぐり拾いだって大変なことだ。やっとトチの木を探し当てても、ほとんどは先手をとられている。ノルマについては定かでないが、小さな袋でも一杯にすることは容易ではなかった。

さらに、稲刈りのすんだ田んぼに落ちている稲穂を拾い集める活動もさせられることもあった。

### 宿題その2、ヒマの栽培

航空燃料の代用油をとるために、ヒマの種が渡され、家庭でそれを栽培させられた。畑の端で育てた。あまり手入れをしなかったが、多くの実をつけてくれた。

### 宿題その3、干し草づくり

嫌いな宿題の中でも特に嫌いなものは、干し草づくりだ。小学生程度では手に負えそうにない宿題だ。

干し草は軍馬の飼料ぐんば しりょうにされるのだから、それに堪えるものでなくてはならない。いくら田舎とはいえ飼料にできる草は限られている。多くの農家は牛を飼育している。刈り取る草を見つけることは難しい。

やっと草を探しだしても、それを刈り取るにはそれなりの技術が必要だ。まず、よく切れる鎌がいる。それには、鎌の刃を磨とがなくてはならないが、容易ではない。つぎに、能率よく草を刈る作業だ。それだって簡単ではない。怪我の危険もある。さらなる大変さは、草干しである。刈った草を広げて日に当てる。雨天が続けば品質が劣ってしまう。しかも干せば、重さも量も以前の何分の一かに減ってしまう。刈っても刈っても目標量に届かない。

最後に、乾燥した草は決められた大きさの立方体に固める。それを、自作の縄でしばって完了することになる。とはいえ、ここまで自分一人では到底できない。わたしは、祖父の手助けを受けることになった。とにかく、宿題は大嫌いだ。

## 6. 遠足はつらい

遠足の前日は、家の畑で未だ青いミカンをもぎ、サトノキを切り取ってきて、おやつおやつの準備をする。当日の朝には、母の作ってくれた握り飯を風呂敷風呂敷に包ん

でたすき掛けにして登校する。

巻脚絆<sup>まききゃはん</sup>に、銃剣に見立てた背丈ほどの棒を持って運動場に整列し、出発式で捧げ筒<sup>ささ つつ</sup>の礼をして訓話を受ける。遠足は、疑似銃剣<sup>ぎじゅうけん</sup>を担いで、紅白2軍に分かれて小隊ごとに隊列を組んで行進する。楽しさは全くない、小軍事訓練そのものだ。

途中、道端に石や草木を組み合わせた信号が置かれていた。小隊はその指示に従って進んだ。最後は手旗<sup>てばた</sup>信号の指示で突進して、紅白両軍が激突した。ここで、つらい戦争ごっこが終りとなる。

## 7. あわや傷害事故か

国策として食糧増産が強く叫ばれようになると、そのために国民学校生までも動員されるようになる。高学年になると、午後の授業はほとんど農作業<sup>あ</sup>に充てられるようになった。

毎日のように鍬<sup>くわ</sup>を担いで登校し、境川の河川敷<sup>か せんしき</sup>を開墾<sup>かいこん</sup>した。土は柔らかくてそんなに力はいらなかったが、なにせ広い範囲の土地である。

5年生の2学期も終わろうとするころの午後であったと記憶している。級友と横一列に並んで土を耕していた。鍬を振り下ろそうとしたときに、急に強い風が吹いてきた。一瞬「危ない」とは感じたが、小さな体は風に押されながら動作を続けた。鍬は隣にいた子の帽子をかすめただけだった。傷害事故を免れた。

辰池の沼地の開墾もさせられた。冷たい水の中に足をとられながら、アシの根を掘り出した。また、働き手が出征したために耕作できなくなった農家への勤労奉仕もした。最後は、学校の運動場まで畑にしてしまった。

## 8. 村境い「砂川橋」で

砂川橋は校区の境であり、わたしたちは村境という感覚でとらえていた。

徴兵<sup>ちようへい</sup>され出征する地域の人をこの村境まで送って行った。橋のたもとにある松の木の下で最後の挨拶があり、万歳三唱して見送った。ついに、わたしも兄を送り出すはめになった。「お国のためだ」と思いながらも、涙<sup>なみだ</sup>が留めどなく流れた。

「天皇陛下万歳」と叫んで、戦地で亡くなったと伝えられる英霊<sup>えいれい</sup>は、その遺骨<sup>いこつ</sup>が白木の箱に納められて帰還<sup>きかん</sup>してきた。それを出迎えたのも村境である。わたしたちは、道端に整列して深々と頭<sup>たま</sup>を垂れた。

昭和20年代に入ると、大地震や大空襲の被害の影響でこうした送迎も実施できなくなった。次兄の入隊の際には、家族のみで送り出すだけだった。

# 私の少国民時代

佐藤英夫

私が小学校3年生のとき、太平洋戦争は始まった。ラジオが<sup>こわだか</sup>声高にアメリカ・イギリスに<sup>せんせん ふこく</sup>宣戦を<sup>しんじゅわんこうげき だいせん か ほう</sup>布告したこと、そして<sup>しんじゅわんこうげき だいせん か ほう</sup>真珠湾攻撃の大戦果を<sup>きんちようかん</sup>報じていた。子ども心に<sup>きんちようかん</sup>緊張感をもって家族と聞き入った。

<sup>よくねん</sup>翌年、入学時の<sup>じんじょう</sup>大府第四尋常小学校は<sup>こうめい</sup>大府第四国民学校と校名が変わった。この<sup>せいど かいかく</sup>制度改革によって、私たちは<sup>しょうこくみん</sup>少国民として教育を受けるようになったのである。資源を持たない日本が<sup>いど</sup>豊かな国を相手に<sup>いど</sup>戦いを挑むのだから、小国民たりとも「<sup>ほ</sup>欲しがりません<sup>う</sup>勝つまでは」「<sup>や</sup>撃ちてし止まん」の心意気で、この<sup>こくなん</sup>国難に立ち向かうことの<sup>ひつようせい</sup>必要性を<sup>やぶ</sup>教えられた。私もこの戦争に敗れたら、日本は<sup>しよくみんち</sup>植民地にされると<sup>ほこ</sup>思っていた。国民としての<sup>だいとうあきょうえいけん</sup>誇りにかけて<sup>ぎむ</sup>大東亜共栄圏の建設に協力することは、当然の義務だと考えていた。当時の私にとって、この戦争は<sup>せいせん</sup>聖戦だったのである。

昼食は、<sup>ふろしき つつ</sup>学習用具といっしょに風呂敷に<sup>しゅりゅう</sup>包んだ日の丸弁当が主流だった。級友の中には<sup>はし</sup>昼放課に家へ帰って<sup>あめつち みよ</sup>食べる者もいた。食事前に「<sup>おんめぐ そせん おん</sup>箸とらば<sup>と</sup>天地御世の御恵み<sup>と</sup>祖先や親の恩を<sup>と</sup>味わえ。いただきます」と唱えた。

男子の遊びは<sup>こと</sup>季節によって異なるが、<sup>ぎょうじゃさん ひこさやま</sup>行者山や彦佐山での「戦争ごっこ」や<sup>のぎたいしょう くすのきまさしげ え</sup>乃木大将や楠正成の<sup>せんとうぼう</sup>絵入りの「めんこ」など<sup>せんとうぼう</sup>戸外の遊びだった。学生服の色は<sup>こくぼうしよく</sup>黒から次第に<sup>せんとうぼう</sup>国防色が多くなり、学生帽は<sup>せんとうぼう</sup>戦闘帽に移る。

吉田地区から<sup>しゅつせいしや</sup>出征者のある時や<sup>せんししや いこつ</sup>戦死者が<sup>いこつ</sup>遺骨となって帰る時は、住民とともに<sup>さかい そうげい</sup>学校から地区境まで<sup>かいせん けいき</sup>送迎するのが常だった。開戦を契機に<sup>せんきょう あくか</sup>出征兵士を送る会が、そして<sup>せんきょう あくか</sup>戦況の悪化とともに<sup>せんきょう あくか</sup>戦死者の遺骨を迎えることが増えていった。戦死者の<sup>そうぎ ちょうそう</sup>葬儀は「<sup>かたき</sup>町葬」として行われ、生徒も参加した。やさしかった<sup>くや</sup>近くのお兄さんが、<sup>かたき</sup>元気に出征して行った1年半後に<sup>かたき</sup>遺骨となって帰ったときは、悔しくて「よし、この仇はとってやる」と思ったりしたものである。

また、<sup>きんろうほうし</sup>出征兵士や戦死者の家へ<sup>きんろうほうし</sup>学校から田植えや<sup>きんろうほうし</sup>稲刈りの<sup>きんろうほうし</sup>勤労奉仕に出ることもあった。

高学年になったころから家々では<sup>ぼうくうごう</sup>防空壕を<sup>けいかいけいほう ぐうしゅう</sup>掘るようになり、警戒警報や空襲警報のサイレンが<sup>ひんびん な</sup>頻々と<sup>ふしゅう</sup>鳴るようになった。空襲で<sup>ふしゅう</sup>負傷したり、死亡した時に<sup>そな</sup>備えて<sup>けつえきがた</sup>上着の胸に血液型を書き込んだ<sup>ぼうくう ず</sup>布の名札が義務づけられ、また、防空頭

巾を携帯するようになった。

家で夕食は、灯火管制のもと、芋ごはんと味噌汁、それにわずかな煮物と漬物が食卓に並ぶ質素な食事だった。薄暗い電灯の下での夕食はおいしいというより、空襲警報の間隙をぬって空腹を満たすという束の間のあわただしい食事であり、入浴も同じだった。

警戒警報から空襲警報に変わると昼夜の別なく防空壕の中へ身を隠し、ひたすら敵機の通り過ぎるのを待つのである。敵機のほとんどは御前崎や潮岬から侵入し、その目標は名古屋だった。B29爆撃機の場合は、敵機に正対し仰角45度になった時が危ない。その時に壕へ入れればよいというような生活の知恵もささやかれた。しかし、夜間の空襲はそんな余裕はなかった。

学校には飛行場建設のために転居してきた朝鮮籍の転校生や名古屋などから縁故疎開してきた子が多くなり60名を超すすしづめ教室になった。そのうえ、農繁期には弟や妹を連れてくる子もいた。私の家にも名古屋から親戚の子が疎開してきた。家族と別れての田舎ぐらしは寂しそだった。

現在の「げんきの郷」あたりへ学校農場づくりに出たことがある。背丈ほどもある草地を開墾するのである。地中に深く根ざした草を掘り起こす作業は子どもにとって重労働であった。

体操時には竹やりで敵を刺し殺す団杖訓練や手旗訓練があった。竹やりは自家製である。また、遊びの器具に回旋輪があり、航空兵になった時のめまい防止訓練だとよく遊んだ。

定期的に学校から引率されて熊野神社や七社神社へ戦勝祈願に行くことがあった。村々でも出征兵士の武運長久を祈る氏神参拝行事があり参加した。この時教えられた参拝マナーや心経は今でも役立っている。

戦況が厳しさを増すにつれて吉田にも高射砲陣地が学校南の高台に敷設され、校舎の一部が兵舎となった。また、それまで兵役が猶予されていた先生も出征されるようになった。

地区唯一の企業浅田人絹工場も軍需工場となり、愛知青年師範学校の学生が勤労働員され、清涼寺や常福寺が宿舎となった。中には、動員途中で学徒として出陣する人もいた。

卒業するころになるとますます空襲が激しくなり、非常時ということで修学旅行は中止となり、卒業写真も写すことができなかった。

卒業後、ほとんどの者は第一国民学校の高等科へ進学したが、クラスで7名

の中学進学希望者があった。入学試験しけんに備えて放課後補習授業ほしゅうじゅぎょうを受けるのだが、国語・算数・理科などの他に歴代天皇名や教育勅語・五箇条の御誓文れきだいてんのうめい きょういくちよくご ごかじょう ごせいもん あんも暗記させられた。しかし、空襲ひんどうの頻度が増したため直前になって書類選考しよるいせんこうになった。そのため運良く希望校に入学することができた。もちろん男子校である。

昭和20年4月1日 日曜日 刈谷中学の入学式は運動場だった。学校長訓くん話は学校の歴史と伝統でんとうについて話した後、「諸君は義勇隊しよくん ぎゆうたいの一員である。」と結んだ。続いて配属将校はいぞくしやうこうから「お前たちは将来皇軍の幹部こうぐん かんぶになるべき赤子せきしである。」と檄げきをとばされ、初等科時代の気持ちを叩き潰たた つぶされた。2年生以上は学徒動員で工場へ行っているため、先生と7名ほどの先輩せんぱいと新入生350名の入学式だった。私はなんだか大きくなった気分になった。服装は戦闘帽、カーキ色の名札つき学生服、両足にはゲートルまを捲いた。



学校では、先生の名をあだ名でいう伝統があるのに驚いた。赤馬とかタルなどという。

運動場の東隅すみには高射砲陣地ぶどうじやうがあり、武道場けんどうじやうや剣道場が兵隊の兵舎になっていた。

この時期、神風特別攻撃隊突入かみかぜとくべつこうげきたいの記事が多く新聞に載るようになった。4月29日は第44回天長節てんちやうせつ（天皇誕生日）。この日はじめて勤労働員に出ていた先輩たちも出席しての式だった。生徒の多さと4・5年生の中にはひげ面の先輩づらにびっくりしたものである。

この1か月間は、まさに体力強化と精神訓話せいしんくんわづ漬けの日々だった。校訓「明るく正しく粘り強く」に始まって、常在戦場じやうざいせんじやう、七生報国しちしやうほうこくなどが頭に浮かぶ。また級友に聞いたのだが、刈谷在住の生徒は夜間警戒警報はつれいが発令になると学校防衛ぼうえいのため出校したそうである。

5月になると、ヒットラー自決・ベルリン陥落・名古屋大空襲など暗いニュースが続く。しかし、必勝の信念は少しも揺るぐことはなかった。

5日はじめて歴史、数学、物象、漢文の授業があり、午後は教練で銃剣術だった。この日は自転車登校したので、下校途中市原の逢妻川いちはら あいづまに浮かぶ特殊潜航艇とくしゆせんこう約40艘を見る。5メートル程の1人乗りだ。前部に爆雷ばくらいをつけて敵艦てきかんに体当たりする小潜水艦しやうせんすいかんである。感動するとともに、何か崇高なものを見た思いで帰った。

私が、死を覚悟した時は3度ある。それは艦載機グラマンに襲われた時である。最初は、運動場でヒマの播種をしていた時である。突然運動場隅の高射砲の射撃音におどろいて空を見ると、7～8機の敵機が1列になって機銃掃射をしながら襲い来るのが見えた。機銃音とともに砂煙がこちらにまっすぐ伸びてきた。鋏を捨て一目散に運動場隅の防空壕へ跳び込み、頭を抱え身を小さくした。パイロットの顔が見えるほどの低空から旋回しては襲って来るのである。爆音が遠くなって壕から顔を出すと、敵の1機が煙を出して飛び去るのを見たときは、思わず大拍手である。高射砲が命中したのである。

2回目は、自転車で下校中に空襲警報になり、境川の橋を越した辺りで艦載機1機に遭遇した時である。石ヶ瀬川の堤防上だから身を隠すものはない。私たちは北側の土手に身を隠した。敵機は、急降下して頭上を越えて急上昇。旋回してまた急降下してきた。私たちは敵機の動きを見ながら堤防の南側へ。そしてまた北側へと身を伏せた。幸い機銃掃射はしなかった。敵が1機だったからよかったと思う。

3回は、下校途中空襲になり刈谷町駅へ飛び込んだ。すでに数機グラマンが上空を蜂が飛ぶように旋回しながら攻撃の機会を伺っている。駅は乗降客のほか避難者でいっぱいだった。瞬間、急降下の爆音と機銃音、そしてガラスの飛び散る音で駅舎の中はパニックになった。私は、出札口の下で身を屈めていた。敵機は何度も繰り返し攻撃をしてきた。私はこれでは機銃弾によるガラスの破片が怖くなって中央へ移ろうとした時、ガラスとともに機銃弾が出札カウンター板を貫通した。このときは身震いがしばらく止まらなかった。

忘れられないのは終戦の日のことである。夏休みであるが、私たちは学徒動員として三河大浜の玉津浦にいた。当日重大放送があるというので、昼前広場へ集合整列した。小型トラックの荷台に置かれたラジオが玉音放送をはじめた。雑音で天皇陛下のお声はよく聞き取れなかったが、途中から先生方は全員泣いておられた。生徒にとって一番怖かった石原先生も声をあげて泣き出した。

翌日から勤労働員は解かれ、先生と生徒だけの学校に返り、自由主義教育が始まった。しかし、先生の豹変ぶりは生徒の落胆と不信感を募らせた。また、予科練帰りの先輩も多く、下級生には怖い存在となった。

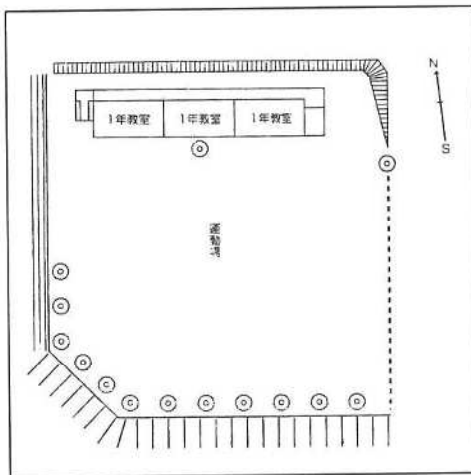
思えば、男女共学となるのはこの1年後である。

## 大府中学校 分教場にて

築波宗二

昭和22（1947）年4月、新学制が公布され、義務教育が従来の8年から9年（小学校6年・中学校3年）に延長された。

小学校は、従来からの国民学校を移行させるだけでよかったが、中学校はまったくの新設で、校地も校舎もなく、各市・町・村ともいろいろ困難な問題があり困惑した。大府町（当時の）は、新設の中学校は全町で一校と定め各地から通学しやすいようにと校地を現在の大府中学校の所在地に選定した。しかし、校舎もなく、本部を大府小学校に置いて同居し、教室その他の間借り生活を始めた。それでも、入りきれない3クラスは<sup>ひいらぎやま</sup>終山にあった会社の社員研修用の3教室と運動場を借りて分教場とした。



大府産業におかれた第二分教場  
（現終山県営住宅地）

分教場には、1年生の3クラスが参加した。この運動場は狭くて、放課に生徒が出ると活発な運動やボール投げなどは、できなかった。6年間広い運動場で<sup>のびのび</sup>と放課を楽しんできた生徒には、気分転換もできない物足りない毎日であった。

授業は教科担任制ではあったが、教師の数が不足して<sup>じゅうぶん</sup>に機能していなかった。特に分教場は3人の担任が、専門教科以外にも受持って苦勞した。教科書がなく、指導計画もなくつらい授業であった。しかし、教科

によっては本校の教師が分教場まで往復して出張授業を行った。自家用車の無い時代で、徒歩か自転車で分教場へやってきた。また、本校で会議のあるときは分教場の3名の教師は、本校まで出むいて参加した。全校的な学校行事には、生徒を引率して往復した。



第二分教場風景（昭23）

授業の切れ目は、手で持っている“りん”を使った。（商店街の大売り出しに振る“り

ん”）全体には聞こえないがチリンチリンという音が一部の生徒には聞こえて教室に入りはじめると全体の生徒もゾロゾロと教室へ入って授業が始まる。授業の終了は“りん”を振る人がない時には授業者が各自腕時計を見て判断した。

のんびりした光景と言えは言えるが、3人の担任にとってはわびしい生活であった。



第二分教場の校舎

写真・図は『大府中学校50年史』より

#### 昭和22年4月 新制中学校

- 生徒用教科書は、未だ一冊もなく校舎間借り、雨の日は傘をさしての授業風景もみられるほどで、教師は教師用教科書や教材プリントにして利用、時には教師自弁で時計盤などを作って間に合わず状態もあり、寺子屋以上の苦心であった。
- 机・腰掛けの修繕や分教場への運搬などに追われ、落ち着かない日々
- 頼るべきものは、学習指導要領一般篇だけ
- 開校当初大府中学校生徒は、711名（男368名、女343名）
- 大府産業の青年学校校舎（現 柘山県営住宅）

（大府市誌より）

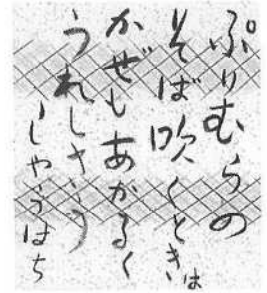


ガンジ山にできた大府中学校（昭和30年ころ）

にい み なんきち  
新美南吉と戦争

小学校の教科書にも載っていた『ごん狐』『手袋を買いに』などの作者として知られている新美南吉は、知多半島の半田の出身です。病弱な彼は、戦争中の昭和18年3月22日に、29歳7か月の若さで亡くなりました。この間、昭和13年3月31日から、亡くなる直前の昭和18年の2月まで、安城高等女学校の先生でした。半田から安城へ通っていた訳ですので、途中、大府駅で武豊線から乗り換えていたのです。したがって、大府にも南吉の足跡があったこととなります。渡辺房枝さんは、安城高等女学校時代に、その新美南吉が4年間担任の先生でした。そして、国語と英語を教わり、多くの思い出を持っています。そして、次のような思い出の記を寄せてくださいました。

「春、プリムラの花が咲くと、いつも思い出します。『ぶりむらのそば吹くときは かげも あかるく うれしさう』一枚の色紙に、新美南吉先生が、女学校卒業のとき、私に書いてくださった一片の詩。先生が『こんなプリムラのように、君がいるだけで周囲を明るく楽しくするような。』としみじみ言われた言葉。素直な心と純粋にものを考え見るようにと指導されたこと。そのようなことが思い出されます。



〈先生から送られた色紙〉

また、その当時、私たち生徒が詩をつくるように、そして、豊かな心を育むために、ワラ半紙にガリ版刷りの詩集を出してくださいました。先日、<sup>たんす</sup>筆筒の中から、その小さな詩集、第3集『<sup>しんちやうげ</sup>沈丁花と卵』・4月、第4集『麦笛』・5月、第6集『星祭り』・9月の3冊が



〈新美南吉先生と私たち〉

出てきました。思わず読みいりました。その第6集のはじめに、こんなことが書かれていました。『ささやかな<sup>お</sup>なみでしたが、2月に始めた詩集…詩集というのも可笑しい位のものですが、ともかく、第2・第3と続いて第6までときました。だが、もうこれで当分やめねばなりません。戦争のため我々が喜んで忍ばねばならない不自由の中に、紙の不足があるのです。それが遂に、学校の中にもやってきたのです。紙商人は、もう要るだけの紙をもってきてはくれません。どこにも紙がないと言います。詩が続かなくて止めるのではない。紙が足りないから止めるのです。だから、紙が再び豊富になるときが来たら、そして、その時、みんなの中に詩心がなおあるならば、我々は再びこの細いとなみの糸を繰りたいものです。早くその日が来るといい。祖国のために、詩のために。9月26日』

思うように紙もノートも与えられずに、帰らぬ人となられた先生、最後まで生きたい・書きたいとの一念であったと思われる先生でした。」と述べられています。

南吉の反戦平和童話として、『ひろったラッパ』が知られています。これが書かれたのは、昭和10年、南吉が東京外国語学校4年生のときでしたが、これが世に出されたのは、戦後の昭和23年のことでした。戦争という過酷な<sup>かこ</sup>運命の中で、不遇のうちに、若くしてこの世を去った南吉の心情は、いかばかりであったことでしょう。

## 5. 語り継ぎたい思い



こども 学校で話をしたの？

わたし 先日、大府南中学校で、2年生に話をしたんだ。

こども どんな話をしたの？

わたし 戦争の頃の話をしたんだ。50年、60年過ぎると、世の中も大きく変わるからね。

こども これから50年過ぎると、世の中はどのように変わるのかなあ？

わたし わたしが子どもの頃には、自分が自動車に乗ったり、テレビを見たりすることは、予想できなかった。ましてや、コンピューターなどは、考えもしなかった。これからの50年は、これまでの50年よりもっと変わると思う。何を残さないで残し、何をどのように変えて行くかが、みんなの大きな課題だと思う。

# 次世代に伝える リレーランナーの一人として

下村 博

「わたしたちは平和のリレーランナーとして、戦争や原爆の恐ろしさと平和の尊さを語り継いでいきます」小学6年生の児童が読みあげる平和の誓いがテレビから流れている。今日は57回目の「広島原爆の日」で、広島市の平和祈念公園で行われている原爆死没者慰霊式典の様式である。

私の戦争体験といえば。あの支那事変が勃発し村のあちらこちらの家に召集令状がきたといわれ、新聞やラジオからは「国威宣揚、八紘一宇」などの言葉がながれ、戦費調達のために盛んに国債が発行された。そんな時代の昭和13年に生れた。その3日後に父親に召集令状が届き、10日後に出征して行ったと聞いている。その日に役所に出生届が出されたので、私の誕生日は6月30日である。父は軍隊入隊後は中国大陸の北支戦線へ…。

こうして私は、6歳になるまで父親の顔は知らなかった。昭和17年秋に無事北支から帰還した。父親を迎えに出た大府駅で、ひげづらの怖いおじさんに抱きあげられ、大泣きした。土産にもらった大きな真赤なリングは今でもはっきりと覚えている。

そして16年、近くに飛行場ができると噂になった。航空機を製作していた三菱重工大江工場が飛行場の建設をすることになり、大府町長草、吉田と上野町（現東海市）にまたがる丘陵地に飛行場の建設が決まった。昭和16年10月17日、酒井大府町長はじめ地元関係者出席のもと起工式が行われたと祖父から聞いた。

太平洋戦争の戦局拡大から飛行場の建設を一段と急がなければならず、山を削り谷を埋める大工事が必死の人海作戦で敢行されました。沢山の人の力が投入された大工事も起工式から30か月目の昭和19年春に竣工した。完成した飛行場は約1000メートルの滑走路を持ち、20万坪の工場に3800台の工作機が備えられた。二棟の格納庫と大府駅からは専用の引込み線が引かれ、4月6日に試験飛行が行われたと記されている。ここで生産された飛行機は「キ六七」といわれる四式重爆撃機で通称「飛龍」といわれた。

父親が家にいるということは楽しいことが多い。特に、毎日のように話してくれる中国での話は、大変楽しいひとときだった。そんな父親に、二度目の召

集令状が届き、3日後に出征して行った。二度目は内地で伊勢方面だと教えられた。家は農家だったので、父がいなくなるとすべてが母と祖父に負担がかかり、朝早くからなれない牛車のたずなを取り、野良仕事にでかける母の姿は今でも忘れていない。

敵機の攻撃を受けるようになると、家の東に高射砲陣地ができた。その高射砲部隊が学校に駐屯した。近くには探照灯施設も造られた。高射砲部隊の兵士は故郷に子どもをおいて兵役に出てきた人たちで、大変可愛がられた。高射砲陣地は毎日の遊び場だったが、砲を撃つようになると近寄れなかった。

私は、昭和20年4月大府第四国民学校へ入学した。学校には兵隊がいたので、吉田支所の倉庫や近くの公会堂が教室だ。祖母手作りのカバンと言うより袋に本を入れ、防空頭巾をかぶり公会堂へ。すると警戒警報のサイレンが鳴る。すぐに家路へ。空襲警報になるとそのまま防空壕へ入る。そんな毎日が続くようになった。飛行場にも爆弾が落ちた。そして、名古屋方面へ爆撃に向かうB29が毎日のように上空を通るようになり、小さな灯りでも判るので空襲警報になると電灯は消した。家の中でも、防空壕でも真暗になるので夜はきらいだった。特に名古屋が空襲の時は空が真赤に染まり、翌朝上空から雪が降るように灰が降ることもあった。



一年生の夏、戦争は終り、可愛がってくれた兵隊さんもいなくなった。父も帰って来た。戦争で食べ物がなく、夜になっても一時間くらいしか電気がつかない。食糧難だったが、農家だったので私たちはまだ良い方だった。空襲の心配がなくなったので、学校から帰るとすぐ遊びに出掛ける日々となった。食べられるものは何でも口にしたが、特に初夏に赤くなる「こしきの実」は、美味しく遠くの山まで取りに行ったものだ。田圃の「つぼ取り」、「どじょうすくい」に「かえどり」、池での魚釣り等々の毎日だった。中でも食用蛙の蒲焼は、うまかった。

ところどころ記憶もおぼろげで一本の線につながらないが、これが私の戦争体験です。これからも親から聞いた体験談をまじえ、次の世代へ語り継いでいきたいと思う。私たちの世代から次の世代へのリレーランナーの一人として。

## 特攻隊員の死に報いるには

蟹 江 博

東海市に隣接する「上野台地域」には、かつて飛行場があったことをご存知の方は多いと思う。陸軍の訓練用飛行場であったと聞く。近隣の住民は飛行場建設のために動員割り当てがあり、資材運搬や整地作業に従事して飛行場が完成した。現在のようにパワーシャベルとかクレーンといった土木重機はない時代のこと、人海作戦で、まさに人々の汗の結晶というべきものだ。

やがて飛行部隊が到着し、その隊員たちが、わが家に滞在することになった。わが家は、日本軍に接收されてしまったのです。家の座敷などの主な部屋は、兵隊さんたちの宿舎として使われることになり、私たち家族は、六畳二間で暮すことになった。不自由だったが、国のためだということで、我慢する日々を過した。

わが家を宿舎としていた兵隊は、いわばエリートで、軍の幹部を養成する幼年学校とか士官学校の卒業生で、パイロットの隊員は航空士官学校を出ていた。

日常の訓練の内容を見聞きすることができました。その内容は、指導教官の乗った飛行機が吹き流しを引っばって飛んでいくと、その吹き流しを訓練生が後方の飛行機から機関銃で撃つ練習だったようだ。弾が命中したかどうかは、それぞれの弾に絵具が塗ってあるからわかるということだ。この訓練は、伊勢湾上空で行われた。

当時、私は小学生だったので兵隊たちと仲よしになり、軍刀を見せてもらったり、金モールのついた帽子や軍服に触れさせてもらった。時には、飛行服を着せてもらったりした。時には、家の上空を超低空で飛んでほしいと頼んだこともありました。操縦席から手を振っているのが見えるくらいに低空を飛んでくれました。この地域は背の低い家屋ばかりだったので、できたことでしょう。わが家に宿泊した兵隊さんは、延人数で30人ぐらいになる。自分の訓練期間が過ぎると、所属部隊へ帰って行った。三重県にある明野航空隊である。

兵隊さんと過した楽しい時期は、戦争が激化し、日本が劣勢になって終りになった。アメリカ軍機による空爆は、日増しに回数が多くなってきた。日本軍は、敵陣または敵艦に飛行機で突入する特別攻撃（現在、中東地区でしばしば行われている自爆テロ）が実施されるようになり、そして広島・長崎に原爆が

投下されて終戦となった。

何年か経って知ったのだが、わが家を宿舎として射撃練習をした人たちは、全員が特攻隊員として出撃し、生還した人はただ一人だけということでした。若い優秀な前途ある青年たちの命が失われたのである。

戦争中は、言論統制のもとで国民は真実の情報を得ることはできなかった。特攻隊員の彼らとて同じです。特攻隊員になって、飛行機もろとも敵陣に突っ込んでいく死の道が最善であったのだ。パイロットになれるほどの人たちだから優れた知能、身体の持ち主たちである。もし戦争がなかったら、いろいろな分野で活躍されたことであろう。しかし、彼らには、世の全体像は知らされず、目かくしをされた馬のようにただひたすら走っただけだった。自分の生き方に満足して生涯を終えた人もおれば、生き方に疑いをもっていた人もいただろうに思っている。

それに比べて現代は、様々な知識、情報を自由に入手し、また、自己の考えるところを自由に発言し、発表することができる社会である。テレビ・ラジオなどを通しての受身の情報ばかりでなく、読書をとおして能動的に知識を得て、自分自身の生き方を作りあげてほしい。

特攻隊員は「お国のために身を捧げた」と美化されているが、自由を奪われた哀れな存在であったといえよう。彼らの死を無駄にしないためには、私たちは、よく知識や情報を吸収して、自分自身の見解をまとめて、発言すべきときには発言し、反対すべきは、おおいに反対していくといった、自分の生き方を作りあげていくことが、大切だと思う。他に強制されることなく、自分で納得した暮らしを送りたいものである。



(冷や酒をのみ交わす出撃前の特攻隊員)

『日本の百年』筑摩書房より

# 私の生涯に深い 感謝・感激・感動の思い

鷹羽 操

21世紀の今日、私は、大正6年（1917年）7月14日生れ、85才であります。はからずも、大府市の「名誉市民」という身にあまる称号をいただき、深く感謝するものであります。

私の青春、二十歳代は、まさしく戦中・戦後でありました。昭和12年、日支事変（日中戦争）が始まり、やがて、第2次世界大戦・太平洋戦争が始まりました。昭和20年8月6日、

広島に、9日、長崎に原子爆弾が投下され、ポツダム宣言受諾。そして、8月15日、終戦となりました。天皇陛下の「終戦の詔書」を聞いた時は、号泣いたしました。今日、平成14年8月15日、平和と命の尊さを改めてかみしめます。

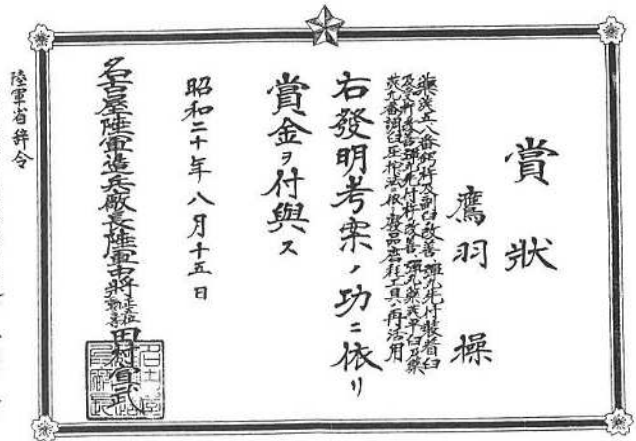
私は、県立刈谷中学校を卒業

後、国の兵器を造っている名古屋陸軍造兵廠（そうへいしやう）に就職いたしました。その後、国費にて3か年大阪に学び、遠く現在の春日井市にあった鷹来製造所（たかぎ）に配属されました。鷹来製造所は、小銃実包（じっぽう）・薬莖（やっきやう）の製造のため、26万坪の用地に昭和16年に開設されました。従業員も終戦時には4千人を超える大工場でした。

鷹来製造所は、終戦の前日の8月14日に、初めてB29による爆撃（ばくげき）の洗礼（せんれい）



〈鷹来製造所跡記念碑〉



〈発明・考案の功による賞状〉

を受けました。幸い全員退避を実施していたので、一人の死者も出さずにすみました。でも広い工場の半分ほどは焼けてしまいました。私は、ここで「冶金技術者」として、兵器の研究製造に精進していました。奇しくも、前日の空襲の後片づけをしていた終戦の朝、発明考案の功により上のような職場での賞状をいただきました。

現在、この鷹来製造所の跡地は、名城大学農学部・名古屋市水道局・鷹来中学校・春日井市総合体育館などとなっており、往時を偲<sup>しの</sup>ばせるものは、体育館の横に建設された記念碑のみであります。

昭和20年5月17日、大府の南島・<sup>さんしき</sup>棧敷・家下・オシロ地内に<sup>しょういだん</sup>焼夷弾が投下されました。死者3名、焼失家屋46棟という被害でした。私の家にも12発の焼夷弾が投下され、母屋は半焼、納屋は全焼という被害でした。

私は、焼夷弾の取扱について訓練を受けていたので、すぐ<sup>きぶとん</sup>座蒲団で座敷に落ちた二つをつかみ、窓から外の道路に投げ捨てました。油脂が付着し、燃え出していた柱の火は、座蒲団で<sup>たた</sup>叩き消しました。しかし、土間作業所（みのこ）は、稲束が積んであり、それに燃え広がったので天井を焼いてしまいました。<sup>ちょうど</sup>丁度、家の敷地内に組の防火水槽があったので、家中の者がバケツリレーで消火にあたりました。その内に消防団も駆けつけ、全焼をくい止めることが出来ました。もし、私たちが逃げておれば、私の家も全焼であったと思います。当時の状況を思い重ねると、平和の尊さをつくづく思います。

私の母は、大府一の仕事師として、朝早く起き、私たちを送り出してくれました。私の健康は、母親ゆずりであり、尊敬する母の愛情に感謝する日々であります。

私の幸せは、

1. 大府に生まれ、育ち、しかも母校大府小学校に通い、学ぶ子どもを<sup>なが</sup>眺め、「ふるさと大府」のまちづくりに精進できたこと。
2. 健康に自信があること。病気とは気を病むことであり、気のゆるみが、病気になると思い、仕事を生きがいとし、忙しさと緊張の連続を私の健康法として来たこと。
3. 大府の地の利（自然・交通）、人の和により、企業の誘致、義務教育施設・コミュニティ施設などの充実ができたこと。

本当に、運に恵まれ、健康にめぐまれ、このような幸せを感じることが出来ることに感謝しております。

私の信条は、「らしくなりきる」人生ということです。技術者であれば、技術者らしく。百姓であれば、百姓らしく。議員であれば、議員らしく7年勤めました。助役になれば、助役らしく22年も勤めました。市長であれば、市長らしくと思い12年間勤めました。現在、大府市名誉市民、名誉市民らしく残りの人生を全うしたいと思います。

## 続、時は流れて

森 下 太三<sup>たみじ</sup>

大府市老人クラブ連合会の機関紙「せせらぎ」第20号（平成14年 3月10日発行）に、戦前北崎地区上空で起きた軍用機の墜落<sup>ついらく</sup>に関連する『時は流れて』と題する小文<sup>けいさい</sup>を掲載していただきました。これは、地元老人クラブ会長の久野新太郎様の体験談をお聞きして感動し、この感動を誰かに伝えたいという衝動<sup>しょうどう</sup>に駆<sup>か</sup>られ執筆したものです。

せせらぎ第20号が発行されて暫くして、人伝<sup>ひとづて</sup>に、当時飛行機墜落事故<sup>もく</sup>を目撃<sup>げき</sup>した人々の声を聞くことができました。

まず、北崎町に住む女性の体験談をご紹介します。彼女は、当時12才の小中学生でした。現在の大府市立神田小学校の校庭で学友と遊んでいる時、東の上空で飛行機の爆音が聞こえました。当時は、飛行機など滅多<sup>めった</sup>に飛来しない時代でしたので、みんな物珍しげに空を見上げました。その時、突然爆音が消え、<sup>きり</sup>誰もみ状態で自分たちめがけて墜落をはじめました。「アッ、飛行機が落ちる!」口々に悲鳴をあげ校舎の中に飛び込みました。

次は、横根山の男性の体験談であります。国鉄共和駅に出征兵士を見送りに出かけた時、この墜落事故を目撃しました。出征兵士の乗った列車が発車した直後、フト空を見上げた時、自宅の方角に墜落を始めた飛行機を発見しました。急いで自転車を飛ばし家に帰りました。幸い自宅から外れた井田山の方角に落ちたようでホッとしました。

こんな墜落事故の翌年、日本軍の真珠湾攻撃<sup>しんじゅわん</sup>があり、日米の戦争<sup>ぼっぼつ</sup>が勃発し暗い戦時体制下の、不自由な生活がはじまりました。以下に『時は流れて』と題する小文をそのまま紹介させていただきます。

### 時は流れて

平成13年8月14日、お盆の朝、北崎井田の池田農園の葡萄<sup>ぶどう</sup>直売所の店先に、千葉ナンバーの乗用車が止まり、70代の女性とその家族が降り立った。農園主の池田幸広氏が対応に出るとその婦人は、昭和15年12月11日、井田地区上空で軍用機の操縦<sup>そうじゅう</sup>中に殉職<sup>じゅん</sup>した高橋繁軍曹の妹さん一家であった。当時、軍の広報では事故の詳細は一切分からず、一度兄の殉職現場へ供養のため訪れたいと願っていたが、機会がないままに時が流れ70才余りの高齢を迎えた。自分の余生を考え、今が最後のチャンスと思い、当地を訪れたという。来意を聞いた農園主は、当時の事情を良く知る老人会長久野新太郎様宅に案内し、

当時18才の久野青年の貴重な体験談を詳しく聞くことになった。

事故当日は、好天に恵まれ農作業の能率もあがっていた。南の空で軽快な飛行機のプロペラ音が聞えたので、手を休めフト空を見上げた瞬間、視界の中で飛行機が空中分解し、キリ揉み状態で自分を目掛けて落下を始めた。危ない、咄嗟に木陰に身を伏せて安全を図った。間一髪頭上を掠めるように通過し、井田墓地の方向で大きな衝突音が聞こえた。我に返った久野青年は立ち上がり、その方角に必死で走った。飛行機は墓地よりもっと北の、桑山梅太郎氏と伊藤猛雄氏の地境の蜜柑畑に墜落していた。機種は陸軍の九九式双発爆撃機、通称金魚腹と呼ばれる機種であった。久野青年が



〈九九式双発爆撃機〉

現場に到着するのと前後して、伊藤猛雄氏も姿を見せ、事故機の中の人を助けようと機内を調べたが、搭乗者の姿は一人も居なかった。直後に警察が来て、住民から飛行機を隔離するための縄張りをして、軍関係者の到着を待った。事故を知った近郷の消防団・青年団の人々が、徒歩や自転車で続々と集まって来た。そして、手分けして井田山や坊主山の畑や雑木林の中に分け入り、遭難者を探し始めた。桑山氏宅が、炊き出し本部になり捜査活動に協力した。その結果、現在の市道井田上線坊主山内にて高橋軍曹を、数百メートル離れた所で、岩崎正義中尉を発見した。その夜は、地元有力者のお宅の一室を借りて、地域の有志と青年団の役員で、丁寧な通夜が営まれた。後日、北崎清水ヶ根の山中に墓標を立てられ、お花や線香が供えられた。戦後、東海道新幹線工事で他所に移転され、時の経過と共に人々の記憶から薄れて行った。

久野様のお話を聞きながら、高橋様一家は、すぎるような気持ちで墓標の手がかりを求めた。古い記憶の中に、名古屋市桶狭間の庚申様裏の上ノ山墓地に移転したと、人づてに聞いたのを思い出し、其の所に案内すると、やっぱりその共同墓地に安置されていた。高橋一家は、思わず膝まずき泣き崩れた。夏の太陽が西に傾きかける頃、積年の願いが叶い、一家は感激と満足感に浸りながら大府市を後にした。

本稿は久野様のご指導を頂き記述しました。



〈上ノ山共同墓地入口には  
庚申様の祠が建って居る〉



〈土に埋もれた文字を確認する久野会長〉

## ついらく 飛行機墜落事故追想

久野正巳

大府市老人クラブ連合会の機関紙、せせらぎ第20号（平成14年 3月10日発行）に、北崎老人クラブみどり会の会員、森下太三次氏が「時は流れて」と題する一文を寄せられていました。その一文の内容は、昭和15年12月11日の午後、北崎の井田地区上空における、陸軍の軍用機の爆発・墜落事故についてでした。

その当時、私は大府第二尋常小学校（今の神田小学校）の6年生でした。ちょうど午後の授業も終り、教室の掃除をしていると、突然教室の上の方でドーン！という大きな爆発音がしました。と、教室の外、運動場の方などから「飛行機が落ちた！」という声と同時に、大騒ぎが起きました。びっくりしながら私たちは、とにかく5～6人ぐらいの集団で井田山の方へ走って行きました。あっちこっちから、何人かの塊が井田山のほうへ駆け込んでいった様子が、今だに目に浮かんで来るような気がします。

当時のことですから、小学校から井田山までは、随分と曲がりくねっていたので、おおよそ4kmぐらいの道程があったでしょうか。ようやく走り込んで行った先は、桑山梅太郎さんの母屋前の竹藪でした。すでに竹藪の周辺は縄が張ってあり、人の怒声、人だかりなどで、子どもたちは墜落現場に近づくことは出来ませんでした。



〈飛行機墜落現場の今の様子〉

今、私の記憶としては、飛行機の胴体部分だけが、土中に刺さり込んでいたという位のことしか判っておりません。でも、森下さんの一文を何度も何度も読み返しているうちに、北崎地内の清水ヶ根の山中に墓標が建てられていたことを思い出し、「よし、何とかして、あの墓標の移転先を見つけて、お墓にお参りしてみよう。」と思いました。でも、墓標がどんな形だったのか、どんな文字が彫られていたのか、全く判らないまま、名古屋市桶狭間の庚申様を聞き聞きして行きました。「こんなことなら、森下様に聞いて来ればよかった。」と反省をしながら、ともかく、庚申様の杜を見つけ当てました。

ところが、庚申様のすぐ裏の墓地を見渡すと、おおよそ二百基ぐらいの石塔

が立ち並んでいるのです。清水ヶ根に建っていた墓標がどんな形のものだったか？ どんな文字が記されているのか？ 全く判っていませんでしたので、「はて、この石塔の中から、どうやって清水ヶ根の墓標を探すのか。」と思案投げ首。ともかく、車を止める場所を探しながら墓地の裏側の方まで来てしまいました。墓地裏にある慈雲寺じうんじ近くの道端に車を止めて、墓地の裏手から墓地の中に入って行きました。

そこは、墓地の奥まったところで、付近には小さな無縁仏むえんぶつの石塔せきとうや三界万霊さんがいばんれいと刻まれた古い石碑せきひなどが並んでおりました。「さあ、どうやって清水ヶ根の墓標を探そうかな？」と思いながら、ふと、目の前を見たのです。すると、目



の前に写真のような石碑が目に入ったのです。思わず「あっ！」と息をのみました。一字ずつゆっくりと刻字を手探りで読んで行きました。「ああ、わしを待っていてくれたんだ。」と思わず私はそう思いました。持っていた菊の花を添えました。とたんに、故岩崎中尉殿と高橋軍曹殿が「ありがとう！」と言ってくれたような気がしました。とにかく、土の中に埋まっている文字が判りません。私は落ちていた木の枝で、石碑の回りをほじくって行きました。

さいわい、碑の周囲は粘土と砂地だったので、掘って行くうちに二人の名前も、泥にまみれながらも読み取れて来ました。岩崎正義君、高橋繁君じゆんし殉死、と読み取りながら、ふっと石碑の頭部をつかんだ瞬間、土中に埋まっていた石碑がグラッと私にもたれかかって来たのです。ヒョロツとしながら、私はしばらくの間、言いようのない寂寥せきぱく・寂寥せきりょうの感に打たれてしまいました。そして、また土をほじくっていく気にはなれませんでした。

後日、墜落事故を目撃された久野新太郎氏と伊藤弘三氏をお訪ねして、種々のお話を聞くことができました。伊藤弘三氏の話によると、中部第九四とは、浜松の航空隊で、台湾より帰隊する途中、何等かのトラブルにより、空中爆発しょうげきを起こし、その衝撃おん音は2～3キロにも及んだとのことでした。

また、桑山美親氏（梅太郎氏の孫）より当時の写真も見せていただきました。



〈落下地点近くに建っていた碑〉  
右より岩崎中尉の父、兄、高橋軍曹の父、弟、桑山梅太郎氏

# 戦争はこんなにも惨い

野田 光輝

当時私は8歳、小学校1年生で、毎日のように出される空襲警報<sup>くうしゅうけいほう</sup>や、やがてそうなるに違いない戦火を逃れるために、生れ育った名古屋市から知多郡東浦町<sup>おがわ そかい</sup>緒川に疎開<sup>そかい</sup>していました。8月15日の玉音放送<sup>ぎょくおん</sup>（昭和天皇の終戦宣言）を道路上に座って、訳<sup>わけ</sup>の分からないまま聞いていた一人でもあります。大人たちが大声で「戦争は負けた。戦争は終わった…」と泣きわめいていたのを思い出します。おまわり（警察官）や雷よりも怖い<sup>こわ</sup>と思っていた大人たちが、道路にへたりこんで、大声をあげて泣いていたのです。絶対に負けない神の国が負けたのです。しかも、現人神（あらひとがみ＝天皇陛下）その人が、「耐えがたきを耐え、忍び<sup>しの</sup>がたきを忍び…」と神民（国民）に直接<sup>しよくちよく</sup>、詔勅（天皇が意思を告げる文書）をのたまわって（伝えて）いるのです。

多くの肉親が・同胞<sup>どうぼう</sup>が、神の子として命を捧<sup>ささ</sup>げて戦い、死んでいったのです。日本が負けるということは全く信じられないことです。戦争の悲惨<sup>ひさん</sup>さは数多く、本や映画に記述されています。天皇は神であり、軍の上官は天皇である。天皇の言動<sup>くんめい</sup>（君命）は絶対であり、それを拒否したり反論することは許されない。君命に従わなければ、反逆罪であり、極悪人のレッテルがはられ、その町では生活できなくなります。

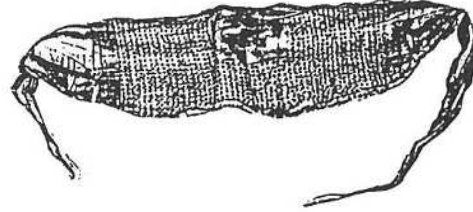
もの心つく頃から、そういう環境、例えば、どこの家でも神棚<sup>かみだな</sup>のある部屋や仏間<sup>ぶつま</sup>などには、その上に天皇・皇后の御真影<sup>ごしんえい</sup>を掲げて現人神<sup>あらひとがみ</sup>として敬い、大和魂（やまとだまし）の源になっていたのです。そうした日本で生まれた私たちのほとんどが、それを疑うこともなく、育てられ教育され「日本は神の国」と信じて成長しました。だから、私たちは「神の子」ですから、たとえ他所<sup>よそ</sup>の国と戦争をしても「絶対に負けない」し「死ぬことはない」のです。何故戦争するかは全く知らされないし、ましてや侵略などと…神の子は知る余地<sup>よち</sup>もなかったのです。

赤紙（あかがみ＝軍隊に入隊する召集令状）が来ると、神兵（本当は神ではなく新兵）として誰もが勇躍<sup>ゆうやく</sup>し、町内の皆さんの歓呼の声に送られて出征（出兵）したのです。太平洋戦争以前は、まだまだ戦争の悲惨さが実感として国民に伝わらず、神格化<sup>しんかくか</sup>された社会情報が流布<sup>るふ</sup>されていたため、「お国のために死

ぬ」 「死んで守護臣・守護神」になることを誇りとまで考えていたのです。

太平洋戦争が末期に近づくと、ようやく国民の間にも、何となく「赤紙が来たら二度と生きては戻れない」という悲壮感が流れ始めていました。それでも、千人針を身に付けていれば、敵の弾丸

もはじき返す。敵は鬼畜だから捕まるとなぶり殺しにされる。女は特に素っ裸にされて辱めを受けたうえ、晒し者にされる。敵を見つけたら竹槍で突き殺せ。日本人であるなら男も女も、万



〈千人針〉…日本手ぬぐいに武運長久を祈って一針づつ縫ってもらったもの

が一敵に捕らえられるようなことがあったら、辱めを受ける前に即座に舌を噛み切っても自決（自殺）して大和魂をみせてやれ…と聞かされたものです。

賢くも、神の子たるものが世間に対して恥ずかしい振る舞いがあったてはならない。日本人たるもの万が一のときは、何も言わず自らの手で即座に命を絶て！何も言わずに死ね！というのです。当時、日本人の誰もが、こうした風潮というよりは生きざまが、正しいと信じて疑わなかったのです。こうした世情は、戦争を知らない世代の人々にどのように説明しても、きっと理解できないに違いない…と私は思います。

人が無知であることが、どんなに恐ろしく悲しいことか。今様に言えば、オウム真理教の有り様を見れば、推察出来るのではないだろうか。オウムは、ある一団に過ぎませんが、大和魂は日本人全員が、いわば日本真理教を信じていたのです。家族も社会も生活・教育・政治の全てが、大和魂を信じて疑うことがなかった。いや、疑うことを許されなかったという方が、正しいのかも知れません。そうすることが国を愛し、郷土の誇りでもあったし、人が人として悲しんだり泣いたりすることが、大和魂に反していれば「非国民」だったのです。戦争の状況についても、正しい戦場の有様は伝えられず、国民の士気を奮い立たせるために「日本軍大勝利」など、軍隊・軍人の勇姿だけが誇張して報道されていた様な気がします。戦死者は、「天皇陛下万歳」を叫び、「御国のために身を捧げた」と。しかし、戦友の実話は戦死者の大半が「お母さん」と、その名を呼びながら亡くなられたと聞きます。歪曲された大和魂が、どんなにか同胞も含めて多くの人々の命を奪ったことか。今更のように戦争の惨さを思い起こさずにはいられません。また、決して忘れていけないことは、数知れない一般の人が、家や家族を戦火で失ったことです。

# 次世代に伝えよう戦争記録

高橋 憲 一

## 1. はじめに

私は、昭和5年、現在の岩手県北上市和賀町で、農家の5男として生まれた。昭和16年12月8日、日本軍は、米国・英国を敵国として宣戦を布告、大東亜戦争が勃発した。日本国民が一丸となって、国を守るために、勝利のために、国に命を捧げる覚悟で戦うことを決意した。しかし、資源が豊富で、重装備に勝る大国に対して、資源が不足し、軽装備で戦う小国では、とうてい勝利する相手ではなかった。国民は、神の国・日本国の勝利を固く信じ、果敢に戦ったが、ついに、昭和20年8月15日、歴史的に例を見ない終戦が、天皇陛下の玉音放送により告げられた。すべての国民が、一時期、奈落の底に突き落とされ、生きる術を見失った感があった。しかし、勤勉な国民は、直ちに日本国の復興に立上がった。そして、平和な国・日本が築かれ、さらに、世界が驚く経済大国・日本が築かれた。

## 2. 戦時における銃後の守り

### (1) 大東亜戦争勃発

大東亜戦争が勃発した当時、私は、まだ小学校4年生だった。漠然とした記憶しか残っていないが、世の中は、勝利・勝利に沸き返っていた。私は子供心ながら、戦争には絶対勝たねばの意気に燃えていた。「大人になったら、軍人を志願し、米・英と戦い、命を国に捧げても国を守ってやる。」と、幼いながらも決意をしていた。現在でも、このことは、はっきりと記憶に残っている。



〈尋常小学、修身の教科書の一コマ〉  
忠義をテーマにした木口小平ラッパの話

### (2) 男の働き手が不在になった農家の銃後

戦況が激烈になるに従い、青少年から壮年にいたる、健康な男子は皆、志願兵・徴兵・軍属として召集され、軍需工場や出征兵士として戦地へと向かった。いきおい、留守は老人・婦女子の世帯となった。当時、我が家は、田2町歩、畑1町歩を耕作し、山林5町歩を保全する専業農家であった。農作業は、現在のような機械化は皆無で、全てが人手と農耕馬の活用であった。すでに、長男と4男は軍人、次男は東京の軍需工場に勤務しており、全ての農作業は老いた

両親と私ども子どもの負担であった。しかし、お国のためにと弱音をはかず、骨身を惜しまず、食料増産に励んだ。このような状況による、疲れも喜びとするような強い精神力は、当時の社会環境により培われたと考える。また、家族の強い絆と心の温め合いに支えられ、だれ一人、文句を言う者・言い争いをする者はいなかった。

### (3) 銃後の守りは愛国婦人会の手で

男の働き手が不在となった農家の主婦は、国から強制される食料増産に対応のため、田畑の農作業に追われた。そんな中でも、町では愛国婦人会を編成、



(銃後の守り防火訓練、東海市名和で)  
『忘れられぬ記憶』東海市教育委員会編より

竹槍で武装し、銃後の守りを固めていった。この武装した愛国婦人会の勇姿は、もんぺ姿に地下足袋をはき、額には日の丸の手拭いを巻き、手には竹槍を持つという出立ちであった。在郷軍人の指導による訓練の様子は、凛々しく、まさに大和撫子を象徴していた。さらに、米軍の爆撃機B29から投下される焼夷弾による火災を、バケツリレーで消す消火訓練も、誠に頼もしいものであった。また、出征兵士の士気高揚の役目も、銃後を守る愛国婦人会の重要な行事の一つでもあった。

### (4) 戦時における小学校の教育

大東亜戦争勃発にともない、小学校も戦時体制が敷かれ、校名が尋常小学校から国民学校に変えられた。教育内容も、もっぱら武道と高学年ではさらに勤労奉仕に重点が置かれ、いきおい授業時間が大きく短縮された。また、農家の子弟の農業の手伝いは、並大抵のものではなく、このことにより、家庭における予習・復習の時間は、どうしても制約される状況となった。しかし、戦時とあって、誰一人、文句を言う者・苦情を言う者はおらず、学ぶべきことはしっかりと学んでいた。

### 3. 岩手の釜石製鉄所より

#### 名古屋製鉄所へ転出

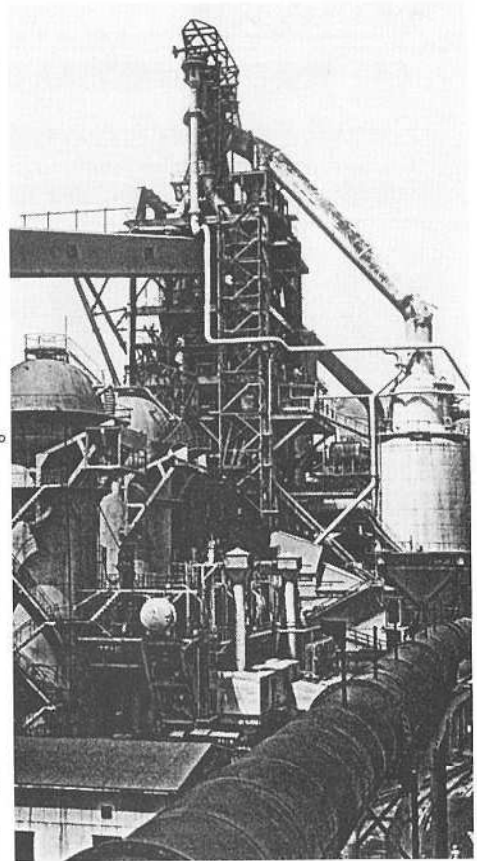
釜石製鉄所の歴史は古く、日本近代製鉄法の始祖と言われ、大東亜戦争の戦時においても、溶鉱炉の火は燃え続けていた。昭和20年7月14日の第



(米軍の艦砲射撃で壊滅した釜石市街、後方は製鉄所)  
『あの戦争』産経新聞社編より

1回の艦砲射撃<sup>かんぼうしゃげき</sup>、続けて、8月9日の第2回の艦砲射撃により、全工場の機能は、すべて停止の状態となった。この時の被弾数は、第1回と第2回を合わせて、4千発とも6千発とも伝えられる。さらに、213名の尊い人命が失われたとも伝えられている。（釜石市の死者は482名といわれる）

終戦とともに、従業員一丸となって復興に励み、ついに、昭和23年5月には、高炉に再び火が入り、再建の第1歩が築かれた。しかし、その後において、経営トップの懸命な合理化施策<sup>ろうきゅうか</sup>にもかかわらず、設備の老朽化、立地条件などの時代の流れには勝てず、昭和38年から、39年にかけて、釜石から遥か遠い名古屋に、家族共々2300名にも及ぶ集団移動が行われた。私も集団の一員として転出に加わった。名古屋製鉄所は、昭和39年9月5日、現東海市に鉄鋼一貫製鉄所として誕生し、以来、高炉の火は消えることなく、炎々と燃え続けている。



〈再建なった釜石製鉄所第一高炉〉

#### 4. おわりに

私は、昭和39年、釜石製鉄所より名古屋製鉄所に転出、昭和48年、現在の大府市宮内町に居住させていただいております。「次代に伝えよう大府の戦争記録」のテーマを拝見した折りに、戦時・戦後を通じ、大府に住んでいなかったのですが、住んでいた場所こそ違え、同じ大東亜戦争を体験した者として、次世代の皆さんに、何か参考になることがあれば幸いと、駄文を省みず投稿させていただいた次第です。

#### 釜石製鉄所

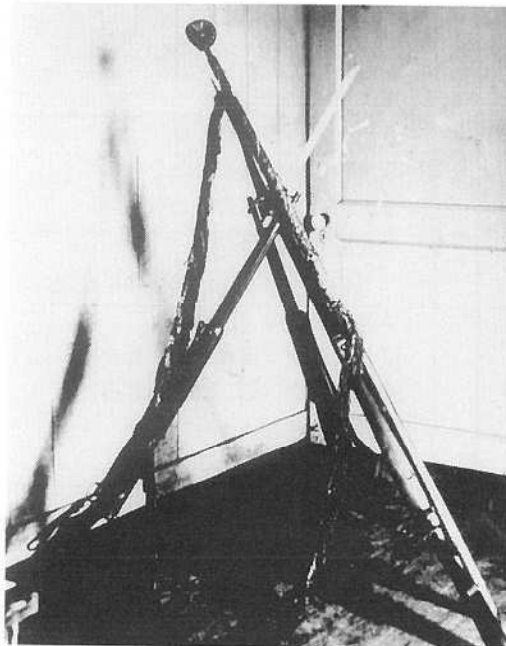
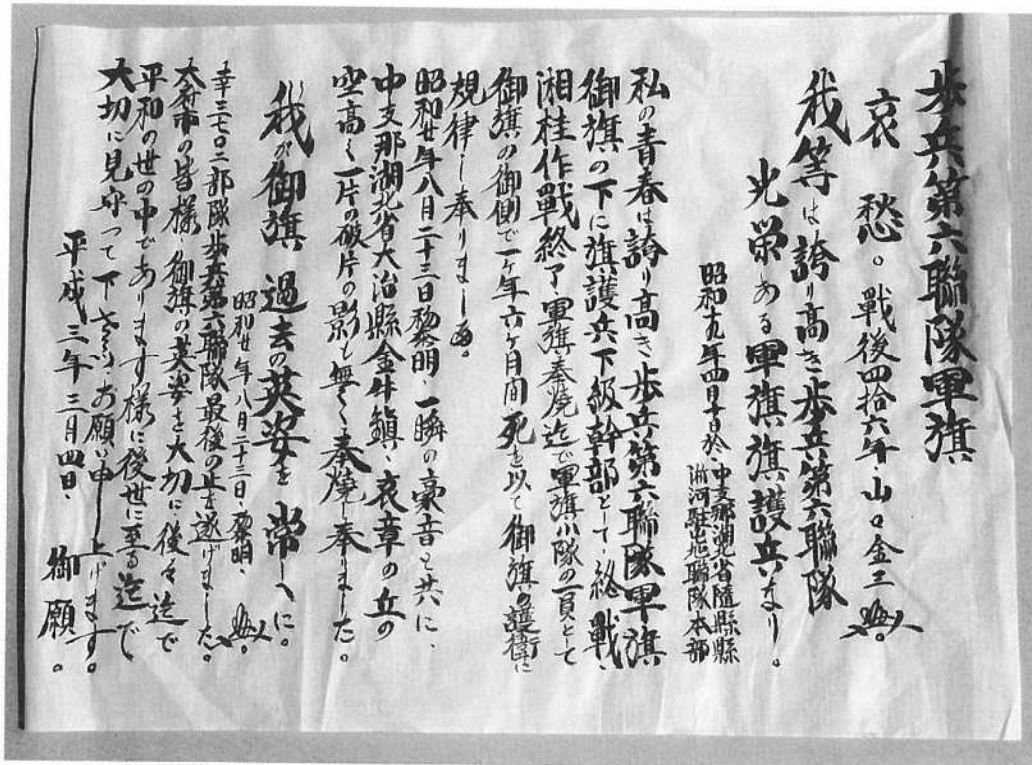
日本の近代製鉄業は、釜石でその記念すべき幕を開けた。鉄鉱石を製錬<sup>せいれん</sup>する洋式高炉法を見事に成功に導いたのが南部藩士の大島高任であり、記念すべき初出鉄成功の地が釜石であった。（安政4年）

明治になって、「殖産興業、富国強兵」をスローガンに、近代国家の建設に取りかかると、鉄はその基幹産業として必要であった。そして、釜石に官営製鉄所の設立が決定された。それは、釜石鉱山が良鉱<sup>まいごう</sup>を埋蔵していたからである。明治8年に建設に着手し、明治13年に高炉の火入れが行われた。釜石は鉄の夜明けのパイオニアであったのである。

くん き ほう しょう  
軍 旗 奉 焼

帝国陸軍で軍旗は、天皇から親授された神聖なものだった。軍旗親授には、連隊長が連隊旗手らを連れて宮中に赴き、天皇の前で侍従武官からそれを受け取った。その軍旗を敵に奪われることは、軍人にとって一番の不名誉なことであった。いざという時には、軍旗を焼却するために、焼却すべき材料は連隊旗手・護衛兵が携帯していた。

軍旗護衛兵であった故山口金三さんより、軍旗についての思い出と、軍旗奉焼についての文章と写真をいただいていますので、ここに原文のまま紹介いたします。



←昭和20年8月23日  
奉焼された第六連隊軍旗

# 年 表

※事柄の頭の数字は月を、・は月がはっきりしないものを表わす。

※年表中人名は、敬称略とする。

西 暦	和 暦	大 府 関 係	町 長	県・国・その他
1928	昭和 3	3 栄劇場開設		
1929	4	3 大府第三尋常小学校奉安殿落成 4 大府第四尋常小学校奉安殿落成	酒	
1930	5	1 0 国勢調査実施 人口10,095人 ・養蚕不況で副業の養鶏が伸びる	井	1 金輸出解禁
1931	6	4 大府農学校を大府農商学校と改称 1 2 栄市場開設	鼎	6 満州事変起こる 1 2 金輸出再禁止
1932	7	4 五ヶ村川排水改良事業始まる 1 1 共和仮駅ができる ・大根、みかんの生産額最高	一	1 上海事変（第一次）起こる 3 満州国建国宣言 5 五、一五事件起こる 9 米穀法改正 1 2 国防婦人会発足
1933	8	7 大府桃即売会（名古屋松坂屋にて） 7 葉たばこ栽培、アメリカ産に変換		3 国際連盟脱退
1934	9	3 大府農商学校廃校 8 愛知トマト株式会社大府工場創業 鈴木バイオリン大府工場創業 大府紡績（森織物）創業		1 2 丹那トンネル全通 ・東北地方冷害
1935	10	4 実業補習学校、青年訓練所が 各小学校付設の青年学校に変わる 1 0 国勢調査実施 人口11,162人 ・斉藤義博 町の行政発展に尽くし 町表彰を受ける（昭和13年にも）		4 青年学校令公布
1936	11	4 大府第二、第四小学校に二宮金次郎 石像建立 ・大府在郷軍人会発足		2 二、二六事件起こる 5 米穀自治管理法公布 9 帝国在郷軍人会令公布
1937	12	1 2 大府信用販売購買組合が成立 ・乗合自動車が大府～刈谷 大府～横須賀間に運行		2 国鉄名古屋駅完成 （名古屋停車場は明治19年完成） 4 防空法公布 7 日中戦争（支那事変）始まる 8 上海事変（第二次）起こる 9 戦時統制経済へ移行開始 戦時下統制令公布・施行
1938	13	4 大府第三尋常小学校に二宮金次郎 銅像建立（戦時供出） 4 四青年学校に女子部設置 ・森岡源吾に傷痍軍人愛知療養所開設 ・豊田光棉紡績創業 （現豊田自動織機製作所大府工場）		4 国家総動員法公布 4 農地調整法公布

1939	14	<p>4 四青年学校が統合され、大府第一尋常高等小学校に町立の青年学校開設</p> <p>4 町立青年学校から女子部が分離し町立大府実践女学校創立</p> <p>6 県立愛知療養所大府荘開設 ・警防団発足</p>	酒井	<p>1 警防団令公布</p> <p>4 米穀配給統制法公布</p> <p>7 国民徴用令公布</p> <p>9 第二次世界大戦（欧州戦争）始まる</p> <p>10 価格等統制令公布・施行</p>
1940	15	<p>10 国勢調査実施 人口13,967人 ・大府町全域に隣組（隣保班）が整備される</p> <p>・第一尋常高等小学校に二宮金次郎石像建立</p> <p>・森永練乳株式会社大府工場創業</p>	鼎	<p>8 臨時米穀配給統制規則公布</p> <p>9 日独伊三国同盟締結</p> <p>10 大政翼賛会発足</p> <p>11 大日本産業報国会設立</p> <p>11 国民服令公布</p> <p>11 紀元2600年記念式典開催</p> <p>11 砂糖・マッチ切符制実施 ・部落会・町内会・隣保班等の整備要項内務省より通達</p>
1941	16	<p>1 大日本青少年団が組織される</p> <p>4 各尋常小学校、国民学校と改称</p> <p>10 三菱重工業名古屋航空機製作所知多飛行場・知多組立工場起工式（大府飛行場とも呼ぶ） ・米の配給始まる</p>		<p>3 国民学校令公布</p> <p>3 国家総動員法改正公布</p> <p>3 治安維持法改正公布</p> <p>4 生活必需物資統制令公布</p> <p>4 米穀配給通帳制実施</p> <p>8 金属回収令公布</p> <p>12 ハワイ真珠湾攻撃、米英に宣戦布告 太平洋戦争（大東亜戦争）始まる</p> <p>12 新聞・ラジオの天気予報等、気象報道禁止</p>
1942	17	<p>3 大府町産業組合結成</p>		<p>1 食塩の通帳配給制実施</p> <p>2 衣料・みそ・しょうゆ切符制始まる</p> <p>2 大日本婦人会発足 （愛国婦人会と国防婦人会が合併）</p> <p>4 米陸軍機による初空襲（東京・名古屋・神戸・北九州）</p> <p>6 ミッドウェー海戦</p> <p>7 食糧管理法施行（麦・とうもろこし・さつまいもも配給になる）</p> <p>11 関門トンネル開通 ・金属類の強制供出始まる</p>
1943	18	<p>12 大府第四国民学校、国旗掲揚塔建設</p>		<p>1 ニューギニア・ブナの日本軍全滅</p> <p>2 ガダルカナル島撤退開始</p> <p>5 アッツ島、日本守備隊全滅</p> <p>5 木炭・薪の配給制実施</p> <p>6 学徒戦時動員体制確立要項決定</p> <p>6 戦力増強企業整備要綱決定</p> <p>7 女子学徒動員決定</p> <p>9 25歳未満の未婚女子を勤労挺身隊として動員決定</p> <p>10 出陣学徒壮行会（愛知県は11月）</p>
1944	19	<p>2 大府町農業会発足</p> <p>4 三菱知多飛行場・知多工場竣工試験飛行実施</p>		<p>6 マリアナ沖海戦</p> <p>6 東条内閣総辞職</p> <p>6 マリアナ沖海戦</p>

1944	19	12 東南海地震起こる (M7.9) ・豊田自動織機製作所大府工場操業開始	酒 井 鼎	6 東条内閣総辞職 7 サイパン島日本守備隊全滅 8 学童疎開始まる 8 学徒勤労令公布 8 女子挺身勤労令公布 8 竹槍訓練開始 10 米機動部隊、沖縄を空襲 10 神風特攻隊レイテ沖で初めて米艦攻撃 11 マリアナ基地のB29東京空襲
1945	20	1 三河地震起こる (M6.8) 5 横根名高山に国立愛知県知北農場 (知多北部指導農場) 開設 5 B29 南島・棧敷・家下・ヲシロ地内 へ焼夷弾投下、46棟焼失・3名死亡 10 国勢調査実施 人口19,326人 12 傷痍軍人愛知療養所を厚生省に移管し 国立愛知療養所として発足	一	3 国民勤労動員令公布 3 東京・大阪・名古屋・神戸大空襲 4 米軍が沖縄上陸 5 名古屋城・熱田神宮、空襲で焼失 6 沖縄の日本守備隊全滅 7 主食の配給1割減 8 広島・長崎に原子爆弾投下 8 ソ連、対日宣戦布告 8 日本、ポツダム宣言を受諾 8 天皇、終戦の詔勅放送 8 太平洋戦争終わる 8 満州皇帝退位、満州国解消 9 降伏文書調印、陸海軍解体命令 9 文部省、教科書から戦時教材削除を通達 (墨ぬり教科書) 10 GHQ教育関係の軍国主義者、超国家主義 者の追放指令 11 治安維持法廃止 11 財閥解体 12 GHQが農地改革指令(第一次) 12 衆議院選挙法改正・公布(婦人参政権等) 12 労働組合法公布
1946	21	9 大府町連合青年団結成 12 大府農地委員会発足	↓ 4/15 4/16 山 口 愛 次	1 GHQ軍国主義者の公職追放 2 金融緊急措置令(預金封鎖・新円発行) 3 物価統制令公布・施工 4 第22回総選挙 5 極東国際軍事裁判開始 6 愛知県教員適格審査委員会規定を定める 6 GHQ農地改革の徹底化を政府に勧告 10 農地改革(第二次)農地調整法改正法公布 自作農創設特別措置法公布 11 日本国憲法公布 11 文部省、当用漢字・現代かなづかいを告示
1947	22	3 第1回農地買収開始 3 町立青年学校、実践女学校を廃止 4 国民学校を小学校と改称 (大府第一・第二・第三・第四国民 学校を大府町立第一・第二・第三 ・第四小学校とする) 4 大府中学校開設、大府第一小学校 講堂で開校式…1年生3クラスは 分教場へ(柘山)	↓ 2/28 4/15 齋 藤 幸 信	3 教育基本法、学校教育法公布 4 新学制発足(六・三制) 4 第1回知事・市町村長選挙 4 第1回参議院議員選挙 4 第23回総選挙 4 第1回統一地方選挙 4 地方自治法公布 5 日本国憲法施行 10 農業協同組合法公布

1947	22	4 日本医療団大府荘が厚生省に移管され国立療養所大府荘となる 4 公選第1回町長選挙 6 大府町役場区制度廃止し出張所を各字に設置 10 国勢調査実施 人口19,234人	齋	12 児童福祉法公布
1948	23	3 大府町自治体警察署・自治体消防団設置 5 大府中学校校舎第1棟10教室竣工し第二教場(柵山)閉鎖 8 農業会が大府町農業協同組合として発足 8 大府町酪農組合結成 10 大府町立第一・第二・第三・第四小学校をそれぞれ大府町立大府・神田共長・吉田小学校と改称 ・大府町連合婦人会発足	藤 幸 信	3 警察法・消防組織法施行 4 新制高等学校発足 7 教育委員会法公布 11 愛知県教育委員会発足 11 国際極東軍事裁判所判決(有罪25名、内死刑7名)
1949	24	3 中部12府県下優良農業協同組合選抜大会で、大府町農業協同組合が農林大臣賞を受ける 4 大府町立大府高等学校開設(定時制) 4 大府中学校第2・3・4棟の竣工 9 大府町公民館開設 ・鈴置理樹雄、農業の発展に尽くし、県知事表彰を受ける		1 第24回総選挙 3 ドッジライン声明(超均衡財政) 4 GHQ1ドル360円の単一為替ルート設定 8 シャウブ使節団、税制改革勧告案発表 11 公選制教育委員会発足 11 道路交通法公布 対面交通実施(人は右、車は左)
1950	25	3 大府弘報創刊 4 役場の機構改革 4 大府町社会福祉協議会発足 4 中京女子短期大学開設 7 大府町青年学級開設 7 大府弘報を大府広報と改称 7 神田小学校に社会学級(県教育委員会指定) 10 国勢調査人口20,427人		1 千円札発行 4 公職選挙法公布 6 第2回参議院議員選挙 8 警察予備隊発足 9 朝鮮戦争起こる ・第5回国民体育大会が愛知県で開催される
1951	26	2 大府中学校本館竣工 4 大府保育所開設 7 大府町農業委員会設置 9 共和駅舎完成、営業開始 9 大府町警察署(自治体警察)廃止	↓ 4/4 4/24	3 農業委員会法施行 5 日本青年団協議会結成 6 ユネスコに加盟 6 児童憲章制定 9 サンフランシスコ講和会議で対日平和条約・日米安全保障条約調印
1952	27	2 森 勇、愛知県副知事に就任 5 大府町戦没者追悼式挙行 11 大府町教育委員会発足 ・豊田自動織機製作所長草工場操業開始	山 口 愛 次	4 GHQ廃止、対日平和・日米安全保障条約発効、独立国となる 4 戦傷病者戦没者遺族等援護法公布 10 警察予備隊、保安隊と改組 10 第25回総選挙

## 用語の解説

い	もん	ぶくろ		
慰	問	袋		戦地の兵士に日用品や手紙をいれて送った袋のことで、故郷の香り豊かな品や使りに、兵士は慰められた。
M		P		
かん	さい	き		
艦	載	機		アメリカ軍の憲兵のこと。警察官のような仕事もした。 戦艦や航空母艦から飛び立つ戦闘機。当時は、グラマンやロッキードが多かった。
かん	ぼう	しゃ	げき	
艦	砲	射	撃	軍艦から主砲・副砲・高角砲を撃つこと。
がい			ち	
外			地	日本国以外の国や土地のこと。
がく	と	しゅつ	じん	
学	徒	出	陣	大学生などは兵役が猶予されていたが、戦争がきびしくなると兵士となって戦場へ行った。
き	ちく	べい	えい	
鬼	畜	米	英	戦意高揚のため、アメリカやイギリスを情のない鬼のような国と宣伝した。
機	じゅう	そう	しゃ	
	銃	掃	射	艦載機による低空からの機関砲射撃であり、逃げ惑う人間をほうきで掃くように撃ってくる。
きょう	いく	ちよく	ご	
教	育	勅	語	明治天皇の名で、教育の基本理念を示したことばである。1948年国会で失効を決議される。
きょう			しゅつ	
供			出	農家が収穫する穀物のうち、一定量を廉価で国へ提供した。また、貴金属等の供出も行われ、お寺の鐘まで弾丸になった。学童には軍馬の餌にする干草の供出も課せられた。
きん	ろう	どう	いん	
勤	労	動	員	学業を中断し、軍需工場や農作業をした。学徒動員・女子挺身隊・勤労報国隊など。
ぎょく	おん	ほう	そう	
玉	音	放	送	1945年8月15日アメリカ・イギリスなど5か国が日本に要求したポツダム宣言を受け入れ、無条件降伏したことを天皇陛下がラジオで放送したことで戦争は終わった。
ぎょく			さい	
玉			砕	占領地の守備隊が全滅した時に使われたいい方。戦死を玉と砕けると表現し、美化した。
くん			しん	
軍			神	真珠湾攻撃をはじめ特別攻撃などの戦死者を、このように呼んで称えた。
くん	じ	きょう	れん	
軍	事	教	練	中等教育以上の諸学校に軍人を配属し、その指導のもと徳育体育の一環とした教練を課した。その目的は国防能力の向上であった。この軍人を配属将校と呼んだ。
くん	じ	ゆう	びん	
軍	事	郵	便	国民学校の団杖・竹やり訓練も、これに類する。 兵士が戦地から出す手紙は機密保持のため、内容を確認められた後、軍事郵便の印を押された。

ぐん 軍	じゅ 需	こう 工	じょう 場	戦争をするために必要な武器や装備を作る工場。国内のほとんどの工場が軍需工場になった。
けい 警			ほう 報	この地方は東海軍管区情報として警戒警報や空襲警報が発令され、ラジオで知らされた。敵機の進行方向から考えて、東海地方に空襲の被害が出ると想定された時に警戒警報となり、日本の領海・領地に侵入した時は空襲警報となった。艦載機の来襲が多くなると、いきなり空襲警報となることもあった。
けん 憲			べい 兵	軍事警察を担当する兵士。軍人や民間人に恐れられた。
こう 高	しゃ 射		ほう 砲	飛行機を射撃するのに使う中小口径砲。海軍では「高角砲」。
こう 工			しょう 廠	軍管理下の工場で、武器・弾薬を製造したり修理した。同じような工場に造兵敵がある。
しゅつ 出			せい 征	召集令状（赤紙）を受け、兵士として行くこと。応召も同じ。
こく 国	い 威	せん 宣	よう 揚	戦争スローガンで、日本の威光を世界に示そうの意。
ざい 在	ごう 郷	ぐん 軍	じん 人	平時は民間人であるが、戦時には必要に応じ召集され、国防の任に当る帰休兵、予備役、退役などの軍人。
しち 七	しょう 生	ほう 報	こく 国	戦争スローガンで、何度も生まれ変わって国の恩に報いるの意。
し 支	な 那	じ 事	変	日中戦争のことを、当時はこのようにいった。
ざつ 雑			のう 囊	さまざまな身のまわり品を入れる肩掛けカバン風の袋。
しょう 焼	い 夷		だん 弾	主に建物等を焼くことを目的とした油性の爆弾・砲弾で、飛行機から落とされた。中でも、エレクトロン焼夷弾は威力が大きかった。
しょう 松	こん 根		ゆ 油	松の根から作る油で、飛行機の燃料の代用油としたが出力が弱く、ほとんど使われなかった。
じょう 常	ざい 在	せん 戦	じょう 場	戦争スローガンで、常に戦場にいるような緊張感をもって過ごそうの意。
じゅう 銃			ご 後	戦地の兵士が国や家族の心配をせずに戦えるよう、後方を固め支えあう国内のこと。銃後の守りなどといった。
じん 盡	ちゅう 忠	ほう 報	こく 国	戦争スローガンで、忠義をつくすことが国の恩に報いることであるの意。
せい 制	くう 空		けん 権	領土や艦船の安全を確保するため、空中の一定範囲を支配する力のこと。また、一定海域を指すときは「制海権」という。
せん 宣	せん 戦	ふ 布	こく 告	戦争状態に入ることを相手国に告げること。
せん 千	にん 人		ち 針	戦争をしている所をいう。戦場・前線も同じ。 一片の布切れに千人の女性が赤糸で1針ずつ縫って千個の縫玉を作り、出征兵士の武運長久と安全を祈願して贈った。寅年生まれの人は「虎は千里を走って、千里をもどる」の諺にちなんで、年の数だけ縫玉を贈った。
せん 戦	せん 争	さい 裁	はん 判	極東国際軍事裁判または東京裁判といい、A級戦犯として政治軍事の指導

疎開		者28名が起訴され7名が死刑となる。この他、B・C級戦争犯罪人として多くの人が処罰された。
疎開		戦禍を逃れて都市から田舎へ移り住むことで、主に子どもが対象とされた。親類の家へ疎開することを縁故疎開といい、縁故先のない子どもは学童疎開となり、学校ごと農山村の社寺で集団生活をした。攻撃されやすい都市の軍需工場を山間部へ移転させる工場疎開もあった。
探照灯		夜間空に向けて強力なあかりを発して敵機等を探す機器で、「照空灯」ともいった。
大東亜共栄圏		日本が中心となって東南アジア各国をまとめ、共に繁栄しようとする日本の独善的構想で、世界の国々から反発をかった。
大本営		戦時における国の最高指導機関。戦争の状況は「大本営発表」として国民に知らされたが、軍事機密の保持と戦意高揚を優先するために誇張・隠蔽が多かった。
G H Q		連合軍が日本占領中に設置した総司令部のこと。そのその目的は日本の武装解除と民主化で、司令官マッカーサーが「ドイツの成熟度は45歳、日本は12歳」と米議会で述べた証言は有名。
町葬査		町主催の葬儀のことで、戦死者の遺骨を迎え、この葬儀となった。
徴兵検査		日本男子は20歳になると必ず受けなければならない検査で、これによって兵役の可否が決められた。
勅語		天皇陛下のことば。詔勅も同じ。
D D T		戦後、衛生状態の悪化にともなって、ノミやシラミの害が増加したため、殺虫剤として占領軍が支給したもの。
天长節		昭和天皇の誕生日。
灯火管制		夜間、電灯の傘に黒い布をかけ、明かりが窓から外に漏れないようにした。
特攻		特攻ともいい、爆弾を抱えた戦闘機で敵艦に体当たりする1機1艦の攻撃方法である。戦況悪化の中、幾度か神風特別攻撃隊が編成された。
特殊潜航艇		小型潜水艦の先端に爆雷を積み、敵艦に体当たりする特攻兵器。
同盟国		国家間で共に同一行動をとることを約束した国（日独伊三国同盟）
内地入営		日本国内のこと。 出征兵士が一定期間訓練を受ける施設に入ること。ここで所属部隊が決まる。
配給		統制経済のもと、米・みそ・しょうゆ・砂糖・木炭・マッチ・石けん・衣料などは、配給切符によって定められた量しか買うことができなかった。
八紘一宇		戦争スローガンで、神国日本を中心に、世界を一つの家族のような楽土に

するの意。

B 2 9

敵の4発爆撃機<sup>ぼくげきき</sup>のこと。航統距離<sup>こうとくきょり</sup>が長く、爆弾<sup>ぼくだん</sup>の積載量<sup>せきさいりょう</sup>も大きかったため、名古屋大空襲等の被害<sup>じんたい</sup>は甚大となった。広島・長崎の原子爆弾もこの飛行機から落とされた。

病院船

日中、太平洋戦争中、外地で戦傷・戦病者の軍人を収容して、内地の海軍病院へ転送する船である。近海郵船「朝日丸」など。

ふか しん じょう やく  
不 可 侵 条 約  
へい 兵 条 約  
ほう 奉 安 殿

日本とソビエト連邦<sup>れんぽう</sup>は互いの領土を尊重し進攻しないとする国家間の約束。国民男子の義務とされ、兵士として一定期間は務めねばならなかった。

天皇・皇后の写真をはじめ勅語・詔書などを納めた庫<sup>くら</sup>で、校地の一角にあり、神聖<sup>しんせい</sup>な場所であった。

ほう ほう ぶくろ  
奉 公 袋

新兵として入営する時、徴兵令書、召集令状、印鑑、筆記用具等を入れた布袋。

ぶ うん ちよう きゆう  
武 運 長 久  
ほう 防 空 壕

戦いの勝利と身体<sup>しんたい</sup>の健康・安全を祈ることば。

空襲時に避難するため、庭や空地に穴を掘り、天井に土を被せた地下部屋。中には、崖<sup>がけ</sup>に横穴を掘ったものもあった。

ポ ツ ダ ム せん げん  
満 州 宣 言 国

1945年米・英・中・ソが日本に降伏をせまった文書。

世界の反対を押し切って、中国東北部と内モンゴル地域に強引に建国した国。日本の意のままになる傀儡<sup>かいらい</sup>政府だった。建国以来日本人の往来は多くなり、日本から満州へ行くことを渡満<sup>とまん</sup>といった。

まん まん てつ  
満 鉄

南満州鉄道株式会社の略称。日本の国策<sup>こくさく</sup>会社で、鉄道だけでなく付属地の採炭・採鉱・製鉄所の経営をした。

まん もう かい たく  
満 蒙 開 拓

日本の国策として、農家の次男、三男を対象に中国・モンゴルへ開拓民を募り送り込んだ。ここは王道楽土の別天地と宣伝した。

やす くに くに じん しゃ  
靖 国 神 社

東京九段にあり、全国の戦死者を神として祀<sup>まつ</sup>っている神社である。終戦までは、国にとって特別な神社であった。戦死者の中には、戦友に「靖国会おう」といって敵艦に体当たりした人もいたという。

また、各県には、護国神社があり、県内の戦死者が祀られている。

や せん せん びん けん  
野 戦 病 院

戦地で負傷したり病気にかかった兵士を治療する臨時の病院のこと。それは仮設テントだったり接收した民家であった。この後方に兵站<sup>へいたん</sup>病院があった。

よ か れん  
予 科 練

飛行予科練習生の略称。甲種は15～20歳、乙種は14～20歳の志願兵である。

れん べい じょう  
練 兵 場

兵隊が訓練や演習をする所。近くでは名古屋城北にあった。

◎この本の発刊にご協力いただいた皆さん（敬称略、順不同）

伴 章英	鷹羽 秀信	小川 雅康	外山 誠治	祖父江茂子	井村 正則
齋藤 正幸	相羽 資敏	相羽 鉦雄	酒井 保	安藤 みね	近藤 彊
故浜島 明房	故酒井 吉勝	浜島 房子	久野 源之	浜島 吉昭	深谷 庄作
岡田 常男	鈴木 幹夫	加古 博	加古 悟朗	小島 正男	花井 利彦
鈴置 鋼一	故浅田 善策	深谷 碩弥	花井 敏治	渡辺 稔	深谷 良一
久野 與吉	久野 栄一	広瀬 治幸	寺島 明和	近藤 敏鉦	山口 勝久
加古 和美					

◎この本の編集委員

渡辺 房枝	鈴木 久弼	伴 武量	佐藤 英夫	深谷 哲	大島 康民
早川 清夫	下村 博	青山 郁博	伴 紘久		

## 編 集 後 記

渡辺房枝さんが、故浜島明房さんとともに「戦争を知っている人々の記憶が残っている間に、大府の戦争記録をまとめたい」と、平成11年より記録や写真などの提供を呼びかけてまいりました。昨年7月、それらをまとめるために「語り継ぐ戦争体験…大府の戦争記録」発刊のための発起人会議が開かれ、編集がスタートすることになりました。

体験記・写真・新聞・書籍など、集められた雑多な資料をいかにまとめ編集するのか…？

結局、体験記を中心に、その中に写真や資料を解説やコラムとして挿入するという事に落ち着きました。そのため、せっかくお寄せいただいた資料の中には、十分に活用し切れなかったものもありました。

また、当初の編集の意図として、戦後の新しい日本の建設や、今なお問われ続ける戦争責任や加害者責任の問題にも目を向けるということがありました。しかし、被害者としての戦争の印象が強烈すぎたせいか、それらには、あまり触れることが出来ませんでした。これらの問題については、多様な皆さんの思いをそのまま掲載することにより、読者自身に考えてもらいたいと思っております。これからの平和を考える一助にこの冊子になってくれれば幸いです。

平成15年8月15日

編集委員を代表して 青山 郁 博

## 主な参考文献

- ・『日本の百年』筑摩書房
- ・『あの戦争』産経新聞社編
- ・『一億人の昭和史』毎日新聞社
- ・『幣原喜重郎』幣原平和財団編
- ・『忘れられた記憶』東海市教育委員会
- ・『戦争とくらし』半田博物館
- ・『日米軍用機』新人物往来社
- ・『中日新聞』
- ・『朝日新聞』

## 語り継ぐ戦争体験

### —大府の戦争記録—

発行日 平成15年8月23日  
編集・発行 戦争体験を語り継ぐ有志の会  
代表 渡辺房枝  
大府市中央町六丁目143  
TEL (0562) 47-7777  
印刷所 フタバインサツ  
大府市明成町三丁目256  
TEL (0562) 46-2618